吹田市五反島遺跡発掘調査報告書

－ 南吹田下水処理場増設に伴う発掘調査報告書 －

遺 物 編

2003年

吹田市教育委員会

例　言

1．本書は大阪府吹田市南吹田５丁目4356他に所在する五反島遺跡の発掘調査報告書である。報告書は当初、第１分冊（本文編）・第２分冊（自然科学編）・第３分冊（図版編）の３分冊で構成する予定で、第２分冊（自然科学編）を平成８年３月に、第３分冊（写真図版編）を平成８年12月に発行した。その後、諸般の事情により第１分冊（本文編）を「遺構編」、「遺物編」、「総括編」に分割することとなった。本書はそのうちの「遺物編」である。なお、「遺構編」は平成14年３月に発行した。

2．発掘調査は、南吹田下水処理場の下水処理槽の拡幅に伴う事前調査として実施されたもので、各年度別の調査内容は以下のとおりである。

昭和59年度事業　昭和59年10月５日～59年10月30日	第１次試掘調査
昭和60年度事業　昭和60年11月18日～61年３月６日	第２次試掘調査
昭和61年度事業　昭和61年７月１日～62年３月20日	下水処理槽拡幅域の全域調査
昭和62年度～平成２年度事業	内業調査及び報告書刊行事業 自然科学調査事業執筆及び自然科学調査報告の校訂
平成２年度～平成７年度業務	自然科学編の編集・刊行事業
平成８年度業務	写真図版編の編集・刊行事業
平成９年度～平成13年度業務	遺構編の編集・刊行事業
平成14年度業務	遺物編の編集・刊行事業

3．発掘調査は、吹田市下水道部事業として実施され、同部の依頼を受けて、市教育委員会社会教育部社会教育課（当時）文化財担当職員が現地調査を担当した。特に、試掘調査は西本安秀が主に担当し、全域調査は西本ほか藤原　学・増田真木・田中充徳の全員で当たった。

4．内業調査については主に西本が担当し、現地の発掘調査期間中は現地の発掘調査事務所に付設した資料整理場にて実施した。発掘調査終了後は、吹田市青山台２-５-１の青山台小学校内社会教育課文化財分室及び吹田市立博物館に資料を移し、以後の内業整理を進めるとともに、報告書刊行までのすべての作業を実施した。

5．本書の執筆は西本、増田、田中、堀口健二、加藤志月、石山智美、大藤晴代が分担して執筆し、文責については文末に記した。

6．本報告書には昭和61年度の全域調査出土遺物の他に第２次試掘調査出土分も一部収載した。なお、遺物番号の後の〔　〕は『遺物図面台帳』の番号である。

7．調査においては下記の各位からご指導・ご協力をいただきました。記して謝意を表します。
（遺構編で記した方を除く）

赤塚次郎、網田龍生、大庭重信、亀井　聡、合田幸美、櫻井久之、定森秀夫、杉本厚典、杉山　洋、鈴木正貴、武部真木、中尾智行、中川あや、前澤郁浩、山田隆一

目　次

第１章　出土遺物の整理について……1
第２章　出土遺物
１．三国川開削期以前の遺構出土遺物
　１．古墳時代遺構面出土遺物……2
　２．河道Ⅴ下層出土遺物……2
　３．河道Ⅴ上層出土遺物……3
　４．堤防下層出土遺物……5
２．三国川開削期以降の遺構出土遺物
　５．堤防上層出土遺物……8
　６．河道Ⅳ下層出土遺物……10
　７．河道Ⅳ上層出土遺物……13
　８．河道Ⅲ下層出土遺物……15
　９．河道Ⅲ上層出土遺物……18
　10．河道Ⅰ下層出土遺物……21
　11．河道Ⅰ上層出土遺物……27
　12．河道Ⅶ下層出土遺物……48
　13．河道Ⅶ上層出土遺物……49
　14．堤防覆土出土遺物……51
　15．河道Ⅵ出土遺物……52
　16．土錘……53
　17．木製品……54
　18．金属製品……58
　19．石製品……66
　20．堤防構成材……67
３．遺物観察表……73

挿　図　目　次

第１図　堤防覆土出土遺物……51
第２図　河道Ⅵ出土遺物……52
第３図　遺構出土遺物……53
第４図　鉄剣実測図……59
第５図　鏡拓影及び断面図……60
第６図　鏡背面加工痕図……60
第７図　銭貨拓影……65
第８図　石製品実測図……66
第９図　堤防構成材実測図……69
第10図　堤防構成材写真……70

図　版　目　次

図版１　古墳時代遺構面出土遺物１
図版２　古墳時代遺構面出土遺物２
図版３　河道Ⅴ下層出土遺物１
図版４　河道Ⅴ下層出土遺物２・上層出土遺物１
図版５　河道Ⅴ上層出土遺物２
図版６　堤防下層出土遺物１
図版７　堤防下層出土遺物２
図版８　堤防下層出土遺物３
図版９　堤防下層出土遺物４
図版10　堤防上層出土遺物１
図版11　堤防上層出土遺物２
図版12　堤防上層出土遺物３
図版13　河道Ⅳ下層出土遺物１
図版14　河道Ⅳ下層出土遺物２・上層出土遺物１
図版15　河道Ⅳ上層出土遺物２
図版16　河道Ⅳ上層出土遺物３
図版17　河道Ⅳ上層出土遺物４
図版18　河道Ⅲ下層出土遺物１
図版19　河道Ⅲ下層出土遺物２
図版20　河道Ⅲ下層出土遺物３
図版21　河道Ⅲ下層出土遺物４・上層出土遺物１
図版22　河道Ⅲ上層出土遺物２
図版23　河道Ⅲ上層出土遺物３
図版24　河道Ⅰ下層出土遺物１
図版25　河道Ⅰ下層出土遺物２
図版26　河道Ⅰ下層出土遺物３
図版27　河道Ⅰ下層出土遺物４
図版28　河道Ⅰ下層出土遺物５
図版29　河道Ⅰ下層出土遺物６
図版30　河道Ⅰ下層出土遺物７
図版31　河道Ⅰ下層出土遺物８
図版32　河道Ⅰ下層出土遺物９
図版33　河道Ⅰ上層出土遺物１
図版34　河道Ⅰ上層出土遺物２
図版35　河道Ⅰ上層出土遺物３
図版36　河道Ⅰ上層出土遺物４
図版37　河道Ⅰ上層出土遺物５
図版38　河道Ⅰ上層出土遺物６
図版39　河道Ⅰ上層出土遺物７
図版40　河道Ⅰ上層出土遺物８

図版 41　河道Ⅰ上層出土遺物 9
図版 42　河道Ⅰ上層出土遺物 10
図版 43　河道Ⅰ上層出土遺物 11
図版 44　河道Ⅰ上層出土遺物 12
図版 45　河道Ⅰ上層出土遺物 13
図版 46　河道Ⅰ上層出土遺物 14
図版 47　河道Ⅰ上層出土遺物 15
図版 48　河道Ⅰ上層出土遺物 16
図版 49　河道Ⅰ上層出土遺物 17
図版 50　河道Ⅰ上層出土遺物 18
図版 51　河道Ⅰ上層出土遺物 19
図版 52　河道Ⅰ上層出土遺物 20
図版 53　河道Ⅰ上層出土遺物 21
図版 54　河道Ⅰ上層出土遺物 22
図版 55　河道Ⅰ上層出土遺物 23
図版 56　河道Ⅰ上層出土遺物 24
図版 57　河道Ⅰ上層出土遺物 25
図版 58　河道Ⅰ上層出土遺物 26
図版 59　河道Ⅰ上層出土遺物 27
図版 60　河道Ⅰ上層出土遺物 28
図版 61　河道Ⅰ上層出土遺物 29
図版 62　河道Ⅶ下層出土遺物 1
図版 63　河道Ⅶ上層出土遺物 1
図版 64　河道Ⅶ上層出土遺物 2
図版 65　土錘
図版 66　木製品 1
図版 67　木製品 2
図版 68　木製品 3
図版 69　木製品 4
図版 70　金属製品 1
図版 71　金属製品 2
図版 72　金属製品 3
図版 73　金属製品 4
図版 74　金属製品 5
図版 75　堤防構成材 1
図版 76　堤防構成材 2
図版 77　堤防構成材 3
図版 78　堤防構成材 4
図版 79　堤防構成材 5
図版 80　堤防構成材 6

第1章　出土遺物の整理について

発掘調査を実施した昭和61年度の出土遺物整理については、基本的に遺物の洗浄と『出土遺物基本台帳』の作成が主な作業となったが、遺物は一部復原を行ったほか、遺物のうち特に緊急に保存措置を講ずる必要のあるものについては現状の写真撮影と実測図作成を優先的に行った。また、堤防の構成材の杭・横木等については『堤防木組整理票』を作成し、主な杭・横木の図面作成を行い、写真撮影はできる限り実施した。その他、自然科学領域による資料の分析については各専門の先生方に調査を依頼し、その成果については本報告書『自然科学編』に収録したとおりである。木製品と金属製品の保存処理が必要なものについては、緊急を要するものから順次、(財)元興寺文化財研究所に保存処理を依頼した。保存処理対象遺物は極めて多く、平成9年度まで年度ごとに継続して実施することとなった。

発掘調査終了後の遺物整理については、報告書作成に向けての作業を実施することとなった。遺物の洗浄はほぼ終了しており、土器類の一部についてはネーミング(マーキング)を行ったほか、接合・復原作業も本格的に開始した。ネーミングの記載は五反島遺跡の略称である「ＧＴＪ」を記し、次に『出土遺物基本台帳』の遺物番号を記し、その台帳と照合させることによって出土区・出土遺構・出土層位・出土年月日等がわかるようにした。次に接合・復原作業がある程度進行した段階で、重要遺物と遺存状態の良好な土器から実測図の作成を開始し、実測した土器類は『遺物図面台帳』に記載した。最終的に実測した土器類は約1400個体にも達した。これらの製図(トレース)を行った後、再整理し、本報告書『遺物編』に収載した。こうした作業に並行して、『遺物台帳』の作成も行った。同様のものとして発掘調査時に大雑把な出土遺物の把握を行うための『出土遺物基本台帳』を作成していたが、『遺物台帳』は個々の遺物の種別・器種・時期等の詳細を把握し、遺物の種別・時期・分布傾向などを探るために作成したものである。『遺物台帳』の成果の一部については報告書『遺構編』に第18図 出土土器遺構別時期分布(1・2)として掲載した。また、出土遺物の原稿作成は上記の作業と並行して行ってきた。五反島遺跡の出土遺物は多種・多様であり、内業調査の進展に伴って再度様々な面からの検討が必要とされ、原稿作成は困難を極めた。特に多量の出土があった弥生～古墳時代土器、竈、製塩土器、古代・中世土器等については、資料の照合や類例の検討が必要であり、他研究機関・研究者の方々の多大なご協力・ご指導等を賜わった。お世話になりました皆様に厚くお礼申し上げます。なお、調査報告書以外では、平成4年11月に吹田市立博物館が開館し、博物館の第1展示室「神崎川の大遺跡」のコーナーで五反島遺跡出土遺物の一部が展示・公開され、歴史・考古学等の専門の研究のみならず、学校教育・生涯学習等の面で活用がはかられている。

(西本)

第2章　出土遺物

1.三国川開削期以前の遺構出土遺物

1．古墳時代遺構面出土遺物（図版1・2）

古墳時代遺構面から出土した土器は古墳時代前・中期の土師器に限られ、須恵器を伴わない。

土師器

壺は小型丸底壺(1)、小型壺(2～4)、大型壺(5･6)がある。小型丸底壺(1)は体部外面に僅かにハケメを残すが、ほとんどナデにより調整している。口縁から体部側面にかけて火を受けた痕跡が残り、外壁が一部剥落している。小型壺(2～4)は調整方法に差異が認められるが、全体に作りが雑になり、布留式でも新しい様相を持つ。大型壺には二重口縁壺(5)と直口壺(6)がある。

甕(7～17)はほぼ布留Ⅲ式に通有な甕である。体部は長胴化し始め、器壁が厚くなる傾向がある。(7)は球形の体部に内彎する口縁部がつき、端部は指オサエにより内側に肥厚させるもので、他の甕より若干古い様相を呈する。(12)の肩部外面にはヘラ状工具による刻線が認められ、(14)の底部内面には炭化米が残る。(17)は扁球形の体部上位に焼成前に径0.5cmの孔を穿孔し、外面全体にススが付着する。

高杯は口径が14.8cmのもの(23)、16cm前後のもの(18～21)、23.0cmを測る大型のもの(22)がある。口径16cm前後のものは杯底部から口縁端部までなだらかな曲線を描くタイプ(18･20)と、杯底部と口縁部の境に明確な稜を持つタイプ(19)の2種に分けられる。(22)は完形品で、杯底部と口縁部の境にナデにより明確な段を形成し、脚部は屈曲して大きく開く。裾部内面にはヘラ状工具による刻線を施す。(23)は椀状の杯部を持ち、口縁端部を外方につまみだし、平坦面を持つ。主にヨコナデにより成形し、外面にはヘラケズリを施す。胎土は石英、長石、チャート等を含み、やや粗い。色調は明黄褐色を呈し、焼成はやや硬質である。形状、胎土、焼成状況からみて在地産ではない。

鉢(24･25)は口径12cm前後で、丸底の体部から緩く短く伸びる口縁部を持ち、外面はハケ、内面はナデ及びヘラケズリで調整する。(25)は完形だが、体部外面に2か所大きく剥離した痕が残る。二次的な加熱によるものというより、焼成中に剥落した可能性もある。　(加藤)

2．河道Ⅴ下層出土遺物（図版3・4）

弥生土器は甕の細片が少量出土した。土師器は古墳時代遺構面出土のものより甕の体部の長胴化が進み、他の器種も調整が粗くなり器壁が厚くなる傾向がある。韓式系土器の壺の完形品が1点出土した。

(1)古墳時代

土師器

壺は小型丸底壺(26･27)、中型壺（28～30）がある。(26)は扁球形の体部にやや長めの口縁部がつく小型丸底壺である。器壁が厚く調整は雑である。中型壺は口縁部の良好な資料がないが、

扁球形の体部外面をハケで調整するもの(29・30)とヘラケズリするもの(28)がある。

甕は口径15cm前後の大型甕(31～35・38・40)と口径13cm前後の中型甕(36・39)、口径10cm前後の小型甕(37)がある。大型甕には、やや長胴化した体部に外上方に開く口縁部を持つタイプ(31・38)、直立気味に伸びる口縁部を持つタイプ(34)、扁球形の体部から大きく外上方へ開き、外傾する端面を持つタイプ(35)、やや長めの口縁部が上外方に伸びるタイプ(33)の4タイプがある。いずれも体部外面をハケで調整する。(31・36)は底部内面に炭化物が付着し、(35)は焼成後底部付近に外側から不整形の穿孔を施す。中型甕はナデのみで調整するもの(36)と体部外面をハケ、体部内面を押圧調整するもの(39)もある。小型甕(37)は体部内外面をヘラケズリで粗く調整する。

高杯は杯底部と口縁部の境目がなだらかな曲線を描くタイプ(44)と、明確な稜を持つタイプ(41～43)の2種に分けられる。(43)は器壁が厚く、脚部を破損した後、火にかけられたためか全面にススが付着する。

椀(45)は平底で口縁端部はヨコナデにより内傾する面を持つ。内面は非常に丁寧にヨコナデを施す。

鍾(46)は土師器の鍾である。口縁部を欠くが扁球形の体部中位に径0.8cmの孔を穿孔する。外面はハケを施すが、磨耗のため詳細はわからない。内面はヘラケズリを施す。

韓式系土器

(47)は軟質土器の壺で、扁球形の体部に上方へ外反して直立気味に伸びる口縁部を持つ。肩部を強くヨコナデし、口縁端部は内傾する面を持つ。底部は上げ底気味である。体部外面はヨコ方向に平行タタキを施し、内面には指頭圧痕が残る。　(加藤)

3．河道V上層出土遺物（図版4・5）

古墳時代前期から中期にかけての土師器と中期から後期にかけての須恵器、中期の韓式系土器、製塩土器がある。

(1)古墳時代

土師器

壺は小型丸底壺(48・49)、中型壺(51～53)、大型壺(50)がある。中型壺の(51)は胴部の張った体部から口縁部が上外方に伸びる。口縁部から体部上半の外面には丁寧なヘラミガキを施し、下半は細かいハケを施す。内面もヘラミガキ、ハケ等で平滑に仕上げている。外面全体にススが付着し、何らかの目的で火にかけられたと考えられる。

甕は肩の張った体部から上外方にまっすぐに伸びる口縁部を持つもの(54)、短く二段に屈曲する口縁部を持つもの(55)、「く」字状に外反する口縁部で口縁端部は上端に水平な面を有するもの(第3図1425)がある。(55)の口縁端部は面をなし、内側へ肥厚する。山陰系の甕の影響を受けて在地の土で作られたものと考えられる。(1425)は外面に密に横方向のハケを施し、タテに2本のヘラ状工具による刻線を施す。(56)は東海系の台付甕の脚部である。押圧及びヘラで

調整し、内面には接合痕が明瞭に残る。胎土に 1～4mm 大の長石を含む。

高杯(57～60・第3図1430)は口径が 16cm 前後のもの(58)と、21.1cm を測る大型のもの(57)がある。(58)は杯部下半に粗いハケを施す。(57)は杯底部と口縁部の境に明確な稜を持ち、内外面ともヨコナデで仕上げる。稜の部分は断面三角形の粘土を貼りつける。(1430)は脚部外面にヘラケズリを施し、内面にシボリメを残す。裾部内面に布目痕を残す。

鉢は口径 14.8cm、残存高 7.8cm を測る台付鉢(61)がある。体部は丸みを持ち、口縁端部を少し外側へ開き、脚台部は付け根で欠損する。口縁部はヨコナデを施すが、体部下半は指頭圧痕が残り、雑な仕上げである。

椀(62)は半円形の浅い体部からやや内側に彎曲して口縁端部に至る。端部はナデにより面をなし、内側へ肥厚する。外面はハケで粗く調整し、内面はナデで仕上げる。胎土に 2mm 大の長石を含む。(加藤)

須恵器

須恵器は蓋杯(蓋、身)、高杯、壺、甕がある。

(63～67)は蓋杯(蓋)で、外面肩部の稜(以下、単に稜と略す)を有するもの(63～65)と稜のないもの(66・67)に大別できる。稜を有するもののうち、(63)は稜がやや鋭くて天井部外面の回転ヘラケズリを施す範囲は広く、口縁端部は内傾しやや鋭いが、(64・65)は稜が鈍くて回転ヘラケズリの範囲は狭く、口縁端部は丸くなる。(63～65)は中村編年(中村 1978)のⅠ-4～5 段階に相当する。(66・67)は、天井部外面は回転ヘラケズリを施し、他は回転ヨコナデ、ナデを施す。(66)は口縁外端面にタテハケ(9条/cm)を施す。(66・67)は中村編年のⅡ-4 段階に相当する。

(68～70)は杯身である。(68)はたちあがりが高く、口縁端部は内傾し端面に沈線を施す。外底部に回転ヘラケズリを施し、その他は回転ヨコナデを施す。(69)はたちあがりが低く、口縁端部はやや丸くおさめる。外底部はヘラ切り未調整である。(70)は受部がなく外底部はヘラ切り未調整である。

(71・72)は高杯である。(71)は有蓋高杯の杯部でたちあがりは高く、口縁端部は内傾する端面を有する。脚台部はわずかに残り、長方形の四方スカシ窓を施す。(72)は無蓋高杯で形状は土師器高杯に近似する。椀状を呈する杯部と緩やかに裾が広がる脚台部からなり、裾部下方の三方に径 1cm の円形スカシ窓を施す。杯部内面及び外面上半部はヨコナデ(粗いハケ)を施し、杯部外面下半部はヨコナデ(細かいハケ)を施す。脚部は上半部外面に押圧痕、下半部にヨコナデ、内面にシボリ目が残る。脚端部は断面四角でシャープな仕上げを施す。

(73)は台付の甕の体部破片である。体部に幅 6mm の凹線が水平に施され、凹線上に径 1cm の円形の孔を施す。(74)は中型の壺である。口頸部は「く」の字状に短く屈曲し、口縁端部はやや丸くおさめる。体部はやや尖り底気味の扁球形を呈し、最大腹径は体部の上位にある。体部外面上半部は水平方向にやや粗いカキメ(4条/cm)を施し、下半部は右上がりの平行タタキ(3条/cm)を施す。体部内面下半部に同心円タタキを施し、同上半部にヨコナデを施す。

(西本)

韓式系土器(75～80)

(75)は口径 15.3cm、器高 5.8cm を測る陶質土器の蓋である。全体に回転ナデを施し、頂部につまみを持つ。口縁端部から約 1cm 上方に突帯を貼りつけ、上半には櫛描刺突文を施す。(76)は軟質土器広口小壺である。平底の小さな体部に比較的長い口縁部が上外方に開く。主にヨコナデを施すが、体底部付近のみ横方向のヘラケズリを施す。胎土は 5mm 大の石英、赤色酸化土粒、長石を多く含む。他に軟質土器鉢(77・78・80)の体底部が3点出土した。いずれも平底でナデにより調整する。(79)は瓦質土器で外表面に縄蓆文タタキを施した細片である。

製塩土器

(81)は口径 7.4cm を測る薄手丸底コップ形の製塩土器である。丸底Ⅰ式に該当する。なお、製塩土器の分類等については後年度刊行予定の『総括編』に記す予定なので参照願いたい。

(加藤)

4．堤防下層出土遺物（図版6～9）

弥生時代中期の甕、古墳時代前期から後期の土師器、同中期から後期にかけての須恵器、中期の韓式系土器、飛鳥・白鳳時代の土師器及び竈が混在して出土した。

(1)弥生～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

弥生土器

甕(82)は、口径 14.3cm を測り、頸部は丸みを持つ体部より屈曲して外反する。口縁端部は上方に向かってわずかにつまみ上げ、外側に平坦面をつくり、部分的に刻み目をつける。

小型丸底壺(85)は、器高 8.2cm、口径 8.8cm(復原値)を測る。底面にへこみを持ち、ソロバン玉形の体部より「く」の字状に屈曲して、頸部は内彎気味に立ち上がる。頸部にはタテ方向に細かいヘラミガキを施す。庄内式期のものと考えられる。 (田中)

土師器

壺は大型壺(83)、中型壺(84)、小型丸底壺(86)、小型壺(87・88)がある。大型壺(83)は大きく肩の張った体部にわずかに外反しながら直線状に伸びる口縁部を持ち、口縁端部はやや丸い。内外面ともに押圧調整を行い、体部及び口縁部内面に粘土紐の接合痕が残る。頸部に粘土帯を貼り付け、上下2段にわたって刺突文を巡らす。中型壺(84)は扁球形の体部に「く」字状に開く口縁部を持ち、口縁端部はやや丸い。体部外面下半と体部内面にヘラケズリを施し、他はナデを施す。小型壺(87)は長球形の体部に短く外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸い。外面にナデを施すがわずかに指頭圧痕を残し、体部内面はヘラケズリを施す。小型壺(88)は体部中位に焼成後外側から不整形の穿孔を施す。

鉢は土師器の鉢が2点出土した。胴の張った体部を持つもの(89)と、球形の体部を持つもの(90)がある。共に径約 1cm の孔を焼成前に体部中位に開ける。(89)は底部中央に焼成前に径 3.5cm の孔を開け、その後内外から粘土で充填する。

甕は小型甕(94)、中型甕(91・92・95)、大型甕(93)がある。大型甕(93)はなで肩の体部に短く

厚い口縁部がつく。体部外面は粗くハケで調整し、内面はヘラケズリをせずハケで調整する。小型甕(94)は平底気味のややいびつな球形の体部に緩く屈曲する短い口縁部を持ち、体部外面は粗いハケで調整する。(95)は直口の甕で口径 13.2cm を測る。内外面はナデにより仕上げ、口縁端部は丸くおさめる。(92)は山陽系の甕の口縁部で、短く立ち上がる口縁外端面に弱い平行条線を施す。

椀(96)は口径 13.0cm、器高 5.6cm を測り、平底気味の体部を持つ。全面をナデで仕上げ、口縁は若干外へ開く。

杯は口径 11.5cm、器高 3.6cm で口縁を外へつまんで開くやや小型のもの(97)と、口径 12.2cm、器高 4.9cm で口縁端部内側に 1 条の浅い沈線をめぐらす中型の鉢(98)がある。

韓式系土器

(99)は軟質土器鉢の体底部である。平底をナデにより調整する。(100)は口径 11.7cm、器高 6.0cm を測る陶質土器の蓋である。全体に回転ナデを施し、一部手持ちヘラケズリを施す。頂部に逆台形のつまみを持つ。(75)より腰高で、口縁端部から約 1.5cm 上方にやや鋭い突帯を貼りつけ、つまみの付け根及び肩部にはヘラ描きの螺旋状沈線を施す。焼成の際の器肉剥離がみられる。

製塩土器

(101)は口径 11.0cm を測る薄手の鉢形の製塩土器である。体部は逆三角形を呈し、内外面とも丁寧なナデが施されているが口縁端部は未調整で波打つ。 (加藤)

須恵器

古墳～飛鳥・白鳳時代の遺物があり、出土量は比較的多い。器種は蓋杯(蓋、身)、高杯、壺、甕、鉢、椀がある。

蓋杯(蓋)は稜を有するもの(102～104)と稜のないもの(105～109)に大別できる。(102)は天井部がやや丸いが、稜は鋭い。口縁端部は内傾しやや鋭い。(103・104)は稜が鈍くなるが、口縁端部は内傾する。(105・106)は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、口縁端部を丸くおさめる。(105)は口縁部外面に 3 条の沈線を施す。(107・108)は天井部外面がヘラ切り未調整で、格段に径が小さくなる。(109)は天井部外面に回転ヘラケズリを施し中央に宝珠つまみがつく。口縁部内面にかえりがつく。

(110～119)は杯身である。(110)は初期須恵器で、外底面に回転ヘラケズリを密に施し、たちあがりは高く、口縁端部は内傾する。(111・112) は外底面の回転ヘラケズリの範囲は狭くなるが、たちあがりは高く、口縁端部は内傾する。(113～119)は口径が大きくてたちあがりは低く、底部の回転ヘラケズリの範囲が狭くなる。中村編年のⅡ-1～4 段階に相当する。

(120)は高杯の脚部破片である。低脚で外面は細かいヨコハケを施し、裾端部は外端面を有する。三角形の四方スカシ窓を施す。

(121)は壺の完形品である。体部は幅広の扁球形で底部がややひずんでいる。体部の中央付近に 1 ヶ所径 1.2cm の穿孔がある。口頸部から口縁部にかけては複合口縁状を呈し、口縁端部は

やや平らな面を有する。(122)は鉢の口縁～底部破片である。外底部から体部中程にかけて回転ヘラケズリを施す。

(123～125)は壺である。(123)は扁球形の体部にやや外反する長い口頸部を有し、口縁端部はやや鋭い。体部外面下半は回転ヘラケズリを施し、口頸部は縦方向の粗いハケ(3条/cm)を施す。(124)は体部全体に丸みがあり、口頸部は短く外反し、口縁端部がわずかに膨らむ。外底部は回転ヘラケズリ、体部上半はヨコナデを施し、底部内面にヘラケズリを施す。(125)は小型の広口壺である。体部下半は回転ヘラケズリ、肩部は横方向のカキメ(8条/cm)を施す。口縁は大きく開き、口縁端部は平坦な端面を有する。

(126)は甕の口縁部破片である。大きく外反した口頸部に弱い突帯が巡り、その上に4条単位の櫛描波状文を施す。口縁端部は肥厚して外面に広い端面を有し、その上端はやや尖り、端面の下に弱い突帯を有する。 (西本)

竈(127～129・394)

大型の竈が4個体分出土した。

(127)は器高41.5cmを測る。付け底系の個体で、前面部のみ遺存する。個体はややふんばる器形をもつ。庇の発達程度は端部欠損のため不明であるが、庇の上端が釜口高を越えることはないと思われる。調整は内外面とも板ナデによってなされ、底部分に接合のための指頭圧痕が多く残存する。上端部はヘラによる調整。端面はナデられて丸くなっている。焚口はヘラによる切開の後、面取り様ナデを施す。焼成がよく、胎土もすこぶる精良な個体である。生駒西麓産の可能性が考えられる。

(128)は遺存高20.2cmを測る。付け底系の個体で、前面の釜口から焚口の部位と右足が遺存する。庇の下から焚口の部分のカーブが特徴的な個体である。釜口の上端部分はややシャープに納める。庇が他の個体に比べて釜口に近いところから派生しているが、正面から見ると庇の上端は釜口高に少しだけ及ばない。調整は外面が庇の下から焚口部分に12条/cmの細かいハケメを施す。内面は板の当たった痕が明瞭に残る板ナデを施す。胎土は密。石英、長石、雲母を含む。非河内系。色調は内面がにぶい黄橙色、外・断面が明黄褐色～にぶい黄橙色である。

(129)は大型竈のタガ及び把手とみられる破片である。8～9条/cmのハケメが施された器体に幅1cm、高さ0.6cmのタガと、タガと一連になって連なる把手が貼り付けられている。把手は他の個体と違って平たく、形態的には平安時代のいわゆる甕Bの把手に類似する。調整は前述のとおり内外面ともに8～9条/cmのハケメ、外面にはタガ・把手接合時の強いナデ、内面にもハケメを消すほどの強いナデが表面のタガに沿って施される。また、把手接合部分の内面は把手を密着させるためにナデで少しくぼんでいる。胎土は密。石英、長石、白・黒雲母を含む。非河内系。

(394)は器高38.6cm、裾部器壁厚2.9cm、上端部器壁厚1.2cm、タガ高1cm、遺存底高36.2cmを測る付け底系の個体である。右脚から庇部と、2段のタガを有する側面から裏面の破片が遺存する。しかし、底部分と体部の破片が接合し得ないので全体のイメージを推し量るのは難し

い。裾部からほぼ直立して立ち上がった器壁は１段目のタガを境に内彎し、太鼓の様な器形をなして端部に至る。下端面はヘラによって平坦な面をもつ。上端は粘土を内側に折り込んでいる可能性がある。上端面はやはりヘラによる調整で内傾する面をもつ。底はハケメを施した後に貼り付けられ、底の裏面から２段のタガが巡っていた痕跡が見てとれる。正面からみて、復原底高は釜口高を越えることはないと思われる。外面は６～７条/cm の縦方向のハケメを丁寧に施した上に２段のタガを貼り付け、ナデで仕上げる。裾部分には指頭圧痕が多く残る。胎土は非河内系で緻密である。（石山）

２.三国川開削期以降の遺構出土遺物

本項では紙数等の都合により各遺構出土の主要な遺物の報告にとどめ、遺物の時期、数量的検討等については別途刊行予定の総括編で行う。また、河道内堆積層の出土であり、弥生時代から室町時代の遺物が混在した状況であることから明確な共伴関係は確認できなかった。なお、土器以外の土錘、木製品、金属製品、石製品、堤防構成材については各遺物の分類上の観点から別途項目を設け記述した。

５．堤防上層出土遺物（図版 10～12）

弥生土器、古墳時代中期の土師器、須恵器、韓式系土器、平安時代の土師器、須恵器が混在して出土した。

（１）弥生～奈良前期（飛鳥・白鳳時代）

弥生土器

甕(164)は、口径 18.0cm(復原値)を測る。張りのない体部から頸部が外方にのび、口縁端部では上方につまみ上げて外側に平坦面を作る。端部外面には沈線４条を巡らせる。体部外面にはヨコ方向の平行タタキ(４条/cm)を施す。中期の所産と考えられる。（田中）

土師器

壷は小型壷(130･131)が出土した。(131)は焼成後、口縁部の２か所に「V」字形の切れ込みを入れている。肩部外面には粗いタテハケを施すが下半はヘラで雑に調整し、内面はナデで仕上げる。外面下半にはススが付着する。

甕は小型甕(134)、中型甕(132･166･167)、大型甕(133･135)がある。小型甕(134)は体部上半は押圧調整、下半はヨコハケ、体部内面は押圧調整と板ナデを施す。中型甕(132)は球形でややなで肩の体部と「く」字状に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は丸い。体部外面は指による押圧と板ナデ、口縁部は内外面ともナデ、体部内面はヘラケズリを施す。(166)は球形の体部から口縁部が短くわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面はヘラケズリを施し、体部内面に板ナデを施す。(167)は下膨れの体部から弱く内彎気味に外反する口縁をもち、口縁端部は平坦面をもつ。体部外面は上半はタテハケ、下半はヨコハケを施し、体部内面はヘラケズリを施す。大型甕(133)は平底気味の長胴化した体部から「く」字形に屈曲して内彎気味に上外方に口縁部が伸びる。口縁端部は内傾する面を持つ。内底部には炭化物が付着する。(135)は東海

系の台付甕の口縁部である。いわゆる「S字状」の口縁部は退化し、端部は外傾する面を持つ。肩部外面にはタテ方向に強いハケを施す。

高杯は浅い椀状の杯部(136)と筒状の脚柱部から屈曲して開く脚部(137)が出土した。(136)は内面にヘラミガキを放射状に施し、端部は面をなす。

鉢は口径11.3cm、器高6.9cmを測る厚手で深い体部をもつもの(138)と、口径12.8cm、器高6.0cmを測り、体部外面を押圧及びヘラケズリで粗く仕上げるもの(139)がある。

製塩土器

(140)は内面に非常に細かい布目を持つ丸底Ⅲ式製塩土器の口縁部である。(141)はタタキ及びナデにより口縁端部が波打つ鉢形の製塩土器である。(加藤)

須恵器

器種は蓋杯(蓋、身)、高杯、壺、甕、椀がある。

(142～148)は初期須恵器である。(142)は蓋杯(蓋)で天井部外面は回転ヘラケズリの後、粗いカキメ(4条/cm)を施す。稜は鋭く、口縁端部は内傾する。(143･144)は蓋杯(身)で外底部は広い範囲で回転ヘラケズリを施し、たちあがりは高い。(146～148)は甕である。(146)は頸部付近に突帯を巡らし、肩部はやや大きく張り出す。口縁端部は凹線を巡らす。(147)は外面肩部に縦方向の平行タタキ、内面はナデを施しわずかに同心円タタキが残る。口縁端部は肥厚し、外端面を有する。口縁直下に突帯をつける。(145)は器種不明で外面に2条の弱い沈線を、その下に波状文を施す。

(149～163)は古墳時代後期～飛鳥時代の所産である。(149～153)は蓋杯(蓋)である。(149)は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、内面に回転ヨコナデを施す。口縁端部は丸い。(151)は口径が小さく、天井部の頂部のみ回転ヘラケズリを施す。(153)は口径が最小で、天井部外面はヘラ切り未調整である。(154～157)は蓋杯(身)である。(154)はたちあがりが低く、口縁端部はやや丸い。外底面は回転ヘラケズリを行う。(155)は口縁部が上方にまっすぐに伸び、口縁端部は丸い。外底面はヘラ切り未調整である。(156･157)は口縁部が外反し、口縁端部はやや鋭い。外底面は(156)が回転ヘラケズリ、(157)はヘラ切り未調整である。

(158)は高杯である。脚部は長脚で中央付近に2条の凹線を施し、脚部の上端から裾部まで縦長の細い三方スカシ窓を施す。杯部には波状文の一部が残る。(159)は鉢で底部外面の下半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ヨコナデを施す。(160)は壺の蓋である。天井部外面はヘラ切り未調整で、口縁端部は肥厚し丸い。

(161～163)は短頸壺である。(161)は体部下半が丸みを有し、最大腹径から肩部にかけてはなだらかに内傾し、頸部は短く立ち上がる。口縁端部はやや丸い。(162)は完形品で球形の体部に短く外反する頸部を有し、肩部に凹線をめぐらす。口縁部は内傾し、端部はやや丸くおさめる。(163)はわずかに外反する口頸部を有する。

韓式系土器

(165)は格子目タタキを外面に施す軟質土器の体部片である。器種は不明である。(西本)

（2）奈良後期（奈良時代）

土師器杯(170)は口径 14.6cm、器高 2.6cm で全体に磨滅しているが、底部は未調整、口縁部は横ナデを施し、口縁部内面は比較的密な一段の放射状の暗紋が認められる。色調は赤褐色を呈する。土師器高杯(168)は脚部であり、外面は 10 面に面取状のヘラケズリを施し、内面はシボリ目が顕著である。色調は明褐色を呈する。須恵器杯(178)は口径 13.1cm、器高 4.1cm で底部から外上方に直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り未調整、他は横ナデを施す。

（3）平安時代

土師器

杯(171)は口径 13.4cm、器高 3.3cm で外面は全面ヘラケズリ、内面はナデを施す。色調は黄橙色を呈する。杯(175)は口径 16cm、器高 3.8cm で口縁部は横ナデを施し、端部を外反させる。色調は淡褐色を呈する。杯(172～174)は回転台土師器で、底部は回転ヘラ切りである。(172)は口径 11.9cm、器高 3.6cm で底部から内彎気味に立ち上がり端部を外反させる。色調は灰黄色を呈する。(173)は口径 11cm、器高 3.7cm、(174)は口径 13.7cm、器高 3.8cm で内彎気味に立ち上がり、底部はヘラ切り後、ナデを施す。(173)は外面の底部から部分的には 1/3 弱まで、(174)は 1/4 までヘラケズリを施す。色調は橙色を呈する。椀(177)は口径 15.4cm、器高 5.6cm で内外面共に赤色顔料が塗布される。底部はヘラ切りで、「ハ」字状のしっかりした高台を持つ。外面は横方向、内面は見込み及び口縁端部近くは横方向に、他は縦方向に密なヘラミガキを施し、内面には螺旋状の暗紋が認められる。非畿内産である。

須恵器

杯(179)は口径 13.3cm、器高 3.9cm で底部はヘラ切り後丁寧にナデが施される。底部外面に「龍」の墨書が認められる。椀(180)は口径 15 cm、器高 5.6cm で円盤状の高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がる。底部は未調整、他は横ナデを施す。

（4）鎌倉時代

白磁壺(176)は四耳壺と考えられる肩部の破片である。肩部の屈曲等から四耳壺Ⅲ-2 類（磁器の報告は大宰府における分類による）と考えられる。（増田）

6．河道Ⅳ下層出土遺物（図版 13・14）

弥生時代後期から室町時代までの遺物が混在して出土した。白磁椀や青磁椀の口縁部片も含まれる。

（1）弥生～奈良前期（飛鳥・白鳳時代）

弥生土器

(183)は口径 22.8cm（復原値）を測る広口壺で、外反する頸部は口縁部付近で水平となり端部に至る。端部は垂下して外側に平坦面を作り、口縁部上面には列点文、口縁端部外面には波状文を巡らせる。（田中）

土師器

小型丸底壺(186)は扁球形の体部に短い口縁部がつく。体部外面下半は細かいハケ、上半は粗いハケを施し、内面はヘラケズリを施す。肩部内面にはヘラケズリの際についたと思われる沈線が認められる。

甕(187)は、ややなで肩の体部から「く」字形に屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ。端部はナデにより面をなす。(188)は東海系台付甕のいわゆるS字状口縁の口縁部片である。復原口径は12.0cmと小型である。

高杯(189・190)は厚手で底部からまっすぐに外上方へ伸びる口縁部を持つ。(189)は若干丸みを持ち、内面は丁寧に板ナデを施す。

鉢(191)は口径10.6cm、器高4.1cmを測る小型の鉢で内外面をナデで仕上げる。

製塩土器

(185)は底径4.0cmを測る脚台Ⅲ式製塩土器である。(加藤)

須恵器

蓋杯、横瓶、短頸壺が認められるが、出土量・器種は少ない。

(192～196)は蓋杯(蓋)である。(192)は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、稜はやや鋭く、口縁端部は内傾する平坦面をもつ。(193)は口径が大きく、稜は形骸化し凹線状の弱いくぼみとなる。口縁端部は丸くおさめる。(194)はやや深めの蓋で稜は消滅している。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、天井部内面に同心円タタキが残る。口縁端部はややつまみ出され内傾する。

(197)は初期須恵器の瓶である。扁球形の体部に少し外反する口頸部を有し、口縁部に人為的な打欠きがある。全体的にナデ調整が施され、底部外面及び体部内面上部に指頭圧痕が残る。体部最大腹径付近に径約1cmの注口部があり、ここに木が詰め込まれ、さらに口頸部にも木製の栓がされている。口頸部の栓は円柱形で長さ6.8cm、厚さ3cmを測り、材質はスギである。口頸部と注口部の両方を栓で塞ぐ例は極めて稀で、特殊な用途に用いられたと考えられる。

(198)は初期須恵器の小型の横瓶である。体部と口頸部が遺存する。体部は俵形を呈する。体部外面にナデ調整を行う。

(199)は壺の蓋で、天井部はやや尖り気味で、回転ヘラケズリを施す。(200)は短頸壺で扁球形の体部に直立する短い口頸部を有する。体部下半は回転ヘラケズリを施す。(西本)

(2) 奈良後期(奈良時代)

土師器甕(201)は口径18.1cm、器高17cmで体部は球形に近く、口縁部は直線的に外上方に伸びる。体部外面はハケメを施し、内面はナデ上げている。色調はにぶい黄橙色を呈する。外面には煤が付着し、内面にも炭化物が付着している。土師器高杯(203)は脚部であり、底径は11.2cmで外面は9面に面取状のヘラケズリを施し、内面はシボリ目が顕著である。色調はにぶい橙色を呈する。須恵器杯(218)は口径12.5cm、器高4.1cmで底部はヘラ切り未調整、他は横ナデを施す。

(3)平安時代

土師器

甕(202)は口径25.4cmで長胴の甕と考えられ、口縁部は内彎気味に外上方に伸び、端部をやや肥厚させる。体部外面はハケメを施し、色調はにぶい褐色を呈する。皿(205)は回転台土師器で、底部はヘラ切りである。口径10.8cm、器高2.4cmで底部から内彎気味に立ち上がる。底部は粘土が全面に付着した状況でそのままヘラ切りを行い、未調整である。色調は黄灰色を呈する。杯(214)は皿に高台が付く器形であり、口径10.8cm、器高3cmで色調は明褐色を呈する。皿(206)は「て」字状口縁の小皿であるが、屈曲は不明確である。口径10cm、器高1.9cmで器壁は4mmと厚く、色調はにぶい黄橙色を呈する。椀(217)は口径16.4cm、器高6.4cmで大型の深い椀型をなし、高台も高くしっかりしたものである。口縁端部を弱く外反させ、内外面ともに密にヘラミガキを施すが、外面は内面に比べてやや間隔がみられる。色調は灰白色～淡黄色を呈し、内面の一部に炭化物が付着する。非畿内産である。

黒色土器

杯(212・213)はA類である。(212)は口径14.8cm、器高3.6cmで比較的平らな底部から内彎気味に立ち上がり低い高台を持つ。外面はヘラケズリを施し、内面は丁寧にヘラミガキを施す。(213)は口径13.8cm、器高4cmでやや丸味を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、比較的高くしっかりした高台を持つ。内面は丁寧にヘラミガキを施す。

瓦器

椀(215)は口径14cm、器高5.1cmで、内外面ともに密にヘラミガキを施す。ヘラミガキは外面は3分割し、見込みは鋸歯状に施す。椀(216)は口径15cm、器高5.3cmで内外面に密なヘラミガキを施す。(215・216)は楠葉型Ⅰ-2期と考えられる

須恵器

皿(219)は口径13.5cm、器高2cmで平高台状になり、底部はヘラ切り未調整、他はナデを施す。内面ほぼ全面に墨が付着する。椀(220)は口径15.5cm、器高5.4cmで底部は糸切である。見込み部分に凹みが認められ、高台部分は明瞭でない。篠窯産と考えられる鉢(221)は口径24.4cm、器高9.3cmで口縁端部をわずかに肥厚させ、底部は回転糸切りである。

白磁

椀(222)は口径15.4cmで内彎気味に立ち上がり、端部を外反させて水平にするもので、椀Ⅴ-4a類と考えられる。(223)は口径16.2cmで外反気味に立ち上がり、器壁は薄い。

(4)鎌倉・室町時代

土師器

皿(207)は口径15.4cm、器高3.6cmで底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部は横ナデを施す。色調は灰白色を呈する。皿(208)は口径11.5cm、器高2.6cm、皿(209)は口径11.8cm、器高2.5cmで口縁部を外反させ、色調はにぶい黄橙色を呈する。(209)は底部に板状圧痕が認められる。皿(210)は口径9.4cm、器高1.5cmで底部から口縁部が直線的に立ち上がる。色調はにぶ

い黄橙色を呈する。皿(211)は口径 9.5cm、器高 2.9cm で底部から外反して立ち上がり、色調はにぶい黄橙色を呈する。(増田)

7．河道Ⅳ上層出土遺物（図版 14～17）

弥生時代後期から鎌倉時代までの遺物が混在して出土した。

(1)弥生～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

弥生土器

広口壺(224)は、口径 14.5cm(復原値)を測るもので、頸部は緩やかに外彎し、口縁端部では下方に小さく垂下させて外側に平坦面をつくる。(225)は、口径 16.0cm(復原値)を測り、上方にのびる頸部より、口縁部は屈曲して外側下方へ垂下させ、内面に円形浮文をつける。

甕(226)は、口径 14.8cm(復原値)を測る。頸部は体部から屈曲して外反し、口縁端部ではわずかにつまみ上げる。体部外面には左上がりの平行タタキ(3条/cm)を施す。タタキは粗目だが器形より庄内系の土器と考えられる。(田中)

土師器

壺は小型丸底壺(227)、中型壺(229･230)、短頸壺(231)、大型壺(233･234)がある。中型壺(229･230)はともに体部外面全体にススが付着し、火にかけられたものと思われる。短頸壺(231)は扁球形の体部に短く直立気味に口縁部がつく。内外面ともナデによって仕上げ、全体に雑な作りである。大型壺(233･234)はいずれも二重口縁壺で二段に大きく屈曲し、口縁端部は外傾する面をなす。

甕は中型甕が出土した。球形の体部から「く」字形に屈曲して外上方に伸び、口縁端部が肥厚する布留式に通有な甕(235･236)と二重口縁を持つ甕(237)、扁球形の体部に外反する口縁部を持つ甕(238)がある。(237)は体部外面をタテハケ、内面をヘラケズリで仕上げ、口縁部はハケの後ヨコナデを施す。他に山陽系の甕の口縁(239･240)や、東海系台付甕の脚台部(241)がある。(248･249)は下ぶくれの丸底の体部に短く開く口縁部を持つ。口縁端部は外傾する面をなし内側に肥厚する。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリを施す。

高杯(242～245)は脚部の形状により、筒状の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部に至るものと、付け根からラッパ状に開くものに分けられる。杯底部から屈折して外上方に伸びる口縁部を持つ杯部が筒状の脚柱部に接続している例(242)があるが、後者の杯部については不明である。

鉢は口径 10～12cm の鉢(246･247)と口径 17.0cm の大型鉢(228)がある。(228)は半円形の小さな体部に長い口縁部がつくもので、口縁部内面及び体部内外面にはヘラミガキを施し、口縁部外面にはナナメハケを施す。丁寧な作りで小型丸底壺をそのまま拡大した形態をとっている。

杯(250)は体部外面押圧調整、口縁部外面にヨコナデ、内面は放射状にヘラミガキ、内底面に輪状暗紋を施し、口縁端部から 3cm 下に1条の沈線を巡らせる。杯(251)は口縁端部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面ヘラケズリ、口縁部外面にヨコナデを施す。内面は放射状にヘラミガキを施す。

製塩土器(267～271)

(267)は底径 2.7cm を測る脚台Ⅳ式製塩土器である。(268)は丸底Ⅲ式製塩土器、(270)は鉢形製塩土器、(271)は薄手鉢形製塩土器である。(271)は口径 10.0cm を測り、口縁部は波打っている。内面はナデで比較的平滑に仕上げるが、外面には接合痕が残る。(加藤)

須恵器

概して出土須恵器は少なく、蓋杯（蓋、身）、壺がみられる。

(261)は蓋杯(蓋)で口径は小さく、天井部外面はヘラ切り未調整で、口縁端部は丸い。(262)は蓋杯(身)でたちあがりは低く、外底面はヘラ切り未調整である。(263)は扁球形の壺体部で体部外面下半は回転ヘラケズリを施す。(西本)

瓦

瓦片が数片出土しているが、完形品はない。(272)は凸面に浅い格子タタキを施す。凹面には布目痕が残る。色調は灰～灰白色(7.5Y6/1～2.5Y8/1)で、胎土は白色細粒を含むが密である。焼成は良好である。(大藤)

(2)奈良後期(奈良時代)

須恵器杯(255)は口径 14.3cm、器高 3.8cm で底部から直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り未調整で他は横ナデを施す。

(3)平安時代

土師器

杯(253)は回転台土師器で、口径 12.4cm、器高 3.8cm である。底部から内彎気味に立ち上がり、底部はヘラ切り後ナデを施し、色調は橙色を呈する。椀(258)は口径 16.2cm で端部を強く外反させ、外面は丁寧に横ナデを施し、部分的に細かいヘラミガキがみられ、内面は細かいヘラミガキを比較的密に施す。色調は灰白色を呈し、精良な胎土である。非畿内産である。

黒色土器

椀(257)はA類で、口径 15.1cm、器高 5.7cm である。底部から内彎して立ち上がり、端部近くを外反させ、深い椀形をなす。底部はヘラ切りで、外面は横方向に、内面は4分割してヘラミガキを施している。非畿内産である。

瓦器

椀(259)は口径 15.2cm で内外面のヘラミガキは細く、内面は丁寧に施すが、外面はやや間隔があく。楠葉型Ⅱ-1期と考えられる。

須恵器

椀(264)は口径 15.9cm、器高 5.4cm で円盤状の高台を持ち、底部はヘラ切り後ナデ、他は横ナデを施す。壺(265)は短い脚を持つ長頸壺で、肩部に最大径を有する。底部にはヘラ先状の圧痕がみられ、体部はヘラケズリを施し、肩部から頸部にかけてナデを施す。肩部全面に濃緑色の自然釉が認められる。

白磁

椀(266)は口径 15.2cm で内彎気味に立ち上がり、端部は玉縁状となる。椀Ⅳ類と考えられる。

(増田)

瀬

(273)は付け底系の個体である。底の上半部と釜口部分の一部が残存する。底の裏面から縦方向に1本、横方向に左右1本ずつのびる底補強用のタガ状突起が特徴的な個体である。底は正面からみると釜口より下位に付き、あまり発達していない。調整は 7 条/cm 及び 9～10 条/cm と2種類の原体の違うハケメが外面に部分的に残る。ハケメを施した後に3本のタガ状突起を貼り付ける。胎土はやや粗い。石英、長石、赤色酸化土粒を含む。非河内系の胎土である。

(274)は復原高 41.8cm、付け底系の個体で 50%程度遺存する。基底部からほぼ直立した器壁は体部中程のタガを境に角度を変え、内傾して端部に至る。向かって左側に把手の剥離痕が残る。釜口と焚口間の距離が他の個体に比べて長い。正面からみると、釜口の高さが底の上端をしのぐ。タガは幅 1.4cm、高さ 0.6cm で体部を一巡する。調整は外面の底を除くほぼ全面に 9 条/cm の縦方向のハケメが施され、内面にも外面と同じ原体によって部分的に縦方向及び斜め方向のハケメが施される。胎土は密。石英、長石、金雲母片を多量に含む。非河内系の胎土である。

(石山)

(4)鎌倉・室町時代

土師器

皿(254)は口径 12.8cm、器高 2.5cm で底部から外反して立ち上がり、色調はにぶい黄橙色を呈する。椀(256)は口径 14.6cm、器高 4.7cm で尖り気味の底部から内彎気味に外上方に伸び、底部には「ハ」字状に開く高台を持つ。口縁部外面を横ナデ、内面はナデを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。非畿内産である。

瓦器

椀(260)は口径 12.3cm、器高 3.7cm でヘラミガキは外面には認められず、内面は細く圏線状に、見込み部分は簡単な鋸歯状に施す。楠葉型Ⅳ-1 期と考えられる。 (増田)

8．河道Ⅲ下層出土遺物 (図版 18～21)

弥生時代後期から室町時代までの遺物が混在して出土する。

(1)弥生～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

弥生土器

(275)は口径 15.0cm(復原値)を測る無頸壺で、体部上半は内傾し、そのまま口縁部に至る。口縁部外面に凹線2条、体部に沈線3条を巡らせる他、口縁部近くに透かしを穿ち、体部外面に右下りハケメ(4条/cm)を施す。

(276)は底部径 4.9cm を測る底部で、体部外面にはヨコ方向に平行叩き(2.5 条/cm)を施す。

(291)は器高21.8cm、口径12.0cm(復原値)を測る。長胴の緩やかなカーブを持つ体部より屈曲して上方に延び、端部近くで内傾して端部を丸くおさめる。体部外面はやや左上がりの平行タタキ(3条/cm)を施し、底部内面はハケ調整(5条/cm)を施す。(292)は口径12.8cm(復原値)を測る。緩やかなカーブを持つ体部より屈曲して外反する。端部はやや鋭いが、ヨコナデ等の口縁調整はみられない。体部を3等分するように体部2カ所及び頸部1カ所に接合痕がみられる。体部外面上半にヨコ方向の平行タタキ(2条/cm)を施す。(291・292)はいわゆる甕形製塩土器の可能性が考えられるものである。 (田中)

土師器

壺は小型丸底壺(277～280)、小型壺(281～283)、中型壺(288)、大型壺(284～287・289・290)がある。小型丸底壺はいずれも扁球形の体部から「く」字形に屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ。ヘラミガキで丹念に調整するもの(278・279)、口縁部から肩部までヘラミガキを施すもの(277)、体部下半をハケで調整するもの(280)がある。小型壺の(283)は扁球形の体部に短い口縁部がつく。器壁が厚く、胎土に径0.2～0.5cm大の石英、長石を多く含み、内外面とも雑な仕上げである。中型壺の(288)は長胴形で尖底気味の体部に直立する口縁部を持ち、全面をハケで丁寧に調整を施す。大型壺(284)の頸部には2か所竹管文を施す。また外反する口縁部を持ち、外面をタタキで調整するもの(290)がある。

甕は長胴形の体部から緩く屈曲して伸びる口縁部を持ち、体部外面にタタキを施すもの(291・292)と球形の体部から上外方へ伸びる口縁部を持つもの(293)、倒卵形の体部から上外方へ伸びる口縁部を持つもの(294)、扁球形の体部から強く屈曲して開く口縁部を持つもの(295)とバラエティがある。他に東海系台付甕の「S字状口縁」の退化したもの(297)が出土した。(300～302)は飛鳥時代の甕で小型甕・中型甕・大型甕がある。小型甕(301)は下ぶくれの球形の体部から緩くくびれて外反する短い口縁部を持つ。体部内外面はくまなくハケを施す。中型甕(300)は扁球形の体部に短い口縁部を持ち、体部内面はユビナデにより凹凸が残る。体部外面はハケを施す。

高杯(298)は杯底部から緩く屈曲して大きく開く浅めの杯部に、ラッパ状に開く脚部を持つ。

鉢(296)は平底気味の球形の体部に外反する短い口縁部がつき、内外面ともナデで仕上げる。(303)は口径17.4cm、器高8.8cmを測る大型鉢である。外面はやや凹凸があるがヘラケズリで調整し、底部に「×」字状のヘラ記号が認められる。内面は放射状にヘラミガキを施す。

杯(299)は口径13.1cm、器高3.35cmを測る完形のものである。外面は細かくヘラケズリを施し、口縁端部から3cm下に1条の沈線を巡らせる。内面は放射状にヘラミガキを施し、最後に底部中央には楕円状に1周半のヘラミガキを施す。胎土に赤色酸化土粒を多く含む。

甑(341)は大型の甑の口縁部と考えられる。外面はタテハケ(7～8条/cm)を施し、内面はヨコハケ(7～8条/cm)を施す。口縁端部は外傾する端面に沈線を巡らす。(342)は甑の底部破片で外面はタテハケ(8条/cm)、内面は縦方向のヘラケズリを施す。底部の蒸気孔は周縁部に楕円形の孔がみられる。胎土は0.5～2mm大の石英、微小な赤色酸化土粒を含み、やや粗い。

製塩土器

脚台Ⅲ式製塩土器が2点(338・339)出土した。　(加藤)

須恵器

概して出土須恵器は少ない。蓋、壺、平瓶がみられる。

(333)は高杯の蓋で、丸みのある天井部にボタン形のつまみがつく。天井部外面に回転ヘラケズリを主に施し、肩部に弱い凹線を施す。(334)は壺である。体部はやや球形に近い小さなもので頸部は細くくびれ、口縁部は段をつけて内彎しながら外上方へ大きく広がる。口縁端部はやや鋭い。口頸部に2条の弱い凹線、体部上部に凹線を施す。体部には径1.5cmの円形の穿孔を行い、くりぬかれた部分が内面に残る。(335)は平瓶の体部である。肩部が大きく張り、底部は丸い。外底部に回転ヘラケズリを施す。肩部に自然釉がかかる。　(西本)

(2)平安時代

土師器

杯・皿

(304～306)は回転台土師器で、底部はヘラ切りである。(304)は口径14.3cm、器高3.3cmで平らな底部から内彎気味に立ち上がり、色調は浅黄橙色を呈する。(305)は口径14.7cm、器高3.7cmで平らな底部から外反気味に立ち上がり、色調はにぶい黄橙色を呈する。(306)は口径12.8cm、器高4cmでやや丸味を持つ底部から外反気味に立ち上がり、色調はにぶい黄橙色を呈する。(311)は口径12cm、器高2.3cmで平らな底部から外反気味に立ち上がる。器壁は薄く、端部内面が弱く凹面をなす。(312～318)は「て」字状口縁の小皿で、口径9.4～10cm、器高1.4～2cmである。(312)は器壁は3mm程で色調は浅黄色を呈する。他は器壁は4mm程度とやや厚く、屈曲もやや不明確となり、色調は灰白色を呈する。(326～328)は口径14.4cm～16cm、器高3.1～4.2cmで口縁部を屈曲させ、横ナデを施しやや外反させる。(326)は端部に内傾する面をなす。色調は(326)は灰白色、(327・328)は褐色を呈する。

椀

(307)は口径15.2cm、器高5.1cmで底部はヘラ切りである。比較的平らな底部から内彎気味に立ち上がり、底部に短いがしっかりとした高台を持つ。色調はにぶい橙色を呈する。(308)は口径16.2cm、器高6.2cmで、底部は糸切りである。しっかりした高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、端部近くで外反する。内外面は密なヘラミガキを施し、色調は白色に近く、胎土は精良である。(307・308)は非畿内産である。

黒色土器

椀(309)はB類で、口径14.6cm、器高5.6cmである。底部から内彎して立ち上がり、端部近くで弱く外反させ、全体に丸味をもつ椀形をなす。器表面は磨滅しており全体の状況は明らかでないが、外面はヘラケズリを施し、内外面ともに細かく密なヘラミガキを施している。

須恵器

杯(336)は口径14.3cm、器高4cmで底部から直線的に外上方に伸びる。底部はヘラケズリ、

他は横ナデを施す。椀(337)は口径 15.8cm、器高 5.1cm で底部から内彎して立ち上がり、内面見込部分に凹みが認められる。円盤状高台で底部は糸切り、他は横ナデを施す。

(3)鎌倉・室町時代

土師器

皿

(319～322)は底部から直線的ないしはやや内彎気味に立ち上がるもので、内面は「の」の字状のナデを施す。(319)は口径 9.3cm、器高 1.8 cm、(320・321)は口径 7.8 及び 8.2cm、器高 1.2 及び 1.3cm 、(322)は口径 7.2cm、器高 1.1cm である。(320) は色調はにぶい黄橙色、(319・321・322)は灰白色を呈する。(323)は口径 11.7cm、器高 2.4cm で底部から内彎気味に立ち上がる。(324・325)はやや外反気味に立ち上がり、(324)は口径 10.4cm、器高 1.8cm、(325)は口径 10.7cm、器高 2.5cm である。(323・325)は内面は一方向にナデを施し、色調は橙色を呈する。

瓦器

椀

(329)は口径 12.8cm、器高 3.6cm、(331)は口径 12.8cm、器高 3.8cm で高台は断面三角形の簡単なもので、内面は細い圏線状、見込みは螺旋状のヘラミガキを施す。(330) は口径 11.6cm、器高 3.6cm で口縁端部近くで上方に屈曲してから外反する。高台は幅 1～2mm 程の紐状のものが認められるが、高台のはがれた跡の可能性もある。内面は細い圏線状のヘラミガキを、見込み部分は簡単な鋸歯状のヘラミガキを施す。(329・331)は楠葉型Ⅳ-1 期、(330)はⅣ-2 期と考えられる。(332)は口径 10.8cm、器高 2.8cm で高台を持たず、やや尖り気味の丸底をなす。内面は粗く圏線状のヘラミガキを施す。外面に重ね焼きの痕跡が認められる。和泉型Ⅳ-4 期と考えられる。 (増田)

9．河道Ⅲ上層出土遺物 (図版 21～23)

弥生時代から鎌倉時代までの遺物が混在して出土した。弥生土器は細片のため図化できなかった。

(1)古墳～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

土師器

壺は小型丸底壺と中型壺がある。小型丸底壺(343)は扁球形の体部に上外方へ伸びる口縁部を持ち、体部外面はヘラケズリの後粗いヘラミガキを施し、体部内面は板ナデを施す。胎土には赤色酸化土粒を多く含む。中型壺(344)は肩の張った体部に短く上外方へ伸びる口縁部を持つ。体部外面はヘラケズリの後、肩部はナデ、中位はヘラミガキにより調整する。内面は口縁部及び体部下半をハケで調整する。

高杯は口径 15cm 前後のもの(345・347)と口径 19.0cm を測る大型高杯(346)がある。(345)は外面をハケ、内面をヘラミガキで丁寧に仕上げ、内外面とも赤色顔料が付着する。(347)は口縁端部から約 1.5cm 下方に径 0.5cm の竹管文を浅く押し巡らす。

鉢(348)は口径15.6cmを測り、偏平な体部に内彎気味に伸びる長い口縁部を持つ。口縁部内外面及び体部内面にはヘラミガキを施し、体部外面は細かいヘラケズリを施す。(349～351)はいずれも有段鉢でヘラミガキ及びナデで調整する。(351)が最も作りが雑である。

椀(352)は口径10.0cmを測る小型の椀で内外面ともナデで仕上げ、強く火熱を受けて赤変し、一部白色化している。

甕(353)は下ぶくれのいびつな球形の体部から緩く屈曲して上外方に短く伸びる口縁部がつく。体部外面はタテハケ、同内面は押圧調整を施すが、全体に作りが雑である。(354)は口縁部の屈曲が小さい甕で器壁が厚い。口縁端部は丸くおさめる。(第3図1426)は東海系S字状口縁甕で口縁部の屈曲はやや鈍い。

杯(356)は外底面にハケ、内面に放射状にヘラミガキを施し、杯(358)は内外面にほとんどナデ調整を施す。(加藤)

甑(392)は甑底部の破片で外面縦方向の平行タタキの後、ナデを施し、体部最下部に横方向のヘラケズリを施し、内面はナデを施す。底部の蒸気孔は円形の中央孔の周りに円孔が巡るものである。胎土は0.1～1.5mm大の石英・長石・黒雲母を含むが精良である。(393)は甑の体部から口縁部の破片で口縁部は直線的に弱く外反し、口縁端部はやや鋭い。外面は密なタテハケ(12～13条/cm)を施し、内面は縦方向のヘラケズリを施し、口縁部に一部ヨコハケを施す。把手は小ぶりで扁平な牛角状である。(西本)

製塩土器

鉢形製塩土器の口縁片(390)が出土した。(加藤)

須恵器

全般的に出土は少ない。蓋杯、高杯、鉢がみられる。

(384)は長脚2段スカシの有蓋高杯である。脚部は裾が大きく広がり、端部は平坦面を有する。脚部中央付近で2条の沈線を巡らす。スカシ窓は二方スカシで細長い長方形のものを2段に分け施す。脚部内面上半部にシボリ目がみられる。杯部は底が浅めで器壁は厚く、たちあがりは低い。(385)は蓋杯(身)で、外底面の回転ヘラケズリは範囲が狭い。たちあがりはやや低く、端部はやや丸い。(386)は蓋で天井部外面に回転ヘラケズリを施す。内面に口縁端部の位置より低いかえりがつく。天井部外面に直線状のヘラ記号を記す。(388)は低平な蓋である。天井部は平坦で口縁は屈曲して大きく広がる。口縁端部はやや丸い。天井部はヘラ切り未調整である。(西本)

瓦

(391)は平瓦破片で凸面にタタキを施し、凹面にケズリを行い、部分的に布目痕が残る。色調は灰白色(7.5Y8/1～N5/0)である。胎土は密で、焼成良好である。(大藤)

（2）平安時代

土師器

杯・皿

(357)は口径 12.7cm、器高 2.2cm で底部押圧調整、口縁部横ナデを施す。色調はにぶい褐色を呈する。(359～362)は回転台土師器で底部はヘラ切りである。(359)は口径 11cm、器高 2.9cm で丸味を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、にぶい褐色を呈する。(360)は口径 14cm、器高 3.5cm で、平らな底部からやや外反気味に立ち上がり、色調は黄褐色を呈する。底部には板状圧痕が認められる。(361)は口径 13.8cm、器高 3.9cm で底部から内彎気味に外上方に伸びる。底部近くにヘラケズリを施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。(362)は口径 11.3cm、器高 3.2cm で底部は円盤状の高台で、板状圧痕が認められる。色調は灰褐色を呈する。(363)は回転台土師器で底部はヘラ切りである。口径 8.9cm、器高 1.7cm で平らな底部から外反気味に短く立ち上がる。色調はにぶい橙色を呈する。(364～366)は口径 14.4～15.8cm、器高 2.7～3.1cm で口縁部は二段に横ナデを施す。色調は(364･365)は淡黄色、(366)は淡褐色を呈する。(367)は口径 12.9cm、器高 2.3cm で底部から内彎気味に立ち上がり、端部はつまみ上げ気味に横ナデを施す。(370)は皿に高台が付く器形で、口径 12cm、器高 3cm で口縁端部に沈線を巡らす。色調は黄橙色を呈する。(377～380)は「て」字状口縁の小皿で、(377～379)は口径 9.6cm～11cm、器高 1.7～1.9 cm である。(380)は口径 10.2cm、器高 1.1cm と低平で、屈曲がやや不明確である。いずれも器壁は 4mm 程度と厚く、色調は(378)はにぶい黄橙色、他は灰白色を呈する。

黒色土器

杯(368･369)はA類である。(368)は口径 16.6cm、器高 4.8cm で底部に直立気味の低い高台を持ち、内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。外面はヘラケズリを施した後丁寧にヘラミガキを施し、内面も丁寧にヘラミガキを施す。(369)は口径 14.7cm、器高 4cm で底部に「ハ」字状の高台を持ち、内彎気味に外上方に開く。外面は部分的に太いヘラミガキがみられ、内面は丁寧にヘラミガキを施す。

緑釉陶器

小椀(387)は口径 8.1cm、器高 3cm で内彎気味に立ち上がり、端部は外反する。削り出しの円盤状高台を持ち、底部は糸切りである。硬質で胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈するが高台底部には認められない。

白磁

皿(389)は口径 11.8cm で口縁部はやや外反して外上方に伸びる。内面見込近くに沈線を巡らし、外面の下半は露胎である。皿Ⅴ-1 類と考えられる。（増田）

竈

(340)は付け庇系カマドの右足部分である。器壁を成形・調整し、庇・脚部分を接合した後に内面裾部に粘土塊を補充している。その補充の仕方が雑で荒い。調整は内外面ともにまばらに 8 条/cm のハケメを施す。胎土はやや密。石英、長石、黒色のなめらかな石を含む。非河内系。

(395)は裾部径 43cm で、付け底が剥離する他はほぼ完形に復原できる。底部から内傾して立ち上がる截頭円錐形の形状を呈し、体部半ばに上向きの一対の把手を有する。焚口の周囲には幅約 3.5cm の底の剥離痕が巡る。底は曲げ底の上に付け底が巡るタイプで、類例が非常に少ない。調整は 11 条／cm 前後のハケメをほぼ全面に施しており、その様子からハケメを施した後に曲げ底を成形、その上で付け底・把手を貼り付けていることがわかる。把手の内面には本体と把手を密着させるための非常に強い押圧調整のくぼみが残る。また、内面裾部焚口の横に粘土塊を貼って補強した痕跡が残る。胎土は密。石英、長石及び金雲母微細砂粒を少量含む。非河内系の胎土である。色調は内・外・断面ともに淡黄色。（石山）

（3）鎌倉・室町時代

土師器

皿

(371～373)は口径 11.4cm～12.4cm、器高 2.2cm～2.6cm で底部から外反して立ち上がる。色調は(371-372)は灰白色を、(373)は浅黄色を呈する。(374)は口径 11.4cm、器高 3.2cm、(375)は口径 11cm、器高 2.6cm のやや深身の器形で、底部から外反気味に立ち上がり、(374)は口縁端部内面は弱い凹面をなす。色調は淡黄色を呈する。(381)は口径 7.9cm、器高 1.3cm で色調は乳白色を呈する。(382)は回転台土師器で底部は糸切りである。口径 8.9cm、器高 1.9 cm で色調はにぶい橙色を呈する。(383)は口径 7.9cm、器高 1.7cm で、比較的薄手のものである。色調は灰色を呈する。

瓦器

椀(376)は口径 10.4cm、器高 2.6cm で丸味を帯びた底部をなし、内面に粗く太い圏線状のヘラミガキを施す。内外面とも残存部分(約 1/3)には炭素の吸着は認められない。和泉型Ⅳ-2 期と考えられる。（増田）

１０．河道Ｉ下層出土遺物（図版 24～32）

弥生時代中期から室町時代までの遺物が混在し、比較的遺存度の良好なものが多数出土した。

（1）弥生～飛鳥・白鳳時代

弥生土器

弥生時代の遺物は、壺(396～400)をはじめ、甕(402)、鉢(401)、有段鉢(403)など数器種がみられた。

壺

いずれも口縁部が遺存しないため、詳細な分類は難しいが、器形にはそれぞれの特徴が明瞭に認められた。(396)は、頸部径 10.5cm(復原値)を測り、全体にゆるやかなカーブを持っていて、外彎する口頸部を持つ。頸部外面にはヘラ描沈線５条、体部外面には円弧状に沈線３条を施す。(397)は、上半部が欠けているため明確ではないが、張りの強い体部から壺と推測される。外面には密に細かいヘラミガキを施す。(398)は、頸部径 8.05cm(復原値)を測る。張りの強い

体部から、頸部は屈曲して上方へのびる。体部外面のタテ方向のヘラミガキなど、全体的に密に調整を施す。(399)は、頸部径 8.2cm を測る。底面にはへこみをもち、体部は下膨れを呈する。頸部では「く」の字状に屈曲して外反する。体部上半にはタテ方向のヘラ描沈線６本を描き、体部下半には穿孔を穿つ。(400)は下膨れの体部で、丸みをもつ上半から屈曲して下半では直線的となり、へこみをもつ底部へとつながる。頸部では「く」の字状に屈曲して外反する。(421)は、体部径 30.0cm、底部径 2.0cm を測る。体部は小さな底部から広がり、さらに方向を転じて丸みを帯びた上半に至る。部位により各々異なる方向の平行タタキ(３条/cm)を施した後、ナデ消す。他例からみて庄内式後半期～布留式初頭の所産と考えられる。

甕

(402)は、口径 14.9cm(復原値)を測る。頸部は緩やかに屈曲して外彎し、口縁端部は外側に平坦面をなす。体部外面にはやや右上がり平行タタキ(３条/cm)を施す。

鉢

(401・403)がみられる。(401)は、体部にふくらみがなく、最大径は口縁部になるもので、器高 13.3cm、口径 15.7cm (復原値)、底部径 7.2cm を測る。口縁部は斜め上方へ短く外反し、端部は丸くおさめるが、口縁調整に精緻さがみられない。また、(403)は有段鉢で、器高 7.3cm、口径 17.7cm を測る。体部は底面にへこみをもつ底部から広く外反し、頸部間近で屈曲して内傾する。頸部は「く」の字状に屈曲して広く直線的に外反する。口縁端部は摘み上げて外側で垂直に平坦面を作るため、上端面は鋭い。口頸部外面にハケメ(６条/cm)、内面にはヘラミガキを密に施し、体部外面にはヘラケズリを施す。庄内期の所産と考えられる。　(田中)

土師器

壺

小型丸底壺(404～408)、小型壺(409～411)、中型壺(412～414)、大型壺(415～420)がある。小型丸底壺は全体のプロポーション及び調整から次の３つに分けられる。(404・405)は扁球形の体部にやや長めの口縁部を持ち、内外面とも丁寧にヘラミガキを施すタイプである。(405)は一部タテハケが残り、調整が比較的雑になっている。次に(406)は扁球形の体部から緩く屈曲して短く伸びる口縁部を持ち、外面はハケ、内面はヨコナデ及び底部付近にヘラミガキを施すタイプである。そして(407・408)は扁球形の体部から上外方へ内彎気味に短く伸びる口縁部を持つ。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施すタイプである。

小型壺(409)は口径 10.2cm、器高 8.6cm を測り、扁球形の体部から緩く屈曲して内彎気味に短く伸びる口縁部を持ち、端部は面をなす。体部外面はハケ、内面は指頭圧痕が顕著に残る。(411)は扁球形の体部から屈曲して内彎気味に長く伸びる口縁部を持つ。ほぼ完形だが、焼成後底部付近に不整形の孔を穿っている。

大型壺には球形の体部から２段に屈曲する口縁部を持つもの(415・416)、球形の体部から外反気味に口縁部が開くもの(417～419)、長胴形の体部から緩やかに屈曲して長く伸びる口縁部を持つもの(420)がある。(415)は口径 16.0cm、器高 35.7cm を測る完形品で体部外面をハケ、内

面をヘラケズリで調整する。口縁部内面にヨコ方向のハケを施す。(418)は体部外面に右上がりのタタキを施した後ハケで調整する。内面は全体にハケを施す。胎土に径2㎜大の黒色砂粒を多く含んでいる。(419)は肩部外面にヘラ描き2本線を施す。(420)は、ほぼ完形で外面にタテハケを施した後、部分的にヨコ又はタテ方向にヘラミガキを施す。底部付近はヘラケズリを施し尖り気味になっている。内面はハケを全面に施し、口縁端部はわずかにナデている。

甕

小型甕(423～425・437・439・441・477)、中型甕(438・443)、大型甕(422・426～436・440・442・444・445・476)がある。

小型甕(425)は、いびつな球形の体部に短い口縁部を持つ。内面はヘラケズリを施すが、下半はユビナデのままで器壁も厚く全体に粗雑な作りである。(424)は肩部に3か所ヘラ描き刺突文(米粒形列点文)を施す。(439)は扁球形の体部に2段に屈曲する口縁部を持ち、端部は面をなす。体部外面はハケ、内面はナデで調整する。(441)は山陽系の甕の口縁片である。(477)は飛鳥時代の小型甕で口径と最大腹径がほぼ同じである。体部外面はタテハケ、同内面上半はヘラケズリ、内底面は押圧調整、口縁部外面はヨコナデ、同内面はヨコハケを施す。

中型甕(438)は球形の体部から「く」字形に屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持ち、端部は内側に肥厚する。体部外面は粗いハケを全面に施し、内面はナデで調整する。(443)は山陰系の中型甕である。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを丁寧に施す。

大型甕は球形の体部から「く」字形に屈曲して上外方へ伸びる口縁部を持つもの(422・426・428～431・436)と、やや長胴化した球形の体部から屈曲して上外方へ伸びる口縁部を持つもの(427・432～435)がある。(426・434～436)の底部内面には炭化米が遺存している。また(431～433)は焼成後に穿孔されており、(436)は肩部に焼成前にヘラ状工具により「A」字形に施文する。(440)は扁球形の体部から強く屈曲して開き、さらに短く上方へ伸びる口縁部を持つ。口縁端部は面をなす。(442)は東海系の台付甕の脚台部である。(444)はやや長胴化した球形の体部から強く屈曲し、さらに緩やかな段をもって上外方へ伸びる口縁部を持つ。在地の甕にはあまり見られない形態を呈する。(445)は山陰系の大型甕で、体部外面は細かいハケ及びナデを施し、内面上半はヘラケズリ、下半には指頭圧痕が残る。(476)は長胴の体部から口縁部は内彎気味に外上方に伸び、口縁端部は内傾する端面を持つ。体部外面はタテハケ、体部内面はタテハケの後、板ナデを施す。

高杯

杯底部と口縁部の境に明瞭な稜を持つものが主流で、椀形の杯部に断面三角形の稜を巡らせるもの(447)や、稜線の不明確なもの(450)がある。いずれもラッパ状に開く脚部を伴う。(446)は内外面とも非常に丁寧にヘラミガキを施し、赤色顔料を塗布する。(449)は杯内外面をハケ、脚部外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。

鉢

(452)は偏平な体部から2段に屈曲する口縁部を持つ。底部外面にはヘラケズリを施し、

胎土に径 1mm 大の石英、長石を多く含む。(453・454)はいずれも完形の鉢で、(454)は底部外面にヘラケズリを施す。

杯

(470)は口径 13.9cm、器高 4.4cm を測り、底部外面にヘラケズリ、内面は放射状にヘラミガキを施す。(471)は口径 12.1cm、器高 3.7cm を測り、内面に放射状にヘラミガキを施し、底部にもいくつか弧状のヘラミガキが残る。 (加藤)

甑

(479)は甑の口縁部から底部の一部が残り、口縁部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外面はタテハケ(7 条/cm)、内面は縦方向の板ナデの後、一部横方向の板ナデを施す。把手は上向きでやや扁平な形状である。底部の蒸気孔は粘土による桟渡しの可能性がある。 (西本)

韓式系土器

(455)は軟質土器の平底鉢で、底部付近の外面にヘラケズリを施し、内面には指頭圧痕が残る。底部は未調整で円盤状の「ゲタ」痕が認められる。

製塩土器

(456)は胎土に径 1mm 大の長石を多く含む鉢形製塩土器である。 (加藤)

須恵器

蓋杯(蓋・身)、壺、甕、鉢、横瓶がみられるが、数量は多くない。

(457～462)は蓋杯(蓋)である。(457)は回転ヘラケズリを天井部外面の広い範囲に施す。稜は鋭く突出し、口縁端部は内傾し端面を有する。(458)は天井部外面の回転ヘラケズリの範囲は狭く、稜は凹線状である。口縁端部は内傾し、やや鈍い端面を有する。(459～462)は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、体部の稜・凹線等はなくなる。口縁端部は丸くおさめるものが多い。中村編年Ⅱ-3～5 段階に相当する。(462)は天井部外面に「×」状のヘラ記号を施す。(465)は蓋杯(身)である。底部はやや平坦でヘラ切り未調整である。体部は逆ハ字状に開き、口縁端部はやや丸い。

(463)は壺である。扁球形の体部に外反する口頸部を有する。頸部の中程に鈍い突帯を巡らす。全体的に丁寧なナデを施すが、腹部外面と体部内面下半と口頸部内面上半に指頭圧痕が残る。(464)は甕体部である。扁球形の体部で最大腹径は体部上半にある。体部上部に左斜め上がりの櫛描列点文を密に施し、その下に径 1.5cm の円孔を施す。(466・467)は有蓋高杯の蓋である。中央部がくぼんだボタン状のつまみを天井中央に付ける。天井部外面は回転ヘラケズリを広い範囲に施す。(466)は鋭い稜を設ける。

(468)は鉢である。外底面はヘラ切り未調整で、体部から口縁部にかけてわずかに内彎する。口縁端部は丸い。体部下半に弱い凹線を施し、その上には「×」状のヘラ記号を施す。(469)は大型の横瓶である。倣状の体部に直線状にわずかに外反する口頸部が付く。体部外面は格子タタキの後、縦方向の粗いカキメ(4 条/cm)を施す。体部内面に同心円タタキを施す。口頸部は

内外面ともナデ調整を施す。　(西本)

(2)奈良後期(奈良時代)

土師器

杯(472)は口径16.8cm、器高4.1cm、皿(473)は口径20.4cm、器高2.9cmで外面底部はヘラケズリ、口縁部は横ナデを施し、口縁部内面には一段の放射状暗紋が、内底面には螺旋状の暗紋が認められる。色調は(472)はにぶい黄橙色、(473)は明黄褐色を呈する。杯(474)は口径11.5cm、器高4.6cmで丸味をもつ底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外反させ、内面に段を有する。外面底部は押圧調整、他はナデを施し、色調は浅橙色を呈する。甕(478)は口径14.7cm、器高12.5cmで口縁端部を上方につまみ上げる。体部外面下半部にハケメ、他はナデ、内面は体部上半部に横方向の板ナデを施し、体部下半部に同心円タタキが認められる。色調は浅黄色を呈する。口縁部を打ち欠き、底部には径6mmの穿孔が認められる。体部外面の一部に煤が付着する。

須恵器

鉢(480)は口径18.6cm、器高10cmの片口鉢で外面底部は不定方向のヘラケズリ、他は横ナデを施す。杯蓋(481)は口径13.8cm、器高1.6cmで外面上方1/3程度をヘラケズリ、他は横ナデを施す。壺(482)は体部の破片で、最大径は肩部にくるものと思われ、残存部は横ナデを施す。

(3)平安時代

土師器

杯・皿

(483)は15.2cm、器高3.1cmで底部押圧調整、口縁部は横ナデを施し、端部内面に沈線を巡らす。色調はにぶい橙色を呈する。(484)は口径17.7cm、器高3.7cmで口縁部は二段に横ナデを施し、端部は直立気味になる。色調は浅黄橙色を呈する。(485～487)は口径14.4～15.5cm、器高3.1～3.4cmで底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部は丁寧に横ナデを施す。色調は淡黄色を呈する。(488)は口径14.7cm、器高3.1cmで底部から内彎気味に立ち上がり、やや内側に屈曲する。色調は明黄褐色を呈する。(489～493)は回転台土師器で(489･493)は底部から内彎気味に立ち上がり端部を外反させ、(490～492)は底部から直線的ないしはやや内彎気味に立ち上がる。(489～492)は口径12.9～14cm、器高3.5～3.6cmである。底部はヘラ切り後ナデを施す。(491)は底部から1/2近く、ヘラケズリを施す。色調は浅黄橙を呈する。(493)は口径10.6cm、器高3cm、底部はヘラ切りで板状圧痕が認められ、色調は灰黄色を呈する。(494)は口径13.8cm、器高4.9cmで、丸味をもつ底部から内彎して立ち上がり、「ハ」の字状に張った高台を持つ。色調は灰白色を呈する。(501)は「て」字状口縁の小皿であり、口径10cm、器高1.2cmで器壁は4mmと厚い。全体に歪んでおり、色調はにぶい黄橙色を呈する。(502～505)は回転台土師器で底部はヘラ切り後にナデを施す。(502～504)は口径9.4～10.9cm、器高1.5～1.6cmで平らな底部から外上方に直線的に伸びる。(505)は口径9.7cm、器高1.9cmでやや内彎気味に伸び、色調はいずれもにぶい黄橙色を呈する。

椀

(495)は口径 15.2cm、器高 6.8cm で平らな底部から外上方に直線的に伸び、「ハ」字状の高台を持つ。底部は未調整、他は横ナデを施す。色調は明黄褐色を呈する。非畿内産である。(496・497)は回転台土師器で、円盤状高台を持ち、底部はヘラ切りである。底部から内彎気味に立ち上がり、(496)は口径 13 cm、器高 4.2cm、(497)は口径 11.8cm、器高 4cm である。色調は淡橙色を呈する。

甕

(518)は口径 25.2cm、器高 24.5cm で丸味をもつ底部から体部中位にやや膨らみを持ちながら直線的に立ち上がる長胴の体部をなす。口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は上下に拡張して凹面をなす。外面上半部は縦方向に粗いハケメを施し、下半部は多方向に施す。内面は口縁部及び体部上部は横方向にハケメを施し、体部上半は縦方向に、下半は斜めにナデ上げている。色調は浅黄色を呈する。

灰釉陶器

椀(499)は口径 12.6cm、器高 3.9cm で低く幅広の高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり端部を外反させる。内面には重ね焼きの痕跡が認められる。折戸 53 号窯式期と考えられる。

瓦器

椀

(513)は口径 15.2cm、器高 5.8cm、(514)は口径 16.4cm、器高 6.1cm、(515)は口径 14.8 cm。(513)は内外面にヘラミガキが丁寧に施され、外面は 3 分割し、内面は密に施されている。見込みは平行線状のヘラミガキを施す。(514・515)は外面の器表面が荒れており、ヘラミガキの状況は明らかでなく、特に(515)は 3～5mm 程度の円錐形の剥離が全面に見られる。内面は(514)は密なヘラミガキを施し、見込み部分は鋸歯状のヘラミガキを施し、(515)は密にヘラミガキを施すが(513・514)よりは間隔があく。(513・514)は楠葉型Ⅰ-2 期、(515)は楠葉形Ⅰ-3 期と考えられる。(516)は口径 15.2cm、器高 5.3cm で外面はヘラケズリを施した後に底部まで密にヘラミガキを施し、内面は見込みまで乱方向に施している。全体に炭素の吸着は悪く、内面の一部には煤状になって付着している。(517)は口径 15.4cm、器高 5.6cm で内外面ともヘラミガキがやや粗くなり、見込み部分は乱方向に施す。(516)は和泉型Ⅰ-2 期、(517)は和泉型Ⅱ-1 期と考えられる。 (増田)

瓦

(519)は狭端の一部を欠くがほぼ完形の平瓦である。凸面は不定方向の縄目タタキの後にナデ調整をする。凹面は側面、広端面に沿って面取りをする他は未調整で、布目(4×4 本/cm)を残す。布目は狭端面にまで回り込んでおり、凸面側のみ削る。 (大藤)

(4)鎌倉・室町時代

土師器

椀(498)は口径 15.5cm で内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。外面の下半は押圧調整

後粗いヘラミガキを部分的に施し、上半は丁寧な横ナデを施す。内面は粗いヘラミガキを施し、ヘラ状工具の当たった痕跡が認められる。非畿内産である。皿(506)は回転台土師器で底部は糸切りである。口径7.8cm、器高1.8cmで色調は浅黄橙色を呈する。皿(509)は口径10.8cm、器高2.4cmで底部から外反気味に立ち上がる。色調は灰白色を呈する。皿(510)は「へそ皿」で口径6.9cm、器高1.8cm、色調は灰白色を呈する。皿(511・512)は底部から直線的に外上方に伸び、内底面端にやや窪んだ圏線を有する。(511)は口径7.4cm、器高1.5cm、(512)は口径7.5cm、器高1.7cmで、色調は(511)はにぶい黄色、(512)は灰白色を呈する。　(増田)

１１．河道Ⅰ上層出土遺物（図版33～61）

弥生時代前期から室町時代までの遺物が混在して出土する。最も出土量の多い層で器種も多い。

(1)弥生～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

弥生土器

弥生時代遺物としてはこの層からの出土が最も多く、器種構成も、壺(524～527・529・557・1415・1418～1420・1422・1423)、甕(520～523・528・530・531・533・538・539)、鉢(534)、高杯(535・536)と多岐にわたる。また、甕(520)は前期に遡るものであり、五反島遺跡では弥生時代を通じて人々の足跡があったことを窺わせる。

壺

壺は広口壺をはじめ、二重口縁壺や短頸壺などの出土が認められた。このうち、(524・525)は広口壺である。(524)は、口径15.0cmを測る。頸部は斜め上方へ外彎し、口縁部で水平となる。端部では上下に肥厚させ、外側に平坦面を作る。この端部外面には２条の凹線を、口縁部内上面にはヘラ状工具によるお玉杓子文を巡らせる。(525)は、口径18.2cm、頸部径12.8cmを測る。頸部は体部から緩やかに屈曲して上方にのびる。さらに屈曲して、口縁部では水平になり、上下方向に肥厚させる。口縁端部外面に波状文を、口縁部内上面に刺突列点文を巡らせる。口頸部外面に指頭圧調整、頸部内面にヘラケズリを施す。

二重口縁壺(526)は、頸部径11.0cmを測る。頸部は体部から強く屈曲して垂直方向へのび、さらに大きく外反して二重口縁部に至る。二重口縁部の外側に竹管文を密に施す。

無頸壺(527)は、口径19.4cmを測り、内傾する器壁の外面に三角形の粘土帯をはりつけて、四角く納めた口縁部を作っている。口縁部の上面と側面には平坦な面をもち、口縁部上面に３条、側面に２条の凹線文をつける。亀井遺跡並びに田能遺跡に類例があり、中期の所産である。

(528)は頸部は短く、丸みを持つ体部より緩やかなカーブをもって外彎し、円形スカシを穿つ。口径は12.6cmを測り、口縁部は上下にやや肥厚させて、明瞭な平坦面をもつ。体部外面下半に右上がりの平行タタキを施す。

粗製小型壺(529)は、器高9.2cm、口径8.8cm、底部径2.6cmを測る。粗製で形状の不明瞭な体部に、押し潰したような底部がつき、頸部は屈曲して上方に立ち上がる。頸部内外面及び体

部外面下半に指頭圧調整、体部内面に強いナデを施す。

粗製壺(532)は、口径 12.0cm を測る。縦長の体部に外彎気味の口縁部がつき、端部は丸くおさめる。口頸部外面には右下がりの平行タタキを施し、体部外面及び内面にはタテ方向にナデを施す。口縁部にはヨコナデ等の調整はみられない。頸部に円形の穿孔を穿つことから、蛸壺と考えられる。

長頸壺(556)は、器高 16.3cm、口径 8.4cm を測る。口頸部は直線的にのび、端部近くでやや内傾する。頸部は明瞭なくびれがみられ、体部は張りが強い。底部は丸底で接地面が押され平らになっている。口頸部内外面及び体部外面に密にヘラミガキを施す。

直口壺(557)は、器高 8.9cm、口径 6.4cm を測る。全体にナデ調整で、特に頸部内面にタテ方向の強いナデを施す。吉備系と考えられる。

(第3図1415)は底部及び体部下半が遺存し、底部径 8.8 cm を測る。広めの底部には明瞭な段はなく体部下半につながる。体部外面にタテ方向のヘラミガキと部分的にケズリ、体部内面に右上がりのハケ(8 条/cm)を施す。(第3図1418)は二重口縁壺で、頸部径 10.6 cm を測る。体部から強く屈曲して頸部は外反する。二重口縁部とは外面に肥厚させて段をつけているが、内面ではわずかに屈折がみられるのみで不明瞭である。頸部外面上半にヨコ方向のハケ(10 条/cm)、下半にタテ方向のハケを施した後、いずれもタテ方向にミガキを施し、内面上半はタテ方向のミガキ、下半にヨコ方向のハケ(10 条/cm)を施す。壺(第3図1419)は、頸部径 13.2 cm を測る。体部から頸部にかけては明瞭な屈曲はみられず、ゆるやかなカーブを描いて外彎する。羽状列点文を巡らせる。壺(第3図1420)は、口径 20.5 cm を測る。頸部は内傾してのび、口縁近くになると水平となる。口縁端部では上方につまみ上げて外側に平坦面をつくり、頸部外面にタテ方向のハケ目(7 条/cm)、頸部内面下半にタテ方向のヘラケズリ、中位は横方向のヘラケズリを施す。東四国系の土器と考えられる。

(第3図1422・1423)は赤色顔料(ベンガラ)を塗布した壺である。(1422)は、体部が残存しないため、頸部との接合状況は確認できないが、頸部が上外方へ伸びており、直口壺の口頸部とみられる。口縁端部はやや鋭く、口径 9.4 cm を測る。頸部外面はタテ方向のヘラミガキで、口縁部付近ではさらにヨコ方向にも施す。内外面にベンガラを施す。(1423)は平底を有する壺底部で、内外面にナデ、ハケを施す。内外面にベンガラを塗布する。

甕

(520)は、体部径 19.0cm を測る。体部にふくらみはみられず、最大径値は口縁部になる。頸部は斜め上方に外彎する。口縁端部は外側に平坦面を持ち、ヘラ先による刻目をつける。体部上半に上段 7 条と中段 4 条・下段 3 条のヘラ描き沈線文、体部内面にタテ方向の指頭圧調整後、ナデによって仕上げる。前期のものと考えられる。(521)は口径 14.4cm を測り、頸部は屈曲して短く外反して、端部をつまみあげる。体部内面に指頭による押圧調整を施す。東四国系の土器と考えられる。(522)は口径 20.0cm を測る。頸部は「く」の字状に屈曲して短く外反し、口縁端部は上下に肥厚させて、明瞭な平坦面をもたせる。口縁端部外面に 1 条の凹線を施す。体

部外面にタテ方向にハケ目(4～5条/cm)を施す。(523)は口径 25.6cm、頸部径 25.2cm を測る。頸部は「く」の字状に屈曲して短く外反し、口縁端部は上下に肥厚させて、明瞭な平坦面をもたせる。口縁端部外面に2条の凹線を巡らせ、体部外面にヨコ方向の平行タタキを施す。(530)は口径 16.3cm、頸部径 14.4cm を測る。頸部は屈曲して外彎し、さらに端部を摘み上げて上方に向かって内彎させる。体部外面に右上がりの平行タタキ(3条/cm)を施す。(531)は底部径 4.0cm を測る。体部外面・底部側面に右上がりの平行タタキ(3条/cm)、体部内面に左上がりのハケ目(11条/cm)を施す。(533)は口径 14.1cm、頸部径 12.4cm を測る。頸部は「く」の字状に屈曲させて外反し、口縁端部をつまみ上げる。体部中央に接合痕があり、体部外面上半に右上がりの平行タタキ(3条/cm)を施す。(537)は、口径 13.6cm を測る。頸部は「く」の字状に屈曲して斜め上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。横方向の平行タタキ(3条/cm)が体部から口縁端部まで及ぶ。(538)は口径 14.6cm を測る。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反して、端部はつまみ上げる。体部外面は、右上がりの平行タタキ(5条/cm)後ハケメ(7条/cm)、体部内面はヘラケズリを施す。頸部内面はハケメ(7条/cm)を施す。(539)は口径 16.8cm を測る。頸部は「く」の字状に屈曲して外反し、端部はつまみ上げる。体部外面は、右上がりの平行タタキ(8条/cm)を施す。(522・523)は中期、(530・531)は後期、(533・537～539)は庄内式と考えられる。

また、(第3図1428)は、口径 13.2cm を測る。体部は直線的で、頸部では屈曲して外反する。口縁部は端部を上方につまみ上げ、斜め上方の端面に弱い凹線を巡らせる。体部外面にタテ方向のハケメ(10条/cm)を施す。東四国系の土器の可能性が考えられる。

鉢

(534)は台付鉢と考えられるもので、基部径 4.7cm(復原値)を測る。ゆるやかに外彎する体部から、下方に向かって外反する台部がつく。台部は2段にわたり竹管文で飾る。浅鉢(540)は、器高 15.6cm、口径 6.65cm を測る。浅い椀状の体部に、広く外方へ直線的にのびる口縁部がつき、底面にはへこみ面がみられる。体部及び口縁部は内外面とも密なヘラミガキを施す。

高杯

(535)は、裾部径 12.3cm を測る。脚柱部は円筒状で、裾部は屈曲して外反する。裾端部は少し方向を変え、鋭くおさめる。裾部に円形のスカシを穿つ。(536)は、裾部径 9.0 cm を測る。裾広がりの脚柱部より、裾部はにぶく屈曲して外反し、裾端部は平坦面をなす。裾部に円形のスカシを穿つ。(田中)

土師器

壺

小型丸底壺(541～552)、小型壺(553・558・559)、中型壺(554・555・560～564)、大型壺(565～569)がある。小型丸底壺は扁球形の小さな体部から大きく開く口縁部を持ち、内外面をヘラミガキ及びハケで調整するもの(541・542)、扁球形の体部から屈曲して短い口縁が伸び、内外面をハケ及びヘラケズリで調整するもの(543～546・548)、扁球形の小さな体部に長い口縁部を持ち、

ナデ及びヘラケズリで調整するもの(547)、球形の体部から屈曲して口縁部が上外方に伸び、外面をハケ及びナデ、内面をヘラケズリで調整するもの(549)、いびつな球形の体部から緩く屈曲して上外方に伸びる口縁部を持ち、ハケ及びナデで調整するもの(550～552)の5つに分けられる。(541・543・549・551)はいずれも完形であり、(548)は外面全体にススが付着している。

小型壺は様々なものがある。(553)は口縁部が内彎しながら外上方へ伸び、口縁端部は丸くおさめる。外面にナデ、頸部に指頭圧痕、内面にわずかにヨコハケを残す。内外面に赤色顔料(ベンガラ)を塗布する。東海系の壺と考えられる。(558)は扁球形の体部にごく短い口縁部を持ち、体部外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。(559)は手づくねで作られた小さな球形の体部を持つ。(第3図1424)は扁球形の体部に「く」字状に開く口縁部を有する。口縁端部はやや丸くおさめる。体部外面下半は押圧痕が顕著で上半はナデを施す。体部内面は横方向のヘラケズリを施す。内面下半に赤色顔料(ベンガラ)がわずかに残る。

中型壺は扁球形の体部から強く屈曲して上外方に伸びる口縁部を持ち、外面に一部ヘラミガキを施すもの(554)、扁球形の体部にやや長めの口縁部がつき、外面をハケ及びナデ、内面をヘラケズリで調整するもの(555・562・564)、球形の体部から屈曲して上外方に伸びる口縁部を持つもの(560・561)、球形の体部から屈曲してやや長めの口縁部が上外方へ開くもの(563)、赤色顔料(ベンガラ)を塗布した壺(第3図1421)とバラエティがある。(1421)は肩の張った体部に細頸が付き、体部外面はヨコハケ、内面は横方向のヘラケズリを施す。ベンガラは体部から頸部外面と頸部内面に塗布され、一部体部内面に垂下した状態で残る。(554・555・561・564)はいずれも完形で、(555・563・564)は体部にススが付着する。

大型壺には二重口縁壺(565～568)と単純口縁壺(569)がある。(567)は屈曲部に突帯を巡らせ、胎土は在地のものと若干異なる。(569)はなで肩の体部を持ち、外面は粗いハケで調整し、内面はヘラケズリを施すが接合痕が明瞭に残る。(第3図1417)は球形の体部を持ち、外面上半はタテハケの後、肩部にヨコハケを、内面にヘラケズリを施す。底部内面に指頭圧痕が残る。

甕

小型甕(572・815～819)、中型甕(570・571・580～587)、大型甕(573～578・588～590)がある。小型甕(572)は、球形の体部から強く屈曲して短く開く口縁部を持ち、外面はハケの後丁寧にナデで仕上げ、内面はヘラケズリを施す。

中型甕(570)は肩部に右下がりのタタキメを残し、下半はハケで調整する。(571)は完形であり、(582)は二重口縁を持ち、体部内外面はハケで調整する。(583)は肩の張った体部から屈曲して上外方に伸びる口縁部を持つ。口縁部外面を強くユビナデすることにより、二重口縁のように見せている。外面はナデ、体部内面にはヘラケズリを施す。(584)は山陽系の中型甕口縁部と思われるが、口縁外端面の櫛描直線文は施されていない。(585)は近江系のいわゆる受口状口縁甕で、なで肩の体部から強く屈曲して開き、さらに上方へ短く伸びる口縁部を持つ。口縁部外面には弱い凹線が認められ、肩部にはタテ方向に粗いハケを施す。(586・第3図1427)は東海系の「S字状口縁」の退化したもの、(587)は東海系台付甕の脚台部である。

大型甕は、布留Ⅲ式に通有な甕(573～575・577・578)と、6世紀に下がると考えられる長胴形の甕(590)、東海系のS字状口縁甕(588・589)がある。(576)は体部外面上半に縦方向の平行タタキ、下半に横方向の平行タタキを施し、口縁部及び内面はナデで仕上げる。口縁端部は平坦な面を持つ。胎土は径1～5mm大の石英・長石・チャートを多く含み粗い。他地域産と考えられる。(577)は底部内面に炭化物が付着している。(590)は完形品で体部外面の上半は粗くヘラケズリを施し、下半はナデで仕上げる。内面には接合痕が明瞭に残る。

(815～819)は飛鳥・白鳳時代の甕で、小型甕(815)は口径12.2cm、器高10.7cmを測り、下ぶくれの扁球形の体部から緩く屈曲して外反気味に開く口縁部を持つ。底部は径2.8cmの平底を持つ。体部外面はヘラケズリ、内面はナデを施し、口縁部内面はハケで調整する。(816・818)は下ぶくれの球形の体部から屈曲して外上方に伸びる口縁部を持ち、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内面はヨコハケを施す。(818)の口縁端部は外傾する面を持ち、内側に肥厚する。(817)は下ぶくれの球形の体部から緩く屈曲して上外方に伸びる口縁部を持ち、体部外面はタテハケ、内面は板ナデ及びナデ、口縁部内面はヨコハケを施す。体部中位の内面にヘラによる沈線が1条認められる。胎土には0.5～1mm大の長石・石英、赤色酸化土粒を多く含む。

羽釜

口縁部が2点出土した(591・592)。共に胎土に径1～3mm大の長石・石英、赤色酸化土粒及び金雲母を多く含み、在地のものとは異なる。(592)は口縁部内面に粗いヨコハケを施す。

高杯

杯部の形態から、杯底部と口縁部の境に明確な段を有するもの(593～597)と、境が不明確なもの(598～600)、椀形のカーブを描くもの(601～604)に分けられる。(593)は杯部外面に指頭圧痕や接合痕が残り、内面は粗いハケを施す。(594)は口径26.1cmを測り、深い杯部を持ち、内外面ともナデで仕上げる。(597)は杯底部と口縁部の境の段の作り方が粗雑になり、杯部外面はヨコナデ、内面及び脚裾部内面に粗いハケを施す。胎土に径1mm大の長石・石英を多く含む。(601)は椀形の杯部に細い脚柱部から裾部が開く脚部を持つ。杯部外面はタテハケを施し、内面は2段に放射状にヘラミガキを施すが、脚裾部はユビナデのため波打っている。(602)の杯底部外面にはススが付着する。(610)は椀形の杯部に大きく開く脚部を持つ。内外面とも細かいハケを施した後ナデで仕上げる。その他、赤色顔料を塗布したもの(第3図1429・1431)もある。

器台

小型器台(611～613)と鼓形器台(614)がある。(611)は受部内外面をヘラミガキで丁寧に調整し、台部外面はヘラミガキとハケを施す。(612)は台部に3方向の透し孔を施し、全面に赤色顔料を塗布する。

鉢

扁球形の体部から屈曲して開く口縁部を持ち、内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げるもの(615～617)と、半球形の体部に短い口縁部が付き、体部外面をハケ、内面をヘラケズリで調整するもの(618)、底部から彎曲してそのまま端部に至るもの(619～622)がある。(619)は完形品

で口縁端部は内側に肥厚する。外面は指頭圧痕が残るが、内面は丁寧にナデを施す。(621)は外面に接合痕が明瞭に残り、外底部はヘラケズリを施す。内面は平滑にナデており、口縁端部はわずかに内側に肥厚する。(622)はロクロを使用して成形し、底部外面にカキメを施す。製作技法からみれば須恵器と大差ないが、酸化炎焼成されており、須恵器の生焼けとは考えられない。

(779・780)は飛鳥・白鳳時代の鉢である。(779)は口径17.0cm、器高 7.0cm 測り、口縁端部をわずかに外へつまみ出す。外面上半はナデ、下半はヘラケズリを施し、内面は2段に放射状ヘラミガキを施す。(780)は完形品で、口径16.8cm、器高 6.3cm を測る。外面上半はヨコナデ、下半はヘラケズリを施し、内面は放射状ヘラミガキを施した後、中位にヨコ方向に2条ヘラミガキを巡らせる。

杯

(781～793)は飛鳥・白鳳時代の杯である。口径10.8～12.1cmを測る小型杯(787・790～793)、口径13.0～15.8cmを測る中型杯(782・784・788・789)、口径16.6～17.8cmを測る大型杯(781・783・785・786)がある。(787・790)は外面をナデ、内面を放射状にヘラミガキを施し、(791～793)はさらに底部内面に螺旋状ヘラミガキを加える。(792)は完形品である。(784)はほぼ完形で、口縁端部の内側に1条の沈線を巡らす。外面は上半にヘラミガキを施すが、下半は指頭圧痕が残る。内面は放射状ヘラミガキの後、螺旋状ヘラミガキを底部に施す。(789)は外面中位にハケの痕跡があるが、ほとんどナデで仕上げ、接合痕が残る。(781)は口縁端部をわずかに外へつまみ出し、外面上半は部分的にヘラミガキ、下半はヘラケズリを施す。内面は平滑で2段に放射状ヘラミガキを施す。(783・785・786)は体部から口縁部が若干開き、口縁端部を肥厚させるタイプのもので、(783・786)は外面上半に丁寧にヘラミガキを施し、底部はナデで調整する。内面は2段に放射状ヘラミガキを施した後、底部に三重以上の螺旋状ヘラミガキを施す。(785)は外面上半をヘラミガキ、下半をヘラケズリし、内面は2段に放射状ヘラミガキを施した後、中位に螺旋状ヘラミガキを施す。なお、(786)には内面にヘラミガキを施した後、底部を四分するようなヘラ描き細線が認められる。 (加藤)

甕

(1149)は小型の甕である。口径10.6cm(復原値)、底径5.8cm(復原値)、器高9.8cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部はやや鋭い。内外面とも押圧及びナデ調整が主体であるが、外面の一部にタテハケ(5～6 条/cm)、内面に縦方向のヘラケズリを施す。体部中央付近に全体のバランスからみてやや長い一対の上向きの把手が付く。底部の蒸気孔は遺存せず、形状は不明である。胎土は1mm大の長石、微細な赤色酸化土粒を含むが、精良である。(1150)は甕の底部で、外面はタテハケの後ヨコハケを施し、内面はヘラケズリを施す。底部は蒸気孔の痕跡が残り、円形の中央孔の周りに楕円形の孔が巡るものと考えられる。(1151)は甕の口縁部から体部で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面にタテハケ(5～7 条/cm)、内面下半部に縦方向の板ナデ、内面上半部に押圧の後一部にヨコハケを施す。把手は上向きの牛角状である。底部に径約0.5cmの円孔が3ヶ所遺存し、底部に複数の小円孔を施しているものと考えられる。

他に円盤状の土製品(第3図1432)が出土した。径約4.5cm、厚さ1～1.5cmを測り、やや中央がくぼんでいる。粘土紐の巻いた痕跡をよく止め、外側面に多くの「×」状の刻みを入れており、用途不明である。(西本)

須恵器

初期須恵器(高杯、壺、鉢、鍾、甕)の他、古墳～飛鳥・白鳳時代の蓋杯(蓋・身)、高杯、壺、鉢、提瓶、横瓶、甕などが認められ、古墳～飛鳥・白鳳時代の須恵器出土遺構の中では最も量・種類が多い。

初期須恵器(623～639)

(623)は高杯で、低く大きく広がるⅢ型の杯部と円筒状の脚柱と短く広がる裾を有する脚部とからなる。杯部は口縁外面及び口縁端部に沈線を施す。脚部外面は押圧痕が顕著で、脚裾部内外面に接合痕が残る。(624)は高杯で、椀形の杯部と基部の太い大きく広がる裾部を有する脚部からなる。杯部は内外面ともヨコナデが主体で外底部に細かいヨコハケを施す。口縁端部は沈線が巡る。脚部外面は細かいヨコハケ、脚部内面はシボリ目の後に指頭圧痕がみられる。脚部裾に鋸い突帯が巡る。色調は内外面ともにぶい橙色でほとんど土師器と同様の焼成である。(625)は高杯杯部で、椀形を呈する底部から屈曲して外反する口縁部を有し、口縁端部はやや丸い。底部外面下半に横方向の手持ちヘラケズリを施し、口縁部から杯部内面に回転ヨコナデの後、内底面にナデを施す。脚部には三方スカシ窓上端部がわずかに残る。(626)は短脚の有蓋高杯でたちあがりは高く、口縁端部は内傾する。杯部外面下半は回転ヘラケズリを施す。脚部下端部には外端面を有する。(627)は有蓋鉢でたちあがりは低く、体部に櫛描波状文(10条/cm)、2条の突帯を施す。(628)は鉢で口縁部はわずかに開きながら直線状に伸び、口縁端部は内傾する。内外面とも押圧痕が明瞭に残り、接合痕も一部に残る。体部下端に横方向の手持ちヘラケズリを施す。(629)は広口壺である。扁球形の体部に口縁部はわずかに内彎気味に外反し、外面に弱い突帯を巡らす。口縁端部はやや鋭い。体部上半と口縁部外面に回転ヨコナデ、体部下半にナデを施すが、押圧痕も残る。体部内面下半に同心円タタキが残る。壺(630)は肩部に7条単位の櫛描波状文を施し、壺(631)は2段にわたって櫛描波状文を施す。(632～635)は鍾である。(632)は鍾体部で内外面ともヨコナデを施し、体部上半に径1.2cmの円孔を施す。(633)は口頸部に櫛描波状文(12条単位)、肩部に櫛描波状文(8～11条単位)を施し、体部上半に径1.2cmの円孔を施す。(634)は肩部に凹線、ヘラ描刺突文を施し、口頸部に21条の櫛描波状文を施す。(635)は肩部に櫛描刺突文、口頸部に櫛描波状文(15条単位)を施す。体部上半に径1.7cmの円孔を施す。(636～639)は甕の口縁部である。(636)は弱く開く口縁の直下に突帯を貼りつけたもので、(637)は口縁部が垂下する外端面を有し、その下にやや鋭い突帯を巡らす。さらに突帯下に櫛描波状文(11条単位)を巡らす。(638)は二重口縁状にやや大きく開く口縁部で屈曲部を境に上は6条単位の櫛描波状文、下は13条単位の櫛描波状文を施す。(639)は口縁端部に粘土紐を貼り付け、小さく垂下する形状としている。

(640～759)は千里古窯跡群(桜井谷古窯跡群、吹田須恵器窯跡群)の須恵器生産開始期から終

息期に相当する遺物群であり、特に中村編年Ⅱ-2段階以降は吹田須恵器窯跡群で焼成されたものが多いと考えられる。胎土は0.5～2mm大程度の長石・石英を少量含むが密で、焼成は概ね良好である。

蓋杯(蓋)

外面の稜の形状と天井頂部のつまみの有無に着目して、A類：外面に明確な稜が認められるもの(640～646)、B類：稜が退化し、凹線状となったもの(647～656)、C類：稜・凹線ともに消滅したもの(668～682、697～700)、D類：天井頂部につまみが付くもの(711～713)の4つ(A～D類)に大別できる。

A類は口径12～13.5cm、器高3.5～5cm程度である。基本的に天井部外面に回転ヘラケズリを、口縁部外面から内面天井部にかけて回転ヨコナデを、天井部内面にナデを施す。ロクロ回転の方向は右回りが多い。口縁端部は丸くおさめるもの(640)や端面をやや凹ませるもの(641)もあるが、その他は内傾する。(645)は天井部外面中央につまみの剥離痕があり、高杯の蓋の可能性がある。A類は中村編年でⅠ-3～5段階に相当する。

B類は口径13～16cm、器高4～5cm程度である。内外面の調整はA類と同様でロクロ回転の方向は右回りである。口縁端部は丸くおさめるもの(656)もあるが、ほとんどが鈍く内傾する。(651)は口縁端部外面に右上がりの細かいハケメを施す。(650)は天井部外面に直線状のヘラ記号を、(652)は天井部から口縁部にかけて右上がりの4本の直線状のヘラ記号を刻む。B類は中村編年でⅡ-2段階に相当する。

C類は天井部外面の調整が回転ヘラケズリを主体とするもの(C1類 668～682)とヘラ切り未調整のもの(C2類 697～700)に分けることができる。C1類は口径12～14cm、器高3～5cm程度である。口縁端部は丸くおさめるものがほとんどである。(677)は口縁端部外面にやや粗い右下がりのタテハケが施される。C2類は口径10.5～12cm、器高3～4cm程度である。(697)は天井部に直線状のヘラ記号、(698・700)は3条の直線状のヘラ記号を施す。C類は中村編年でⅡ-3～6段階に相当する。

D類(711～713)は天井頂部につまみが付き、口縁内面に短いかえりが付く。口径9～11.5cm、器高3cm程度である。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、口縁部外面から内面は回転ヨコナデ、ナデを施す。つまみの形状は(711・712)は乳頭状、(713)は宝珠状である。(712)は天井部外面に「×」字状のヘラ記号を、(713)は2本の直線状のヘラ記号を施す。D類は中村編年でⅢ-1～2段階に相当する。

蓋杯(身)

(657～667)は上述の蓋杯(蓋)A・B類に対応する蓋杯(身)で口径10～13cm、受部径12～16cm、器高4～5.5cm程度である。基本的に外底面に回転ヘラケズリ、受部から内面にかけてはヨコナデ、ナデを施す。口縁端部は内傾する端面を有するもの(657・659・660・661)、やや丸くおさめるもの(662・665～667)がある。受部とたちあがりの接合は受部にたちあがりを接合させたものが大部分であるが、(660・663)は受部を貼り付けたものである。(660・661)はたちあがりの接合痕

が残る。

(683～696)は蓋杯(蓋)Ｃ１類に対応する蓋杯(身)で口径10～15cm、受部径13～16cm、器高３～４cm程度である。基本的に外底面は回転ヘラケズリ、受部から内面にかけてはヨコナデ、ナデを施す。(684･695)は外底面の中心付近がヘラ切り未調整である。(683)は内底面の一部に同心円タタキが残る。(696)は口縁部折込で作られる。(686)は外面に別個体の器壁が釉着する。

(703･705～710)は蓋杯(蓋)のＣ２類に対応する蓋杯(身)で口径９～10cm、受部径10～12cm、器高2.5～３cm程度である。たちあがりは概ね低く、受部高よりも低いもの(710)もある。外底面は一部回転ヘラケズリの残るものもあるが、ほとんどはヘラ切り未調整である。(706)の外底面に「×」字状のヘラ記号を刻む。(704)は大型品で器壁は厚い。外底面に回転ヘラケズリ、外側面にタタキ状の深い圧痕が残る。内面はヨコナデを施す。

(714～721)は蓋杯(蓋)のＤ類に対応する蓋杯(身)で口径９～12cm、器高３～５cm程度である。外底面は回転ヘラケズリ(714･717･718･719)、ヘラ切り未調整(715･716･720･721)の２種がある。口縁端部はつまみ上げてやや尖り気味のもの(716･717･721)と丸くおさめるもの(714･715･718～720)がある。

高杯 (722･723･729)

(722)は椀形の杯部とやや長脚の脚部からなる。杯部の口縁はわずかに屈曲し立ち上がる。杯底部外面は回転ヘラケズリを施す。脚部は外面に指の押圧痕、内面にシボリメが残る。(723)は脚部で裾付近が弱く屈曲する。脚端部はひずみが激しい。内外面ともヨコナデを施す。(729)は杯部である。直立する口縁部の端部はやや鋭い。

壺 (724･725･730･731･736～739・743～745)

(724)は長頸壺で外底部は回転ヘラケズリ、体部肩から口縁部にかけて横方向のカキメ(８条/cm)を施す。内面はヨコナデを施す。(730･739･743～745)は広口壺である。(730)は口頸部外面に２条の凹線、体部上半部は横方向のカキメ(７条/cm)、体部下半は回転ヘラケズリを施す。肩部付近に接合痕が残る。(739)は内外面とも回転ナデを施し、肩部に沈線が巡る。口縁端部は外傾する端面を有する。(743)は口縁部に鈍い段を有して屈曲し、接合痕を残す。口縁端部は水平の端面を有する。体部外面上半部から口縁部にかけて横方向のカキメ(6 条/cm)を施す。(744)は内外面ともヨコナデを施す。(745)は口縁外端部を肥厚させ、端部はやや鋭い。口頸部にＶ字状のヘラ記号を施す。(731)は直口壺で頸部にカキメ(７条/cm)を施し、体部内面にわずかに同心円タタキが残る。(725･736～738)は短頸壺である。扁球形の体部に短く直立する口縁部を有する。体部下半は回転ヘラケズリを施す。(738)は体部上半部に横方向のカキメ(5 条/cm)を施す。(736･738)には頸部に重ね焼痕がみられ、セットとなる蓋とともに焼成された可能性がある。

(732～735)は壺の蓋である。口径10～11cm、器高３～４cm程度である。天井部は(732･735)はヘラ切り未調整で、(733･734)は回転ヘラケズリを施す。口縁端部は丸くおさめるもの(732･733)と内側に肥厚させるもの(734)、外反させるもの(735)がある。(735)の天井部に直線と弧の交差した形状のヘラ記号を施す。

鉢(726～728)

(726)は小型の鉢で外上方に口縁が伸び、外底面は回転ヘラケズリ、体部下半に沈線を巡らす。(727)は大型の鉢で口縁部は外反する体部から屈曲して直立し、端部は外反し内傾する端面をもつ。屈曲部外面に2条の沈線を巡らし、外面上半部と内底面に自然釉がかぶる。(728)は外底面に回転ヘラケズリを施し、口縁部は直立し、端部は内傾する。

提瓶(740～742)

(740・741)は外面に同心円状に細かいカキメ(8条/cm)を施し、把手の形状は鍵状である。(742)は外面に粗いカキメ(3条/cm)を施し、把手の形状はボタン状である。

横瓶(749)

俵状の体部に直立する口縁部を有し、口縁端部は丸い。体部外面は横方向の平行タタキの後、同心円状のカキメ(5条/cm)を施す。体部内面は同心円タタキが顕著に残る。

甕

概ね大中2種に分かれる。(746・747・750～756・759)は中型甕である。(746)は口頸部に沈線を巡らせ、その上下に6条単位の櫛描波状文を施す。口縁端部は肥厚する。(747)は口縁下に2条の突帯、8条単位の櫛描波状文、さらに回線を巡らす。口縁外端部はやや垂下する。口縁端部に棒状の押圧痕が残る。(750・751・755)は口縁端部が肥厚せず丸くおさめるものである。(750)は体部外面に縦方向の平行タタキの後、横方向の粗いカキメ(3条/cm)を施し、(751)は体部外面に縦方向の平行タタキの後、横方向の粗いカキメ(3条/cm)を施す。体部内面は同心円タタキを施す。口縁内面に「大有」とヘラで文字が刻まれる。(755)は体部外面に斜め方向の平行タタキの後、細かいカキメ(8条/cm)を施す。(752～756・759)は口縁端部が肥厚するものである。(752)は体部外面に縦方向の平行タタキを施した後、横方向のカキメ(8条/cm)を施し、体部内面に同心円タタキを施す。(756)は体部外面に縦方向の平行タタキを施した後、一部に横方向のカキメ(9条/cm)を施す。体部内面に同心円タタキを施す。(759)は底部外面に縦方向の平行タタキ、体部中位から頸部は縦方向の平行タタキの後、やや粗いカキメ(5条/cm)を施す。体部内面は同心円タタキを施すが、4ヶ所で接合痕が残る。

(757・758)は大型甕である。(757)は大きく外反する口頸部に垂下する端部を有し、頸部は2条一対の回線を3ヶ所に巡らし、その間の4ヶ所の文様帯に10～12条単位の櫛描波状文を施す。(758)はやや縦長の球形の体部に大きく開く口縁部が付く。体部外面下半は縦方向の平行タタキの後、横方向の平行タタキを施す。上半部は横方向の平行タタキの後、縦方向の平行タタキを施し、後に右下がりの粗いカキメ(3条/cm)を施す。体部内面は同心円タタキを密に施す。内面体部上半と下半の境には接合痕がみられる。口縁部は2条一対の回線を巡らし、その間に6条単位の櫛描波状文を施す。(西本)

韓式系土器

軟質土器(760～769)、瓦質土器(770・776～778)、陶質土器(771～775)がある。

軟質土器

(760)は口径 11.6cm、器高 9.7cm を測る鉢である。体部外面はナデ、内面はハケを施し、底部中央が凹んでいる。全体にススが付着する。(762)は外面に格子目タタキを持つ鉢である。内面はユビナデにより仕上げる。(761)は鉢で、口径 13.8cm、器高 6.7cm を測る。外面はハケを施し、内面はナデを施す。(765)は完形の鉢で、口縁部はヨコナデで整えるものの、体部は強いユビナデにより凹凸が残る。底部にはゲタ痕が残る。(763)は口径 21.8cm、残存高 9.4cm を測る甕の口縁部で、口縁端部は外側に凹んだ面を持つ。内外面ともナデで調整し、内面には全体にススが付着する。(764)は甕の体底部と思われる。底部から 3.5cm 上方に縄席文が認められ、内面にナデを施す。(769)は甕の口縁部で硬質なものである。他に鉢の底部(766)、格子目タタキを持つ破片(767・768)がある。

瓦質土器

(770・776・777)はいずれも甕の口縁部で外面に格子目タタキを持つ。(770)は口径 16.2cm、残存高 9.6cm を測り、全体に格子目タタキを施した後、強くヨコナデして口縁部を作り出している。口縁端部は外側に凹んだ面を持つ。体部中位の外面にはヨコ方向に条線が入る。内面はナデにより調整し、ススが付着している。他に格子目タタキを持つ破片(778)がある。

陶質土器

(773)は口径 12.6cm、器高 3.7cm を測る蓋の完形品である。口縁端部から、1.5cm 上方に段を巡らせ、頂部はわずかに凹む。内外面とも回転ナデで仕上げ、口縁端部はやや凹んだ面をなす。他に縄席文を持つ破片(771・772・775)と、平行タタキの後に直交する沈線を巡らせる破片(774)がある。

製塩土器

(1103)は脚台Ⅱ式製塩土器で本遺跡では他にこの型式のものは見つかっていない。(1104～1107・1110)は脚台Ⅲ式製塩土器の脚台部、(1108・1109)は口縁部である。(1111～1113)は丸底Ⅰ式製塩土器、(1122～1124)は師楽系製塩土器に該当する。(1129)は丸底Ⅲ式製塩土器のうち内面に布目を持つものである。型抜きの際に布を引いた痕跡が体部中位の内面に残る。(1188)と製作技法、胎土ともに類似する。(1130)は内面に布目を持たない。(1131～1133)は鉢形製塩土器で、(1133)は胎土にモミ・スサを含み全体にもろい。 (加藤)

瓦

ほとんどが平瓦の破片である。(1152)は凸面を格子目タタキの後に横方向のナデ調整を、凹面を縦方向にケズリを入れる。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色(N5/0)である。(1153)は凸面を格子目タタキによる調整を行い、凹面をナデによる調整を行い、部分的に布目を残す。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は灰白色(2.5Y8/1)～暗灰色(N3/0)である。(1154)は凸面を格子目タタキによる調整を行い、深く刻まれている。何度か重ねて叩かれているために、タタキの単位はわからない。狭端より 10cm 位まで横方向のナデによりタタキを擦り消す。凹面に縦方向のケズリを施し、布目痕と模骨痕が残る。胎土は密で焼成は良好である。色調は凸面灰白(2.5Y8/1)～にぶい黄褐色(10YR7/2)、凹面灰白(10YR7/1)～にぶい橙色(7.5YR7/4) である。

(1155)は凸面をナデによる調整を行い、糸切り痕が残る。ハナレ砂が付着する。凹面はナデ及びケズリを施す。色調は灰白色(N7/0～5Y7/1)で、胎土は密で焼成は須恵質である。(1156)は凸面に縄目タタキの後にナデを施し、端面付近には煤が付着する。凹面には布目痕を残す。色調は灰白色(7.5Y8/1)で、胎土は粗く、焼成はやや軟である。(大藤)

(2)奈良後期(奈良時代)

土師器

杯・皿

(794～797)は口径18～19.6cm、器高3.1～3.6cmで端部を外反させる。外面底部は(797)は未調整、他はヘラケズリで、口縁部は横ナデを施す。内面は口縁部に一段の放射状の暗紋が、底面には螺旋状の暗紋が認められる。色調は橙色を呈する。(798)は口径16cm、器高4cmとやや深く、(799)は口径14.4cm、器高2.7cmと小型で浅い器形である。外面底部はヘラケズリで、口縁部は横ナデを施し、内面は口縁部に一段の放射状暗紋が、底面に螺旋状の暗紋が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈する。(799)は底部外面に「∠」の墨書が認められる。(800)は口径24cm、器高2.6cmで口縁部は直線的に外上方に伸びる。(801)は口径21.8 cm、器高3.6cmで口縁部は内彎気味に立ち上がる。外面底部はヘラケズリ、口縁部は横ナデを施し、内面は口縁部に一段放射状の暗紋を、底面には螺旋状の暗紋が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈する。

壺

(802～805)は口径8～11.4cm、器高4.7～6.3cmで底部から内彎気味に伸び、頸部下で内側に屈曲して肩をなし、口縁部を外反させる。(806～809)は口径9.8～11.5cm、器高5.1～5.4cmで、底部から内彎気味ないしは直線的に伸びり縁部を外反させる。(810～813)は口径9.6～10.9cm、器高3.4～4.4cmで底部から内彎気味に上方に伸び、口縁部を外反させる。口縁端部を(807･811)は内側に折り返して肥厚させ、(808･809)は上方につまみ上げ、他は丸くおさめる。外面は(807･808)は体部を下から上へナデ上げ、(812･813)は横ナデを施し、他は押圧調整である。内面は(806･809)は体部にヘラケズリを他はナデを施す。色調は明黄褐色ないしは黄橙色を呈する。また、(804･805･807～809)には粘土紐巻上げの痕跡が認められる。(802～813)は奈良時代から長岡京期を主に平安時代にかけてみられる墨書人面の描かれる祭祀用土器の可能性の考えられるものであるが、墨書のあるものは認められない。

甕

(817～819)は口径13～15.4cmで口縁部が直線的に外上方に開き、(818･819)は端部を内側へつまみ上げる。外面はハケメ、内面は口縁部はハケメ、体部は(818･819)はヘラケズリを施す。色調は黄褐色ないしはにぶい橙色を呈し、(819)は体部外面に直線上のヘラ描きが認められる。(820)は長胴の甕と考えられ、口縁部は内彎気味に外上方に伸び、端部は外傾する面をなす。体部外面はハケメを施し、色調はにぶい褐色を呈する。(821)は口径27cmで口縁部は直線的に外上方へ伸び、端部近くでさらに外側に屈曲する。体部外面及び口縁部内面にハケメを施す。(824)

は口径 22.4cm で口縁部は外上方に直線的に伸び、端部は内傾する面をなす。体部外面は粗いハケメ、内面は口縁部はハケメ、体部はヘラケズリを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。(826)は口径 21.4cm で口縁部は外反気味に伸びる。体部外面及び口縁部内面にハケメを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。(830・831)は直線的な体部の長胴の甕と考えられ、(830)は口径 11.1cm で口縁部は外反気味に伸び、体部外面はハケメ、内面はナデを施す。(831)は口径 17cm で、口縁部は直線的に開き、体部は内外面とも縦方向にナデを施す。色調はにぶい橙色を呈する。

須恵器

杯蓋(837～839)は口径 14.4cm～15.8cm で天井部は平らに近く、端部を内側へ屈曲させる。杯蓋(840～843)は口径 16.5～17.6cm、(842)は器高 1.5cm で低平な器形となる。外面天井部を丁寧にヘラケズリ後、全体に横ナデを施す。杯(844～855)は平らな底部から口縁部は直線的ないしはやや外反気味に伸び、外面底部はヘラケズリ、他は横ナデを施す。(844・845・847～852・855)は口径 12.6～15.8cm、器高 3.7～4.2cm、(846・853・854)は口径 16～16.6cm、器高 3.9～4.6cm である。高台は底部端よりやや内側に付し、(844・845・848)は高台端部は外傾する面を、他は内傾する面をなす。杯(856)は口径 18.3cm、器高 6.2cm と深い器形で、高台も高く「ハ」字状に開く。平らな底部から直線的に外上方に伸び、底部はヘラケズリ、他は横ナデを施す。皿(857)は高台を持ち、口径 25.6cm、器高 4.2cm で平らな底部から直線的に伸びる。底部はヘラケズリ、他は横ナデを施す。壺(858)は長頸壺で口径 12.4cm、器高 21.9cm である。体部は肩が強く張り、口縁部は端部が大きく外反し、頸部に一条の沈線を巡らす。体部から頸部にかけて灰をかぶっている。壺(860)は口径 13.9cm で強く張る肩部から口頸部が直線的にやや外上方に伸び、端部を外側に水平に屈曲させる。外面、底部から 1/2 までヘラケズリ、他は横ナデを施す。底部、高台内側に爪状の圧痕が認められる。鉢(861)は尖底から内彎して立ち上がる鉄鉢形のもので、口径 23.2cm、器高 12.5cm、外面はヘラミガキ、内面は横ナデを丁寧に施している。

(3)平安時代

土師器

杯・皿

(862)は口径 11.8cm で底部から内彎気味に外上方に立ち上がり、外面下半はヘラケズリで他は横ナデを施す。色調は灰黄色を呈する。(863～866・868・869・871)は平らな底部から直線的に外上方ないしは内彎気味に立ち上がり、端部内面に沈線を巡らせる。口径は 13.4～16.2cm、器高 3～3.2cm、外面は底部は押圧調整で、他は丁寧に横ナデを施す。(864～866)は口縁端部を外側に屈曲させ、(864)は底部外面、中央からやや片寄った位置に「官」の墨書が認められる。色調は(856・868)は赤褐色、他はにぶい橙色を呈する。(870)は口径 13.8cm で底部から内彎気味に外上方に立ち上がり、端部を内側に屈曲させる。外面下半を押圧調整、他は横ナデを施し、色調はにぶい橙色を呈する。(875～877)は口径 14.4～16.5cm、器高 3.1～3.7cm で底部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部を外反させる。外面は底部から 1/2～2/3 まで押圧調整で他は横ナデを施す。色調はにぶい橙色ないし黄橙色である。(879～881)は口径 14.6～16.2cm、器高 2.8

～3.3cm で底部から内彎気味に立ち上がる。外面は底部から 1/2 まで押圧調整で他は横ナデを施す。色調は淡黄色を呈する。(872～874)は底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外方に屈曲させ、さらに上方につまみあげる。口径 13.7～15.2cm、器高 2.4～2.8cm で外面は底部から 2/3 まで押圧調整、他は丁寧に横ナデを施す。(872･874)は器壁は 2mm 程度と薄く、色調は(872)は灰褐色、他は橙色を呈し、(872)は内面に墨が付着し、(874)は外面底部に線刻が認められる。(882)は口径 15.6cm、器高 1.1cm で、底部から外反して立ち上がり、端部をさらに大きく外反させる。(883)は口径 14.8cm、器高 1.3cm で底部から外反気味に立ち上がり、端部を上方につまみ上げる。(882･883)は底部外面は押圧調整、他は横ナデを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。

(878･884～892･895～911･913･914)は回転台土師器で、底部ヘラ切りである。(884)は口径 13.4cm、器高 1.3cm、(886)は口径 13.1cm、器高 1.6cm で底部はヘラ切り後ナデを施し、底部から外反気味に立ち上がる。(884)は端部内面が弱い凹面をなす。色調は(884)は淡褐色、(886)は橙色を呈し、(886)は外面底部に「□田」の墨書が認められる。(878)は口径 15.4cm、器高 2.8cm で外反気味に立ち上がり、底部に板状圧痕が認められる。(885)は口径 10.7cm、器高 2.7cm でやや丸味をもつ底部から直線的に立ち上がり、内面に墨痕が認められる。(887～892･895～897)は口径 11.8～14cm、器高 2.4～3.9cm で平らな底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外反させるもの(888～890)と内彎気味ないしは直線的に外上方に立ち上がるもの(891･892･895～897)がある。(889･891･892)はヘラ切り後丁寧にナデを施しており、(878･890)は板状圧痕が認められる。色調は(888)は淡灰褐色、(891)は灰白色、他はにぶい橙色を呈する。(898～901･934)は口径に対して底径の割合が大きい器形で、口径は 12.5～16cm、器高 3.9～5.6cm である。底部から内彎気味ないしは直線的に外上方に伸び、(901)は端部を外反させる。(898･901)は底部はヘラ切り後ナデを施す。また、(900)は底部から約 1/4 弱、ヘラケズリを施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。(902～904)はやや浅い器形で、口径 13.2～16.6cm、器高 2.9～3.8cm である。(902･904)は底部から外反気味に立ち上がり、(903)は端部を肥厚させる。色調はにぶい橙色を呈する。(906～908)は口径がやや小型の深い器形で、口径 11.2～12.6cm、器高 4～4.8cm である。底部から外反気味に立ち上がり、端部を外反させる。底部はヘラ切り後丁寧にナデを施し、色調はにぶい橙色を呈する。(909･910)は円盤状の高台を持ち、(909)は口径 11.9cm、器高 3cm、(910)は口径 12 cm、器高 2.8cm である。底部からやや内彎気味に伸びる。(910)は底部ヘラ切り後丁寧にナデを施し、板状圧痕が認められる。色調は橙色を呈する。(909)は内面に重ね焼きの痕跡が認められる。(911･913･914)は口径 11.6～13.2cm、器高 2.8～3.5cm で底部から直線的に外上方に伸びる。色調は (911･914)は灰白色、(913)はにぶい橙色を呈する。(913)は底部外面に「方」の、(914)は体部外面に「田中」の墨書が認められる。(917)は口径 12.4cm、器高 3.3cm で底部からやや外反気味に伸びる。底部は未調整で、色調は淡黄色を呈する。

(918)は口径 13cm の丸味をもつ器形で高台を持つものであるが欠失している。底部内面には連続的な指押さえの痕跡が顕著であり、色調はにぶい赤褐色を呈する。非畿内産である。(922)

は口径 15.4cm、器高 6cm で、底部から内彎気味に外上方に開き、底部に「ハ」字状に開く高い高台を持つ。色調はにぶい黄橙色を呈し、内面底部に煤が付着する。(923) は口径 15.8cm、器高 5cm で、底部ヘラ切りである。「ハ」字状に開くしっかりした高台を持つ底部から内彎気味に外上方に伸びる。色調はにぶい黄橙色を呈する。非畿内産である。

(920・921) は皿に高台が付く器形で、(920) は口径 11cm、器高 3.7cm、(921) は口径 12cm、器高 4.7cm で底部から内彎気味に立ち上がる。(920) は内外面横ナデを施し、(921) は外面の底部から 1/2 まで押圧調整で、他は横ナデを施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。(912・924・925) は底部から外反気味に立ち上がり、端部近くで内側に屈曲して稜をなし、(924・925) は底部に断面三角形の低い高台を持つ。口径 15.6 及び 16.2cm、器高 4cm 及び 5.4cm で、外面は端部近くに丁寧な横ナデを施し、下方は押圧調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。(912) は体部外面に墨書が認められる。(919) は口径 13.1cm、器高 4.9cm で底部から内彎気味に立ち上がり、底部に「ハ」字状に開く短い高台を持つ。(915・916) は底部の破片で墨書が認められる。底部は未調整で、色調は (915) はにぶい橙色、(916) はにぶい黄橙色を呈する。

(945～951) は口径 14.2cm～15.6cm、器高 3.2～3.4cm で、(946) はやや丸味をもつ底部から内彎気味に立ち上がり、内側に屈曲して直線的ないしは内彎気味に伸びる。(945・947) は底部から内彎気味に立ち上がり、(948～951) は直線的に外上方に伸びる。底部は押圧調整、口縁部は横ナデを施す。色調は (946) は白灰色、他は淡褐色ないしは淡黄橙色を呈する。

(952～964) は回転台土師器で (952～958) は底部ヘラ切り、(959～964) は糸切りである。(952～954) は口径 9.4～10.8cm、器高 1.8～2.2cm で底部から直線的に外上方に伸び、(952) は端部をやや外反させる。色調はにぶい黄橙色を呈する。(955～957) は口径 8.6cm～10cm、器高 1.4～1.6cm で底部から外反気味に立ち上がり、色調はにぶい橙色を呈する。(952・956) は底部ヘラ切り後、丁寧にナデを施し、(952) は板状圧痕が認められる。(958) は口径 8cm、器高 1.1cm と低平な器形で、底部から直線的に外上方に短く伸び、色調はにぶい黄橙色を呈す。内面に油煤が付着する。(959) は口径 9.7cm、器高 1.5 cm で、底部から段をなして内彎気味に立ち上がり、色調はにぶい黄橙色を呈する。(960・962) は底部から直線的に外上方に立ち上がり、(960) は口径 10.4cm、器高 2.3cm、(962) は口径 8.3cm、器高 1.6cm で、色調はにぶい黄橙色を呈する。(961) は底部から直線的に外上方に短く立ち上がる。口径は 10.3cm、器高 1.2cm と低平で、色調は灰白色を呈する。(963・964) は底部が厚く、内彎気味に立ち上がる。(963) は口径 7.1cm、器高 1.4cm、(964) は口径 7.4cm、器高 1.2cm でにぶい黄橙色を呈する。

(965～980) は「て」字状口縁の小皿で、(965) は口径 11.8cm、器高 1.9cm、器壁の厚みは 3mm 程で、全体に丁寧なつくりである。色調は浅黄色を呈する。(966～977) は口径 9.2～10.2cm、器高 1.5～1.9cm、器壁の厚みは 4mm 程で、「て」字部分がやや退化し屈曲も不明確となる。色調は (966・968・972・974・977) は灰白色、(967・969～971・973・975・976) は淡褐色を呈する。(978～980) は口径 9.2cm～9.6cm、器高 1.4cm～1.9cm で、さらに「て」字部分が退化したものである。色調は (978・979) は灰白色、(980) は淡褐色を呈する。(982～984) は丸味を帯びた底部から

内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。口径は9.8～10.4cm、器高2～2.2cmで口縁部は丁寧に横ナデを施す。色調は黄橙色を呈する。

椀

(928)は口径20cm、器高7cmで底部から内彎気味に立ち上がり、端部近くを弱く外反させる。底部に「ハ」字状のしっかりした高台を持つ。外面底部近くはヘラケズリ、他は内外面に細かく密なヘラミガキを施し、赤色顔料を内外面に付す。(929)は口径17cm、器高6.1cmで底部から内彎気味に立ち上がる。底部に「ハ」字状のしっかりした高台を持ち、内外面はナデを施し、内面に螺旋状の暗紋が認められる。色調は橙色を呈する。(931～933・935)は回転台土師器で、底部糸切りである。円盤状高台で口径14.4～15.1cm、器高4.1～5.5cmである。底部から内彎気味に立ち上がり、(935)は端部をやや肥厚させる。内外面とも丁寧に横ナデを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。(936)は口径14.4cmで、端部をやや外反させ、内外面ともに細かいヘラミガキを施すが、外面はやや間隔があく。(937)は口径14.8cm、器高6.4cmの深い器形で外面は横方向にやや太く密なヘラミガキを、内面は細かく密なヘラミガキを施し、端部近くは丁寧に横ナデを施す。底部にしっかりした高台を持つ。(938～943)は色調が灰白色ないしは灰黄色を呈する。口径13.2～15.6cmであり、(939)は端部を肥厚させ、他はやや外反させる。底部の残存する(940・943)は底部糸切りである。(938・939・941)は内外面に、(940)は内面に細かいヘラミガキを施すが、比較的間隔があく。(943)は外面は磨滅が著しく明らかでないが、内面は残存部分には細かく密なヘラミガキが認められる。(936～943)は非畿内産である。

甕

(1070)は体部の破片で外面は比較的粗いハケメ、内面は縦方向にヘラケズリを施し、外面に2面、人面墨書が認められる。(1073・1074)は直線的に立ち上がる長胴の体部から口縁部は外上方へ直線的に伸びる。(1073)は口径30cmで、口縁端部外面に凹面をなし、(1074)は口径23.6cmで口縁端部を上方につまみ上げる。体部外面は残存部分は縦方向に粗いハケメ、内面は口縁部及び頸部に横方向のハケメを施す。色調は明黄褐色を呈する。(1075・1076)は丸味を帯びた体部で最大径は体部ほぼ中位にある。(1075)は口径17.9cm、器高16.2cmで口縁部は直線的に外上方に伸び、端部は内外へ弱く発達させる。(1076)は口径15.4cm、器高15.6cmで口縁部は内彎気味に伸び、端部は丸くおさめる。外面は押圧調整、内面は板ナデを施し、(1075)は体部ほぼ中央に穿孔が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈する。

羽釜

(1077～1079)は短く直立する口縁部に端部にほぼ続けて厚く幅の狭い鍔を巡らせる。口径20.4～27cmで口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦方向に粗いハケメを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。(1081)は口径28.2cmで、口縁部は「く」字状に外反して端部を丸くおさめ、肩部に水平な鍔を巡らす。残存部分は内外面とも横ナデを施す。

黒色土器

杯

(1017～1019)はA類である。(1017)は口径16cm、器高4.1cmで外面はヘラケズリ後細かく密なヘラミガキ、内面も同様のヘラミガキを施す。(1018)は口径15.6cm、器高4.7cmで口縁端部内面に沈線を巡らせる。底部に断面三角形の低い高台を持つ。外面はヘラケズリ後、太いヘラミガキ、内面は細かいヘラミガキを施すが、やや間隔があく。(1019)は口径16.2cm、器高5.2cmで、底部に直立気味のしっかりした高台を持つ。外面はヘラケズリ後太く粗いヘラミガキ、内面も同様のヘラミガキを施す。

椀

(1020～1026)はA類である。(1020)は口径15.4cmで口縁端部内面に沈線を巡らし、外面は磨滅しているが内面は細かく密なヘラミガキを施し、暗紋が認められる。(1021)は口径14.2cm、器高5.2cmで底部にはしっかりした高台を持つ。外面はヘラケズリ後太く密なヘラミガキを施し、内面も同様のヘラミガキを施す。(1022)は口径13cm、器高4.9cmで底部に太くしっかりした高台を持つ。内外面とも磨滅しており、内面はカーボンの付着が悪く煤状になっている。(1023･1024)は大型の椀で、(1023)は口径18.2cm、(1024)は口径18.6cm、器高6.7cmで底部に断面台形のしっかりした高台を持つ。(1023)は外面は太く密なヘラミガキ、内面はやや細かく密なヘラミガキを施す。(1024)は外面はヘラケズリ後細かく密なヘラミガキを、内面も同様のヘラミガキを施す。(1025･1026)は底部ヘラ切りで、「ハ」字状に開くしっかりした高台を持つ底部から直線的に外上方に開く。(1025)は口径16.7cm、器高5.5cmで口縁端部内面に痕跡程度の沈線を巡らす。外面は磨滅しているが内面は粗く分割し、見込み部分は一定方向に細かいヘラミガキを施す。(1026)は口径14.2cm、器高4.3cmで端部を弱く外反させる。外面下半部はヘラケズリ、他は横ナデを施し、内面は細かく密なヘラミガキを施す。(1025･1026)は非畿内産である。

(1027～1030)はB類である。(1027)は口径11.8cm、器高4.1cmで口縁端部内面に沈線を巡らし、底部には断面三角形の低い高台を持つ。外面の高台付近はカーボンが未吸着である。外面は部分的、内面は全面に密なヘラミガキを施す。(1028)は口径14.6cm、器高5.8cm、(1029)は口径15cmで口縁端部内面に沈線を巡らし、外面はヘラケズリ後細かく密なヘラミガキ、内面も同様なヘラミガキを施す。(1030)は口径15.9cm、器高5.9cmで外面下半に並列する指押さえ痕が顕著である。内面には4分割されたヘラミガキが施され、外面に「＋」状のヘラ描が認められる。非畿内産である。

瓦器

椀

(1031)は口径15.4cm、器高6.1cm、(1032)は口径16.2cmで底部から内彎気味に外上方に伸びる。内外面に丁寧にヘラミガキを施し、(1031)は外面は3分割し、見込み部分は鋸歯状に施し、(1032)は見込み部分は格子状に施す。(1033)は口径14.6cm、器高5.9cm、(1034)は口径15cm、

器高 6cm で底部から内彎気味に立ち上がり、丸味をもつ器形となる。内面のヘラミガキは丁寧に施されるが、外面はやや簡略化され、間隔があくものである。見込み部分は鋸歯状にヘラミガキを施す。椀(1035)は口径 15.8cm、器高 5.2cm、(1036)は口径 14.6cm、器高 5cm でヘラミガキは内面は丁寧に施すが、外面は簡略化が目立ち、見込み部分は(1035)は螺旋状、(1036)は格子状に施す。(1031・1032)は楠葉型Ⅰ-2 期、(1033・1034)は楠葉型Ⅰ-3 期、(1035・1036)は楠葉型Ⅱ-1 期と考えられる。(1037～1041)は口径 14.2～16.4cm、器高 5.4～5.8cm で、底部から内彎気味に立ち上がり、(1037)は端部が強い横ナデにより外面は凹面をなし、(1040)は端部を外反させる。高台は比較的高くしっかりしたものである。外面にはヘラケズリは認められず、内外面ともほぼ全面にヘラミガキが施されるが、間隔の認められるものであり、(1037・1038)は外面のヘラミガキに分割性が認められるが痕跡を留める程度のものである。内面見込部分は(1037・1040)は格子状、(1041)は平行線状に施す。(1037～1041)は和泉型Ⅰ-3～Ⅱ-1 期と考えられる。

緑釉陶器

椀

(1055)は口径 15.8cm、器高 5.2cm で削り出しの輪高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、端部を弱く外反させる。硬質で、胎土は灰色、釉はオリーブ灰色を呈する。内面に重ね焼きの痕跡が認められる。(1056)は口径 14cm、器高 4.4cm で、削り出しの蛇の目高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。内面には粗いヘラミガキを施す。硬質で胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。(1057)は口径 21.2cm と大型のもので内彎気味に外上方に伸び、端部を弱く外反させる。軟質で胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

皿

(1058)は口径 13.4cm、器高 2.2cm で削り出しの円盤状高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。軟質で、胎土は淡黄色、釉はオリーブ灰色を呈する。(1059)は口径 13.6cm、器高 2.6cm で、削り出しの円盤状高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり端部を外反させる。硬質で胎土は灰色、釉はオリーブ灰色を呈する。(1060)は口径 10.9cm、器高 2.3cm で、貼付けの有段輪高台を持つ底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。外面の一部に重ね焼きの痕跡が認められる。軟質で胎土は浅黄橙色、釉は明オリーブ色を呈する。(1060)は近江産、他は洛北産と考えられる。

白磁

椀(1061)は口径 15.8cm で内彎気味に立ち上がり、丸味を帯びた器形をなし、端部は小さな玉縁状をなす。外面の残存部下半に貫入が顕著にみられ、胎土には微細な黒色粒を含む。椀(1062・1064・1065)は底部から内彎気味に立ち上がり、端部は玉縁状をなす。(1062)は口径 15.7cm、(1064)は口径 16.6cm、器高 6cm、(1065)は口径 16cm、器高 6.9cm である。(1064・1065) は高台を幅広で丁寧につくり、底部は厚く、内面底部は平滑である。(1063)は口径 14cm で、直線的に外上方に伸び、端部をやや外反させる。(1061)は椀Ⅱ類、(1062・1064・1065)は椀Ⅳ類、(1063)

は椀Ⅴ類と考えられる。

青磁

椀(1066)は口径16.8cmで内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。器壁は厚く、外面は丁寧にヘラケズリを施し、無紋である。椀(1067)は口径14cmで、内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁端部に輪花を有し、内面は破片であることから全体は明らかでないが、分割して紋様を入れるものと考えられる。龍泉窯系青磁で(1066)は椀Ⅰ-1類、(1067)は椀Ⅰ-4類と考えられる。

須恵器

杯

(1087)は口径14.6cm、器高4.8cmで底部から直線的に上方に立ち上がり、端部は内傾する面をなす。底部はヘラケズリで他は横ナデを施す。底部外面ほぼ中央に「栗家」の墨書が認められる。(1088)は口径17cm、器高5.1cmで底部端に高台を持ち、直線的に外上方に伸びる。底部はヘラケズリ、他は横ナデを施す。(1089)は口径13.8cm、器高4cmで、底部から内彎気味に立ち上がる。底部は糸切りで他は横ナデを施す。底部に「西?」の墨書が認められる。焼成は不良で、色調は淡黄色を呈する。(1090)は口径12.2cm、器高4.2cmで、底部から内彎気味に立ち上がり、端部で外反させる。底部はヘラ切り未調整で、他は横ナデを施す。体部外面に「大夕」あるいは「大月」の墨書が認められる。(1092)は口径13.4cm、器高3.1cmで底部から直線的に外上方に伸びる。底部はヘラ切り未調整、他は横ナデを施す。体部外面に「豊」の墨書が認められる。

椀

(1091)は口縁部のひずみが大きく、口径は14.6～16.2cm、器高7.5cmで底部端近くに高台を持つ底部から直線的に外上方に伸び、端部近くで内側にやや屈曲させる。底部はヘラケズリで他は横ナデを施す。体部外面2ヶ所に「田」の墨書が認められる。非畿内産である。(1093)は口径17.4cm、器高6cmで、底部にしっかりした高台を持ち、内彎気味に立ち上がり、端部近くで外反させる。底部はヘラ切り未調整で他は横ナデを施す。(1094～1098)は口径14～16cm、器高4.8～6.6cmで、円盤状の高台を持ち、内彎気味に立ち上がり、(1095)は端部をやや外反させる。底部は糸切りで、他は横ナデを施す。底部見込部分に凹みが認められる。

皿(1099)は口径6.9cm、器高2.2cm、(1100)は口径7.8cm、器高2.3cmで底部は糸切り、他は横ナデを施す。鉢(1101)は東播系の片口の捏鉢で、口径26.8cm、器高8.9cmである。底部から直線的に外上方に伸び、端部を上下にやや拡張させる。

壺(1102)は口径15.8cm、器高32.5cm、平底で二段の受け口状の口縁を有する長胴の壺である。口縁部は内外面横ナデ、体部外面は左上がりの平行タタキ、底部近くは手持ちヘラケズリを施す。非畿内産である。(増田)

竈

(1134)は粘土帯を巻き上げた後、焚口を切開し、庇を貼り付けた(平行タタキを施した後、庇

を貼り付けたことが看取できる)付け庇の竈である。器高 33.3cm、釜口径 28cm を測り、ヘラによる調整のために面をもつ底部から内傾して立ち上がり、口縁部は上端 1.5cm 程度折り返して丸くおさめる。色調は灰白色～灰黄褐色を呈し、胎土に石英、長石、金雲母を少量含み、固く焼き上がっている。外面は庇部を除いて、左上がりの平行タタキを施し、内面は指頭押圧の後、外面とは異なる原体で重なり合うように平行タタキを施している。このような色調、胎土、調整をもつ窯の例は本遺跡には他になく、周辺地域にも類例はみられない。 (石山)

(1135)は遺存高 30.1cm を測る。付け庇系の竈で、前面部の一部と側面部の一部が遺存する。庇は焚口の周りに付き、前に突き出るが、庇の上端高は釜口高より低い。体部側面上半部に庇から斜め上がりに断面台形のタガが貼りつく。調整は外面にタテハケ(12～13 条/cm)を、内面に板ナデを施し、庇に押圧調整を行う。焚口はヘラによって半円形に切開した後、タテハケを施す。把手は上向きの牛角状である。胎土は 0.1mm 大の石英、0.1～0.3mm 大の長石を含むが精良で、焼成は良好である。なお、煤の付着はあまり見られない。

(1136)は付け庇系竈の庇と焚口上部の破片である。庇と焚口の正面観は四角形で、焚口上部外面はタテハケ(9～11 条/cm)、その他は押圧調整の後、ナデを施す。胎土は 0.1～1mm 大の長石・金雲母を含み、やや粗い。

(1137)は釜口径 36.2cm(復原値)、釜口高 34.8cm を測る付け庇系の竈で、向かって左前面の焚口から左側面、後面の釜口部分が遺存する。釜口は内彎しながら上方に伸び、釜口端部は平坦面を持つ。庇は前面に突出し、庇高は釜口高よりわずかに高い。側面上部の庇接合部に形骸化した把手が残る。外面は押圧調整の後ナデを主体に施すが、側面と焚口に粗いタテハケ(3 条/cm)、内面に横方向の板ナデを施す。庇接合部分は押圧調整を施す。胎土は 0.5～2mm 大の長石・金雲母を含み、やや粗い。

(1138)は釜口径 38.6cm(復原値)、釜口高 28.8cm を測る付け庇系の竈で、向かって左前面の焚口から左側面、後面の釜口部の一部が遺存する。釜口部側面はわずかに外反気味に伸び、同後面は内彎気味に外反する。釜口部の端部は丸くおさめる。庇は左前面が遺存し、上部は遺存していないが、庇高は釜口高よりわずかに高いと思われる。外面は押圧調整が主体で一部にナデを施し、粘土紐巻き上げの接合痕が残る部分が多い。胎土は 0.5～3mm 大の石英、0.5～2mm 大の長石、1～2mm 大の金雲母を含み、粗い。

(1139)は付け庇系の竈で、上部庇の一部が遺存する。遺存高 8cm を測る。内外面とも横方向のナデが主体で焚口の上端部にタテハケ(7 条/cm)を施す。胎土は 0.5～2mm 大の長石、0.5～1mm 大の金雲母を含み、粗い。内外面とも色調は黒褐色である。

(1140)は竈釜口部破片である。内傾しながら上方へ伸び、端部は肥厚し平坦面を持つ。わずかに外傾する端面には同心円タタキを施し、外面はタテハケ(5～6 条/cm)、内面は押圧調整とナデを施す。胎土は 0.1～2mm 大の石英・長石・金雲母・角閃石を含み、粗い。外面は黄褐色～黒褐色、内面は黒色である。

(1141～1147) は竈の基部で、(1141～1143)は向かって左の基部、(1144～1147)は同右の基部

である。(1141・1142・1144)は基部に脚状の突起が付き、裾あきになるものである。それぞれの脚状の突起の形状は異なり、(1141)は長く伸びる舌状、(1142)は半球状、(1144)は三角状である。調整は押圧及びナデが主体であるが、(1141)は内面に一部ヨコハケ(6～8 条/cm)、(1147)は外面に一部タテハケを施す。胎土は(1141)が0.5～5mm大の石英・黒雲母を含み粗いが、他は石英・長石を含むものの精良である。(1143・1146)は微量の金雲母を含む。

(1148)はミニチュアの竈である。釜口径8.8cm(復原値)、底径9.3cm、器高6.0cmを測る。釜口部は内彎気味に直立し、端部は内側に肥厚し丸い。焚口は半円形に切り取られるのみで庇を設けない。外面は押圧調整の後、ナデを施し、一部に粘土の巻き上げ痕が残る。内面は細かいヨコハケ(10～11 条/cm)を施す。胎土は2mm大の長石を含むが、精良である。　(西本)

(4)鎌倉・室町時代

土師器

椀

(944)は口径13.7cm、器高4.2cmで底部から内彎気味に外上方に伸び、高台は低い。口縁部は横ナデ、内面はナデを施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。非畿内産である。

皿

(985～990)は丸味を帯びた底部から内彎気味に外上方に伸びる。口径は9～10.1cm、器高1.5～2.1cmで色調はにぶい黄橙色を呈する。(991)は口径9.5cm、器高1.7cm、(992)は口径9cm、器高1.7cmで丸味を帯びた底部から外反気味に立ち上がり、色調は淡橙色を呈する。(993～999)は平らな底部から外反気味に立ち上がる。口径9.4～11cm、器高1.7～2.2cmで、色調は淡橙色を呈する。(1001～1006・1009)は底部から内彎気味に立ち上がる。口径は8.1～10.2cm、器高1.1～1.6cmで、色調は(1001・1005・1006)は灰白色、他は淡褐色を呈する。(1007・1008)は底部から直線的に外上方に短く立ち上がる。口径は7.6、7.7cm、器高1.1cmであり、色調は(1007)はにぶい橙色、(1008)は灰白色を呈する。(1013)は口径8.9cm、器高1.7cmで底部から外反して立ち上がり、色調は赤褐色を呈する。(1014～1016)は「へそ皿」で口径7.2～7.9cm、器高1.6～1.7cmであり、色調は淡黄色を呈する。

羽釜

(1082)は口径31.6cmで口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部を屈曲して直立させる。口縁部内面はハケメを施し、色調は淡褐色を呈する。

瓦器

椀

(1043)は口径14cm、器高4.3cmで、口縁端部に沈線を巡らす。内面のヘラミガキは間隔があき、見込み部分は省略化された螺旋状のミガキを施す。(1044～1046)は口径11.9～12.7cm、器高3.9～4cmで内面のミガキは間隔のあく圏線状のものとなり、見込み部分は(1044・1045)は簡単な鋸歯状、(1046)は省略された螺旋状のミガキを施す。高台は簡略化された断面三角形のものである。(1047)は口径10cm、器高3.3 cmで内面の見込みは数条の圏線状のもので、見込

み部分は省略された螺旋状のミガキを施す。(1043)は楠葉型Ⅲ-1期、(1044～1046)は楠葉型Ⅳ-1期、(1047)は楠葉型Ⅳ-2期と考えられる。

(1042)は口径14cm、器高4.2cmで内面に粗いヘラミガキを、見込み部分は平行線状のヘラミガキを施す。高台は断面半円状の簡略化されたものである。(1049)は口径12.8cm、器高3.4cm、(1050)は口径12.6cmで内面のヘラミガキはさらに粗く、見込み部分は平行線状のヘラミガキを施す。高台もさらに簡略化されたものである。(1051)は口径12.2cm、器高3.6cmで内面は1～2条圏線状に、見込み部分は平行線状にヘラミガキを施す。高台は形骸化したもので底部と変らない高さである。(1052)は高台をもたない丸底の器形をなし、口径11.4cm、器高3.2cmで内面から見込みにかけて圏線状に連結してヘラミガキを施す。(1042・1048)は和泉型Ⅲ-3期、(1049・1050)は和泉型Ⅳ-1期、(1051)は和泉型Ⅳ-2期、(1052)は和泉型Ⅳ-3期と考えられる。

羽釜

(1080)は口径15.2cmで内傾して立ち上がる口縁部で端部を内側につまみ、上面に凹面をなす。鍔は短く外上方に伸び、内面は口縁部及び体部に横方向のハケメを施す。体部外面には口縁端部まで全面に煤が付着する。(1083)は口径30.4cm、口縁部は外傾して立ち上がり、端部を内側につまみ、上面に凹面をなす。鍔はほぼ水平に伸びる。内面は口縁部及び体部にハケメを施す。(1084)は口径24.8cmで口縁部はほぼ直立して立ち上がり、端部を内側につまみ、やや内傾する面をなす。鍔は上方に短く伸びる。口縁部及び体部内面にハケメを施す。

白磁

皿(1068)は口径8.4cm、器高2.8cmで平底の底部から直線的に外上方に伸び、口縁端部は口禿げである。外面体部下端から底部は露胎である。皿Ⅸ-2類と考えられる。

古瀬戸

壺(748)は四耳壺と考えられる口頸部の破片で口径9.4cmである。外反して立ち上がり、端部を外側に折り返して玉縁状を呈する。折縁深皿(1069)は口径29.8cmで、端部を短く外折し、上面をつまんで小突起をなす。外面はヘラケズリを施し、内外面に灰釉が施されるが、残存部の外面最下部に灰釉はみられない。(増田)

12．河道Ⅶ下層出土遺物（図版62）

古墳時代前期から平安時代の遺物が混在して出土した。出土量は少ない。

(1)古墳～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

土師器

壺(1157)は小型壺の完形品で、口径9.0cm、器高11.1cmを測る。口縁部外面から肩部にかけてと、体底部にハケを施し、体部中位は押圧調整が残る。口縁端部は内側がわずかに凹む。内面は粗いナナメハケを施し、体部内面はヘラケズリを施す。全体に調整が雑である。

甕(1160)は肩の張った体部から強く屈曲して開く口縁部を持つ大型甕である。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す

鉢は口径 18.0cm、残存高 9.3cm を測る大型鉢(1158)と、口径 14.5cm、器高 5.7cm を測る中型鉢(1159)がある。(1158)は半球形の深い体部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。外面は下半にハケを施すが、表面に凹凸がある。内面は板ナデ及びナデで調整するが、接合痕が残る。(1159)は体部外面をハケ、底部はナデ、内面は板ナデを施す。内面は平滑に仕上げられているが、外面の調整はやや雑である。(1165)は口径 17.6cm、器高 7.4cm を測る。体部外面は指頭圧痕が残り、底部はヘラケズリを施す。内面は2段に放射状ヘラミガキを施す。

杯(1161)は口径 11.0cm、器高 3.4cm を測り、外面はナデ、内面は放射状のヘラミガキで調整し、底部内面には螺旋状にヘラミガキを施す。(1162)は口径 13.4cm、器高 4.8cm を測り、口縁端部は内傾する面を持ち、1条の沈線が入る。体部外面は粗いヘラミガキ、底部はヘラケズリを施し、内面は放射状にヘラミガキを施す。

製塩土器

(1169)は師楽系製塩土器の底部と思われる。 (加藤)

須恵器

蓋杯、椀が認められるが、量的に少ない。蓋杯(蓋)は外側面に凹線が残るもの(1170)と稜・凹線が消滅し、天井部外面をヘラ切り未調整とするもの(1171)がある。(1172)は蓋杯(身)でたちあがりはやや短く、外底部は回転ヘラケズリを施す。(1173)はたちあがりが短く、外底部はヘラ切り未調整である。(1174)は鉢で、口縁部は内傾し、口縁端部はやや鋭い。外底面は回転ヘラケズリを施し、口縁部外面に沈線が巡る。 (西本)

(2)奈良後期(奈良時代)

土師器皿(1163)は口径 16.4cm、器高 2cm で底部から直線的に外上方に立ち上がる。外面底部はヘラケズリ、体部下半はヘラミガキを施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

(3)平安時代

土師器杯(1167・1176)は回転台土師器で、(1167)は口径 12.8cm、器高 3.5cm、底部はヘラ切り、(1176)は口径 12.8cm、器高 3.3cm で底部はヘラ切り後ナデを施す。色調は(1167)はにぶい褐色、(1176)は明赤褐色を呈する。 (増田)

13. 河道Ⅶ上層出土遺物 (図版 63・64)

下層と同様、弥生時代から平安時代の遺物が混在して出土したが出土量は少ない。墨書土器の出土が比較的多い。

(1)弥生～奈良前期(飛鳥・白鳳時代)

弥生土器

甕(第3図 1416)は、器高 16.9 cm、口径 12.9 cm、底径 4.8 cm を測る。体部は張りが弱く、最大径は口径となる。頸部は強く屈曲して短く外反し、端部はやや膨らみ気味で丸く納める。体部外面にタテ方向のヘラミガキを施す。 (田中)

土師器

(1179)は壺で扁球形の体部から屈曲して上外方に長く伸びる口縁部を持つ。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケを施し、内面はヘラケズリを施す。(1180)は尖底気味の甕体底部である。全体に指ナデにより成形し、凹凸が激しい。体部にハケの痕跡が認められる。(1181)は口径30.4cmを測る大型の羽釜である。胎土に径0.5～2mm大の長石・石英、赤色酸化土粒及び金雲母が多く含まれ、生駒西麓産のものと思われる。(1182)は口径11.2cm、器高3.5cmの小型杯で、外面はナデ、内面は放射状ヘラミガキを施した後、底部に螺旋状ヘラミガキを施す。

(1198)はバケツ形の甕で口径22.8cm(復原値)、遺存高24.4cmを測る。外面は密なタテハケ(9～10条/cm)、内面は横方向の板ナデを施す。口縁外端面に沈線を巡らす。把手は牛角状であるが、やや扁平である。底部は遺存せず、形状は不明である。胎土は1mm大の長石を多く含むが、精良である。(1199)は大型の甕の口縁部から体部である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸い。内外面とも押圧の後板ナデを施す。把手は牛角状である。胎土は0.1～2mm大の石英・長石を含むが、精良である。

製塩土器

(1186)は脚台Ⅲ式製塩土器の口縁部である。口径9.1cmを測り、端部は波打つ。(1187・1188)はともに丸底Ⅲ式製塩土器である。(1188)は口径8.0cmを測り、内面に布目痕を持つ。端部は指押さえにより水平な面をなし、端部から0.7cm下がった内面に稜がある。布目は13本/cm×14本/cmの平織の布と、14本/cm×12本/cmの綾織の布接ぎ合わせて使用している。外面はナデを施す。胎土に2mm大の長石を含み、全体の色調は茶褐色を呈する。河道Ⅰ上層出土の(1129)と類似している。

蛸壺

(1189)は蛸壺の上部である。釣鐘状の体部の釣手の部分に、径1.0cmの孔をあけている。頂部にはヘラ状工具により溝が切られている。所属時期は不明である。(加藤)

須恵器

短頸壺、蓋杯がみられるが、量は少ない。短頸壺はやや頸部が長いもの(1190)と短いもの(1193・1194)に分かれる。(1190)は体部最大径付近に2条の沈線、底部に1条の沈線を巡らす。外底面はヘラ切り未調整である。(1193)は体部外面に横方向の細かいカキメ(8条/cm)の後、櫛先による刺突文を施す。(1194)は体部外面に粗い横方向のカキメ(5条/cm)を施す。肩部に重ね焼痕が残る。(1191・1192)は蓋杯(蓋)である。(1191)は肩部に凹線状のくぼみが残り、天井部外面は回転ヘラケズリを施す。(1191)は天井部外面に回転ヘラケズリを施して乳頭状のつまみが付き、口縁部内面にかえりが付く。(西本)

(2)平安時代

土師器

杯(1183)は口径13.8cm、器高3.1cmで底部から内彎気味に立ち上がり、端部を外反させる。端部内面に沈線を巡らす。底部から1/2まで押圧調整、他は横ナデを施す。底部中央に墨書が

認められる。羽釜(1184)は口径19.4cmで、短く直立する口縁部に端部にほぼ続けて厚く幅の狭い鍔を巡らせる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦方向に粗いハケメを施し、色調は黄灰色を呈する。

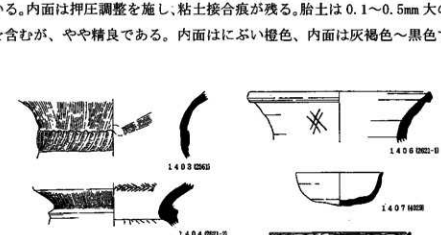
須恵器

杯(1195)は口径12.5cm、器高4.1cmで底部から直線的にやや外上方に立ち上がり、底部端近くに直立気味の高台を持ち、高台端は内傾する。外面底部はヘラケズリ、他は横ナデを施す。底部の片寄った位置に「縄家」の墨書が認められる。杯(1196)は口径13.4cm、器高3.6cmで底部から内彎気味に立ち上がる。底部はヘラ切り未調整、他は横ナデを施す。底部外面の中央に「田口家」の墨書が認められる。(増田)

竈

(1197)は付け庇系の竈で、釜口部、庇部の一部が遺存する。釜口復元径22.1cm(復原値)、遺存高12.2cmを測る。釜口部は内彎気味に内傾し、端部は内傾する端面を持つ。外面の上部は粗いヨコハケ(3条/cm)を施し、その下に一部ヘラケズリ、やや粗いタテハケ(4条/cm)を施す。庇は剥離している。内面は押圧調整を施し、粘土接合痕が残る。胎土は0.1～0.5mm大の長石、0.1mm大の金雲母を含むが、やや精良である。内面はにぶい橙色、内面は灰褐色～黒色である。

(西本)



第1図　堤防覆土出土遺物

14．堤防覆土出土遺物（第1図）

弥生～平安時代までの土器が認められるが、量は少ない。(1403)は弥生中期壺の頸部～口縁部破片で頸部に突帯を巡らし、その上部にタテハケを施す。(1404)は土師器壺で口頸部は「く」字状に屈曲し、外面に突帯を貼り付ける。頸部外面にタテハケを施し、頸部内面に綾杉状の櫛描列点文を施し、体部内面に縦方向のケズリを施す。(1405)は土師器羽釜で口縁部は外反し、

鍔はやや下向きに伸びる。鍔を接合した際の接合痕が残る。(1406)は須恵器甕で口縁部は肥厚する。口頸部外面に「井」字状のヘラ記号を施す。(1407)は須恵器蓋杯(身)である。口縁部はわずかに外反し、外底面はヘラ切り未調整である。瓦器椀(1408)は口径14.7cm、器高5.6cmで外面は上半部にヘラミガキを施すが、やや間隔があく。内面は密に、見込み部分は鋸歯状にヘラミガキを施す。楠葉型Ⅱ-1期と考えられる。青磁椀(1409)は蛇の目高台を持つ底部の破片で、体部は直線的に外上方に伸びる。内外面が施釉され、高台畳付部の釉は削られる。底部外面に目跡が認められる。越州窯系青磁で椀Ⅰ-1b類と考えられる。

(西本・増田)

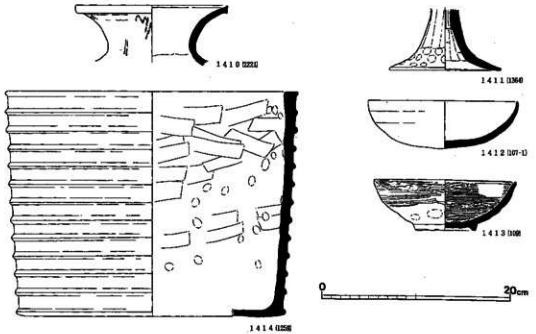
１５．河道Ⅵ出土遺物（第２図）

出土量は少ないが、古墳時代～中世の土器が認められる。土器以外では漆器が多量に出土したのが注目される。

(1410～1412)は土師器である。(1410)は壺で口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は端面を有する。(1411)は高杯の脚部で外面に縦方向のナデ、内面に横方向のケズリを施す。(1412)は鉢で口縁部はやや内彎し、端部はやや丸い。内外面にナデを施す。

瓦器椀(1413)は口径15cm、器高5.3cmで外面は上半部に３分割してヘラミガキを施すが、やや間隔があく。内面は密に、見込み部分は螺旋状にヘラミガキを施す。楠葉型Ⅱ-1期と考えられる。瓦質火鉢(1414)は口径28.4cm、器高23.4cmの深鉢である。口縁端部及び底部を外側に突出させ、その間に11条の凸帯を巡らし、内外面横ナデを施す。

(西本・増田)

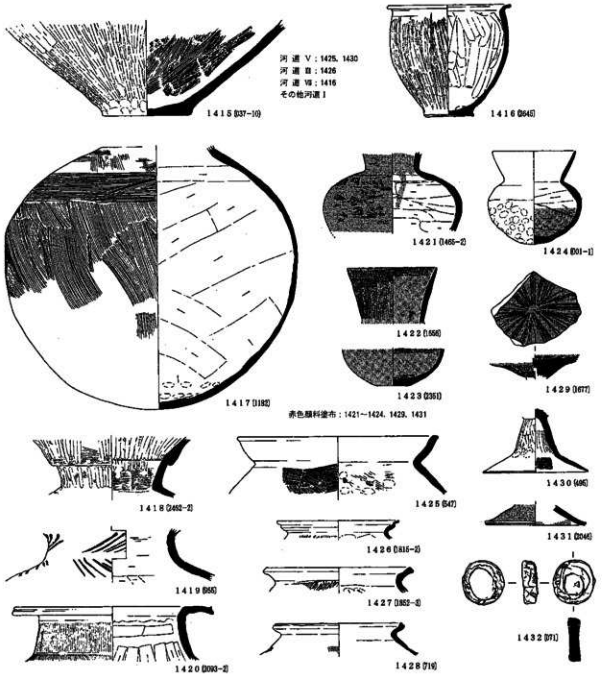


第２図　河道Ⅵ出土遺物

１６．土錘（図版 65）

土錘は河道Ⅴ（1217）、河道Ⅳ（1226）、河道Ⅲ（1204・1223）、河道Ⅶ（1201～1203）、河道Ⅰ（1200・1205～1216、1218～1222、1224・1225、1227・1228）から出土しており、河道Ⅰの出土量が最も多い。全体の出土量が少ないので、法量及び形態的特徴をもとに 10 種類に分けて記述する。

① 長さ 3.7～5.3cm、最大径 1.0～1.9cm を測り、細長い楕円形の形態を持つ管状土錘である（1200～1203）。重量は（1202）が最小で 3.4cm、（1203）が最大で 7.55cm を測る。全体にナデに



縮尺１：４

第３図　遺構出土遺物

より成形する。

② 長さ3.5cm、最大径3.3cmを測るそろばん玉形の管状土錘(1204)である。重量は29.0gを測り、表面に指頭圧痕が残る。孔径は0.4cmと小さい。

③ 長さ3.8～4.9cm、最大径3.5～3.9cmを測る樽形の管状土錘で両端は面をなす(1205～1207)。孔径は0.18～0.2cmと比較的大きい。重量は(1206・1207)が約半分しか残っていないので、単純に2倍して比較すると、(1204)が最小で35.2g、(1206)が最大で52.5gとなる。全体に細かく指押えしている。

④ 長さ7.8～11.4cm、最大径3.5～4.2cmを測る細長い楕円形の形態を持つ管状土錘である(1208～1210)。重量は99～133gであり、ナデにより成形し、指頭圧痕が残る。

⑤ 形態としては④と同様だが、長さが5.1～5.8cmと短い。(1211・1212)は手づくねにより成形し、指頭圧痕が多く残る。重量は(1211)が71.6g、(1212)が36.9gを測る。

⑥ 長さ7.1～7.9cm、最大径1.8cmを測る棒状土錘である(1213・1214)。両端はヘラ切りのため面をなし、端部からそれぞれ約0.7cm内側に径0.5cmの孔を穿つ。重量は(1213)が22.9g、(1214)が28.8gを測る。(1213)は手づくねで成形するが、(1214)はヘラで面取り様にナデを施す。

⑦ 長さ6.2～7.4cm、最大径3.1～3.9cmを測る円筒形の形態を持つ管状土錘で、両端は面をなし、全体にナデで仕上げる(1215～1217・1222～1224)。重量は(1224)が最小で56.4g、(1223)が最大で98.9gを測る。孔径は約0.16cmと若干大きい。

⑧ ⑦とほぼ同じ形態で長さ9.1cmを測るものが2点ある。(1218)は(1219)に比べて最大径が1.0cm細く2.8cmを測り、重量は60.8gである。(1219)の重量は145.9gを測る。

⑨ 長さ11.4～14.3cm、最大径4.8～5.5cmを測る、中位が膨らんだ円筒形の形態を持つ管状土錘である(1220・1221)。両端は面をなし、重量は(1220)が215.4g、(1221)が375.1gとかなり大きく重い。全体にナデで仕上げるが、部分的にハケを施す。(1221)はヘラで面取り様にナデている。

⑩ 長さ3.8～8.7cm、最大幅2.3～4.2cm、最大厚1.8～3.8cmを測る楕円形の有溝土錘である(1225～1228)は他と比べて小さすぎるが、一応この種類に含めておく。長側面にヘラ状工具により溝を切るもので、全体にナデで成形し指頭圧痕が多く残る。重量は(1225)が最小で14.3g、(1227)が最大で109.9gを測る。

これらの土錘のうち、①～⑨の土錘は弥生時代から中世に至るまで各遺跡で出土しており、所属時期は明確ではない。⑩のような有溝土錘は他の遺跡出土例からみると古代、中世の時期のものが多く、土錘の中では比較的新しい部類に属すると考えられる。 (加藤)

17. 木製品(図版66～69)

木製品は堤防上層(1242・1245・1247・1249・1253・1259～1262)、河道Ⅲ(1234・1250)、河道Ⅶ(1241・1251)、河道Ⅵ(1229～1231・1233・1235～1237・1239・1258)、河道Ⅰ(1232・1234・1240・1243・1244・1246・1252・1254～1257・1263～1268・1270)、近現代溜池(1248)等から合計約70点(杭を除

く）が出土したが、大半は河道Ⅰ出土である。種類は食事具、祭祀具、漁撈具、容器、仏教関係信仰具、その他用途不明品等がある。

漆器（1229～1241）

漆器は椀と鉢で、十数点出土したが完形品はない。ほとんどが椀である。本遺跡で出土した椀は内外面の文様から３種類に分けられる。まず内外面に朱漆をかける椀で、これには高台の内側に黒漆をかけるもの（1229～1231・1233）と高台部分全体に黒漆をかけるもの（1232）とがある。次に黒漆を内外面にかけ、朱漆で文様を施すもの（1234～1238）、内面に朱漆をかけ、外面には黒漆をかけた上に朱漆で文様を施すもの（1239・1240）がある。どの椀にも下地が施されている。（1229）は口縁部外面に一条の沈線を施す。口径 16.5cm、残存高 3.1cm を測る。（1230）は底径 7.3cm、残存高 1.6cm を測り、材質はヤマザクラである。（1231）は残存高 2.5cm、（1232）は残存高 2.8cm を測り、材質はナラ類である。（1233）は底径８cm、残存高 2.4cm を測り、材質はブナである。（1234）は内外面に鶴を描く。内面の鶴の両脇には貝が並ぶ。残存高 4.9cm を測る。材質はアサガラである。（1235）は内彎する口縁を持ち、残存高 7.2cm、底径８cm を測る。（1236）は内外面に施す文様は押型による施文かもしれない。残存高 4.1cm、底径 6.6cm を測り、材質はブナである。（1237）は低い高台を持ち、内面の底に草花文を描く。残存高 1.4cm で材質はナラ類である。（1238）は内彎する口縁を持つ。外面には割菱文を描く。口径 15.2cm、残存高 6.3cm を測る。（1239）は外面にのみ文様を描き、径 14.6cm、器高 5.3cm、底径 6.4cm を測る。材質はトチノキである。（1240）は破片である。漆器鉢（1241）は内外面に黒漆をかけ、蓋付の鉢であったのか、印籠抉りにした口縁を持つ。この口縁部の漆が部分的に禿げ落ちている。口径 23.6cm、残存高 4.9cm である。

箸（1242～1246）

全体を粗く削り棒状に整形する。形状は真直ぐなものと、中央部分が膨らみ両端を細くするものとがあるが、本末の区別はない。（1242）は径 0.5cm、長さ 24.9cm、（1243）は径 0.6cm、長さ 21.2cm を測る。

曲物（1247）

曲物の底部で、全体の約１/３を欠失する。直径 20.9cm、厚さ 0.6cm を測る。表面は丁寧に削られており、削り痕を残さない。木釘片が一ケ所残り、側板の上から木釘を打込んで結合していたことがわかる。

曲物柄杓（1248）

側板のみで留め板と柄は残っていない。側板の綴合わせは２か所ある。側板のやや上寄りに 2.3cm×1.4cm の長方形の孔があり、ここに柄を挿入して使用するが、その対応位置に柄の先端を挿入する孔はない。しかし樹皮で作られた細かい紐が側板に２か所存在することから、これらを用いて柄の先端を固定していたことがわかる。樹皮との結合は、側板の外面から木釘を打ち込む。固定用の木釘穴が３か所残る。高さ 10.3cm、径 11.7cm を測る。

皿（1249）

口径 20.3cm、器高 1.2cm を測る。口部は低くて浅い皿である。ロクロを用いて整形を行なっており、特に口縁部外面にはロクロ削りの痕跡が微妙に残る。

木蓋（1250）

表面・裏面ともに平らに削られているが、刃物の痕跡が明瞭に残る。円板のほぼ中央は径 0.5cm の孔を刳り貫きここに細棒を差し込む。直径 16 cm、厚さ 0.8cm を測る。

下駄（1251・1252）

どちらも台と歯を一木で作る連歯下駄である。鼻緒を後壺に通した後に裏面で結んだと思われる痕跡が残る。(1251)は隅丸長方形で、台の部分は前幅よりも後幅を狭くし、歯の下辺部を台の幅よりもやや広くする。表面は滑らかに削られているが、裏面の調整は粗い。後歯の消耗が著しい。現存長 19.3cm、最大幅 8.5cm、台の厚さ 1 cm を測る。材質はケヤキである。(1252)は小判形でやや小さめである。前歯に比べ後歯の方が消耗している。現存長 12.2cm、幅 6.5cm、台の厚さ 0.9cm を測る。

鳥形（1253）

鶏の頭部から頸部にかけての部位である。現状では全長 15.3cm、頭部の幅は最大で 8.8cm、厚さ 4.5cm、頸部幅 4.3cm、厚さ 2.4cm を測る。頭部は左右対称に作られていない。顔の左側には膨らみを持たせて目、嘴を表現しているが、顔の右側は平らに削られている。頭頂部に径 1.3cm、深さ 2.3cm の孔を穿っており、別造りの鶏冠を挿入する孔かもしれない。

陽物（1254）

中心部分は樹皮を取りさり加工される。両端は加工された後に焼かれているために、黒色を呈する。全長 15.5cm、中心部の径は 2.6cm を測る。

擂粉木（1255）

樹皮を取り去り部分的に刃物をあてた棒の一端を尖らせ気味に加工する。全長 60.1cm、断面は楕円形で径は 3.9cm を測る。

脚付台（1256）

台部分と脚部分が一木より作られている。台の部分の法量は最も残りの良いところで、長さ 27.7cm、厚さ 0.7cm を測る。台の両端はわずかに上に反る。台の内側に方形の孔が 1 か所穿ってある。脚は台の端に作られ外側に向かって彎曲し、断面は三角形を呈する。台までの高さ 10.8cm を測る。

付札（1259）

全長 15.2cm、幅 2.5cm、厚さ 0.4cm を測る。丁寧に削られており、刃物の痕跡は残らない。両端から 1.5cm 程入った所に三角形の切り込みを入れる。墨書は遺存していない。　（大藤）

卒塔婆（1265～1269）

笹塔婆 4 点、柿経 1 点の合計 5 点出土した。笹塔婆の分類については西本分類(西本 1998)に準拠する。墨書の残る卒塔婆については文末にその釈文を記す。(1265)はほぼ完形の笹塔婆で、

長さ 36cm、幅 3.3cm、厚さ 3～5mm を測る。細長い杉材を用い、頭部を五輪塔状に削り出し、下端を尖らせておらず、A－Ⅲに分類できる。両面とも平滑に加工されているが、墨書は遺存していない。頭部先端より 13cm 下に 2mm 四方の方形の孔があり、ここよりさらに 18cm 下にも 2mm 四方の方形の孔がある。上下２か所に孔があることから単独での使用ではなく、上下にそれぞれ横木を組み合わせたものとして使われたと推定できる。(1266)はほぼ完形に復元できる笹塔婆である。材質は杉材を用い、頭部を五輪塔状に削り出し、下端をやや尖り気味にしたものであり、A-Ⅱに分類できる。長さ 37.5cm、幅 3.6cm、厚さ 0.3cm を測る。両面に墨書が残る。表面の最上部の空・風・火・水・地輪の各部に梵字のキャ・カ・ラ・バ・ア(五大種子)を配し、その下にキリーク(阿弥陀如来種子)と左にサク(勢至菩薩種子)を記す。右は判読できないが、サー(観音菩薩種子)が記され、阿弥陀三尊を構成していたものと考えられる。その下には「毎自作是念　以何(令衆生)　得入無上道　速(成就仏身)」と偈文が二行に書かれている。これは『妙法蓮華経』如来寿量品第十六の末文で破地獄偈といわれ、卒塔婆の偈文としてよく使われるものである。その下に、享禄元(1528)年２月 17 日の日付がある。右側に「日九」「年」「十二」などの文字が確認できるが、これも年月日が記されていた可能性がある。裏面は、五輪にア・ビ・ラ・ウン・ケン(大日如来報身真言)を配する。その下にカ(地蔵菩薩種子)が記され、表面の阿弥陀三尊に対応する配置である。以下、「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成佛道」は『妙法蓮華経』化城喩品第七にみえる偈文である。この類例としては、岡山県熊山田散布地出土の笹塔婆、福岡県大宰府史跡第 78 次調査出土笹塔婆などがある。現在でも読経の最後に唱える回向文として広く使用されている。次に続く梵字は胎蔵界五仏、金剛界五仏と考えられる。(1267)は笹塔婆で現存長 21.8cm、幅 2.6cm、厚さ 0.3cm を測る。上下端とも欠失しており、片面に墨書が残る。２行にわたって種子が書かれており、随求小呪の下半部にあたる。その下に、浄心浄業のための四年供養とあり、追善供養の笹塔婆である。(1268)は頭部を山形にし、左右に切り込みのあるCタイプに分類できる笹塔婆で断片的にしか遺存していない。現存長 2.7cm、幅 2.4cm、厚さ 0.03cm を測る。「南」１字のみ遺存し、下には「無阿弥陀仏」という文言が続くと思われる。極めて薄い材であることから、削りくずの可能性もある。(1269)は細長く薄い材の両面に墨書した柿経である。現存長 17.7cm、幅 1.3cm、厚さ 0.1cm を測る。表面の「何是善男子善女人功徳多」は『妙法蓮華経』観世音菩薩普門品第二十五の 43 行目に当たる。裏面は「訶薩於怖畏急難之中能」で同 78 行目に当たり、20 本１組で使われたことがわかる。

以上の卒塔婆のうち、笹塔婆は全体の形状と墨書内容からおおむね室町時代の所産と考えられ、また紀年銘の残るもの(1266)から、年代の一点が押えられる。柿経は両面に経文が書かれていることから南北朝時代以前に属すると判断される(木下 1975)。

(1266)・「　　毎自作是念　以何(令衆生か) □日九　□
〈五大種子〉〈阿弥陀三尊〉　　年十二　□□
得入無上道　速(成就仏身か) 享禄元年二月十七日」

・「　　願以此功徳 普及於一切
〈大日如来報身真言〉〈地蔵菩薩〉　　〈胎蔵界五仏〉〈金剛界五仏〉
我等与衆生 皆共成佛道　　」
(1267)・…〈随求小呪〉為御子浄心浄栄
四年供養□
(1269)・…何是善男子善女人功徳多
・…訶(薩於か)怖畏(急難之中か)能　　(西本)

櫂(1270)

柄と水掻きを一木で作る。水掻きの部分は削って薄くするが均一ではなく、断面を観察すると中央部を膨らませ、両端を薄く整形する。水掻きの先端部は尖り気味に加工する。柄の断面は円形に近い形状を呈する。全長 352cm、水掻き部分の長さ 200cm、最大幅 10cm、厚さ 2.4cm、柄の部分の断面の直径は 4.4cm を測る。

付け木(1261・1262)

木片を粗く削っている。どちらの木片にも片側の先端には燃えこげがあり、火付けの際に用いたものと考えられる。

用途不明

(1257)は片側端部より 2 cm 内に入った所に 1.6cm×0.9cm の長方形の孔を持つ。周縁は垂直に削り落とされている。全長 32.8cm、幅 2.4cm、厚さ 1.2cm を測る。(1258)は現存では長さ 29.8cm、幅 10.2cm、かなり薄く削られており、厚さは 0.3cm を測る。隅を斜めに切り落とし、表面・裏面共に刃物の痕跡を残さず滑らかに整形する。径 0.2cm の 孔を刺り貫き、ここに細棒を差し込む。(1260)は全長 15.2cm、厚さ 5 cm を測り、径 1.8～2 cm、深さ 1.7～2.2cm の孔を 3 個持つ。うち 2 か所には孔の内に更に凹みがある。残りの 1 か所は貫通している。孔の燃焼痕は明確でないが、形状よりみて火錐臼の可能性がある。(1263)は一方の端を斜めに切り落とし、側縁の 2 か所に抉りを入れる。全長 48.4cm、最大幅 10.7cm、最小幅 4.6cm、厚さは 1.2～2.5cm で不均一である。(1264)は残存長 45cm、残存幅 11.2cm、厚さ 1.7cm を測る。側縁から内に 1.5cm 入った所に 1.9cm×1.4cm の長方形の孔が穿たれている。大足の可能性がある。　　(大藤)

１８．金属製品（第 4～7 図、図版 70～74）

鉄製品と銅製品がある。鉄製品には剣、鏃、鎌、刀子、釘、ヤス、坩堝、斧、小刀、鋤、壺鐙、鉸具など多様な遺物があり、銅製品には鏡、銭貨がある。出土遺構は古墳時代遺構面(1401)、堤防下層（1288・1292・1309)、堤防上層(1271・1275・1290)、堤防覆土(1285)、河道Ⅳ下層（1317・1402・1436)、河道Ⅳ上層(1272・1289)、河道Ⅲ下層(1314)、河道Ⅲ上層(1291)、河道Ⅶ(1295・1298・1300)、河道Ⅰ上層(1273・1274・1276～1284・1286・1287・1293・1294・1296・1297・1299・1301～1308・1310～1313・1315・1316・1318～1325・1434・1435)である。

剣(1401)

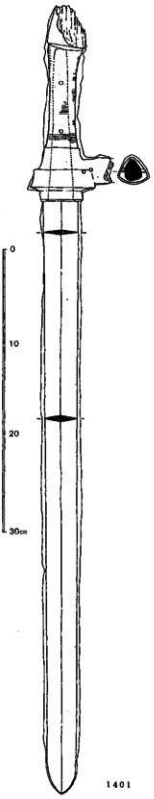
古墳時代の鉄剣で、剣身と装具からなり、現存全体長 83.5cm を測る。全体的に表面を覆う鉄

錆によって外形輪郭の姿をとどめているという状態であり、肉眼による観察の他にX線写真による検討も行った。剣身は刃部と茎とからなり、刃部は両刃で直線状にまっすぐに伸び、先端付近でわずかに幅を狭めながら切先はやや鋭く尖る。刃部は鎬が認められ、断面はやや鋭い菱形を呈する。刃部から茎にいたる境の関は両側に見られる。茎は部に行くに従い幅を狭めており、中央付近で径 0.4cm の目釘穴が5.2cm間隔で2か所あけられている。剣身全長は78.7cmで、刃部の長さ 62.5cm、幅 3.6cm、厚さ 0.5cm、茎の長さ 16.2cm、最大幅 2.6cm を測る。剣身は禹分類(禹 1999)で長剣・長茎・広茎Bに分類できる。

剣装具については柄部が遺存し、鞘は認められない。柄部は木製で、柄頭、柄間、柄縁からなる。柄頭は方頭形にやや膨らんだ形状を呈するが、木質部はほとんど遺存せず、中空の状態である。先端は遺存していない。柄間は柄頭との接合付近で弱く弓なりに彎曲し、X線写真による観察では糸巻きがされていたようである。柄縁は2段構造をしており、柄の方向に直角に現存長3.3cmの突起が出ている。突起は断面三角形を呈し、2か所に釘止めされている。この内部には乾燥し、収縮した木質部が遺存する。柄部は全体で鹿角装状の形状を呈し、奈良県布留遺跡出土資料に類例(5世紀)が認められ、置田分類(置田 1985)でA類(鹿角装状)に分類できる。

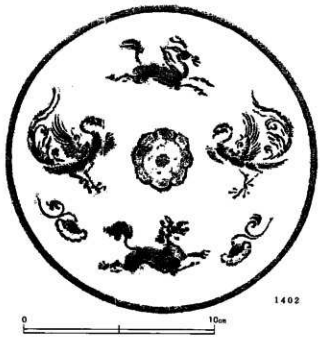
鏡(1402)

河道Ⅳの河岸落ち際で出土した唐式鏡である。出土時に左側約1/3に割れがあったもののほぼ完形に復元できる。錆による腐食はほとんど認められず、鈍い光沢を有し、良好な保存状態を保っている。鏡縁の形状は円形で径 166mm、縁厚4mm、鏡胎厚3mm、重さ 658.5gを測る。縁の断面は台形を呈し、縁上端幅3mmを測る。鏡面・鏡背ともに反りはない。鏡背には中央に径約35mmを測るやや形のくずれた八花形の鈕座があり、その中央に径約 18mm、高さ8mmを測る半球形の鈕を置く。鈕の穿孔の形状は半円形でその方向は左上斜め約30°である。鈕の頂部は径約8mmの狭い平坦面がある。図様は単一方向から見る視点で構成され、中央の鈕をはさんで左右に鳳、上に麒麟、下に狻猊(いずれも伝説上の瑞鳥・瑞獣)を配する。図様は全体的にややシャープさがなく、踏み返し鋳造がある程度進んだ段階のものと思われる。双鳳は一対



第4図　鉄剣実測図

の羽ばたく鳳が向かい合うもので、どちらも尾羽根を上方へS字状にくねらせながら伸ばしている。含綬(双鳳がそれぞれ口にくわえるリボン状の図様)は省略されている。双鳳のうち、向かって左側の鳳は左足を踏ん張り、右足の踵を大きく上げ、爪先立ちになっている。右側の鳳は左側の鳳とは逆に右足を踏ん張り、左足の踵を大きく上げ、爪先立ちになっている。麒麟・狻猊ともに向かって右側に走る姿で描かれる。麒麟は馬に似た獣形で頭上に角を持ち、背中に小さな翼を背負っている。両前足を大きく前方へ伸ばし、両後足も後方へ大きく伸ばしている。狻猊はいわゆる唐獅子で、後頭部から肩部にかけてたてがみがあり、尻尾の先端は大きく膨んでいる。麒麟と同様に両前足を大きく前上方へ伸ばし、両後足も後方へ伸ばしている。狻猊の左右、双鳳との間に瑞花(草花状の図様)が1つずつ置かれる。蓮に似た図様で、いずれも茎から花弁状のものと葉状のものが分かれている。これらの個々の図様の構成から瑞花双鳳麒麟狻猊文鏡と呼称する。なお、鏡の上部で鏡縁内側に不整な段が認められ、本来八花形を呈した縁を円鏡に修正した痕跡の可能性もある。また、鏡背の個々の図様及び鈕座の周りにノミ状の工具によるやや鋭い削り痕がみられる。これらの削り痕は鈕座に13ヶ所、左側の鳳に3ヶ所、右側の鳳に6ヶ所、麒麟に8ヶ所、狻猊に10ヶ所、左側の瑞花に2ヶ所、右側の瑞花に1ヶ所見られる。削り痕の方向は



第5図　鏡拓影及び断面図

第6図　鏡背面加工痕図

ほとんどそれぞれの図様に向かっており、シャープな痕跡として残る。このことから図様等の輪郭を鮮明にするために鋳造後に加工が行われたものと考えられる。また、それぞれの図様間の地は完全に平滑でなく、微かに凹凸があり、鋳造後研磨されたものと思われる。白銅質で銅質が良く、中国唐代の鏡とみられ、西本分類(高橋・西本 2002)の双鳳麒麟狻猊文系鏡D２類に属する。双鳳麒麟狻猊文系鏡はほぼ８世紀代の所産と考えられ、その中でも図様の省略がかなり進んだ段階であるD２類に属すること、中国の偃師唐墓で出土した鏡(D１類)が墓誌によって至徳元(756)年頃の年代が求められていること(中国社会科学院 2001) から、五反島遺跡出土鏡は８世紀後半の所産と考えられる。

鉄鏃（1271～1285）

鉄鏃は堤防上層、堤防覆土、河道Ⅳ、河道Ⅰ等の遺構から合計 15 点出土した。形式として雁又式、柳葉式、鏨根式などが認められる。分類については杉山分類(杉山 1988)と津野分類(津野 1990)を参照した。

(1271～1275)は雁又式の鏃で(1271)は小型、(1272～1275)は大型である。(1271～1273)は鏃身部と茎部からなり、鏃身部は刃部で二股に分かれ、内側線のみに刃を有する。刃部の断面は平片刃造で頸部関部は台形関である。茎部は断面方形である。二股に分かれた刃部は(1271)はやや鋭くＶ字状に直線的に開き、(1272)は短くＵ字状に開く。(1273)は先端部が遺存しないが、(1272)よりも刃部は大きく開く。(1271)は関付近にわずかに矢柄の一部が残り、(1272)は頸部関から矢柄、漆塗りの樹皮巻、糸巻きが残る。(1273)は細く巻かれた樹皮が残る。(1271)は全体長 12.3cm、鏃身部長 6.4cm、茎部長 5.9cm、(1272)は全体長 17.1cm、鏃身部長 6.5cm、茎部長 10.6cm、(1273)は全体遺存長 15.8cm、鏃身部遺存長 5.6cm、茎部長 10.2cm を測る。(1274・1275)は彎曲しながら大きく広がる二股の刃部を有し、内側線に刃を有する。刃部の断面は平片刃造であり、頸部関部は台形関で、ここに径約 2cm の球形の鳴鏑を具える。鳴鏑に円孔があけられ、茎部は断面方形である。(1274)は全体長 18.6cm、鏃身部長 10.0cm、茎部長 8.6cm、(1275)は全体長 19.2cm、鏃身部長 10.6cm、茎部長 8.6cm を測る。

(1276～1280)は柳葉式の鏃である。(1276～1279) は鏃身部と茎部からなり、刃部の断面形は両鎬造で鏃身関部を有し、茎部の断面は方形である。(1276)は鏃身関部が２段になっており、頸部関はなく、(1277～1279)は頸部関部は台形関である。(1280)は刃部は細長く、断面は両切刃造である。頸部関部は円形輪関で、茎部は長く、その断面は方形である。(1276) は鏃身に猪の目スカシ、(1278)は形状不明ながらスカシがある。(1276)は茎部にわずかに矢柄の一部が残り、(1277)は頸部関から漆塗りの筒状の樹皮と矢柄が残り、(1278)は頸部関から八角形の漆塗りの樹皮、矢柄の一部が残る。(1279)は茎部に矢柄の一部が残る。(1276)は全体長 15.9cm、鏃身部長 7.3cm、茎部長 8.6cm、(1277)は全体長 14.9cm、鏃身部長 8.2cm、茎部長 6.7cm、(1278)は全体長 13.9cm、鏃身部長 8.2cm、茎部長 5.7cm、(1279)は全体長 14.3cm、鏃身部長 7.8cm、茎部長 6.5cm、(1280)は全体長 17.8cm、鏃身部長 8.4cm、茎部長 9.4cm を測る。

(1281)は先端刃部が遺存しないが、鏨根式と考えられる鏃で、鏃身部、頸部、茎部からなる。

鏃身部は直線状に伸び、断面は方形である。頸部には関があり、断面は円形である。茎は台形関で断面方形である。全体遺存長 14.6cm、鏃身部遺存長 7.2cm、頸部長 3.2cm、茎部長 4.2cm を測る。(1282)は茎部とその一部を巻いた細い樹皮が残る。(1284)は茎部と身の一部が残る。頸部関部は台形関である。(1283・1285)は小型の柳葉式と思われ、鏃身部と茎部からなる。(1283)は頸部関が認められ、(1285)は頸部関部は台形関である。(1285)は茎部に六角形を呈する樹皮がつけられ、その下に矢柄がわずかに残る。(1282)は遺存長 11.0cm、(1283)は全体長 8.2cm、鏃身部長 5.5cm、茎部長 2.7cm を測り、(1284)は遺存長 7.7cm、茎部長 2.7cm、(1285)は全体長 12.8cm、鏃身部長 7.1cm、茎部長 5.7cm を測る。

鉄鏃(1286～1301、1319・1320)

鉄鏃は堤防下層、堤防上層、河道Ⅳ、河道Ⅲ、河道Ⅶ、河道Ⅰ等の遺構から合計 18 点出土した。河道Ⅰ出土が 10 点で最も多い。

鉄鏃の分類については古瀬分類（古瀬 1991）に準拠する。出土した鉄鏃は、大形式として鏃身本体の大きさが大型と中型に分類でき、中形式として着柄角度（刃弦と柄のなす角度）が直角のもの（Ⅰ類）と 110 度前後を超えるもの(Ⅱ類)に分類できる。また、付加属性として直刃（A類）と曲刃（B類）に分類でき、さらに、B類はB1（長方形で先だけ尖らせて下に曲げたもの）とB2(身全体を曲げたもの)に細分できる。A類はA2(方形であるが先細となるもの)のみが認められた。

(1287～1289)は中型Ⅰ類の鏃である。(1287)は身部のみが遺存し、身の根元端を短く急角度に折り曲げている。身の長さ 16.2cm、身幅 2.7cm を測る。付加属性はA2 に分類される。(1288)は完形品で、身は細長く伸び、先端はやや下方へ曲がり気味に尖り、柄との着装部分で刃側に関がある。着柄角度は約 88° である。柄の頭部は大きく膨らみ、下方へはやや屈曲しながら長く伸び、下端は片側が膨らみ気味で先端はやや尖る。身との着装部には付着物が広く覆っており、接着剤(膠か？)の一部かもしれない。柄の断面は円形である。身の長さ 19.2cm、身幅 2.8cm、柄長 38.5cm、柄厚 2cm である。付加属性はB1 に分類される。(1289)は完形品で、身は長方形で柄との着装部分で刃及び背の両側に関がある。先端をやや尖り気味にし、根元は折り曲げている。着柄角度は約 90° である。柄の頭部は膨らんでおらず、直線状に長く下方に伸び、下端は身の先端方向に急に曲げている。柄の材質はカシ類で、その断面形は楕円である。身の長さ 13cm、幅 2.9cm、柄長 38.3cm、柄厚 2.1×1.7cm である。付加属性はA2 に分類される。

(1286・1290・1291・1293)は中型Ⅱ類の鏃である。(1286) は身の根元と柄の一部がわずかに遺存するもので、着柄角度は約 100° である。身の遺存長は 9.1cm、幅 3cm である。付加属性はB2 に分類される。(1290)は身及び柄の一部が遺存する。身は細長く斜上方に伸び、先端は尖り、やや下に曲がっている。身の根元は短く直角に折り曲げられており、着柄角度は約 110° である。柄の頭部はやや尖り気味に丸くおさめられており、下部は片側に弱いえぐりが入れられている。柄の断面は長方形である。身の長さ(復元長)17.7cm、幅 3cm、柄の遺存長 17cm、柄厚 2.5×1.8cm である。付加属性はB1 に分類される。(1291)は身の先端部が遺存せず、柄も下

半部が残っていない。柄は頭部がやや大きく、下方へは細くなり、断面は円形である。身との着装部には付着物が広く覆っており、着柄角度は約121°である。身遺存長15cm、幅3cm、柄遺存長16.2cm、柄厚1.8cmである。付加属性はB2に分類される。(1293)は身は完存し、柄は着装部分で一部遺存するのみである。着柄角度は約101°である。身の長さ17.7cm、幅2.4cm、柄の遺存長4.5cmである。付加属性はB2に分類される。

(1292・1297・1298・1300・1301・1319・1320)は大型Ⅱ類の鏃である。付加属性は(1292)のみA2に分類され、他はB2に分類される。(1292)は身は完存し、柄は上半部が残る。柄は頭部が大きく膨れ、下方へ行くにつれ細くなり、断面は楕円形である。材質はヒサカキである。身との着装部には付着物が残り、着柄角度は約127°である。身の長さ21cm、幅3.9cm、柄遺存長22.7cm、柄厚3.3×2.2cmである。(1297)は身は先端部分が遺存しないが、柄は完形に復元できる。柄は頭部が少し膨らみ気味で、下方へS字状になだらかに屈曲し、下端は広がる。断面は楕円形である。材質はカシ類である。身との着装部には頭部上部に2ヶ所、下部に1ヶ所の目釘が残る。着柄角度は約131°である。身遺存長16.5cm、幅4.7cm、柄長30cm、柄厚2×1.8cmである。(1298)は身は完存し、柄は着装部に一部が残る。着柄角度は約116°である。身の長さ24.5cm、幅4.7cm、柄遺存長6.4cm、幅3cmである。(1300)は身のみほぼ完形に復元できる。根元先端部は折り曲げられていない。身の長さ23.6cm、幅5cmである。(1301)は身の下部の一部が遺存する。下部先端の一部が短く折り曲げられている。身遺存長22.5cm、身幅3.5cmである。(1319・1320)はほぼ完存し、(1320)は身が半折状態で遺存する。どちらも先細りの身茎下端を釣り針状に曲げ、それを上部に細い溝を穿った細長い柄に着装し、釘で止め、柄の上端部を口金で止めたものである。(1319)は着柄角度は約100°で、材質は二葉マツである。身の長さ18.5cm、身幅4.3cm、柄長43.6cm、柄厚2.6×1.8cmである。(1320)は着柄角度は約111°である。身復原長13.8cm、身幅4.7cm、柄長41cm、柄厚2.9×1.8cmである。(1286～1301)とは形態が異なり、むしろ現代の鏃に近似し、時期的に新しいものと考えられる。

その他の鏃では、(1294)は身の先端の一部が残るのみで着柄角度は不明のものの、中型で付加属性はB2に分類される。身遺存長12cm、身幅1.8cmである。(1295)は柄の下端が一部残るのみである。断面は円形で、材質はカシ類である。柄遺存長14cm、柄厚2.3cmである。(1296)は大型Ⅱ類で付加属性はB2に分類される。先端が遺存しないが幅広の刃部で下方は大きく彎曲し先細りとなる。柄は一木で柄頭の1cm下から下方にかけて溝が穿たれ、その間隙に茎が挿入されている。さらに茎と柄のわずかの隙間に長方形の材(3.3×3.9cm、厚さ0.5cm、材質二葉マツ)が詰められている。柄の上部には1ヶ所釘が打たれている。柄の材質はカシ類である。身遺存長26.8cm、身幅6.3cm、柄遺存長14.8cm、柄厚2.3cmである。(1299)は身の先端の一部が残る。着柄角度は不明であるが、大型で付加属性はB2に分類される。身遺存長14cm、身幅4.5cmである。

刀子(1302～1310)

堤防下層から1点、河道Ⅰから8点、合計9点出土した。刀子は刃が施された刀身と茎から

なる。すべて渡邉分類のA類（刀身から伸びた茎を柄に装着する形式、渡邉 1997）に分類できる。刃部は直線に近く、先端でやや彎曲して尖り、背は直線状である。断面形は二等辺三角形を呈する。茎は細長く伸び先細りとなり、断面長方形を呈する。関（刀身と茎との境界の段）は背にのみあるもの（1303・1304・1310）と刃・背両側にあるもの（1302・1305～1308）がある。（1302）は刀身及び茎の一部が残る。刀身遺存長 11cm、茎遺存長 3cm である。（1303）は刀身の一部と茎、柄の一部が残る。刀身遺存長 5cm、茎長 6cm である。（1304）は刀身の一部と茎、柄の一部が残る。刀身遺存長 1.5cm、茎長 5cm である。（1305～1308）は遺存状態が良く、刀身・茎・柄がほぼ復元できる。刀身長と茎長の比率は（1306～1308）が３：２であるのに対し、（1305）は２：１で、（1305）のみ刀身に比べ茎は短い。身の長さ 15.1cm、茎長 7.5cm、柄長 15.4cm、柄厚 2.1×1.6cm である。（1306）は身の長さ 16.8cm、茎長 12cm、柄長 11.7cm、柄厚 1.5×1.2cm で、材質はヒサカキである。（1307）は身の長さ 15.6cm、茎長 11.6cm、柄長 11.1cm、柄厚 1.7×1.3cm で、材質はムクノキである。（1308）は身の長さ 11.8cm、茎長 9cm、柄長 13.9cm、柄厚 1.6×1.4cm で、材質はクスノキである。（1309）は刀身の一部と柄が残る。身遺存長 6.5cm、柄長 13.7cm、柄厚 1.5×0.9cm である。（1310）は刀身と茎がほぼ遺存する。刀身長と茎長の比率はおおよそ１：１である。身遺存長 9.5cm、茎遺存長 8.9cm である。

釘（1311・1312）

全体の形状は楔状で下端を尖らせ、上端を折り曲げている。身部の断面形は長方形である。（1311）は長さ 11.2cm、上端幅 1.5cm、（1312）は長さ 6cm、上端幅 1.1cm である。

坩堝（1313）

ほぼ完形で遺存する。全体の形状は椀形で底部は丸底である。口縁部に１ヶ所の注口部を有する。口径 8cm、器高 2.3cm、底部厚 0.5cm である。

ヤス（1315）

複式のヤスの刺突部と考えられる。断面方形の頸部から刺突部が曲がりながら伸び、先端は尖り、内側には逆刺が付く。遺存長 11.7cm、頸部厚 0.7×0.6cm である。

鉄斧（1316・1317）

斧身が２点出土した。どちらも渡邉分類の横斧（C類斧、渡邉 1998）に分類できる。曲木斧柄の先端を斧身袋部に装着する構造であり、斧身は袋状のヒツと穂部分とで構成される。柄装着部は袋式で有隙であり、斧身平面は無肩で、斧身側面形状は無段でクサビ形状である。刃部は（1316）はやや外彎し先端が広がる形状で、（1317）は直線状で先端が広がらない形状である。刃部の断面形は縦断面は片刃、横断面は長方形である。（1317）は袋部に柄の一部とみられる木質部がわずかに残る。（1316）は身の長さ 8.5cm、刃幅 4.9cm、（1317）は身の長さ 7.8cm、刃幅 3.9cm である。

小刀（1318）

刀身と茎部で構成され、ほぼ完形に遺存する。刀身はわずかに反りがみられるぐらいで直線的であり、先端に向かうにしたがって細くなり、切先は鋭く尖る。茎は短く、断面形は長方形

で中央付近に径0.5cm の丸い目釘穴がある。小刀全長27.2cm、刀身長20.2cm、刃幅2.2cm、茎長7cm である。

鋤(1321)

いわゆるナスビ形組合せ鋤と考えられる。木製の鋤身とU字形の鉄製鋤先とからなる。鋤身は上部の軸部は欠失する。笠部と肩部は片方のみの一部遺存である。笠部はなだらかでわずかな突起となり、肩部は上がり気味でイカリ肩状である。笠部と肩部間の側面には凹凸が見られ、紐の緊縛痕と考えられる。鉄製鋤先は刃先部がU字形で刃の幅は先端部が広く、耳部は幅が狭くなっている。身との装着する部分にV字形の溝をつけている。遺存全体長 29.2cm、幅 18.6cm、鋤先の長さ 22.1cm、幅 18.6cm、厚さ 0.8cm で、刃の幅は先端部で 5.6cm、耳部で 2.0cm である。松井分類のA3類(松井 1986)に該当し、奈良時代以降のものと考えられる。

壺鐙(1322)

鉄地黒漆塗り壺鐙である。全体が鉄でできており、錆の付着が顕著であるが、全体の姿を良くとどめている。壺部は外面全体に黒漆が塗布されており、その一部が現存する。沓先形で甲上に鐙を立て、先端はやや尖り、爪先は丸くおさめている。踏込部はやや長い舌を出し、水平に伸びる。踏込口の縁金は幅約 1.5cm の幅広い断面蒲鉾形を呈し、上部から側面にかけてまわり、舌部の外縁沿いに舌先部まで及ぶ。縁金には側面に 6 ヶ所、舌先部に 3 ヶ所の鋲止めが施されている。壺部上縁に方形の吊手を作り、その先端に逆U字形の金具を横軸を設けて留め、さらにそこから鉄製の兵庫鎖を 4 段連ねている。吊手と兵庫鎖は本来一直線に並ぶものと考えられるが、現状では約 90° の角度に折れ曲がっている。踏込口の側縁と舌部とのなす角度は約 76° である。全長 20.0cm、幅 13.7cm、全高 14.6cm、踏込部長 18.5cm、踏込部幅 12.4cm、舌長 6.9cm、舌幅 10.3cm、厚みは 0.3～0.6cm である。全体の形状・大きさは正倉院の壺鐙に類似するが、それよりも舌部が長いことから後出のもので、奈良時代以降の所産と考えられる。

鉸具(1323～1325)

大型 1 点と小型 2 点の合計 3 点出土した。(1323・1324)は断面円形の鉄棒を曲げて逆U字形の金具とし、脚部下端に横軸を設け、その上に刺金を付けた横軸を設けている。(1323)は直径約 0.8cm の鉄棒を加工し、下方脚部を折りたたんでおり、長さ 8.8cm、頭部幅 4.3cm、脚部幅 3.7cm、である。(1324)は長さ 5.0cm、頭部幅 4.3cm、脚部幅 4.3cm である。(1325)は先の 2 点と同様な造りであるが、刺金は脚部下端の横軸に直接巻きつくように取り付けられているのが相違する。長さ 4.8cm、頭部幅 2.8cm、脚部幅 2.8cm である。これらは単体として機能するものでなく馬具等に組み合わせ使用されたものと考えられる。

用途不明(1314)

刀子に似た形状で、茎と身に分れる。片面の茎と身に鏑状のものがみら

縮尺1：1

第7図　銭貨拓影

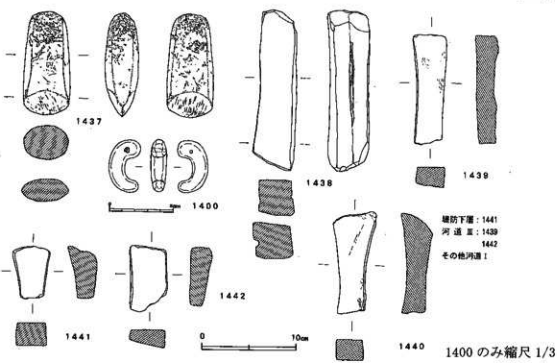
れ、他方は平坦であり、先端は丸くおさめている。全体長16.3cm、身幅1.6cm、厚さ0.4cmである。

銭貨(第7図1434～1436)

出土量は少なく、北宋銭が合計4点出土した。(1434～1436)は河道Ⅰ上層出土である。(1434)は熙寧元寶、(1435)は元豊通寶、(1436)は元祐通寶である。(1434)は径2.4cmを測る。他1点は第2次試掘調査T8調査区出土の熙寧元寶である。(西本)

19．石製品(第8図)

弥生時代の石斧、古墳時代の勾玉、砥石等が出土したが、数量は少ない。出土遺構は堤防下層(1441)、河道Ⅲ(1439・1442)、河道Ⅰ(1400・1437・1438・1440)である。(1437)は太型蛤刃石斧で長さ10.8cm、幅4.6cm、厚さ3.5cmを測る。着柄部よりも刃部の方が幅広で、刃部平面は弧状を呈する。刃部には多くの擦痕がみられる。(1400)は瑪瑙製のやや大型の勾玉で長さ4.1cm、厚さ1.2cmを測る。頭部に穿孔があり、孔の広い方は径0.3cm、狭い方は径0.2cmである。(1438～1441)は砥石である。形態は両端とも幅の差がない棒状のもの(1438・1439・1442)と片方が膨らんだ形状のもの(1440・1441)がある。大型で砥面がやや粗いもの(1438)、中型で砥面がやや粗いもの(1439)、中型で砥面が細かいもの(1440)、小型で砥面がやや粗いもの(1441)、小型で砥面が細かいもの(1442)がある。砥面がやや粗いものは中砥石、砥面が細かいものは仕上げ砥石と考えられる。(西本)



1400のみ縮尺1/3

第8図　石製品実測

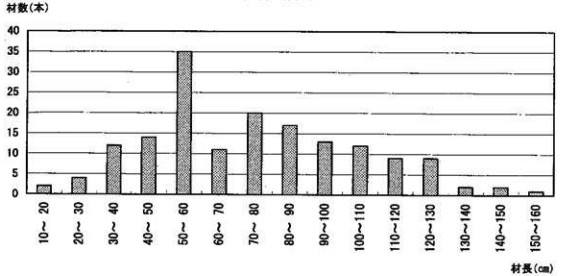
２０．堤防構成材（図版 75～80）

調査で確認した堤防跡では馬踏及び法面のほぼ全面に杭、横木等による木組が認められ、使用されている木材は延長 54mの堤防調査範囲において、総数 653 本が確認されている。木組の構成材としては原位置を留めていないものも多く認められることから厳密な数値は示せないが、杭として使用されたものは打ち込まれた状況で確認されたものが 112 本で、さらに形態、寸法等から杭として使用されていたと考えられるものが他に 50 本認められる。横木として使用されていたと考えられるものは336本、その他が 155本である。これらの材はその加工状況等から、他からの転用材と考えられるものはほとんど認められず、この堤防構築に際して新たに用意されたものと考えられる。堤防構成材として使用された木材の樹種は島地謙先生、林昭三先生に鑑定していただいた結果、36 種（広葉樹 30 種、針葉樹 6 種）が報告されており（『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書　自然科学編』1996）、表は報告をもとに顕微鏡観察による樹種同定以外に肉眼的観察による予備調査において確認されたマツ等を含めた本数を加えて作成したものである。総数 653 本の内、マツが杭で 160 本、横木で 258 本、その他で 74 本の計 492 本と全体の約 75.3%を占め、特に杭では 98.8%とほぼ全てがマツ材である。他に 10 本以上確認されているものはヤナギ属が 25 本（ 3.8%）、ヒノキが 18 本（ 2.8%）、ムクノキが 14 本（ 2.1%）、エノキとカシ類が共に 12 本（ 1.8%）で、他の種類のものは１～８本である。

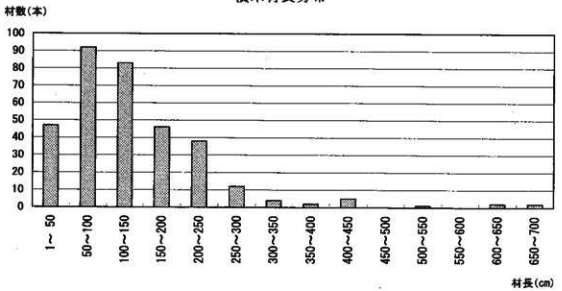
材	杭	横木	その他	計	材	杭	横木	その他	計
アキグミ	0	1	0	1	ヒカサキ	0	2	0	2
カキノキ	0	1	0	1	ヤマグワ	0	1	1	2
カマツカ	0	0	1	1	クマシデ属	0	2	1	3
カヤ	0	1	0	1	サカキ	0	4	0	4
クリ	0	0	1	1	スギ	0	0	4	4
サイカチ	0	1	0	1	ツブラジイ	0	3	1	4
シキミ	0	0	1	1	ハコヤナギ属	0	1	4	5
シラキ	0	1	0	1	クヌギ類	0	6	0	6
トチノキ	0	1	0	1	ナラ類	0	2	5	7
ニガキ	0	1	0	1	カエデ属	0	2	6	8
ハイノキ	0	1	0	1	モミ	0	4	4	8
ムクロジ	0	1	0	1	エノキ	0	4	8	12
ヤマウルシ	0	0	1	1	カシ類	0	10	2	12
アキニレ	0	1	1	2	ムクノキ	0	5	9	14
イスノキ	0	2	0	2	ヒノキ	0	7	11	18
イヌマキ	0	2	0	2	ヤナギ属	1	7	17	25
クスノキ	1	1	0	2	二葉マツ	160	258	74	492
ケヤキ	0	0	2	2	不明	0	1	1	2
トネリコ属	0	2	0	2	合計	162	336	155	653

表　堤防構成材樹種

杭材長分布



横木材長分布



堤防構成材　寸法分布

杭（1326～1381）

杭として使用されたものは欠損しているものもあるが、長さ 13～159cm、太さ 3～16cm である。堤防天端の馬踏杭列の杭を長さ 10cm 単位に区分してみると 50～60cm 代のものが最も多く、30～130cm のものが各々10 本前後とほぼ平均してある。堤防南側の杭列の杭は資料数が少ないが、長さ 70～110cm に集まる傾向にある。

一方、杭の加工状況をみるといずれも幹部分を使用し、先端部を 7 面前後削って杭先とし、枝払い等丁寧に加工されており、杭頭部にかけては枝を払うのみのものと下半部及び全体を丁寧に面取りを施すものがある。但し、この加工方法の差は杭の大きさや使用される場所等による違いが認められるものではない。

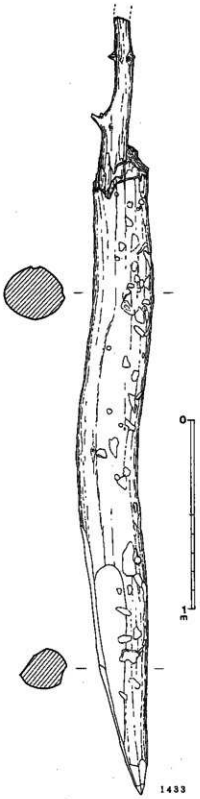
横木（1382～1385・1388～1394）

横木として使用されたと考えられるものは長さ 20～653cm、太さ 2～55cm である。長さ 400～600cm 前後、太さ 10cm 前後のものが馬踏上で杭列と組み合わされて、法肩を意識して使用されたものと考えられるが、50cm 単位に区分してみると 50～ 150cm のものが多く全体の50%強を占める。 加工状況はほとんどが幹部分を使用し、その 80%は枝払いを丁寧に行っており、20%ほどが先端を杭状に削っている。

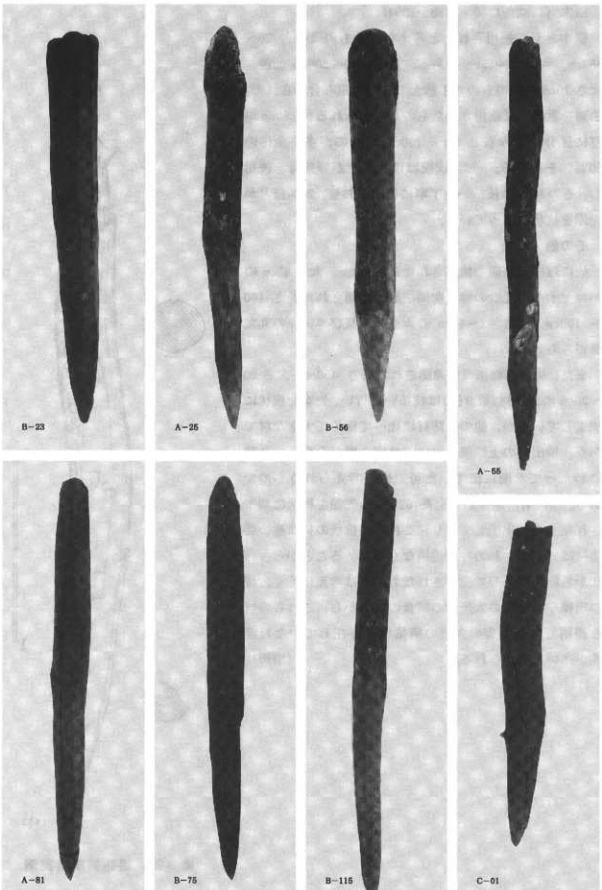
その他

他には南側法面で確認された長さ 90cm、太さ 42cm のハコヤナギの二股の幹、北側法面で確認された長さ 100～ 102cm、太さ 42～45cm のムクノキ及びエノキの丸太等がみられる。

また、堤防南側法面で確認された長さ 450cm、太さ 20～30cm の大型材(第９図)は枝払いを行い、先端を杭状に加工しているが、他の堤防材に比べて極めて大きな材であり、検出部の上端部については腐食痕がみられ、長期にわたって水面に出ていた可能性が考えられるものである。他にも河道１から全長 520cm の先端を杭状に加工されたものが出土しており、これらの杭状の材は他の堤防材に対してきわめて大規模なものであることから、当初から堤防材として使用されたものとは考えにくく、材の規模や第９図の大型材の腐食の状況から、これらの材を使用した橋梁等の大型の構築物の存在していた可能性が高いと考えられる。 (増田)



第９図　堤防構成材実測



第10図　堤防構成材写真

＜引用文献＞

置田雅昭「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学報』145輯（1985）

津野　仁「古代・中世の鉄鏃-東国の出土品を中心に」『物質文化』54号（1990）

杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8集（1988）

禹　在柄「鉄剣の型式学的研究」『国家形成期の考古学-大阪大学考古学研究室10周年記念論集-』（1999）

古瀬清秀「農耕具」『古墳時代の研究』8　古墳Ⅱ（1991）

渡邉　晶「近世の建築用の斧について」『竹中大工道具館研究紀要』第10号（1998）

渡邉　晶「近世の建築用刀子系道具について」『竹中大工道具館研究紀要』第9号（1997）

松井和幸「日本古代の鉄製鍬先・鋤先について」『考古学雑誌』72巻3号（1987）

中国社会科学院考古研究所編『偃師杏園唐墓』（2001）

高橋真希・西本安秀『開館10周年記念特別展　川の古代祭祀-玉反島遺跡を考える-』（2002）

西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古稀記念考古学論集』（1998）

中村　浩ほか『陶邑Ⅲ』（1978）

木下密運ほか「解題　こけら経」『日本仏教民俗基礎資料集成第6巻』（財）元興寺文化財研究所編（1975）

＜参考文献＞

安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60巻2号（1974）

寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』（1986）

尾上　実「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』藤澤一夫先生古希記念論集刊行会（1983）

栗田正芳「道後平野における回転台土師器について」『中近世土器の基礎研究』X日本中世土器研究会（1994）

古代の土器研究会編『古代の土器1・2・3』（1992・1993・1994）

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所（1983）

鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会（1988）

鈴木康之「鹿田遺跡出土の中世土器について」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第3冊　鹿田遺跡』1岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（1985）

高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』（1980）

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV』（2000）

中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社（1995）

橋本久和「畿内の黒色土器(1・2)」『中近世土器の基礎研究Ⅱ・Ⅳ』（1986・1988）

橋本久和『中世土器研究序論』真陽社（1992）

藤澤良祐「瀬戸古窯址群2」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X　瀬戸市歴史民俗資料館（1991）

藤澤良祐「瀬戸古窯址群3」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター（1995）

百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会（1986）

森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ　大和古中近研究会（1992）

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館（1978）

遺 物 観 察 表

＜遺物観察表凡例＞

・挿図・図版に掲載した遺物を全て観察表に取り上げることは紙数の制限でできず、一部を収載したにすぎない。
・観察表中の記述内容は遺物番号、台帳番号、地区、遺構、層位、種類、寸法(cm)、形態・手法の特徴、色調、胎土、焼成、備考の順に記した。
・表中の「台帳番号」は『遺物図面台帳』の番号である。
・色調は小山正忠・竹原秀雄著『新版　標準土色帖』(1987)に基づき、外面、内面、断面の順に記述した。
・「台帳番号」中で4000番以降は第２次試掘調査出土遺物を収載した。

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
8	1001	G 8 - B	古墳時代 遺構面	土師器 甕	口径12.7 胴径10.9 胴径21.7 器高22.8	体部:多方向ハケ5条/cm 内面下半:1/3指圧調整 内面上半:2/3ヘラケズリ	外)橙色7.5YR6/6 内)橙色7.5YR7/6 断)にぶい橙色7.5YR7/3	密 石英砂粒を含む。	良好	
12	354	G 5 - C	古墳時代 遺構面	土師器 甕	口径15.1 胴径13 胴径26.3 器高30.7	体部:板ナデ 内面:ヘラケズリ 口縁部:横ナデ	外)にぶい黄橙色10YR6/3 内)灰黄褐色10YR5/2 断)灰黄褐色10YR4/2	密 1～3㎜の灰白色・黒色・白色の石粒を含む。	良好	
42	849	G 5 - C	河道Ⅴ下層	土師器 高杯	杯部径16.1 基部径3.1 裾部径10 器高13.6	杯部外面:横ナデ 杯部内面:指圧調整のち横ナデ 脚部外面:縦の強いナデ 脚部内面:横のヘラケズリ	外)橙色2.5YR7/6～にぶい橙色5YR6/3 内)にぶい橙色5YR6/3～橙色2.5YR7/6 断)褐色5YR5/2	密 金雲母、3㎜以下の石英、1㎜大の長石を多く含む。	良好	
47	1012	G14 - A	河道Ⅴ下層	軟質土器 壺	口径11 頸径10.3 胴径17.3 器高18	体部:横タタキ4条/cm 口縁部:ナデ 内面指圧調整と横ナデ	外)明褐灰色　7.5YR7/2 内)にぶい橙色　7.5YR7/3	密 0.5㎜大の長石を少し含む。	良好	韓式系土器
55	862－2	G 8 - C ・D	河道Ⅴ上層	土師器 甕	口径20.8 遺存高3.7	口縁部:外面横ナデ 口縁部:内面ハケ調整	外)黄褐色2.5Y5/6 内)黄褐色2.5Y5/6 断)黄褐色2.5Y5/6	密 2㎜以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好	
56	575	G11 - C	河道Ⅴ上層	土師器 台付甕	裾径8.8 遺存高6.2	体部:ヘラケズリ、一部板ナデ 内面:指圧調整とヘラケズリ	外)浅黄橙色7.5YR8/4 内)浅黄橙色7.5YR8/6 断)浅黄色2.5Y8/3	密 0.5～3㎜大の長石、0.1～4㎜大の石英・金雲母を少量含む。	良好	東海系
66	795	G 8 - D	河道Ⅴ上層	須恵器 蓋	口径15.7 最大径16.1 器高4.3	天井部:回転ヘラケズリ（ロクロ回転方向右回り） 下半:回転ナデ 口縁部:ハケ目	外)灰色N6/0 内)灰色7.5Y6/1 断)灰白色N7/1	密 0.5㎜大の長石を多く含む。 1㎜大の長石をわずかに含む。	良好	
68	491－1	G 8 - C	河道Ⅴ上層	須恵器 杯	口径10 最大径11.8 器高5.1	底部:回転ヘラケズリ（ロクロ回転方向右回り） たちあがり:回転ナデ 内面:回転ナデ	外)灰色N5/0 内)灰色N6/0 断)赤褐色10R4/3	密 0.5㎜大の長石を多く含む。 1㎜大の長石をわずかに含む。	良好	
75	498	G 8 - D	河道Ⅴ上層	陶質土器 蓋	口径15.3 器高5.8	全面:回転ナデ つまみ:カキ目状のナデ	外)灰色N5/0 内)灰白色7.5Y7/1 断)灰白色N7/0	密 0.5㎜以下の砂粒を極少量含む。	良好	韓式系土器
76	1538－1	G11 - A	河道Ⅴ上層	軟質土器 広口小壺	口径8.9 頸径6.4 胴径7.2 底径5.6 器高7.1	体部:弱い指圧調整と指ナデ 胴部下半:横のヘラケズリ 口縁部:横ナデ 底部:指圧調整	全面)にぶい橙色7.5YR6/4	やや粗 0.5～1.5㎜大の白色粒・黒色粒、石英を多量、金雲母を少量含む。	良好	韓式系土器
77	619	G11 - C ・D	河道Ⅴ上層	軟質土器 鉢	胴径11.6 底径7 遺存高7	体部:ナデ（一部ハケ目） 口縁部:横ナデ 内面:ナデ（一部指圧調整）	外)褐灰色10YR4/1～にぶい黄褐色5/3 内)褐灰色10YR4/1～にぶい黄褐色5/3 断)褐色10YR5/1	やや粗 1～2㎜大の長石・石英を多量に含む。	良好	韓式系土器

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
82	3174	G23－A	堤防下層	弥生土器 甕	口径14.3 頸径12.4 胴径18.9 遺存高14.2	体部:ナデ（一部ハケ目） 口縁部:横ナデ 内面:ナデ（一部指圧調整）	外)黒褐色10ＹＲ3/1 内)にぶい赤褐色2.5ＹＲ5/3 断)灰赤色2.5ＹＲ5/2	密 0.5㎜大の白色砂粒をわずかに含む。	良好	
83	2555	G22－C	堤防下層	土師器 壺	口縁13.4 胴径11.5 遺存高17.5	体部:タタキ後ナデ 口縁部:横ナデ 内面:指圧調整	外)にぶい黄橙色10ＹＲ7/4 内)にぶい黄橙色10ＹＲ7/4 断)にぶい黄橙色10ＹＲ7/4	やや粗 0.1～2㎜大の石英、0.5㎜大の長石・金雲母を含む。	良好	
92	2847－1	G20－D	堤防下層	土師器 甕	口径14.4 頸径11.1 遺存高4.4	体部:ハケ６～７条/cm 口縁部:横ナデ 内面:ケズリ	外)浅黄色7.5ＹＲ8/6 内)淡黄色2.5ＹＲ8/3 断)浅黄橙色10ＹＲ8/4	やや粗 0.5㎜～1㎜大の長石・石英を多量に含む。	良好	吉備系
100	3345	堤防 W－24畦	堤防下層	陶質土器 有蓋高杯蓋	口径11.8 器高6 つまみ径1.9	体部:ナデ（一部ミガキ） 内面:ナデ	外)青灰色５ＰＢ5/1 内)灰色Ｎ6/0 断)灰赤色2.5ＹＲ4/2	密 微細な長石を含む。	良好	
102	3433	G20－B	堤防下層	須恵器 杯蓋	口径12.5 器高4.5	天井部:回転ヘラケズリ 口縁部～内面:回転ヘラケズリ 天井部:内面ナデ	外)灰色Ｎ5/0 内)青灰色５Ｂ5/0 断)暗青灰色５ＢＧ4/0	密 0.5～1㎜大の長石を含む。	良好	
109	3248	G22－D	堤防下層	須恵器 杯蓋	口径9.6 器高3	天井部:回転ヘラケズリ つまみ:ナデ 口縁部:横ナデ 内面:一定方向ナデ	外)色7.5Ｙ6/1 内)灰白色Ｎ7/0 断)灰白色7.5Ｙ7/1	密 0.5～1㎜大の長石を含む。	良好	
110	3479	G20－B	堤防下層	須恵器 杯	口径11.2 最大径12.8 器高4.6	体部:回転ヘラケズリ（ロクロ回転方向左回り） 口縁部～内面:回転ナデ	外)灰色Ｎ5/0～4/0 内)灰色Ｎ6/0	密 0.5㎜大の長石を多量に含む。	良好	
114	3425－2	G20－B	堤防下層	須恵器 杯	口径13.4 最大径16 器高4.3	底部:回転ヘラケズリ 口縁部～内面:回転ナデ 内面底部:ナデ	外)灰色Ｎ6/0 内)青灰色５Ｂ5/0	密 0.5㎜大以下の長石を含む。	良好	
121	3388	堤防 W－24畦	堤防下層	須恵器 壺	口径9.6 頸径4.9 胴径12.3 器高11.9	体部底部:ハケ 口縁部～内面:回転ナデ	外)灰色Ｎ4/0 内)灰色Ｎ4/0 断)灰色Ｎ5/0	密 良好		初期須恵器
124	3099	G22－C	堤防下層	須恵器 壺	口径14 頸径11.4 胴径20.9 器高18	体部下半:ヘラケズリ 体部～内面:回転ナデ 内面底部:強いナデ	外)灰色Ｎ5/～暗灰色Ｎ/3 内)灰色Ｎ6/0～オリーブ灰色断2.5ＧＹ6/1 断)灰白色7.5Ｙ8/1	密 1㎜大前後の長石を少量含む。	良好	
127	3252	G22－D	堤防下層	竈	器高41.6	外面:指圧調整の後板ナデ 内面:縦方向のナデ	外)明黄褐色10ＹＲ7/6 内・断)明黄褐色10ＹＲ6/6～にぶい橙色５ＹＲ7/4	密 0.5～1.5㎜大の長石・石英と金雲母徴砂粒を少し含む。	良好	付け庇
128	3200	G23－A	堤防下層	竈	遺存幅42.3	外面:ナデと指圧調整 内面:ハケ目12条/cm	外)明黄褐色10ＹＲ6/6、にぶい黄橙色10ＹＲ6/4 内・断)にぶい黄橙色10ＹＲ7/3～7/4	密 1.5㎜大以下の石英、1㎜大以下の長石・雲母、5㎜大以下の礫を含む。	良好	
129	3470	G20－B	堤防下層	竈	遺存高10.9 遺存幅22.9	外面:ハケ目８～９条/cm 把手:強いナデ 内面:ハケ目８～９条/cmと指圧調整	外)黄色2.5Ｙ8/6 内)灰色10Ｙ6/1 断)灰色Ｎ6/0	密 0.1～1.5㎜大の石英・長石・金雲母を含む。	良好	把手付近（片側のみ）

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
131	2583	G22－B	堤防上層	土師器 壺	口縁10.5 頸径8.1 胴径12.4 器高11.7	体部下半:ヘラケズリと指圧調整 体部上半;ハケ目8条/cm 口縁部内面:ハケ目 内面:指圧調整、一部ナデ調整	外)にぶい黄色10YR7/3 内)にぶい黄色10YR7/3 断)灰白色2.5Y8/2	密 0.5mm大の黒色土粒、0.5～1mm大の黒雲母を含む。	良好	口縁部にV字状の人為的破損あり
133	2592	G22－B	堤防上層	土師器 甕	口径20.9 頸径17.5 胴径25 器高28.8	体部:ハケ目6～7条/cm 口縁部:横ナデ 内面:ヘラケズリ 内面上位:指圧調整	全面)にぶい橙色5YR6/3	密 0.5～2mm大の長石、金雲母を含む。	良好	
135	1602－3	G17・C	堤防上層	土師器 甕	口縁20.5 頸径18.4 遺存高4.3	体部:右上がりハケ目4cm/条 口縁部:横ナデ 内面:指圧調整	外)にぶい黄橙色10YR5/3 内)にぶい黄橙色10YR7/3 断)浅黄色2.5Y7/3	密 多少長石を含む。	良好	東海系
146	1386	G20・A	堤防上層	須恵器 小型壺	口径17 頸径12.7 遺存高6.2	体部～口縁部:ナデ 内面:タタキの痕跡あり 口縁部:下方に1条の突帯	外)暗緑灰色10G4/1 内)青灰色10BG5/1 断)にぶい赤褐色2.5YR5/3	密 1mm大の長石を含む。	良好	初期須恵器
147	2825－1	G17・C	堤防上層	須恵器 甕	口径24.7 頸径16.7 遺存高7.3	体部:縦方向のタタキ目4条/cm 口縁部:回転ナデ 内面:同心円文をすり消し 口縁部:下方にケズリ出し突帯	外)青灰色5PB6/1 内)青灰色5PB5/1 断)青灰色5PB6/1	密 0.5～3mm大の長石・石英を含む。	良好	初期須恵器
164	2825－2	G17・C	堤防上層	弥生土器 甕	口径18 頸径15.9 遺存高6.1	体部:タタキ目3～4条/cm 口縁部:横ナデ 指圧調整の後部分的にナデ	外)暗黄灰色2.5Y5/2 内)黄灰色2.5Y5/1 断)黄灰色2.5Y5/1	やや粗 0.1～1mmの石英・長石を多量に含む。	やや軟質	
165	2836	G17・C ・D	堤防上層	軟質土器 甕	—	体部:タタキ目 内面:不定方向のナデ	外)にぶい橙色5YR6/4 内)にぶい橙色5YR6/4 断)灰色5Y6/1	密 1mm大の長石を含む。	良好	糠式系土器
168	2899	G20・B	堤防上層	土師器 高杯	基部径5.4 遺存高8.1	外面:10面に面取り状に縦方向のヘラケズリ	外)明褐色7.5YR5/6 内)明赤褐色5YR5/6 断)明赤褐色5YR5/6	密 0.1～0.5mm大の長石・石英を含む。	良好	
177	1505	G20・B	堤防上層	土師器 椀	口径15.4 高台径7.9 器高5.7	体部:横方向のヘラミガキ 口縁部:横方向のヘラミガキ 内面:不定方向のヘラミガキ 底面:ヘラ切り	外)明褐灰色5YR7/2 内)明褐灰色5YR7/2 断)明褐灰色5YR7/2	密 0.5～3mm大の小石を含む。	良好	内外面に赤色顔料塗布
179	1150	G14-D	堤防上層	須恵器 杯	口径13.2 高台径9.7 器高3.9	底部:ヘラ切り後ナデ 内外面:横ナデ	外)灰色7.5Y6/1 内)灰色7.5Y6/1 断)灰色7.5Y6/1	密 極小の長石を含む	良好	外底面に「龍」の墨書あり。
181	2331	G20・A	堤防上層	須恵器 壺	頸径9.3 胴径20.2 遺存高14.2	体部～内面:ナデ 底部:ヘラ切り	外)明青灰色5BG7/1 内)明青灰色5BG7/1	密(やや粗) 0.5mm大以下の黒色砂粒、0.5～7mm大の長石を多く含む。	やや軟質	
182	3001	G22・C	堤防上層	須恵器 平瓶	口径9.3 胴径20 高台径14.3 器高14.9	体部～底部:回転ヘラケズリ 高台:回転ナデ 口頸部:回転ナデ 把手:ナデ	外)灰白色N7/0 内)灰色N6/0 断)灰白色N7/0	密 1mm大の長石を若干含む。	良好	
183	314	G5・A	河道Ⅳ下層	弥生土器 広口壺	口径22.8 遺存高1.9	口縁部:ナデ 刺突文　波状文6条/cm	外)灰色N5/0 内)灰黄色2.5Y6/2 断)灰黄色2.5Y6/2	やや粗 7mm大の暗茶色礫、黒雲母、石英、長石を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
194	600	G3-B	河道IV下層	須恵器蓋	口径:14.2 器高:4.8	口縁部～内面:回転ナデ 天井部:回転ヘラケズリ 天井内面:同心円文が残る	外)灰色N6/0 内)明青灰色5B7/1 断)灰白色5Y7/1	密 1～4㎜大の長石を少量、1～2㎜大の石英・黒色砂粒を微量含む。	良好	
197	3542	G4-C	河道IV下層	須恵器壺	頸径4.7 胴径12.2 遺存高10.9	体部:下半指圧調整 全面:回転ナデ	外)明オリーブ灰色2.5GY7/1～暗灰色N3/0 内)明オリーブ灰色2.5GY7/1 断)オリーブ灰色2.5GY6/1	密 0.5～1.5㎜大の長石・黒色土粒を含む。	良好	木製栓で口と孔を塞ぐ。
202	358	G4-C	河道IV下層	土師器甕	口径:25.4 頸径:21.2 遺存高:9	体部:縦方向のハケメ6条/㎝ 口縁部:横ナデ 内面:押圧調整(磨滅著しい)	外)にぶい褐色7.5YR5/3 内)にぶい褐色7.5YR5/4 断)灰黄褐色10YR6/2	粗 8㎜大の茶色礫、5㎜大の石英、長石・茶色の砂粒を多く含む。	良好	
212	326	G5-A	河道IV下層	黒色土器A類杯	口径14.8 高台径8.1 器高3.6	外面:ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ	外)灰黄色2.5Y7/2 内)暗灰色N3/0 断)灰黄色2.5Y7/2	密 微細～1㎜大の石英・長石・黒石・雲母を含む。	良好	
215	731	G3・5間畦	河道IV下層	瓦器椀	口径14 高台径5.4 器高5.1	内外面:細かいヘラミガキ 見込み:螺旋状のヘラミガキ	外)暗オリーブ灰色2.5GY3/1 内)黒色N2/0 断)灰白色7.5Y8/1		良好	
217	4002	T8	河道IV下層	土師器椀	口径16.4 高台径7.3 器高6.4	内外面細かいヘラミガキ	外)灰白色2.5Y8/1 内)淡黄色2.5Y8/3	密 1㎜大の長石を若干含む。	良好	
219	636	G3-D	河道IV下層	須恵器皿	口径13.5 底径10.3 器高2.1	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ切り未調整	外)明褐灰色5YR7/2 内)にぶい橙色5YR7/4 断)明褐灰色5YR7/2	密 3㎜大以下の白色砂粒を含む	良好	内面墨付着
222	334-2	G5-A	河道IV下層	白磁椀	口径15.4 遺存高4.3		外)灰白色N8/0よりも明るい 内)灰白色N8/0よりも明るい		良好	
226	1710	G7-C	河道IV上層	庄内式土器甕	口径14.8 頸径11.8 胴径20.2 遺存高11.1	体部:タタキ目3～4条/㎝ 口縁部:ナデ 内面:指圧調整の後上方へのナデ	外)明黄褐色10YR6/6 内)明黄褐色10YR7/4 断)明黄褐色10YR6/6	密 1㎜大の雲母・長石を含む。	良好	
228	4003	T2	河道IV上層	土師器壺	口径16.9 頸径8.6 胴径8.6 器高10.3	体部:ハケの後横のミガキ 口頸部:後斜め方向のハケ目12条/㎝の後ミガキ 内面:不定方向のハケ目5条/㎝の後ミガキ	外)にぶい赤褐色2.5YR5/4 内)にぶい赤褐色5YR5/3 断)褐灰色10YR6/1	密 0.5㎜大以下の石英を少し含む。	良好	
237	295	G3-A・B間畦	河道IV上層	土師器二重口縁壺	口径13.6 頸径9.2 遺存高6.2	体部～口縁外面:ハケ目6条/㎝ 頸部強いナデ 口縁内面:横方向のナデ 内面:横方向のケズリ	外)にぶい黄橙色10YR6/4 内)にぶい黄橙色7.5YR5/3 断)褐灰色10YR5/1	密 1～3㎜大の長石・石英・黒砂粒・極小の砂粒を含む。	良好	山陰系
239	4005	T2	河道IV上層	土師器壺	口径12.8 頸径10.3 遺存高2.9	口縁部:横ナデ	外)にぶい黄橙色10YR6/4 内)にぶい黄橙色10YR6/4 断)にぶい黄橙色10YR6/4	0.5㎜大以下の長石を多く含む。	良好	吉備系

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
248	4007	T2	河道IV上層	土師器 甕	口径13.2 頸径11.2 胴径13.2 器高12.9	体部:縦方向のハケ8条/cm 口縁部:横ナデ内面ヘラケズリ	外)にぶい褐色7.5YR6/3 内)灰褐色7.5YR6/2 断)にぶい褐色7.5YR6/3	密 2～3mm大の長石・白チャート・黒色砂粒・赤色酸化土粒を含む。	良好	
257	4008	T2	河道IV上層	黒色土器 A椀椀	口径15.1 高台径7.4 器高5.7	体部:横方向の粗いヘラミガキ 底部:ヘラ切り 口縁部:横ナデ 内面:横方向の粗いヘラミガキ 見込み:一定方向の太いヘラミガキ	外)明褐灰色7.5YR7/2 内)にぶい橙色5YR7/3 (カーボン未吸着部分)	やや粗 微砂粒を若干含む。 器表面に1～2mm大の黒色粒が若干認められる。	良好	
258	251-2	G3-D	河道IV上層	土師器 椀	口径16.2 遺存高4.5	体部:横ナデ後ヘラミガキ 内面:横方向のヘラミガキ	外)灰白色2.5Y8/2 内)淡黄色2.5Y8/3 断)灰白色2.5Y8/2	密 1.5mm大の長石を含む。	良好	
260	596	G3-A	河道IV上層	瓦器 椀	口径12.3 高台径4.9 器高3.7	体部:押圧調整 口縁部～内面:横ナデ 内面:圏線状のヘラミガキ	外)灰色N4/0 内)灰色N4/0 断)灰白色7.5Y8/1	密 1～3mm大の白色砂粒を含む。	良好	
265	236	G3-D	河道IV上層	須恵器 長頸壺	頸径4.6 胴径17.3 高台径8 遺存高20.5	体部下半:回転ヘラケズリ 体部上半～口頸部:回転ナデ 高台:回転ナデ	外)灰色N6/0 内)灰白色N7/0		良好	
273	232-2	G3-A	河道IV上層	竈	遺存高33.8	外面:指圧調整の後ナデ(一部ハケ目10～11条/cm)	外)淡赤橙色2.5YR7/4～淡黄橙色10YR8/3 内)淡黄橙色10YR8/3～灰黄褐色10YR4/2 断)淡黄橙色10YR8/3	やや粗 1～2mm大の石英・長石・黒色・茶色の砂粒を含む。	やや軟質	
274	203	G5	河道IV上層	竈	全高41.8 釜口径23.4 掛部38.4×29.6 焚き口:下幅34.4×高さ25.5	外面:ハケ目9条/cm 庇部:指圧調整の後ハケ目 内面:下半ハケ目9条/cm	外)淡黄色2.5Y8/3～淡黄色7.5YR8/3 内)灰白色5Y8/2～淡橙色5YR8/4 断)明青灰色5B7/1	密 1～1.5mm大の石英・長石・金雲母片を多量に含む。	良好	付け庇系
275	1082	G13-A	河道III下層	弥生土器 無頸壺	口径15 胴径18.8 遺存高5.6	外部:ハケ目4条/cm 口縁部外面:未調整 内面:横ナデ(一部ハケ目痕跡)	外)灰白色2.5Y8/1～暗灰色N3/0 内)にぶい褐色7.5YR5/3 断)灰白色2.5Y8/1	やや密 石英・長石・黒色砂粒を含む	良好	
288	617	G2-C	河道III下層	土師器 甕	口径11.5 頸径10.8 胴径13.5 器高21.0	体部～口頸部:ハケ目7～9条/cm 内面:ハケ後ナデ、底部指圧調整	全面)浅黄色2.5Y7/3～黄橙色7.5YR7/8～黄灰色2.5Y5/1	密 0.5～1mm大の石英・長石・黒色砂粒を含む。	良好	
300	1081	G7-A	河道III下層	土師器 甕	口径16 頸径13.8 胴径17.5 器高15.8	体部:ハケ目7条/cm 口縁部:ナデ 内面下半:ナデあげ 内面上半:板ナデ	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)にぶい黄橙色10YR7/3 断)にぶい黄橙色7.5YR6/4	やや密 石英・長石・赤色酸化土粒を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
301	1061	G7-B	河道Ⅲ下層	土師器 甕	口径13.5 頸径11.5 胴径12.7 器高11.8	体部:ハケ目10条/cm 口縁部:横ナデ 内面:ハケ目5～6条/cm	外)明赤褐色5YR5/6 内)にぶい赤褐色5YR5/4 断)にぶい赤褐色5YR5/4	密 1㎜大以下の長石・石英・金雲母を含む。	良好	
303	1136－1	G10-A	河道Ⅲ下層	土師器 鉢	口径17.4 胴径18.4 器高8.7	体部上半:細かいヘラミガキ 体部下半:ヘラケズリ 口縁部:横ナデ 内面:暗文	外)明褐色7.5YR5/8 内)明褐色7.5YR5/8 断)明赤褐色5YR5/6	密 2㎜大以下の石英・長石・金雲母を含む	良好	
309	307－2	G4-C	河道Ⅲ下層	黒色土器 B類椀	口径14.6 高台径6.2 器高5.6	体部:ヘラケズリ後ヘラミガキ 口縁部:横ナデ 内面:ヘラミガキ	外)暗灰色N3/0 内)灰色N4/0 断)灰色5Y5/1	密 微細な白色砂粒を少し含む。	良好	
312	1129	G10-B	河道Ⅲ下層	土師器 皿	口径10.0 器高1.4	体部:押圧調整 口縁部:横ナデ 内面:一定方向のナデ	全面)浅黄色2.5Y8/3～黄色2.5Y8/6	密 1㎜大までの石英・長石を微量含む。	良好	
344	1094	G13-A	河道Ⅲ上層	土師器 甕	口径11.2 頸径9.2 胴径21.9 遺存高11.6	体部～口頸部:左方向のヘラケズリの後ナデ 内面:横方向のハケ目9条/cm	外)灰赤色2.5YR6/2 内)暗黄褐色10YR6/2 断)暗黄褐色10YR6/2	密 5㎜大の灰褐色長石・石英を含む。	良好	
355	828－2	G10-A	河道Ⅲ上層	土師器 杯	口径10.6 器高3.8	体部:指圧調整 口縁部:横ナデ 内面:指圧調整の後ナデ	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)にぶい褐色7.5YR5/3 断)にぶい褐色7.5YR6/3	密 2㎜大の石英・赤色酸化土粒、極小の石英・長石を含む。	良好	墨書土器
361	389	G4	河道Ⅲ上層	土師器 杯	口径13.8 底径7.3 器高3.9	体部:ナデ、下位ヘラケズリ 底部:ヘラ切り後ナデ 口縁部～内面:横ナデ 内面底部:不定方向ナデ	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)にぶい黄橙色10YR7/4 断)にぶい黄橙色10YR7/3	密 1～2㎜大の長石・黒色粒、微細な石英を含む。	良好	
362	1704－4	G7-D	河道Ⅲ上層	土師器 杯	口径11.3 底径6 器高3.2	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り 内面底部:一定方向ナデ	外・内)灰褐色 断)灰オリーブ色5Y6/2	やや粗 3㎜大以下の砂粒を含む。	良好	
363	811－1	G10-A	河道Ⅲ上層	土師器 皿	口径8.9 器高1.7	体部:横ナデ 底部:ヘラ切り 内面:横ナデ	外)にぶい橙色5YR7/3 内)にぶい橙色5YR6/4 断)にぶい橙色5YR7/3	密 0.5～3㎜大の黒色砂粒を含む。	良好	
368	510－4	G10-A	河道Ⅲ上層	黒色土器 A類椀	口径16.6 高台径7.8 器高4.8	外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ 口縁部:ナデ 内面:ヘラミガキ	外)暗灰色N3/0～灰黄褐色10YR6/2 内・断)暗灰色N3/0	密 微細～1㎜大の石英・雲母を含む。	良好	
370	1141	G13A	河道Ⅲ上層	土師器 杯	口径12 高台径4.9 器高3	体部～内面:横ナデ 高台～底部:ナデ 内面底部:ナデ	外)黄橙色7.5YR7/2 内)橙色7.5YR6/6 断)明黄褐色10YR7/6	密 長石・赤色酸化土粒を含む。	良好	
376	241	G5-D	河道Ⅲ上層	瓦器 椀	口径10.4 器高2.6	体部:押圧調整 口縁部～内面:横ナデ 内面:粗いミガキ	全面)灰白色10Y7/1	密 1～4㎜大の石英、3㎜大の暗褐色粒、1㎜大の長石を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
377	510－1	G10－A	河道Ⅲ上層	土師器 皿	口径11.0 器高1.7	体部:押圧調整 口縁部～内面:横ナデ 内面底部:不定方向ナデ	外)灰白色2.5Y8/1 内)灰白色2.5Y8/2 断)灰白色2.5Y8/2	密 0.5mm大以下の黒色粒を含む。	良好	
391	522	G7－A・B	河道Ⅲ上層	平瓦	遺存長8 遺存幅4.1 厚さ1.6	凹面:ケズリ、布目痕 凸面:格子目タタキ	凹)灰白色7.5Y8/1 凸)灰白色7.5Y8/1～灰色N5/0	密 1mm大の石英、0.5～1mm大の長石、1mm大の黒色砂粒を含む。	良好	
392	1815－4	G13－A	河道Ⅲ上層	土師器 甕	底径12.8 遺存高14.4 孔径2.1	体部:縦方向のタタキ目3条/cm 体部下部:横方向のケズリ 内面:ナデ 底部:指圧調整	外)橙色7.5YR6/6 内)にぶい赤橙色5YR5/4 断)明褐色7.5YR5/6	密 石英・長石・暗灰色砂粒を含む。	良好	
393	4029	T9	河道Ⅲ上層	土師器 甕	口径25.2 遺存高21.8	体部:縦ハケ 内面:縦ケズリ	全面)にぶい黄橙色10YR7/2	密 0.5～1mm大の灰色・黒色砂粒を少し含む。	良好	
394	2535	G22－C	場防下層	甕	全高38.7	外面:縦方向のハケ目6～7条/cm 受口部:ヘラ切り 据部:指圧調整 内面:指ナデと指圧調整	外・断)にぶい黄橙色10YR7/4～にぶい橙色7.5YR7/4 内)にぶい橙色7.5YR7/4～灰褐色7.5YR6/2	密 1～1.5mm大の石英・長石及び黒色・茶色の砂粒を含む。	良好	
395	1754	G13－A	河道Ⅲ上層	甕	受口径21.2 据径42×31.7 焚口・下幅32.6×高さ21.7　全高31	外面:縦方向のハケ目11条/cm 把手:指ナデ 内面:縦および横方向のハケ目11条/cm	全面)淡黄色2.5Y8/3	密 1～1.5mm大の石英・長石、金雲母の微砂粒を少量含む。	良好	
396	2089	G16－D	河道Ⅰ下層	弥生土器 壺	頸径10.5 胴径22.9 底径8.2 遺存高28	体部:ナデ（磨滅著しい） 底部:指圧調整 内面下半:横方向の板ナデ 内面上半:ナデ、磨滅著しい	外)にぶい黄橙色10YR7/2 内)にぶい黄橙色10YR7/2 断)にぶい黄橙色10YR7/2	粗 3～4mm大の石英・長石・チャートを多く含む。	良好	3条の凸線のヘラ描き沈線あり 中期
399	1521	G31－D	河道Ⅰ下層	弥生土器 壺	頸径8.2 胴径15.2 底径5.8 遺存高12.9	体部下半:左右上方へのミガキ 体部上半:ナデ 内面:板ナデ	外)にぶい黄橙色10YR7/2 内)にぶい黄橙色10YR7/2 断)にぶい黄橙色10YR7/2	粗 長石・赤色酸化土粒を多く含む。	良好	穿孔、6本の縦方向のヘラ描き沈線あり
415	1215	G16－A	河道Ⅰ下層	土師器 壺	口径16 頸径12.8 胴径29.4 器高35.7	体部～口頸部:多方向のハケ目6条/cm 内面:ヘラケズリ 口頸部内面:横方向のハケ目	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)赤黒色2.5YR1.7/1 断)にぶい黄橙色10YR7/3 （斜面)灰褐色10YR5/1（中央)	密 1.5mm大の長石、1mm大の石英・茶褐色砂粒を含む。	良好	
424	1067	G12－D	河道Ⅰ下層	土師器 甕	口径11.7 頸径9.2 胴径15.4 器高14.3	体部:多方向のハケ目8条/cm 口縁部:横ナデ 内面上半:ヘラケズリ 内面下半:指圧調整	外)橙色7.5YR6/8 内)橙色7.5YR6/8 断)にぶい橙色7.5YR5/4	密 2mm大以下の石英・長石・雲母を含む。	良好	
436	2419	G16－D	河道Ⅰ下層	土師器 甕	口径15.4 頸径12.7 胴径23.6 器高25	体部:板ナデ 口縁部:横ナデ 内面:ヘラケズリ	全面)にぶい橙色7.5YR7/3～褐灰色5/1	密 2～4mm大の砂粒・金雲母片を多く含む。	良好	体部にヘラによる施文

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
443	1291	G15・C	河道Ⅰ下層	土師器 甕	口径13.8 頸径11.1 胴径17.8 遺存高17.2	体部:多方向のハケ目 口縁部:横ナデ 内面:ヘラケズリ	外)にぶい黄色2.5Y6/3 内)にぶい黄色2.5Y6/3 断)にぶい黄色2.5Y6/3	粗い砂粒を多く含む。	良好	山陰系
455	1242	G19・B	河道Ⅰ下層	軟質土器 鉢	口径9.4 底径5.9 器高7.4	体部:横ナデ 体部下部:ヘラケズリ 内面:指圧調整とヘラナデ 底部:未調整	全面)灰褐色5YR6/2	密 1㎜大の長石・赤色酸化土粒・黒色砂粒・白チャートを多く含む。	良好	韓式系土器 ゲタ痕跡あり
462	1878	G32・F	河道Ⅰ下層	須恵器 杯蓋	口径13.7 器高3.6	天井部:回転ヘラケズリ(ロクロ回転方向右まわり) 口縁部~内面:回転ナデ	外)灰色N5/0 内)灰色10YR5/1 断)10YR6/1	密 1~2㎜大の長石を多く含む。	良好	「×」ヘラ記号
463	1928	G16・D	河道Ⅰ下層	須恵器 壺	口径10.6 頸径7.3 胴径15.1 器高14.9	体部下半:指圧後ナデ 体部上半:横ナデ 口頸部:回転ナデ 内面:横ナデ	外)灰色N4/0 内)灰色N6/0	密 石英・長石の極小砂粒を含む。	良好	初期須恵器
478	1532	G31・B	河道Ⅰ下層	土師器 甕	口径14.7 頸径13 胴径14.7 器高12.4	体部下半:ハケメ7条/cm 体部上半:押圧調整の後ナデ 口縁部:横ナデ 内面下半:同心円タタキ 内面上半:横方向の板ナデ	外)浅黄色2.5Y7/3 内)浅黄色2.5Y7/4 断)浅黄色2.5Y7/4	密 赤色酸化土粒・石英・長石・暗灰色砂粒を含む。	良好	口縁部2ケ所に焼成後の打ち欠き、底部に穿孔(径6㎜)あり
494	1173	G13・B	河道Ⅰ下層	土師器 杯	口径13.8 高台径7.4 器高4.9	体部~底部:押圧調整 高台:横ナデ 内面:不定方向のナデ	外)灰白色5Y8/2 内)淡黄色2.5Y8/3 断)淡黄色2.5Y8/4	密 長石を含む。	良好	
510	1938	G34・B	河道Ⅰ下層	土師器 皿	口径6.7 底径3.2 器高1.8	内外面:横ナデ	内外面)灰白色7.5Y8/1	密 極小な石英を含む。	良好	
513	1573	G35・B	河道Ⅰ下層	瓦器 椀	口径15.2 高台径5 器高5.8	体部:ヘラミガキ 内面:細かいヘラミガキ 見込み:平行線状のヘラミガキ	外)暗灰色N3/0 内)灰色N4/0 断)明オリーブ灰色2.5GY7/1	密 0.5~1㎜大の石英・長石を少量含む。	良好	
518	1855	G34・E	河道Ⅰ下層	土師器 甕	口径25.2 頸径21.4 胴径22.2 器高24.5	体部下半:多方向のハケメ4条/cm 上半:縦方向のハケメ6~9条/cm 内面:下半ナデ 上半:押圧調整 口縁部内面:横方向のハケメ9条/cm	外)浅黄色2.5Y7/3 内)灰黄色2.5Y7/2 断)にぶい黄色2.5Y6/3	やや粗 石英・長石・赤褐色砂粒を多く含む。	良好	
519	2327	G36-C	河道Ⅰ下層	平瓦	長さ35.0 幅広端部27.0 狭端部25.4 厚さ2.5	凸面:平行タタキ 凹面:布目痕	凸面灰白2.5Y8/2 凹面灰白2.5Y8/2~黒2.5Y2/1	粗 1~3㎜大の石英・長石を多量に含む。黒雲母少量、5㎜程の小礫を少量含む。	良好	
520	2106-2	G28・D	河道Ⅰ上層	弥生土器 甕	口径19 遺存高5	体部~口縁部:ナデ 内面:指圧調整 口縁端部:刻み目 ヘラ描き沈線文6条	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)にぶい黄橙色10YR7/4 断)にぶい黄橙色10YR7/3	粗 1~3㎜大の石英・チャート・長石・黒雲母を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
521	626－2	G3・A	河道Ⅰ上層	弥生土器 甕	口径14.4 頸径12.3 胴径16.4 遺存高6.3	二次焼成を受ける 内面指圧調整	外)黒色2.5Y2/1 内)暗灰色N3/0 断)黒色2.5Y2/1	密 角閃石を含む。	良好	東四国系
523	2187－2	G28・C G30・F	河道Ⅰ上層	弥生土器 甕	口縁25.6 頸径25.2 遺存高9.9	体部:平行タタキ目2条/cm 口縁部:横ナデ 内面:指圧調整	外)灰黄色2.5Y7/2 内)灰白色2.5Y8/2 断)灰黄色2.5Y7/2	粗 0.5mm大の石英・0.5～1mm大の長石を多く、1mm大の黒雲母を含む。	良好	
537	1003	G3・A	河道Ⅰ上層	庄内式土器 甕	口径13.6 頸径11.7 胴径16.6 器高15.2	体部:平行タタキ目3条/cm 内面:板ナデ 口縁部:内面横ナデ	外)にぶい黄橙色10YR7/4 内)にぶい黄橙色10YR7/3 断)にぶい黄橙色10YR7/3	密　1 mm大の砂礫をわずかに含む。	良好	
538	1161	G18・D	河道Ⅰ上層	庄内式土器 甕	口径14.6 頸径12.4 遺存高7.6	体部:平行タタキ5条/cmの後ハケ目7条/cm 口頸部:ナデ 口縁部:内面ヘラ目7条/cm 内面:指圧調整の後ケズリ	外)灰黄褐色10YR6/2 内)灰黄褐色10YR6/2 断)灰黄色2.5Y7/2	密 石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	
553	1430－2	G17・D	河道Ⅰ上層	土師器 壺	口径10 遺存高5.6	全体ナデ（一部板ナデの痕跡）	全面)にぶい黄橙色10YR6/3 断)褐灰色10YR4/1	密 1mm大の長石・石英、0.5mm大の黒色砂粒を含む。	良好	全面に赤色顔料 東海系
557	939－3	G13・B	河道Ⅰ上層	弥生土器 直口壺	口径6.4 頸径5.4 胴径8.2 器高8.9	体部:ナデ 内面:ナデ 口頸部:内面ナデ上げ	外)にぶい褐色7.5YR6/3 内)にぶい橙色5YR7/4 断)		良好	吉備系
559	1935	G32・33 －D・E	河道Ⅰ上層	土師器 壺	胴径4.6 底径1.5 遺存高4.7	体部:指圧調整の後ナデ 内面下半:ヘラケズリ	外)にぶい黄橙色10YR6/3 内)にぶい黄橙色10YR6/3 断)にぶい黄橙色10YR6/3	やや密 多量の砂粒を含む。	良好	ミニチュア土器
567	992－1	G16・A	河道Ⅰ上層	土師器 壺	口径23 遺存高4.5	口頸部外面:縦方向ハケ目8条/cm 口頸部内面:横方向ハケ目5条/cm	外)灰オリーブ色5Y4/2 内)灰オリーブ色5Y4/2 断)灰5Y5/1	密 2mm大以下の石英・長石・雲母を含む。	良好	複合口縁壺
576	1372－3	G17・D	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径14 遺存高19.6	体部下部:横方向タタキ目2～3条/cm 体部中部:縦方向タタキ目2～3条/cm 口頸部:ナデ内面底部指圧調整内面ナデ上げ	外)にぶい黄橙色10YR7/2 内)浅黄橙色10YR8/3 断)灰白色10YR8/2	やや粗 2mm大以下の石英・長石・茶色・灰色砂粒を含む。	良好	
588	1396－1	G17・B	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径17 頸径14.7 遺存高9.9	体部:多方向ハケ目5～6条/cm 口頸部:横ナデ 内面:指ナデ	外)橙色7.5YR6/6 内)橙色7.5YR6/6 断)明褐色7.5YR5/6	密 長石を含む。	良好	東海系
590	2417	G22・D	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径13.5 頸径11.8 胴径19.9 器高28.4	体部:縦方向ヘラケズリ 口頸部:横ナデ 内面:底部板ナデ 内面:ナデ	外)赤褐色7.5R5/1～黒褐色10YR3/1～明黄褐色10YR6/6 内)明黄褐色10YR6/6 断)灰黄褐色10YR6/2	密 長石・黒雲母を含む。	良好	
592	2558	G29・D	河道Ⅰ上層	土師器 羽釜	口径25 胴径21.3 鍔径27.6 遺存高7.1	体部:横ナデ 口頸部:内面横方向ハケ目5条/cm 内面:ナデ	全面)にぶい黄橙色10YR6/4 ～にぶい橙色7.5YR6/4	密 1mm大の長石、1mm大以下の黒色砂粒を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
601	2501	G19－D	河道Ⅰ上層	土師器 高杯	口径17.1 基部径2.3 裾径9.5 器高13.2	杯部:縦方向のハケ目6条/cm 杯部内面:放射状のミガキ2～3条/cm 脚部:縦方向の面取り様ナデの後横ナデ 裾部:横ナデ 裾部端面:面取り 脚部内面指圧調整の後横ハケ	外)橙色5YR6/6 内)明黄褐色10YR7/6 断)にぶい黄橙色10YR7/4	密 3㎜大の灰色砂粒、極小な長石を含む。	良好	
611	954－1	G13－B	河道Ⅰ上層	土師器 器台	口径8.3 基部径4 遺存高5.3	杯部:横方向ミガキ 脚部:外面ハケ目10条/cm 脚部:内面指ナデ	全面)明黄褐色10YR6/8	密 1㎜大以下の石英・長石・雲母を含む。	良好	
614	1487－1	G31－B	河道Ⅰ上層	土師器 器台	裾径17.3 遺存高5.7	外面:ナデ 内面:ヘラケズリ	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)にぶい黄橙色10YR7/3 断)淡黄色2.5Y8/3	密 金雲母・赤色酸化土粒・石英・長石を含む。	良好	山陰系
622	2467	G31－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径14.8 器高5.8	体部:下半カキ目9条/cm 体部上半～内面:横ナデ 内面黒色化	外)にぶい黄橙色10YR7/4 ～褐灰色10YR4/1 内)黒褐色10YR3/1 断)にぶい黄橙色10YR7/4 (側面)～黒褐色10YR3/1（中央）	密 極小～1㎜大の石英を含む。	良好	
623	1507－1	G33－A	河道Ⅰ上層	須恵器 高杯	口径17.7 基部径3.8 裾径10.6 器高11.7	杯部内外面:回転～横ナデ 脚部:指圧調整の後横ナデ 裾部:強い横ナデ 脚部:内面未調整	外)灰色N6/0 内)灰色N6/0 断)灰色N6/0	密 0.5㎜大の長石を含む。	良好	
624	783	G8－D・C	河道Ⅰ上層	須恵器 高杯	口径15.2 基部径5 裾径12.1 器高13	杯部:横ナデ 内外底部～脚部ハケ目11条/cm 裾部内面:横ナデ 脚部内面:絞り目と指圧調整	内外面)にぶい橙色7.5YR7/4 断)にぶい黄橙色10YR7/3	密 1～3㎜大の石英・長石・赤色酸化土粒を含む。	良好	初期須恵器
627	396	G11－C	河道Ⅰ上層	須恵器 鉢	口径9.2 最大径11.4 遺存高4.1	体部～内面:横ナデ 波状文5条/1組	外)灰色N5/0 内)灰色7.5Y5/1 断)灰色7.5Y5/1	密 長石・黒色砂粒を含む。	良好	初期須恵器
628	1206	G16－B	河道Ⅰ上層	須恵器 鉢	口径10.5 頭径8.3 脚径13.7 器高13.9	体部下半:ナデ 体部上半～内面上半:回転ナデ 内面下半:同心円タタキをすり消し 内面:底部指圧調整	外)灰白色7.5Y7/1～灰色N6/0 内)灰色N5/0	密 0.5㎜大以下の黒色砂粒、0.5～3㎜大の長石を含む。	良好	初期須恵器
629	1854	G35－A	河道Ⅰ上層	須恵器 鉢	口径14.9 底径12.9 器高5.9	体部下部:横方向ケズリ 体部～内面:指圧調整の後横ナデ 底部:ナデ	外)青灰色10BG4/1～明青灰色10BG7/1 内)青灰色5B4/1～明青灰色5B7/1 外)青灰色10BG4/1～青灰色10BG6/1	密 5㎜大以下の長石を多く、2㎜大以下の黒色砂粒を少量含む。	良好	
640	1623－1	G20－A	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径12.7 器高4.7	体部～天井部内面:回転ナデ 天井部:回転ヘラケズリ（右回り）	外)灰色N4/0 内)灰色7.5Y5/1 断)外:灰色10Y5/1～内:にぶい赤褐色2.5YR5/3	密 長石を多く含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
642	108－3	G8－D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径12.7 器高4.7	体部:回転ナデ 天井部内面:回転ナデの後一定方向ナデ 天井部:回転ヘラケズリ（ロクロ回転方向左回り）	外)灰色N6/0 内)灰色N5/0 断)灰色N5/0	密 0.5～2㎜大の白色砂粒を含む。	良好	
651	1372－2	G17－D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径15.2 器高4.1	体部:横ナデ 天井部:回転ヘラケズリ 天井部内面:一定方向ナデ 口縁端部:ハケ目9～10条/cm	外)灰色N4/1 内)青灰色5B6/1 断)灰色N6/1	密 0.5～1㎜大の長石を少し含む。	良好	
655	028－1	G3－D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径15.8 器高4.9	体部:横ナデ 天井部:回転ヘラケズリ 天井部内面:一定方向ナデ	外)暗灰色N3/0～灰白色10Y7/1 内)にぶい褐色7.5YR6/3 断)	密 1㎜大以下の長石・灰色砂粒を多く含む。	やや軟質	
657	1653－2	G20－A	河道Ⅰ上層	須恵器 杯身	口径10.7 最大径12.6 器高5.4	体部～内面:回転ナデ 内面底部:回転ナデ後一定方向ナデ 底部:ヘラケズリ	外)明青灰色5BG7/1～明オリーブ灰色2.5GY7/1 内)青灰色10BG6/1～緑灰色10G5/1 断)灰色N6/0～暗青灰色5BG4/1	密 3㎜大以下の長石を少量、黒色砂粒を微量含む。	良好	
682	1397－4	G7－A	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径11.9 器高4.1	体部～天井部内面:回転ナデ 天井部:回転ヘラケズリ（ロクロ回転方向右回り）ヘラ切り未調整 天井部内面:静止ナデ	外)灰色N5/0～にぶい黄橙色10YR6/4 内)灰色N5/0 断)灰色N5/6	やや粗 3㎜大以下の長石・砂粒を多く含む。	良好	
698	1847	G35－A	河道Ⅰ上層	須恵器 蓋	口径13.8 器高4	体部～内面:回転ナデ 天井部:回転ヘラケズリ 天井部内面:ナデ	外)灰色N5/0～暗灰色N3/0 内)灰色N5/0 断)灰白色N7/0	密 微細～3㎜大の長石を含む。	良好	天井部にヘラ記号
704	2160	G35－C	河道Ⅰ上層	須恵器 杯	口径12.4 最大径14.7 器高4.7	体部:回転ヘラケズリ 口縁部～内面:回転ナデ 内面底部:一定方向ナデ	外)灰色5Y6/1 内)灰白色2.5Y7/1 断)灰白色10Y7/1	密 0.5～3㎜大の長石を多量に、1～3㎜大の長石、2～5.5㎜大の黒色砂粒を含	良好	体部の一部にヘラ先による押圧調整
707	2187－1	G28－C	河道Ⅰ上層	須恵器 杯身	口径9.4 受部径11.3 器高3.1	体部～内面:回転ナデ 底部:ヘラ切り未調整	外)灰白色5Y7/1 内)灰白色5Y8/1 断)灰白色7.5Y7/1	密 0.5㎜大の長石を含む。	良好	
713	2342	G19－C	河道Ⅰ上層	須恵器 蓋	口径10.3 器高3.1	体部～内面と宝珠つまみ:回転ナデ 天井部:回転ヘラケズリ 天井部内面:一定方向ナデ	外)灰色N5/0～7.5Y6/0 内)灰色N5/0～7.5Y6/0 断)灰色N5/0～7.5Y6/0	密 2㎜大以下の石英・長石・微細な雲母を含む。	良好	天井部に「＝」ヘラ記号
716	1961	G7－D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯身	口径9.9 器高3.5	体部～内面:回転ナデ 底部:回転ヘラ切り	外)灰色N4/0 内)灰白色N7/0～明オリーブ灰色2.5GY7/1 断)灰白色N7/0	密 長石を含む。	良好	
722	2294	G31－A	河道Ⅰ上層	須恵器 高杯	口径12.7 脚径13.3 基部径3.6 裾径10.8 器高15.1	口縁部～内面:回転ナデ 内面底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 脚部内外面:絞りの後ナデ 脚裾部:回転ナデ	全面)灰色N6/0～4/0	密 1㎜大以下の石英・長石、微細な雲母を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
738	1002	G14－C	河道Ⅰ上層	須恵器 短頸壺	口径9.8 頸径10.5 肩径20.6 器高14.4	体部下1/3:回転ヘラケズリ 体部上半:カキ目 口頸部～内面:回転ナデ	外)青灰色10GB5/1 内)明青灰色10GB4/1 断)明青灰色10GB4/1	密 2㎜大以下の石英・長石・鉄分を含む。	良好	
739	2380	G21－C	河道Ⅰ上層	須恵器 壺	口径11.5 頸径9.4 胴径19.8 器高17.9	体部～内面:同転ナデ（体部下半は剥離のため不明） 内面底部:ナデ	外)灰白色10Y7/1 内)黄灰色2.5Y6/2～暗灰色N3/0 断)外:灰白色10Y7/1～内:にぶい黄橙色10YR7/4	密 1～2㎜の長石・石英を含む。	良好	
740	023	G11	河道Ⅰ上層	須恵器 提瓶	口径7.3 頸径4.7 胴径15.4×10.1 器高18.6	体部:カキ目～横ナデ 底部:ヘラケズリ 口頸部:回転ナデ 内面:横ナデ	全面)灰白色N7/0～灰色N6/0	密 0.5～1㎜大の長石・黒色砂粒を含む。	良好	
751	1539	G5－C	河道Ⅰ上層	須恵器 甕	口径17.7 頸径16 胴径29.9 遺存高29.6	体部:縦方向タタキ目の後カキ目 内面:同心円文タタキ	外)灰白色2.5Y8/1 内)灰白色7.5Y7/1 断)灰白色5Y8/1	密 黒色砂粒を含む。	良好	口頸部に「大有」ヘラ描きあり
757	2381	G21－C	河道Ⅰ上層	須恵器 甕	口径46.6 頸径34.5 (33.6) 遺存高16.2	口縁部:回転ナデ 体部:縦方向のタタキ目の後横方向のカキ目 内面:同心円文	外)灰色N6/0 内)灰色N6/0 断)灰色N5/0	密 2㎜大以下の長石・茶褐色砂粒を含む。	良好	
758	1589	G34－E	河道Ⅰ上層	須恵器 甕	口径32.7 頸径22.6 胴径63 遺存高71.3	体部:多方向のタタキ目3～4条/cm 体部上半:カキ目 内面:同心円タタキ	外)明青灰色5B7/1 内)にぶい橙色5YR7/4 断)明青灰色5B7/1	密 1㎜大以下の石英・長石・雲母・黒石を含む。	良好	
762	1420	G17－D	河道Ⅰ上層	軟質土器 鉢	口径13 頸径11.5 胴径12.2 遺存高7.6	体部:格子目タタキ 口縁部:外面横ナデ 口縁部:内面指圧調整 内面:強いナデ	全面)赤褐色10R6/6	密 白色砂粒を含む	良好	韓式系土器
765	2565	G29－D	河道Ⅰ上層	軟質土器 鉢	口径11.2 頸径9.9 胴径10.4 遺存高5	体部:指圧調整 口縁部:回転ナデ 内面:強ナデ 底部未調整（ゲタ痕あり）	全面)にぶい橙色7.5YR7	密 0.5㎜大以下の長石を含む。	良好	韓式系土器
770	2006	G16－C	河道Ⅰ上層	軟質土器 甕	口径16.2 頸径13.4 遺存高9.6	体部:格子目タタキ 内面指圧調整の後ナデ	外)灰白色N7/0～灰色N5/0 内)灰白色2.5Y8/2 断)灰黄色2.5Y7/2	密 0.5㎜弱の石英を多く含む。	良好	韓式系土器
779	2062－1	G30－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径17 器高7	口縁部～体部上半:横ナデ 体部下半:横方向のヘラケズリ 内面:二段斜放射暗文	外)橙色7.5YR6/6 内)橙色7.5YR6/6 断)橙色7.5YR7/6	密 0.5㎜大の長石・金雲母を含む。	良好	
785	158－4	G8－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径16.5 器高5.6	口縁部:横ナデ 体部上半:縦かいミガキ 体部下半:横位のミガキ 内面:二段斜放射暗文	外)にぶい橙色7.5YR7/4 内)にぶい橙色10YR7/4 断)にぶい橙色5YR6/4～浅黄橙7.5YR8/4	密 0.5㎜大の長石を少し含む。	良好	
788	1822－2	G16－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径13 器高3	口縁部～体部:横ナデ 底部:板ナデ 内面:螺旋＋放射暗文	外)橙色7.5YR7/6 内)にぶい橙色7.5YR7/4 断)にぶい橙色5YR6/4	密 1㎜大の赤色酸化土粒と微細な長石を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
794	094－1	G3－A	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径18 底径3.1 器高13	口縁部～体部:横ナデ 体部下部:横方向のヘラケズリ 底部:押圧調整	外)にぶい橙色6/4 内)橙色にぶい橙色6/6 断)橙色にぶい橙色6/6	密 2㎜大の石英と0.5～1㎜大の石英を含む	良好	
797	2284－2	G22－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径18.0 器高3.6	体部～内面:横ナデ 底部:指圧調整 内面:放射状＋螺旋状暗文	外)にぶい橙色7.5YR7/4 内)にぶい橙色7.5YR7/4 断)橙色7.5YR6/6	密 長石・黒色土粒・金雲母を含む。	良好	
801	1247	G19－B	河道Ⅰ上層	土師器 皿	口径21.8 器高3.6	口縁部外面:横ナデ 底部:ヘラケズリ 内面:放射状＋螺旋状暗文	外)黄橙色10YR7/4 内)黄橙色10YR7/4 断)黄橙色10YR7/4	密 微細な長石を含む。	良好	
802	1880－1	G16－C	河道Ⅰ上層	土師器 壺	口径11.4 頸径10.3 胴径11 器高6.1	口縁部:横ナデ 体部～底部:押圧調整 内面:ナデ	内外面)明黄褐色10YR7/6	密 1㎜大の長石と2㎜大の石英を少し含む。	良好	
814	2254	G19－C	河道Ⅰ上層	須恵器 短頸壺	口径8.8 頸径8.7 胴径9.7 遺存高3.3	体部～内面:横ナデ	外)淡黄色2.5Y8/3 内)淡黄色2.5Y8/2 断)淡黄色2.5Y8/3	密 黒色土粒・石英を含む。	良好	
817	1410	G16－B	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径14.6 頸径12.8 胴径15.4 器高15	口縁部外面:横ナデ 体部:縦方向のハケ目6条～10条/cm 内面上半:横方向のハケ目7条/cm 内面下半:板ナデ	外)にぶい橙色7.5YR6/4 内)明褐灰色7.5YR7/27	やや粗 0.5～1㎜大の長石・褐色砂粒・赤色酸化土粒を多く含む。	良好	
819	420	G6－D	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径13.0 頸径12.1 胴径12.8 遺存高10.6	口縁部:横ナデ 体部上半:縦方向のハケ目4～5条/cm 体部下半:斜め方向の粗いハケ目	外)にぶい黄橙色10YR6/3 内)にぶい黄色2.5Y6/3 断)にぶい黄橙色10YR6/3	密 3㎜大の灰色砂粒を少々極小の長石・石英砂粒を含む。	良好	
820	2391	G21－C	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径23.6 頸径21.1 遺存高10.3	口縁部:横ナデ 体部:ハケ目6～8条/cm 内面:指圧調整	外)にぶい褐色7.5YR6/3 内)にぶい褐色7.5YR6/3 断)外:にぶい褐色7.5YR6/3 ～内:灰色10Y6/1	やや粗 0.5～1.5㎜大の石英、0.5㎜大の長石、微細な金雲母・黒色土粒を含む。	良好	
829	1632－2	G20－A	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径14.7 頸径13.3 胴径21 遺存高15.1	口縁部:ナデ 体部:ハケ目7～8条/cm 内面:ハケ目5～7条/cm (一部摺り消し)	内外面)にぶい黄橙色10YR7/4	密 長石と3㎜大の礫を含む。	良好	
830	1671－3	G20－B	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径11.1 遺存高11.2	体部:押圧調整の後一部ハケ 内面:押圧調整の後ナデ	外)にぶい橙色7.5YR6/4 内)にぶい橙色7.5YR6/4 断)にぶい橙色7.5YR6/4	密 金雲母を多く、長石・黒色土粒を少量、1㎜大の石英を含む。	良好	
833	2099－1	G28－C	河道Ⅰ上層	土師器 高杯	脚基部4.8 遺存高8.3	脚部外面:縦方向のヘラケズリ（九角に面取り）	外)橙色7.5YR7/6 内)にぶい橙色7.5YR7/4 断)にぶい黄橙色10YR7/4	密 6㎜大の灰褐色砂粒・石英を含む	良好	
834	2069	G30－E	河道Ⅰ上層	土師器 鉢	口径32 遺存高11	口縁部:ナデ 体部:やや粗いケズリ 内面:粗いケズリ	外)橙色7.5YR6/6 内)にぶい橙色7.5YR6/4 断)橙色7.5YR6/6	密 0.5～1㎜大の長石、0.5㎜大の黒雲母を少し含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
837	1671－2	G20－B	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径15.8 遺存高2.6	口縁部～内面:回転ナデ 天井部:回転ヘラケズリ	外)灰色2.5Y8/1～10Y5/1 内)灰色2.5Y8/1～灰白色7.5Y7/1 断)灰色2.5Y8/1	密 金雲母・黒色土粒を多く含む。	良好	
842	1828－5	G16-D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯蓋	口径17.3 つまみ径2.4 器高1.5	口縁部～内面:回転ナデ 天井部:回転ナデの後一定方向ナデ	内外面)灰色7.5Y6/1～N6/0	密 微細～1㎜大の長石を含む。	良好	
844	1842	16－C	河道Ⅰ上層	須恵器 杯身	口径15.8 高台径9.3 器高3.8	体部～高台～内面:横ナデ 内面底部:横ナデの後ナデ 底部:ヘラケズリの後ナデ	外)灰白色10Y8/2 内)灰白色10Y8/1 断)灰白色10Y8/1	密 0.5～2㎜大の雲母、3㎜大の石英を含む。	良好	
858	2721	G26－A	河道Ⅰ上層	須恵器 長頸壺	口径12.4 頸径5.8 胴径16.9 高台径9	体部～口頸部～内面:回転ナデ 底部、内面底部:ナデ	外)灰白色N8/0 内)灰白色2.5GY8/1 断)外:灰白色N8/0～内:灰色N7/0	密 3㎜大以下の雲母・石英・長石・黒色砂粒を含む。	良好	
860	413	G8－D	河道Ⅰ上層	須恵器 広口壺	口径13.9 頸径11 胴径14.6 遺存高11.5	体部上半～内面:横ナデ 体部下半:回転ヘラケズリ	外)明紫灰色5P7/1 内)明紫灰色5P7/1	密 2～4㎜大の長石を若干含む。	良好	底部に爪状圧痕
861	319	G3－D	河道Ⅰ上層	須恵器 鉢	口径23.2 胴径23.9 器高12.5	体部:横方向のヘラミガキ 端面:ナデ 内面:横ナデ	外)灰色N4/0 内)灰白色10Y8/1 断)灰白色10Y8/1	密 暗灰色砂粒を含む。	良好	
864	944	G10－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径13.9 器高3.4	体部～内面:横ナデ 底部:押圧調整	外)淡茶褐色 内)淡茶褐色 断)淡茶褐色	密 長石を含む。	良好	外底面に「官」の墨書
872	4017	T9	河道Ⅰ上層	土師器 皿	口径14.4 器高2.8	口縁部～内面:横ナデ 体部:押圧調整 内面底部:不定方向ナデ	外)灰褐色 内)にぶい橙色5YR7/4	密 長石をわずかに含む。	良好	
886	4019	T8	河道Ⅰ上層	土師器 皿	口径13.1 器高1.6	口縁部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り	外)橙色2.5YR6/6 内)橙色2.5YR6/6	密 0.5㎜大の長石を多く含む。	良好	底部に「口田」の墨書
889	1852－2	G16－C	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径13.2 器高3.1	体部～内面:横ナデ 内面底部:ナデ 底部:ヘラ切り後ナデ	外)にぶい橙色7.5YR6/3 内)にぶい橙色7.5YR7/3 断)灰白色7.5YR8/2	密 赤色酸化土粒・淡橙色の砂粒を含む。	良好	
896	1872－2	G13－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径13.2 底径8 器高3.6	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り	全面)明黄褐色10YR7/6	密 長石・石英を含む。	良好	
897	1985-2	G4－B	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径13.4 底径7.6 器高3.8	体部～内面:横ナデ 内面底部:ナデ 底部:ヘラ切り	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)浅黄色2.5Y7/3 断)にぶい黄橙色10YR7/3	やや粗 石英・黒色・灰色の砂粒、赤色酸化土粒を含む。	良好	
909	004－2	G5－C	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径11.9 器高3.1	底部:ヘラ切り	外)橙色2.5YR7/6 内)灰白色10YR8/2～淡赤橙色2.5YR7/4	密 石英・長石・黒色砂粒を含む。	良好	内面に重ね焼き痕

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
912	2320	G19－D	河道Ⅰ上層	土師器 椀	口径15.7 遺存高4.3	体部:押圧調整 口縁部～内面:横ナデ	外)にぶい褐色7.5R 5/4 内)にぶい黄橙色10YR 6/4 断)にぶい黄橙色10YR 7/4	密 3㎜大の赤色酸化土粒、1㎜大の長石・石英を含む。	良好	体部に墨書
913	660－3	G14	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径13.2 底径7.4 器高3.5	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り	外)にぶい橙色7.5YR 7/4 内)橙色7.5YR 6/6 断)浅黄橙色10YR 8/3	密	良好	底部に「方」の墨書
914	1518	G34－E	河道Ⅰ上層	土師器 杯	口径12.4 底径6.7 器高3.2	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り	外-脚)灰白色10Y 8/1 内)灰白色7.5Y 8/1～暗灰色N 3/0	密 0.5㎜大の茶褐色輝小砂粒を含む。	良好	体部に「田中」の墨書
915	2323	G16－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	底径5.5 遺存高2	体部～内面:ナデ 底部:押圧調整	外)にぶい橙色7.5YR 7/3 内)にぶい橙色7.5YR 7/3	密 1㎜大の砂粒を含む。	良好	底部に墨書
916	899	G14－D	河道Ⅰ上層	土師器 杯	遺存高0.9	底部:指圧調整 内面:ナデ	外)にぶい黄橙色10YR 6/4 内)にぶい黄橙色10YR 6/3 断)にぶい黄橙色10YR 6/3	密 長石・長石・雲母・赤色酸化土粒を含む。	良好	底部に墨書
937	1185	G 8－D	河道Ⅰ上層	土師器 椀	口径14.8 高台径6 器高6.4	口縁部:横ナデ 体部:ミガキ 内面:縦方向のハケ目の後横方向の細かいミガキ 高台:ナデ	外)灰白色2.5Y 8/2 内)淡黄色2.5Y 8/3 断)淡黄色2.5Y 8/3	密 赤色酸化土粒を含む。	良好	
940	528－2	G21－D	河道Ⅰ上層	土師器 椀	口径15.6 器高6.0	内面:縦かいへラミガキ 底部:糸切り	内外脚)灰黄色2.5Y 7/2	密 1㎜大の石英・金雲母を含む。	良好	
959	2115－2	G28－E	河道Ⅰ上層	土師器 小皿	口径9.7 底径5.5 器高1.5	体部～内面:横ナデ 底部:糸切り	外)にぶい黄橙色10YR 7/4 内)にぶい黄橙色10YR 6/3 断)にぶい黄橙色10YR 7/3	密 2㎜大以下の長石・灰色砂粒を少量含む。	良好	
965	2072－1	G30－D	河道Ⅰ上層	土師器 皿	口径11.8 器高1.9	口縁部～内面:横ナデ 底部:押圧調整	外)浅黄色2.5Y 7/3 内)にぶい黄橙色10YR 7/3 断)にぶい黄橙色10YR 7/3	密 黒色砂粒・微細な金雲母を極少量含む。	良好	
966	675	G12－D	河道Ⅰ上層	土師器 皿	口径9.6 器高1.5	口縁部～内面:横ナデ 内面底部:ナデ 底部:押圧調整	外)灰白色10YR 8/2 内)灰白色10YR 8/2	密 1㎜大以下の微砂粒を多く含む。	良好	
982	1831－3	G32－C	河道Ⅰ上層	土師器 小皿	口径9.8 器高2.2	口縁部～内面:横ナデ 体部:押圧調整	外)にぶい橙色7.5YR 7/4 内)にぶい橙色7.5YR 7/4	密 黒雲母・金雲母・長石を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1016	1677－1	G7－D	河道Ⅰ上層	土師器 皿	口径7.5 器高1.6	口縁部:横ナデ 内面底部:ナデ 外面底部:押圧調整	外)浅黄橙色10YR8/4 内)にぶい黄橙色10YR7/4 断)外:灰白色10Y7/1～内: 浅黄橙色10YR8/4	密 石英・チャート・長石・黒色の砂粒を含む。	良好	
1017	503－1	G8－B	河道Ⅰ上層	黒色土器 A類杯	口径16.0 底径6.9 器高4.1	口縁部:横ナデ 体部～底部:ヘラケズリ後やや粗いヘラミガキ 内面:細かいヘラミガキ	外)にぶい黄橙色10YR7/4 内)暗灰色N3/0 断)橙色7.5YR7/6	やや粗 0.5～1.5mm大の石英・長石を多く、0.5mm大以下の黒色砂粒を少量含む。	良好	
1024	1202－1	G19－A	河道Ⅰ上層	黒色土器 A類椀	口径18.6 高台径8.8 器高6.7	口縁部:横ナデ 体部:やや粗いミガキ 内面:細かいミガキ	外)浅黄橙色7.5YR8/4～にぶい橙色7.5YR7/4 内)黒色7.5YR1.7/1 断)浅黄橙色10YR8/4	密 微細～1mm大の長石と赤色酸化土粒を少量含む。	良好	
1026	1813	G36－A	河道Ⅰ上層	黒色土器 A類椀	口径14.2 高台6.7 器高4.3	体部上半～口縁部内面:ナデ 体部下半:ヘラケズリ 内面:細かいヘラミガキ 底部:ヘラ切り	外)浅黄2.5Y8/4 内)黒色N2/1 断)浅黄2.5Y8/4～灰白色7/1～灰色5Y5/1	密 微細～1mm大の長石、黒色砂粒を多く含む。	良好	
1031	918	G14	河道Ⅰ上層	瓦器 椀	口径15.4 高台径5.4 器高6.1	体部:ヘラミガキ 内面:横方向ヘラミガキ 見込み:螺旋状のヘラミガキ	外)黒色N2/0 内)灰白色N7/0 断)黒色N2/0	密	良好	
1041	1567	G32－D	河道Ⅰ上層	瓦器 椀	口径15.8 高台径5.3 器高5.8	体部:粗いヘラミガキ 内面:細かいヘラミガキ	外)灰色10Y5/1～暗灰色N3/0 内)灰色N6/0 断)灰白色N8/0～7.5Y8/1	やや粗 0.5～3mm大の石英を含む。	良好	
1042	1166－2	G18－C	河道Ⅰ上層	瓦器 椀	口径14 高台径3.7 器高4.2	体部～底部:押圧調整 口縁部:横ナデ 内面:粗いヘラミガキ 見込み:平行線状の暗文	外)暗灰色N3/0 内)灰色N4/0～灰白色N8/0 断)灰白色7.5Y7/2	密	良好	
1043	1350－1	G15－A	河道Ⅰ上層	瓦器 椀	口径14.0 高台6.2 器高4.3	口縁部外面:横ナデ 体部～底部:押圧調整 内面:粗いヘラミガキ 見込み:螺旋状のヘラミガキ	外)灰色N4/0 内)灰色N4/0 断)灰白色7.5Y8/1	密 金雲母を含む	良好	
1048	1041－2	G1－A ・F	河道Ⅰ上層	瓦器 椀	口径14.0 高台径3.5 器高3.7	口縁部:横ナデ 体部～底部:押圧調整 内面平半:粗いヘラミガキ 見込み:粗い平行線状ヘラミガキ	外)灰オリーブ色5Y6/2～灰色N4/0 内)暗灰色N3/0～明オリーブ灰色2.5GY7/2 断)灰白色10Y8/1～浅黄色2.5Y7/4	密 1mm大以下の長石を極少量含む。	良好	
1053	2243－1	G22－D	河道Ⅰ上層	瓦器 皿	口径10 器高2.2	口縁部外面:横ナデ 体部:押圧調整 内面:細かいヘラミガキ 見込み:平行線状のヘラミガキ	外)灰色N5/0 内)灰色N5/0 断)灰白色2.5GY8/1	密 微細な石英砂粒を含む。	良好	
1056	1502－1	G33－A	河道Ⅰ上層	緑釉陶器 椀	口径14 高台径6.2 器高4.4	体部～内面:横ナデ・ヘラミガキ	外・内)オリーブ灰色2.5GY5/1 断)灰白色N7/0～10YR8/2	密 黒色微細粒を含む。	良好	

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
1058	403	—	河道Ⅰ上層	緑釉陶器 皿	口径13.4 器高2.2	口縁部～内面:横ナデ 内面底部:ナデ 体部:ヘラケズリの後横ナデ 底部:糸切り	外)オリーブ灰色10Y 5/2 内)オリーブ灰色10Y 5/2 断)淡黄色5Y 5/2	密 微細な砂粒を含む	良好	
1059	400－1	G-14	河道Ⅰ上層	緑釉陶器 皿	口径13.6 高台径5.7 器高2.6	体部上半～内面:横ナデ 体部下半:ヘラケズリ 底部:糸切り痕	外)オリーブ灰色7.5Y 4/2 内)暗オリーブ灰色7.5Y 4/3 断)灰色7.5Y 4/1	密 白色極小砂粒を含む。	良好	
1060	1468－1	G33－B	河道Ⅰ上層	緑釉陶器 皿	口径10.9 高台径6.5 器高2.3	貼り付け高台	外)明オリーブ灰色2.5GY 7/1 内)明オリーブ灰色2.5GY 7/1 断)浅黄橙色10YR 8/4	密	良好	
1064	2071	G30－F	河道Ⅰ上層	白磁 椀	口径16.6 高台径5.6 器高6	体部下1/3～内面:施釉	施釉)灰白色10Y 7/1 露胎)灰白色5Y 7/1 断)灰白色N 8/1	密 気泡が入る。 極小の黒砂粒を含む。	良好	
1065	2204	G30－A･F	河道Ⅰ上層	白磁 椀	口径16.0 高台径6.3 器高6.9	体部下1/3～内面:施釉	施釉)灰白色10Y 8/1 露胎)灰白色5Y 8/2 断)灰白色10Y 8/1より明るい	密 気泡と黄入が認められる。	良好	
1070	094－3	G3－A	河道Ⅰ上層	土師器 甕	遺存高6.8	体部:粗いハケ目7～8条/cm 内面:縦方向のヘラケズリ	外)明黄褐色10YR 7/6 内･断)にぶい黄橙色10YR 6/4 ～にぶい黄褐色10YR 5/4	密 長石・暗灰色砂粒を含む。	良好	人面墨書土器
1075	1033	G14－D	河道Ⅰ上層	土師器 甕	口径17.9 頸径16.8 胴径20.6 器高16.2	体部:押圧調整 口頸部:横ナデ 内面:板ナデ	外)浅黄色2.5Y 7/3 内)灰黄色2.5Y 7/2 断)にぶい褐色7.5Y 5/4	密 石英・長石・金雲母・赤色 酸化土粒を少々含む。	良好	体部に穿孔あり
1077	2278－3	G22－D	河道Ⅰ上層	土師器 羽釜	口径27 鍔径31.7 頸径28.8 遺存高10	体部:縦方向のハケ目6条/cm 鍔～口縁部:横ナデ 内面:縦方向ナデ	全面)黄橙色10YR 7/8	やや粗 1㎜大の石英・長石・雲母 を含む。	良好	
1084	2278－2	G22－D	河道Ⅰ上層	瓦質土器 羽釜	口径25.2 鍔径30 胴径27.4 遺存高16.4	体部:押圧調整 鍔～口縁部:ナデ 内面:ハケ目8条/cm	外)灰色N 4/0 内)灰色5Y 5/1 断)暗青灰色5BG 4/1	密 1㎜大弱の黒色砂粒を多く 含む。	良好	
1087	683	G2－B	河道Ⅰ上層	須恵器 杯	口径14.6 底径6.4 器高4.8	体部上3/4:横ナデ 体部下1/4:ヘラケズリ 底部:ヘラ切り	外)明オリーブ灰色2.5GY 7/1 ～浅黄色2.5Y 7/3 内)明オリーブ灰色2.5GY 7/1 断)明オリーブ灰色2.5GY/1～ 黄灰色2.5Y 5/1	密 灰色・灰白色・茶色の砂粒 を含む。	良好	外底部に「栗家」 の墨書
1089	113	G8－D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯	口径13.8 底径5.5 器高4	体部～内面:横ナデ 底部:糸切り	外)灰黄色2.5Y 7/2 内)灰黄色2.5Y 7/2 断)灰白色7.5Y 8/1	密 1㎜大以下の石英を多く含 む。	良好	外底部に「西？」 の墨書
1090	685	G14－A	河道Ⅰ上層	須恵器 杯	口径12.2 器高4.2	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り	外)灰白色7.5Y 7/1～暗灰色N 3/0 内)灰黄色2.5Y 7/2 断)灰色N 6/0	やや粗 2㎜大の長石を含む。	良好	体部に「大夕」 の墨書

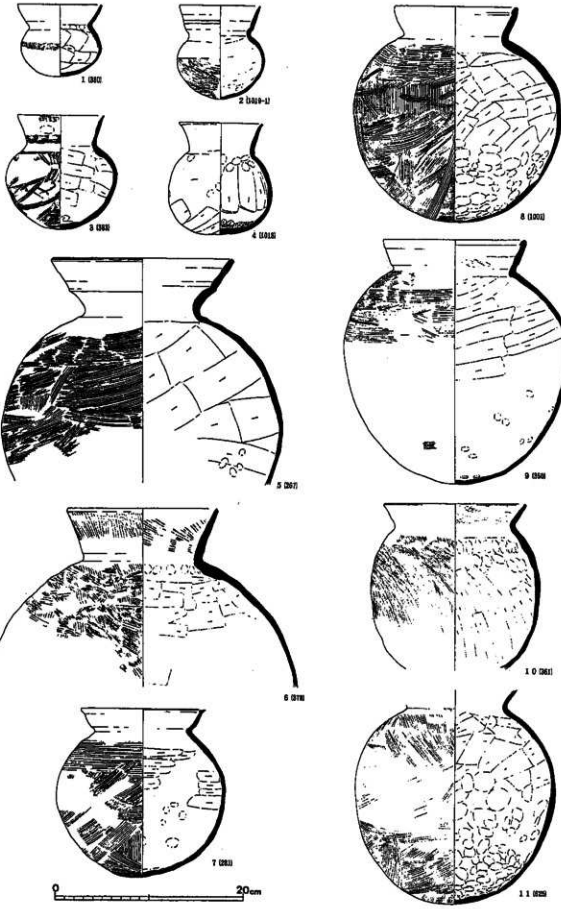
遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1091	1537	G33-C	河道Ⅰ上層	須恵器 椀	口径14.6～16.2 高台径8.2 器高7.5	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り未調整	外)灰白色7.5Y7/1 内)灰白色7.5Y7/1 断)灰白色7.5Y7/1	やや粗 0.5～2㎜大の長石・灰褐色の砂粒を多く含む。	良好	体部に「田」の墨書2ケ所あり
1092	238	C5-D	河道Ⅰ上層	須恵器 杯	口径13.4 底径8.9 器高3.1	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り未調整	外)明青灰色5B7/1 内)明青灰色5B7/1	密 1.5㎜大の砂粒を含む。	良好	体部に「豊」の墨書
1093	4023	T9	河道Ⅰ上層	須恵器 椀	口径17.4 高台径8.4 器高6.0	体部～内面:横ナデ 底部:ヘラ切り未調整	外)灰色 内)灰色	密 0.5～7㎜大の長石を含む。	良好	
1096	72	G2-A	河道Ⅰ上層	須恵器 椀	口径16.0 高台径5.8 器高6.6	体部～内面:横ナデ 底部:糸切り	内面)灰白色10Y7/1 外面)灰白色10Y7/1	密 1～3㎜大の石英と0.5～6㎜大の灰色礫を多く含む。	良好	
1099	2061	30-F	河道Ⅰ上層	須恵器 皿	口径6.9 底径4.1 器高2.2	体部～内面:横ナデ 底部:糸切り	内面)灰白色N7/0 外面)灰白色N7/0	密 1㎜大の長石・黒色砂粒を含む。	良好	
1101	1314	G1-C	河道Ⅰ上層	須恵器 鉢	口径26.8 底径9.1 器高8.9	体部:横ナデ 底部:糸切り	外)青灰色5G6/1 内)灰N5/1 断)灰色N6/1	密 0.5～1.5㎜大の長石を多く含む。	良好	
1102	910	G14-C·D	河道Ⅰ上層	須恵器 壺	口径15.8 頸径8.4 胴径22.5 底径14.3 器高32.5	体部下部:横方向のヘラケズリ 体部:タタキ目2条/㎝ 内面:押圧調整 口頸部:横ナデ 底面:押圧調整の後ナデ	外)灰色10Y5/1 内)灰色5Y5/1 断)灰白色7.5Y7/1	やや粗 0.2～1㎜大の長石を多く、3～4㎜大の灰褐色・白色砂粒を含む。	良好	
1104	4025	T7	河道Ⅰ上層	製塩土器 鉢	高台径4.9 遺存高2.9	高台部:指ナデ 体部:タタキ目3条/㎝ 内面:ナデ	外)にぶい橙色2.5YR6/3 内)褐灰色10YR4/1 断)褐灰色10YR4/1	粗 1㎜大強の長石を多く含む。	良好	
1115	1630	G17-D	河道Ⅰ上層	製塩土器 鉢	口径3 胴径5.5 遺存高6.9	体部下半:指圧調整 体部上半:タタキ目 (不明瞭) 内面:ナデ	外)黄褐色2.5Y5/4 内)黄褐色2.5Y5/4 断)	粗 0.5㎜大の石英・長石を多量に含む。	良好	
1123	1627	G17-A·D	河道Ⅰ上層	製塩土器 鉢	口径10 胴径12.5 遺存高5.9	体部下半:指圧調整 体部上半:タタキ目2条/㎝ 口縁部:内面未調整 内面:板ナデ	外)にぶい橙色7.5YR7/4 内)〃 断)にぶい橙色7.5YR7/4～黒褐色7.5YR3/1	粗 1～2㎜大の長石を若干含む。	良好	
1125	1643	G20-A	河道Ⅰ上層	製塩土器 鉢	口径12 胴径13 遺存高6.6	内面:指ナデ	外)にぶい褐色7.5YR5/3 内)褐灰色10YR4/1 断)黒褐色10YR3/1	粗 0.5～1㎜大の長石を多く含む。	良好	
1134	410	G8-A	河道Ⅰ上層	竈	釜口径19.1 焚口高28.2 器高38.3	外面:螺旋状タタキ目2～3条 内面:多方向タタキ目3条/㎝ 底部:ナデ	外)浅黄橙色10YR8/3～灰白色10YR7/1 内)灰黄褐色10YR6/2～2.5Y4/2 断)灰白色10YR7/1	密 1㎜大以下の石英・長石、微細粒の金雲母を少量含む。	良好	付け底

遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
1135	2908－2	G20－A	河道Ⅰ上層	甕	遺存高31	外面:縦方向のハケ目9～11条/㎝、多方向のハケ目12～13条/㎝ 内面:板ナデ	外)橙色7.5YR7/6～褐灰色7.5YR5/1 内)にぶい黄橙色10YR7/4～明黄褐色7/5 断)橙色7.5YR7/6～明青灰色5B7/1	密 3㎜大以下の長石・石英・雲母の角閃石を含む。黒色・褐色砂粒を少量含む。	良好	付け底
1136	1467-2	G32－D	河道Ⅰ上層	甕	遺存高13.8	外面:縦方向のハケ目9～11条/㎝ 内面:縦方向のハケ目9～11条/㎝	外)灰黄褐色10YR5/2 内)にぶい橙色7.5YR7/3 断)にぶい橙色7.5YR7/3	密 1㎜大以下の長石・金雲母を含む。	良好	
1137	1768	G36－B	河道Ⅰ上層	甕	釜口径36.2 器高34.8 焚口27.1	体部:縦方向のハケ目3条/㎝ 内面:横方向の板ナデ	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)にぶい褐色7.5YR5/4～明褐灰色7/2 断)にぶい橙色7.5YR6/4	密 0.5～2㎜大の砂粒・金雲母を多量に含む。	良好	
1138	1591	G32－D	河道Ⅰ上層	甕	釜口径37.3 器高29.5	体部:指圧調整の後ナデ 口縁部:横方向のナデ 底部:ナデ 内面:指圧調整の後ナデ	外)明褐灰色7.5YR7/2 内)褐灰色10YR5/1 断)明褐灰色7.5YR7/2	やや粗 0.5㎜～3㎜大の石英、0.5㎜～2㎜大の石英、1㎜～2㎜大の金雲母を多量に含む。	良好	
1148	2738－1	G25－D	河道Ⅰ上層	ミニチュア甕	釜口径8.8 胴径9.3 器高6 焚口高4.2 焚口幅7.6	体部:指圧調整の後ナデ 口縁部:横方向のナデ 内面:横方向のヘケメ	前面)赤色10R5/6～にぶい赤橙色10R6/3	密 1㎜大の白色・黒色砂粒を含む。	良好	
1151	1500－1	G31－B	河道Ⅰ上層	土師器 甑	口径23.5 遺存高22.4	体部:縦方向のハケ目5～7条/㎝ 口縁部:横ナデ 把手部:指圧調整 内面上半:指頭圧痕 内面下半:縦方向のケズリ	外)にぶい黄橙色10YR7/4～6/4 内)橙色7.5YR7/6～6/6 断)灰白色2.5Y8/1～7/1	密 0.5㎜大羽の黒色・白色砂粒を多く含む。	良好	蒸気孔3ケ所以上
1152	093	G11－D	河道Ⅰ上層	平瓦	遺存長10.4 遺存幅7.4 厚さ2	凹面:縦方向のケズリ 凸面:格子タタキ目をナデ消し 端面は面取り	全面)灰白色N8/0～10YR8/1～灰色N5/0	密 0.5㎜大の黒色砂粒、1～1.5㎜大の長石を含む。	良好	
1153	092	G3－D	河道Ⅰ上層	平瓦	遺存長9 遺存幅5.8 厚さ2.5～2.8	凹面:布目痕をナデ消し 凸面:格子タタキ目 端面:ナデ	凹-凸)灰白色2.5Y8/1～暗灰色N3/0 断)灰白色2.5Y8/1	密 1～2㎜大の長石を含む。	良好	
1154	052－2	G16－C	河道Ⅰ上層	平瓦	遺存長24.5 遺存幅20.6 厚さ1.3～1.8	凹面:縦方向のケズリ 凸面:格子タタキ目の後ナデ消し 端面:面取り	凹)にぶい橙色5YR7/4 凸)灰白色7.5Y7/1～明褐灰色7.5YR7/2 断)にぶい橙色5YR7/4	やや粗 0.5㎜大のチャートと0.5㎜大の長石・黒色砂粒を含む。	良好	凹面に模骨痕
1183	2146－2	G23－C	河道Ⅶ上層	土師器 杯	口径13.8 器高3.1	底部:押圧調整 口縁部～内面:横ナデ	外)にぶい黄橙色7.5YR5/ 内)灰黄褐色10YR6/2 断)にぶい黄橙色10YR6/3	密 0.5～4㎜大の長石を含む。	良好	底部に墨書

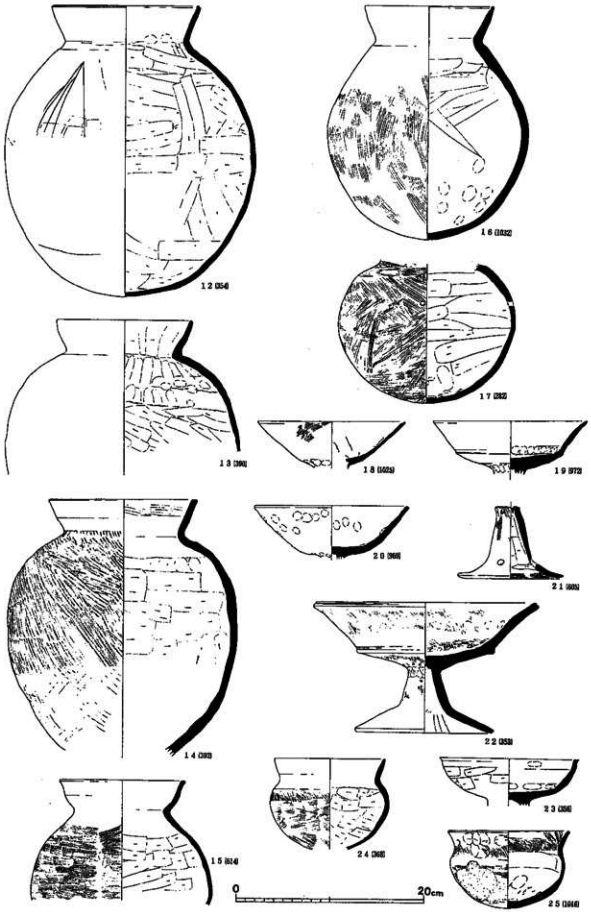
遺物番号	台帳番号	地区	遺構・層位	種類	寸法(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1189	3276	G27 - A	河道Ⅶ上層	土師質 鉢壺	遺存高8.9 孔径0.9～1.1	全面:ナデ	外)灰白色7.5Y7/1～灰色4/1 内)灰色10Y5/1 断)灰白色7.5Y7/1	密	良好	
1195	2876	G20 - D	河道Ⅶ上層	須恵器 杯	口径12.5 高台径9.5 器高4.2	体部～内面:回転ナデ 内面底部:ナデ 高台:横ナデ	外)灰色5Y5/1 内)灰色5Y5/1 断)灰色5Y5/1	密 1㎜大以下の白色砂粒を含む。	良好	底部に「縄家」の墨書
1196	2324	G20 - C·D	河道Ⅶ上層	須恵器 杯	口径13.2 底径7.6 器高3.6	体部～内面:回転ナデ 底部:糸切り未調整	全体)灰白色7.5Y7/1 口縁部)暗灰色N3/0	密 長石を含む。	良好	底部に「田口家」の墨書
1198	2164	G23 - C	河道Ⅶ上層	土師器 甑	口径23 底径13.9 遺存高24.4	体部:縦方向のヘケ目9～10条/㎝ 口縁部:横ナデ 把手部:指圧調整 内面:横方向の指ナデ	外)灰褐色7.5YR5/2 内)灰褐色7.5YR5/1 断)にぶい赤褐色2.5YR5/3	密 1㎜大弱の長石を多く含む。	良好	
1200	1262－2	G19 - A	河道Ⅰ下層	土師質 土錘	全長4.4 最大径1	磨滅著しい	全面)灰褐色5YR5/2～黒褐色2/1	密 0.5㎜大の長石を含む。	良好	
1204	1066	G13 - A	河道Ⅲ下層	土師質 球形土錘	全長3.5 最大径3.3	指押さえ	全面)にぶい橙色7.5YR6/4	密	良好	
1205	1225－2	G19 - A	河道Ⅰ上層	瓦質 管状土錘	全長3.8 最大径3.9	指押さえ	外)暗灰色N3/0 内)暗灰色N3/0 断)灰白色N7/0	密 3㎜大以下の小石を少量含む。	良好	
1208	2039－1	G31 - D	河道Ⅰ上層	土師質 管状土錘	全長11.4 最大径3.5	指押さえ ヘラ痕	全面)褐灰色7.5YR6/1～にぶい褐色6/3	密	良好	
1213	1607	G34 - E	河道Ⅰ上層	土師質 土錘	全長1.6 径7.1	全体:てづくね 両端:ヘラ切り	全面)明褐灰色7.5YR7/2	密	良好	
1215	751	G12 - C	河道Ⅰ上層	土師質 管状土錘	全長6.3 最大径3.1	全体:てづくね	全面)灰黄色2.5Y7/2		良好	
1221	4028	T 8	河道Ⅰ上層	土師質 管状土錘	全長14.3 最大径5.5	全体:縦方向の板ナデ（一部横方向のヘケ目） 両端:ナデ	全面)灰黄褐色10YR6/2	密 黒雲母・金雲母・白チャート・長石を含む。	良好	
1226	1795	G10 - D	河道Ⅳ上層	土師質 有溝土錘	全長7.1 最大幅3.9 厚さ3.3	指頭圧痕	全面)にぶい赤褐色5YR5/3	密 5㎜大程度の石を含む。	良好	

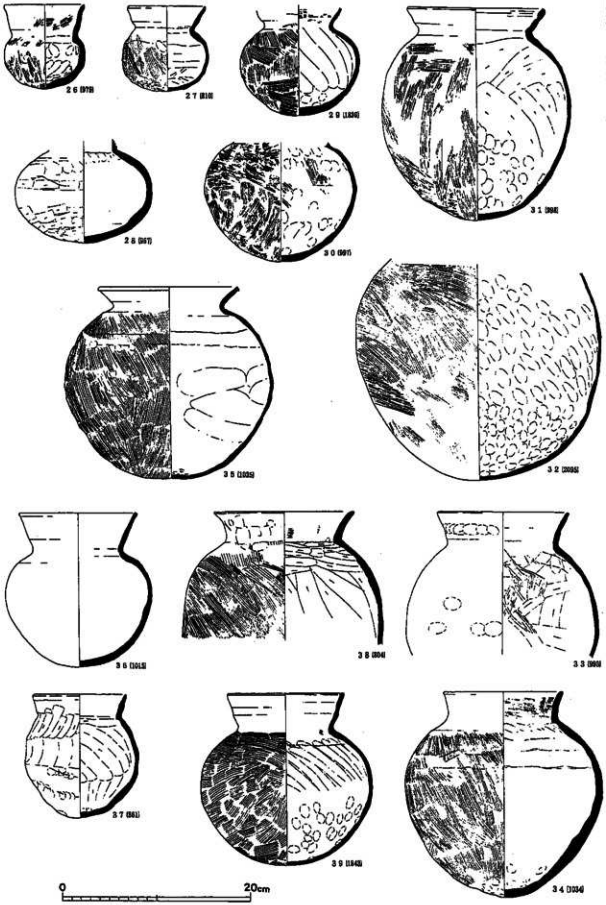
（堀口）

図版1　古墳時代遺構面出土遺物1

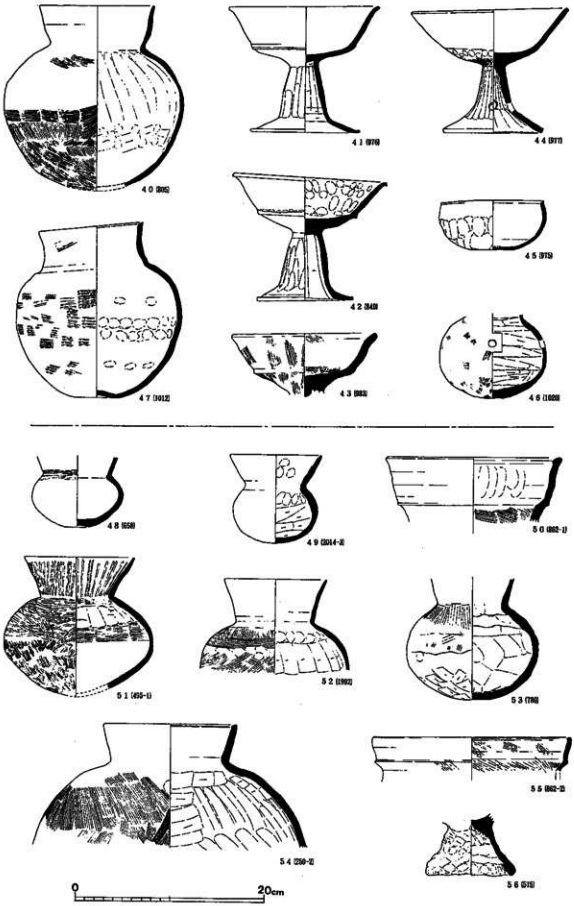


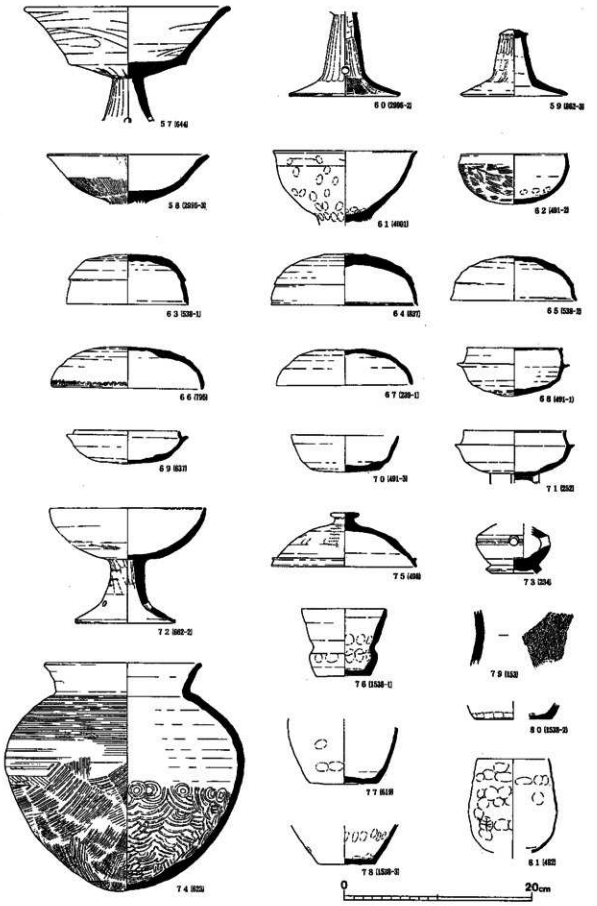
図版2　古墳時代遺構面出土遺物2



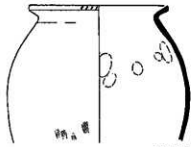

0
20cm

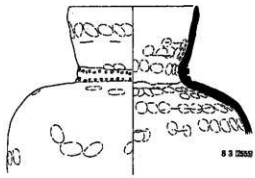
図版4　河道V下層出土遺物2・上層出土遺物1

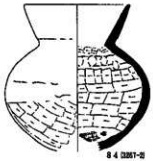


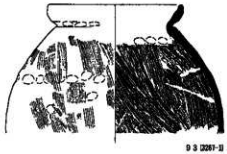

0
20cm

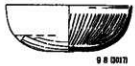
図版6　堤防下層出土遺物1

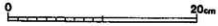




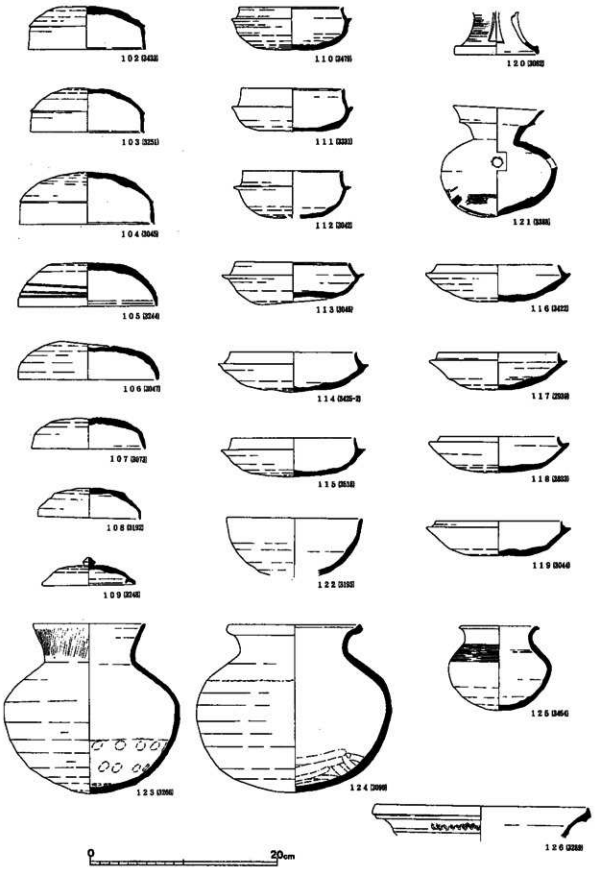




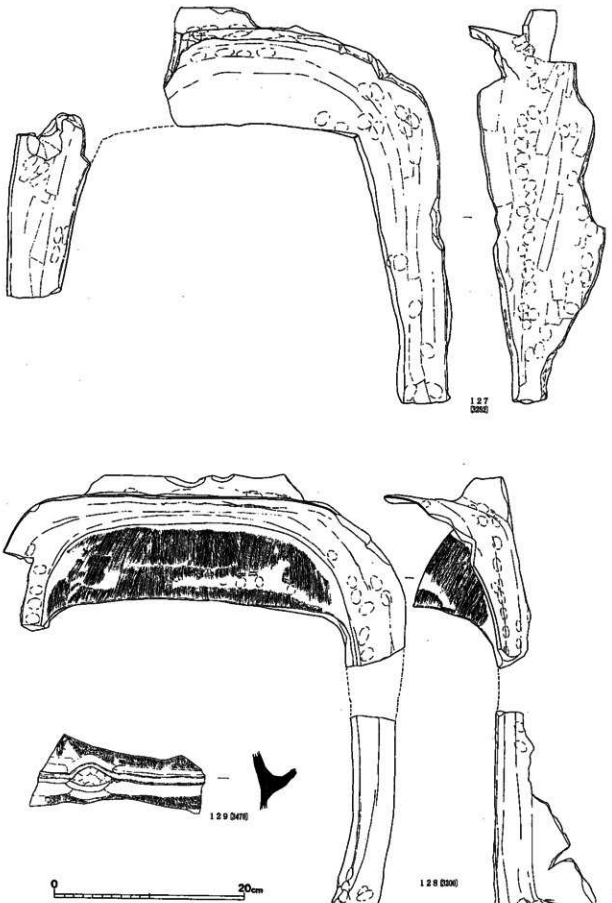




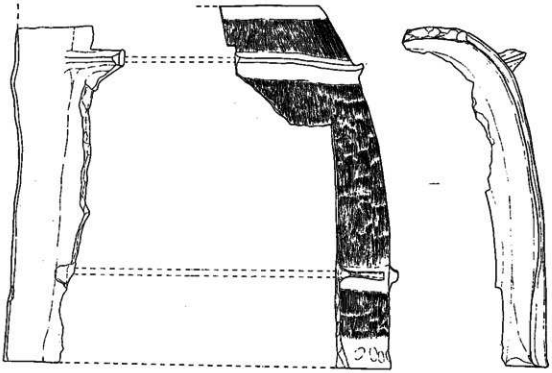
図版7　堤防下層出土遺物2

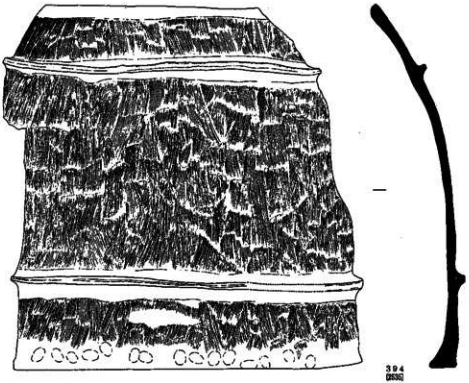


図版8　堤防下層出土遺物3

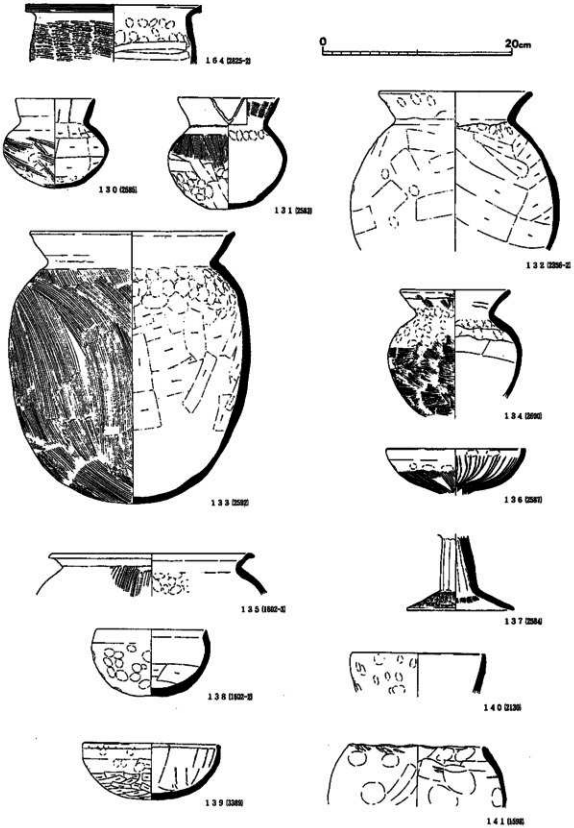


図版9　堤防下層出土遺物4

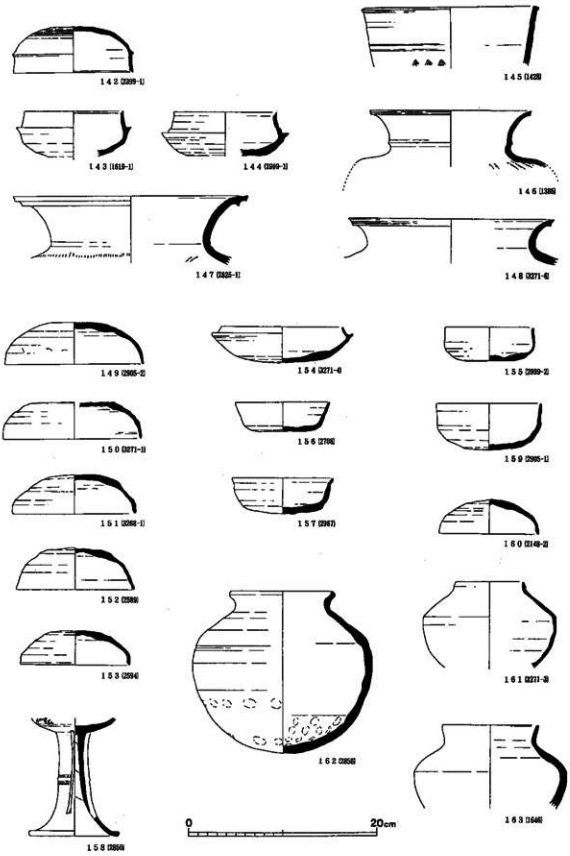




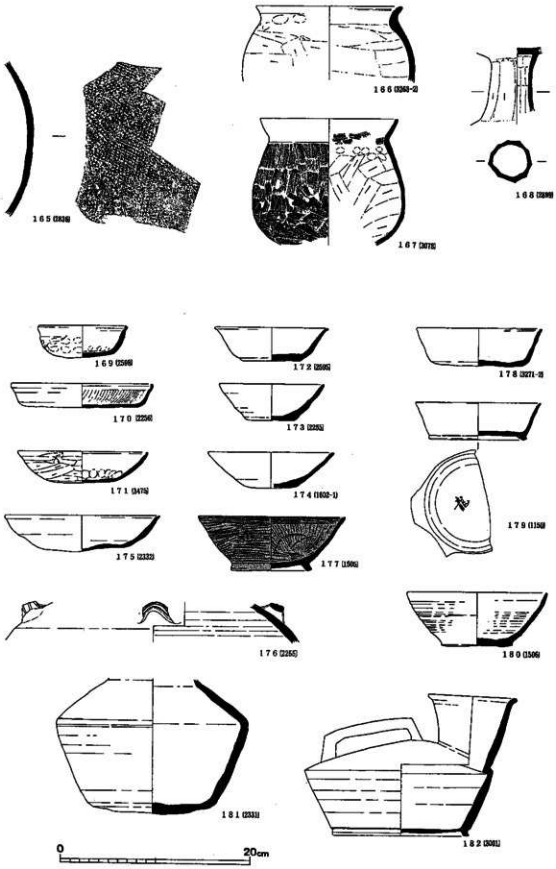
図版10　堤防上層出土遺物1

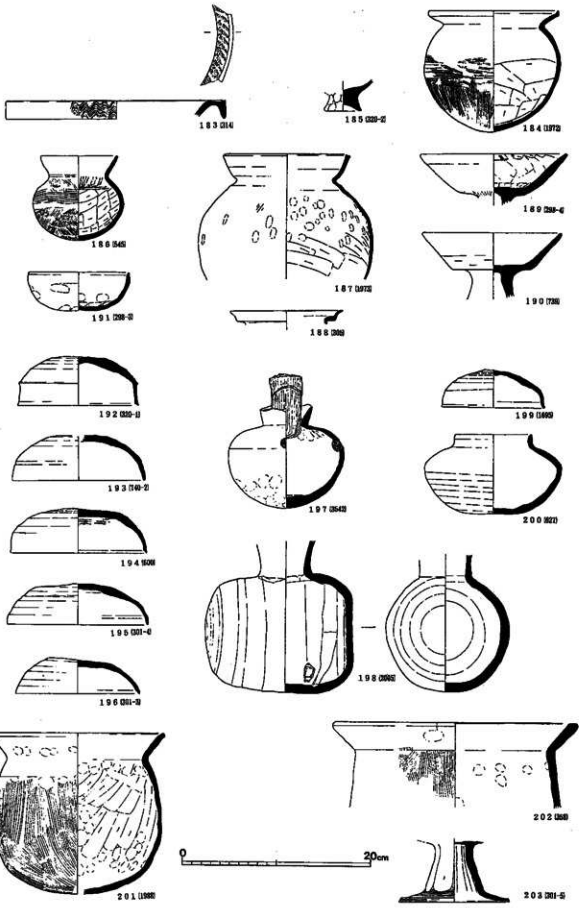


図版11　堤防上層出土遺物2

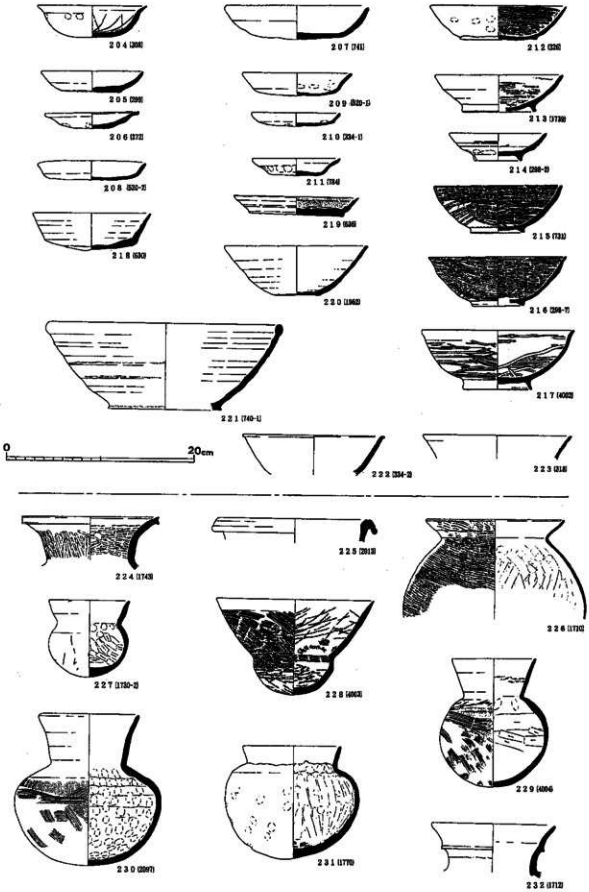


図版12　堤防上層出土遺物3

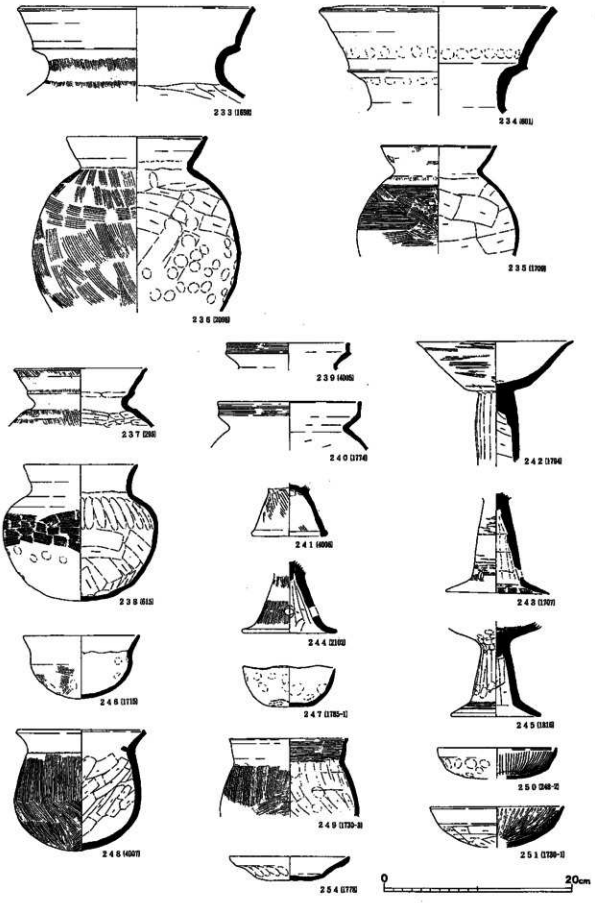



183
185
184
186
189
187
190
191
188
192
199
193
197
200
194
195
198
196
202
201
20cm
203

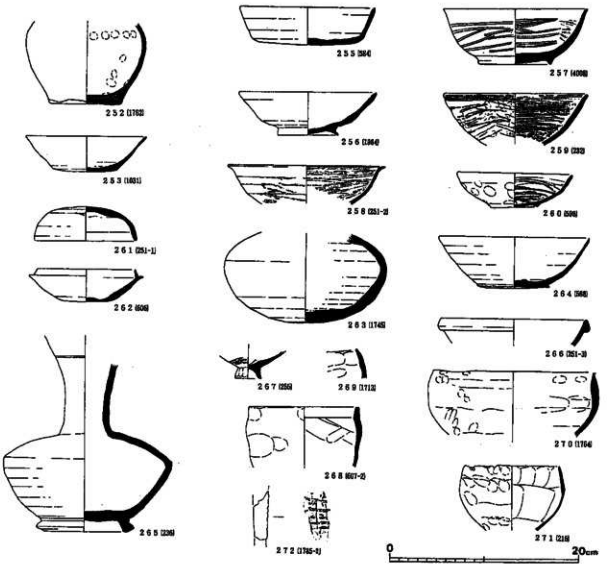
図版14　河道Ⅳ下層出土遺物2・上層出土遺物1

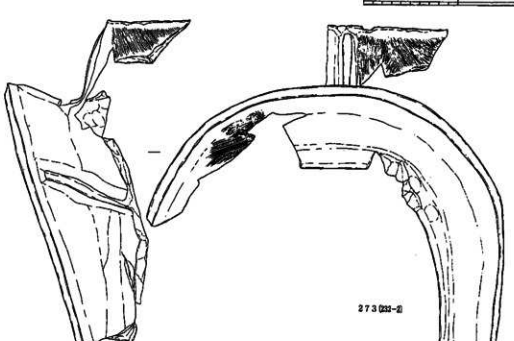


図版15　河道Ⅳ上層出土遺物2

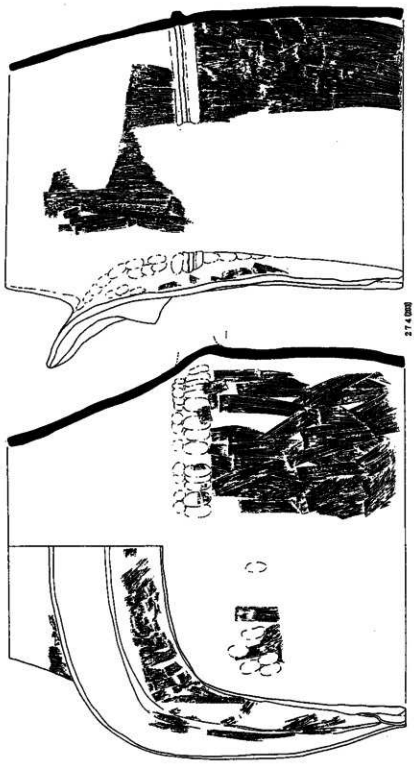


図版16　河道Ⅳ上層出土遺物3

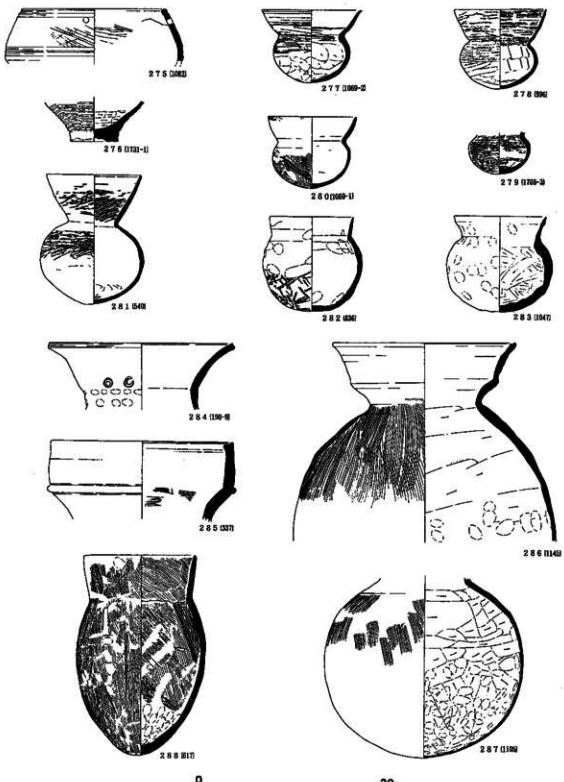




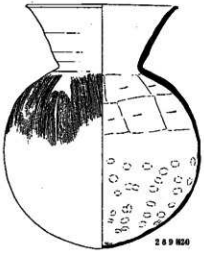
図版17　河道Ⅳ上層出土遺物4

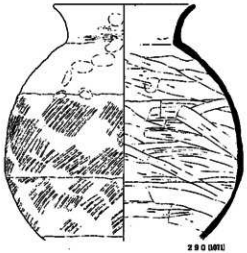


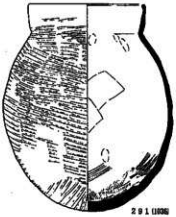
図版18　河道Ⅲ下層出土遺物1

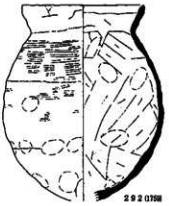


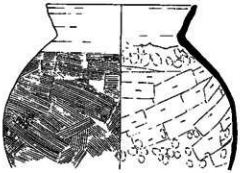
図版19　河道Ⅲ下層出土遺物2

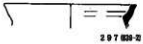


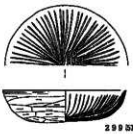


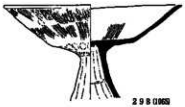


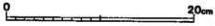




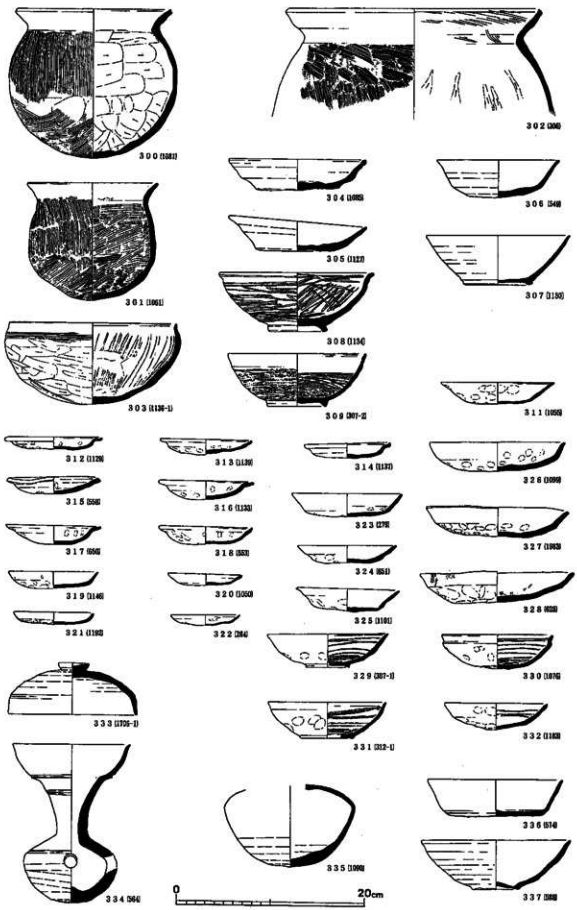




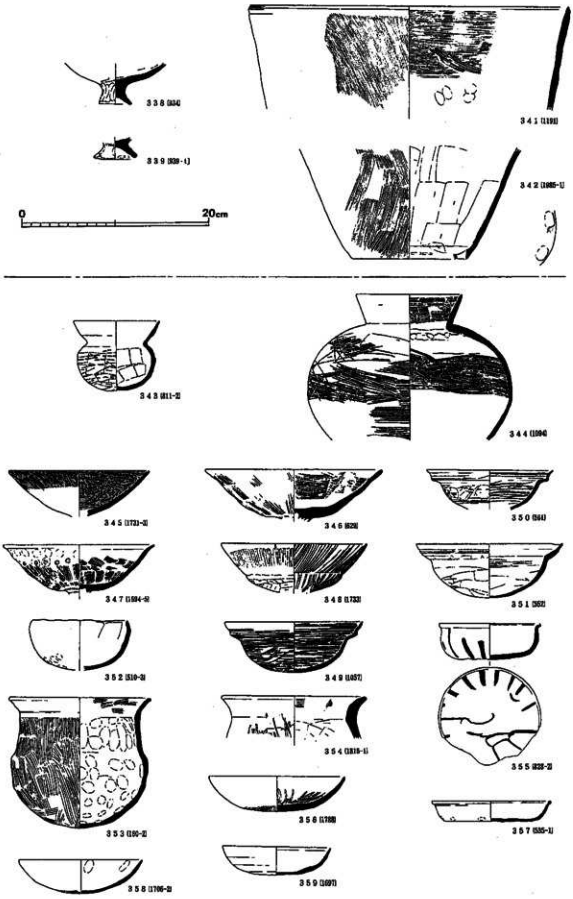


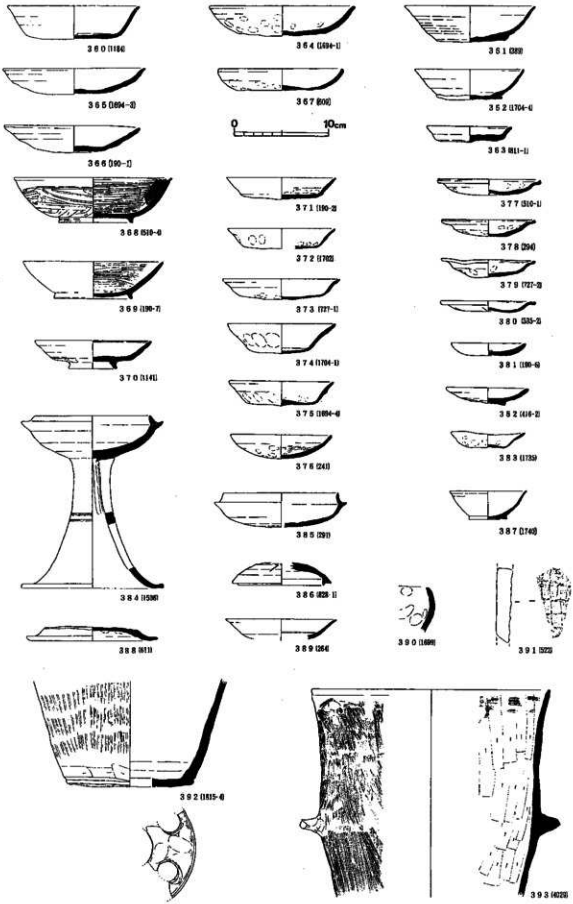


図版20　河道Ⅲ下層出土遺物3

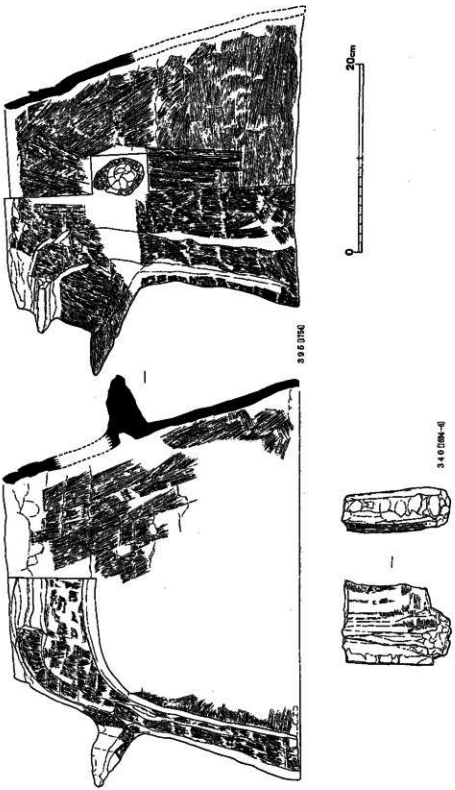


図版21　河道Ⅲ下層出土遺物4・上層出土遺物1

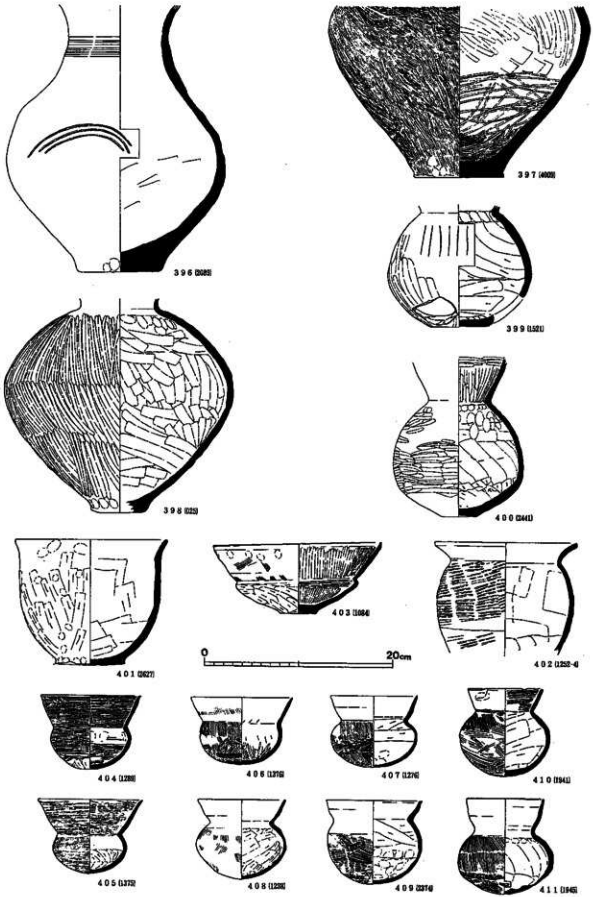



0
10cm

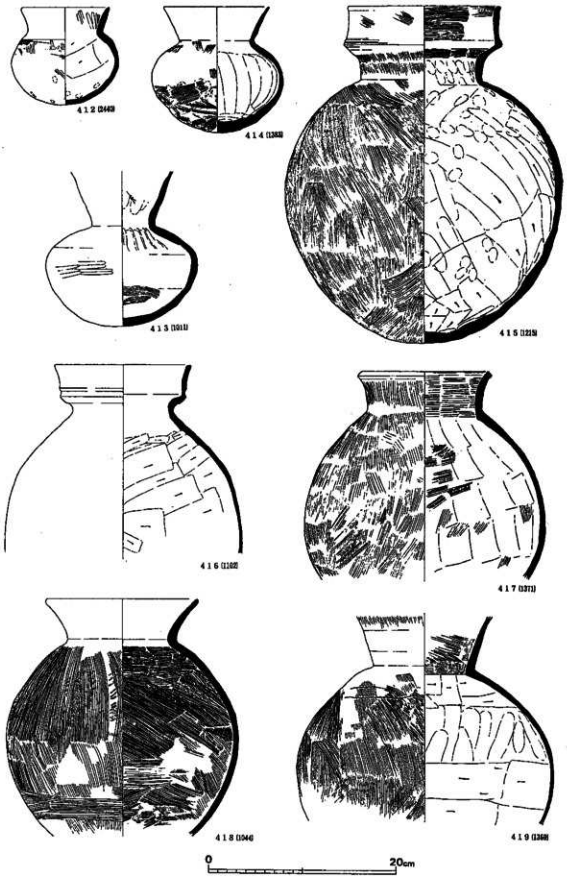
図版23　河道Ⅲ上層出土遺物3



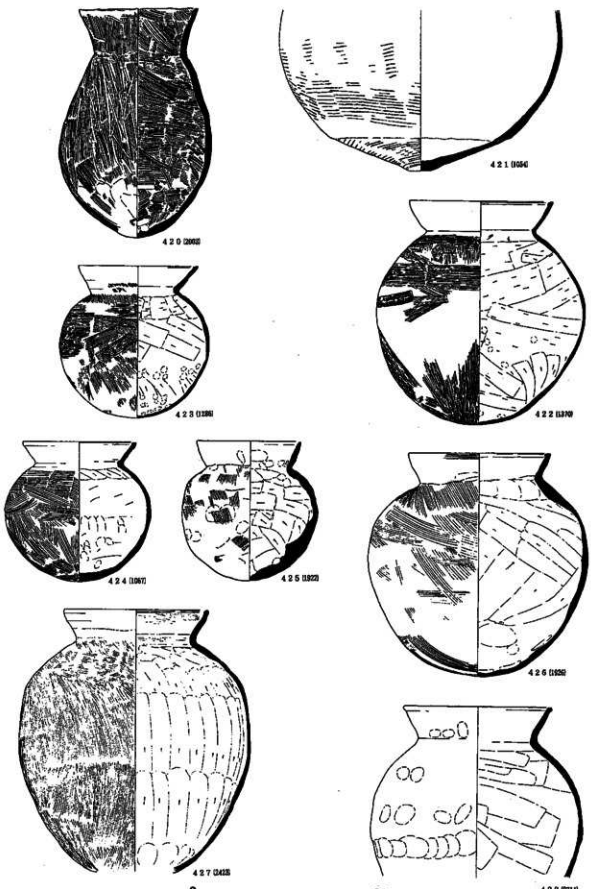
図版24　河道Ⅰ下層出土遺物1



図版25　河道Ⅰ下層出土遺物2

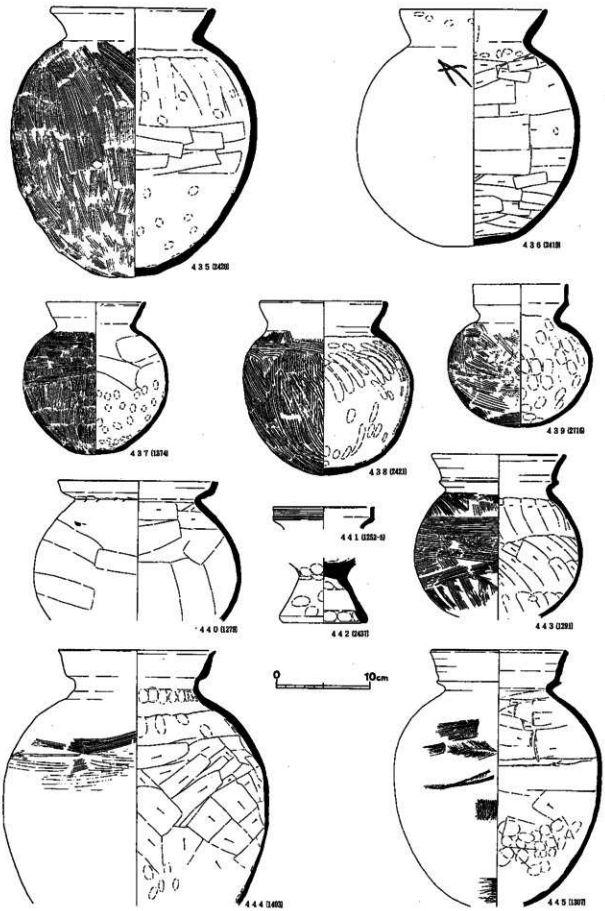


図版26　河道Ⅰ下層出土遺物3

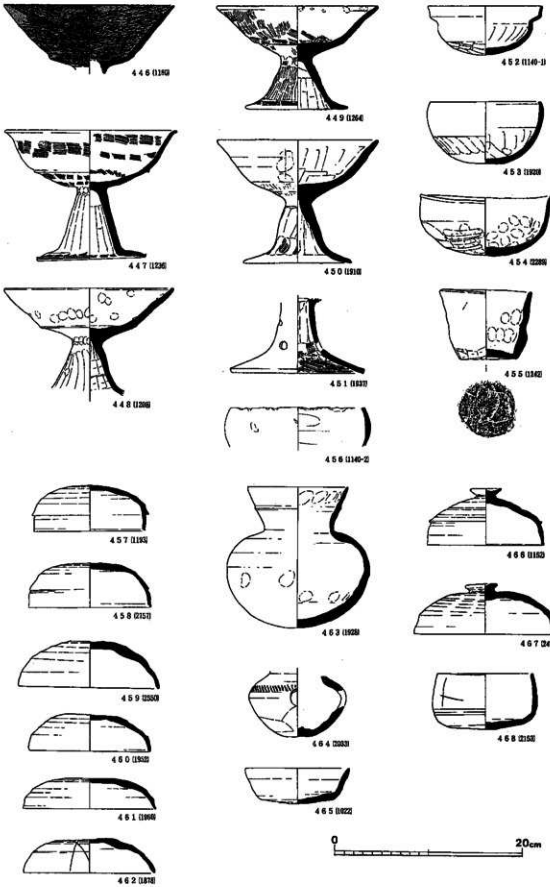


0
20cm

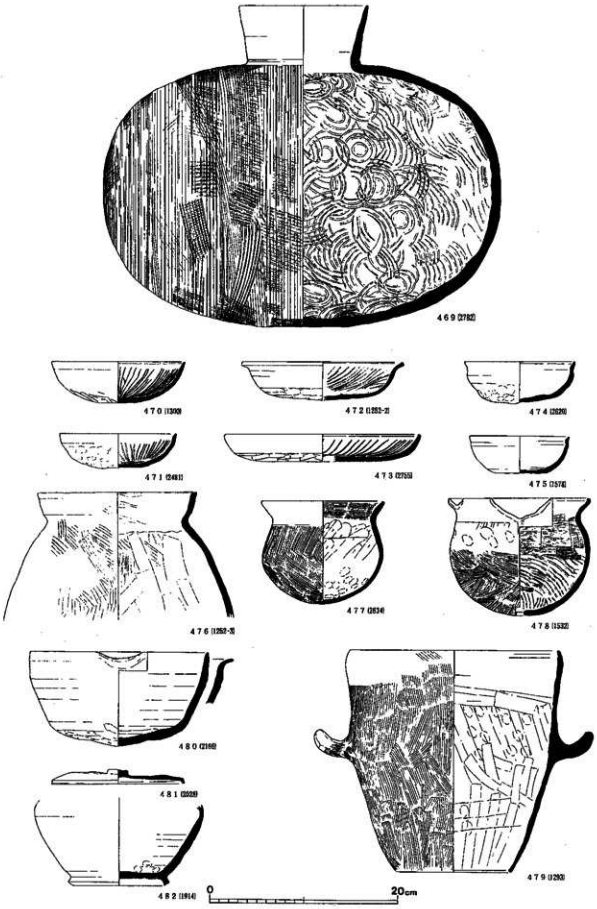
図版28　河道1下層出土遺物5

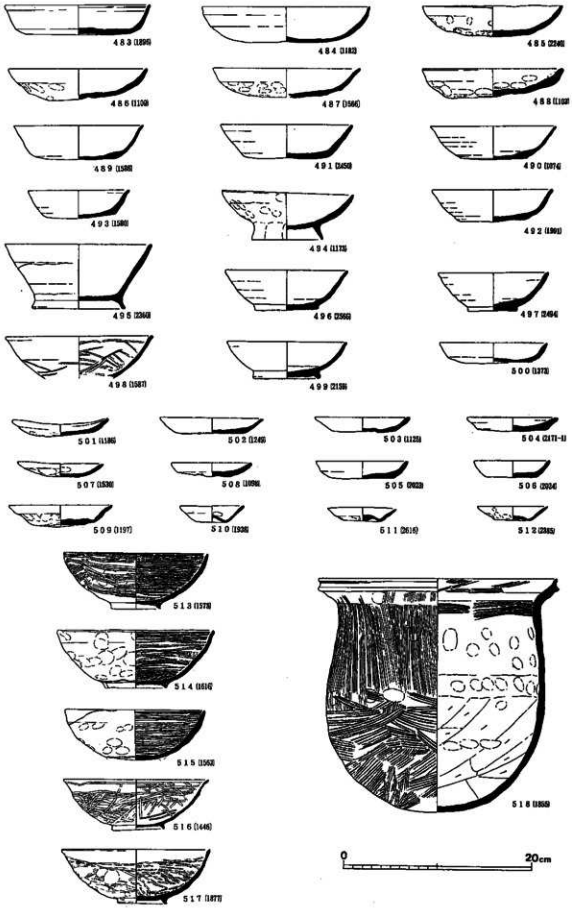


図版29　河道Ⅰ下層出土遺物6

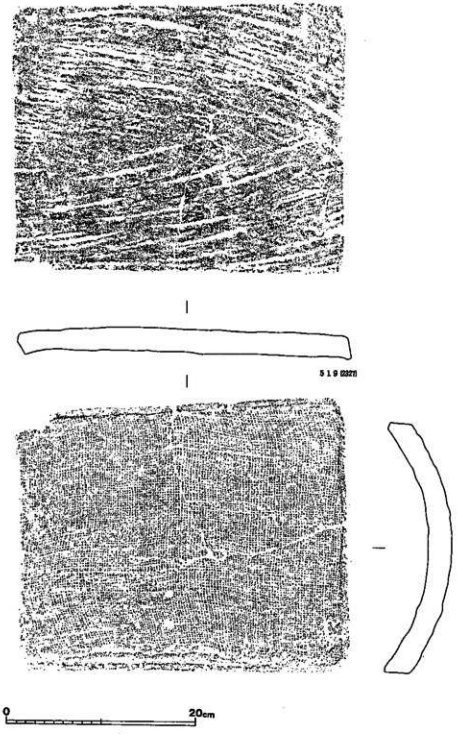


図版30　河道Ⅰ下層出土遺物7

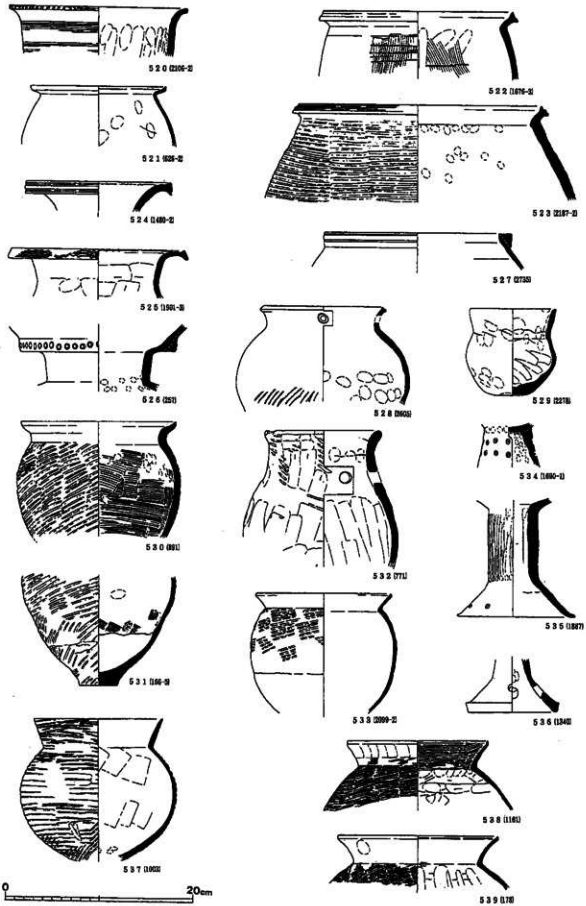



483 (1896)
484 (1882)
485 (2346)
486 (1150)
487 (1566)
488 (1168)
489 (1588)
491 (1458)
490 (1076)
493 (1588)
494 (1175)
492 (1991)
495 (2360)
496 (2566)
497 (2494)
498 (1587)
499 (2138)
500 (1373)
501 (1186)
502 (1240)
503 (1123)
504 (2171-1)
507 (1520)
508 (1856)
505 (2023)
506 (2024)
509 (197)
510 (1926)
511 (2619)
512 (2385)
513 (1578)
514 (2610)
515 (1562)
516 (1446)
517 (1877)
518 (1859)
0
20cm

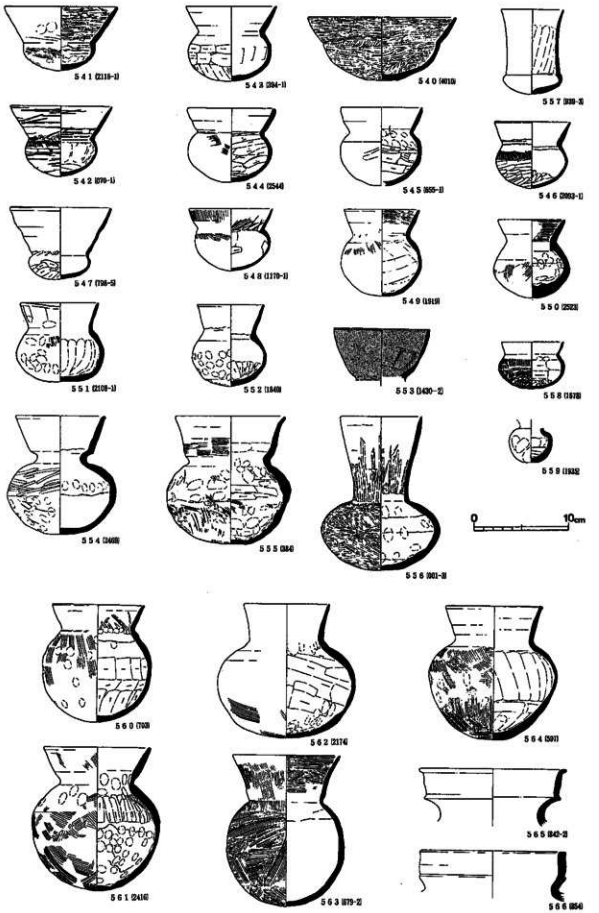
図版32　河道1下層出土遺物9



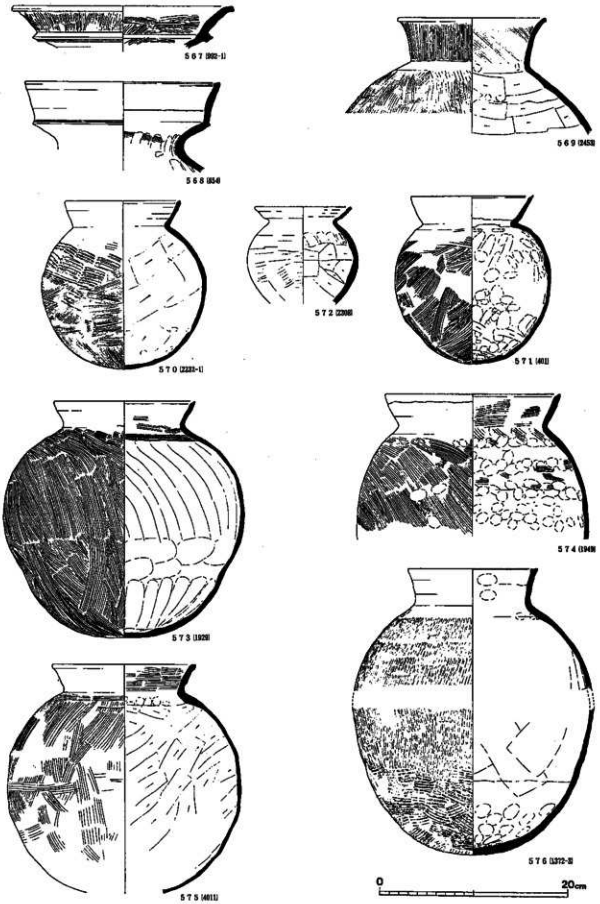
図版33　河道Ⅰ上層出土遺物1



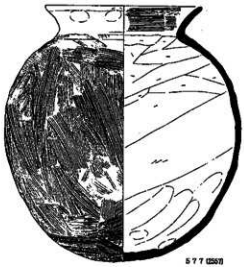
図版34　河道I上層出土遺物2

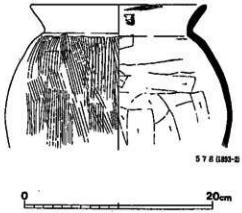


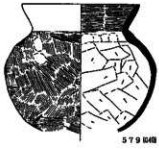
図版35　河道I上層出土遺物3

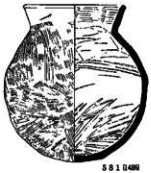


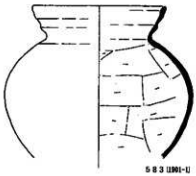
図版36　河道I上層出土遺物4

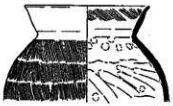


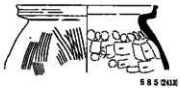


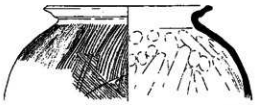


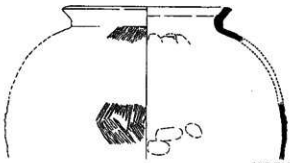


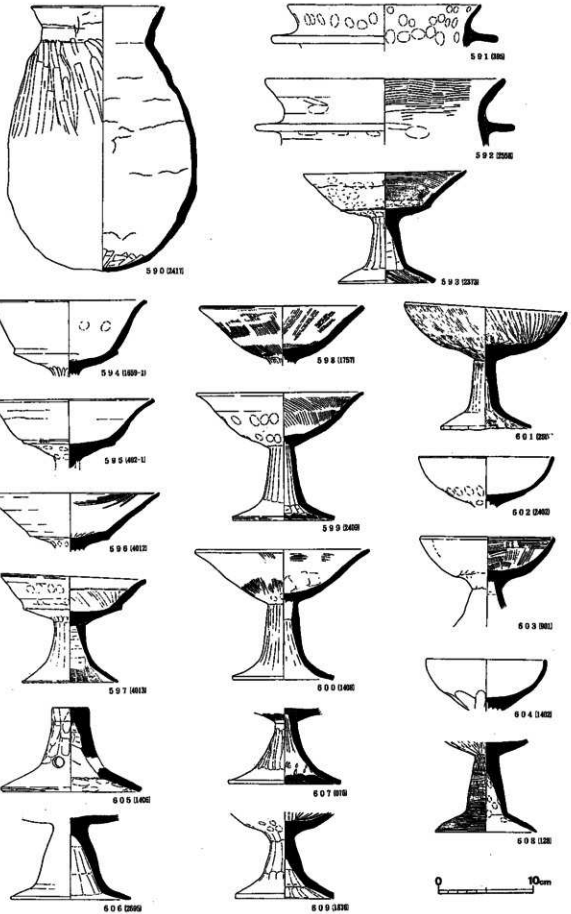




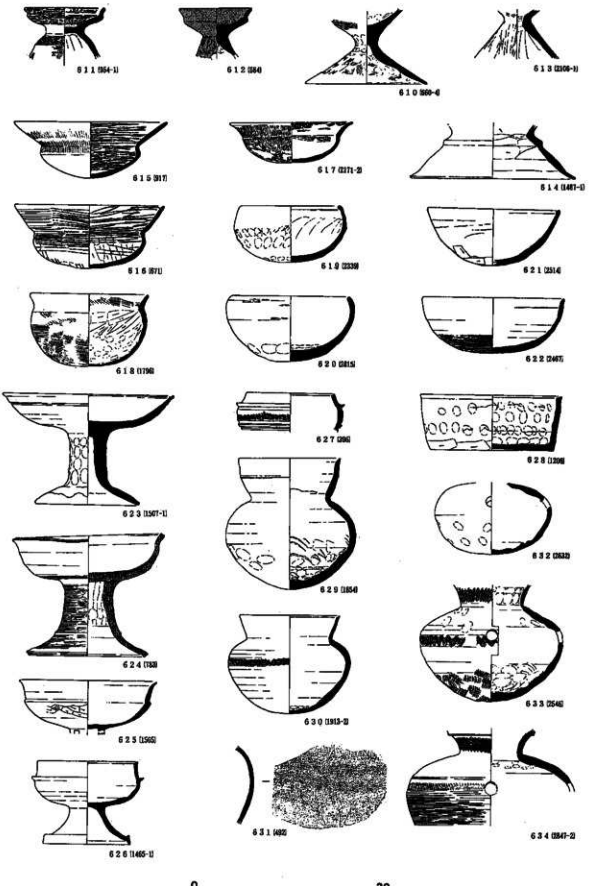


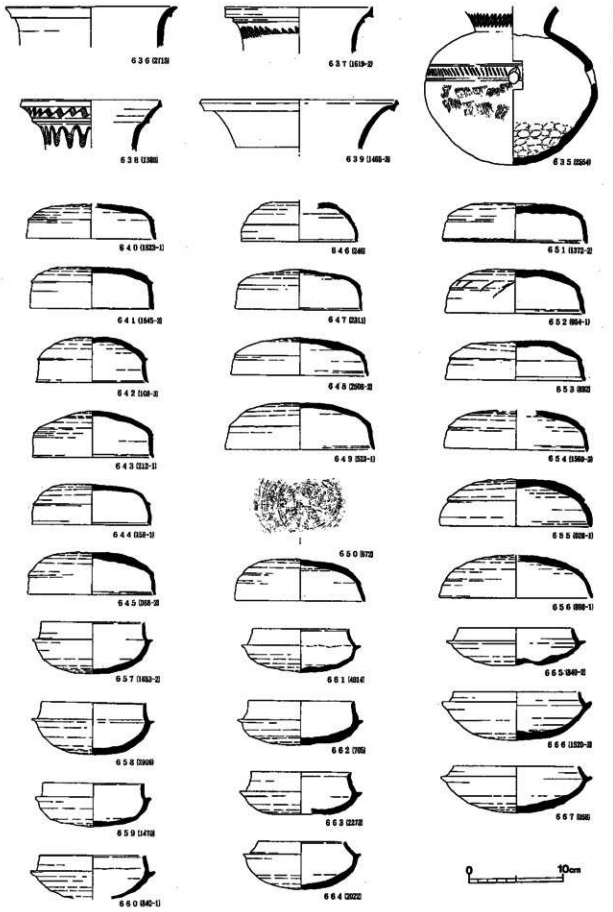




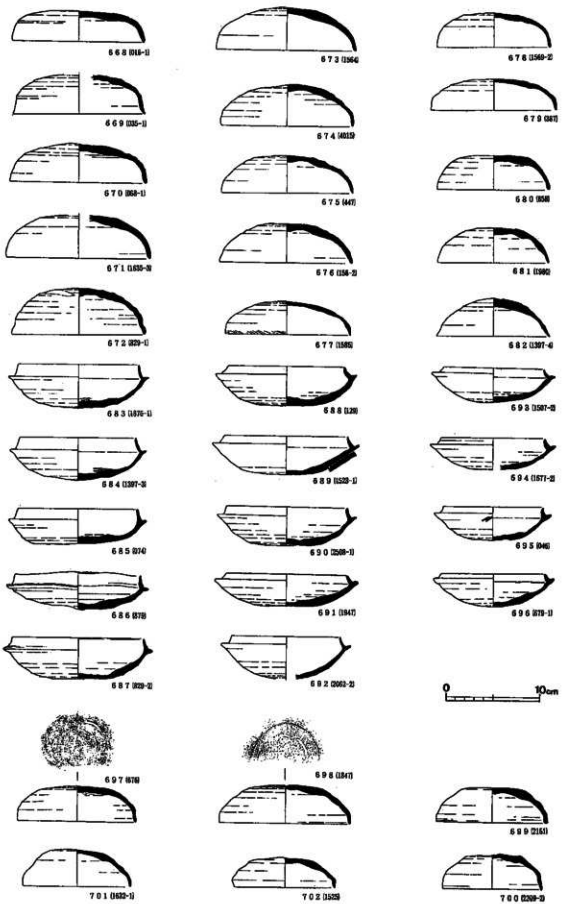

591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
0
10cm

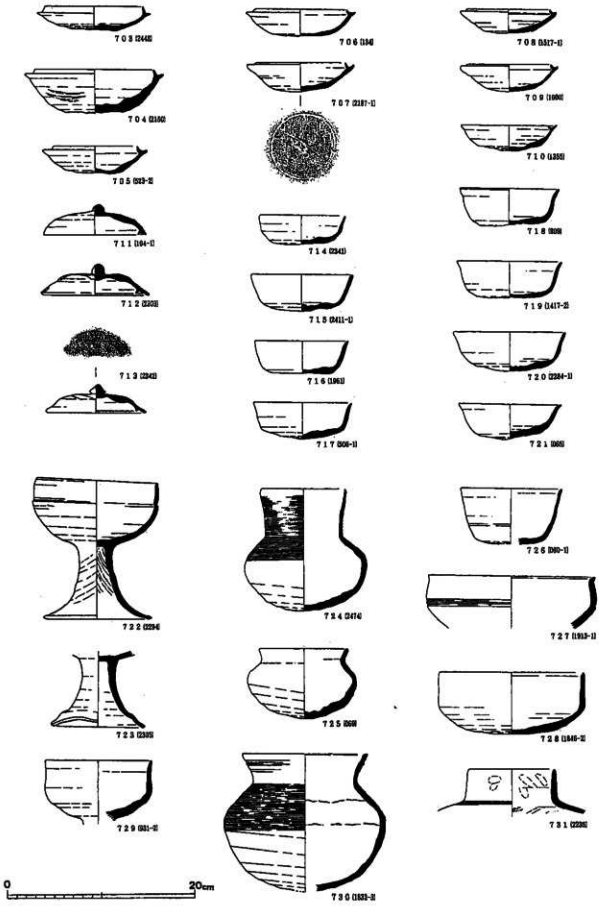
図版38　河道Ⅰ上層出土遺物6

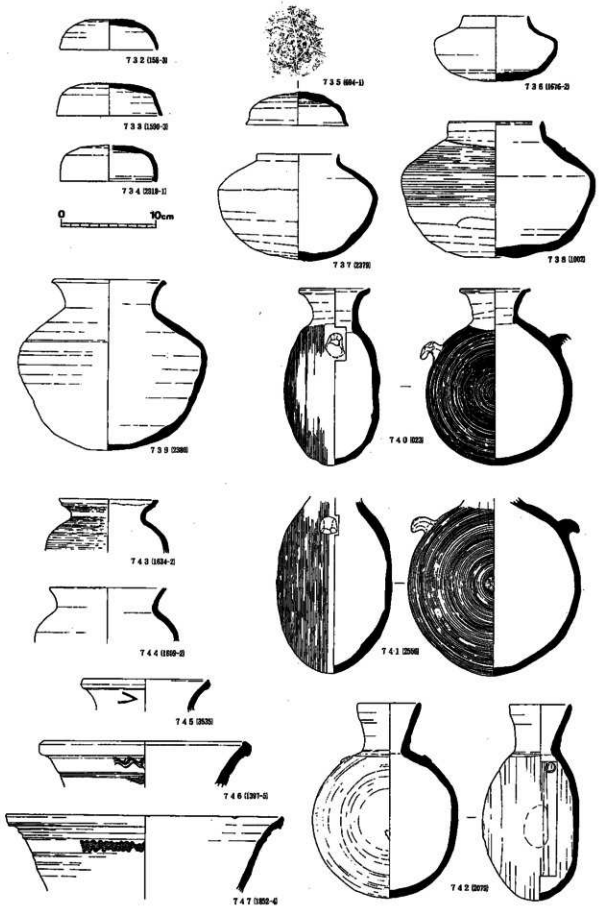


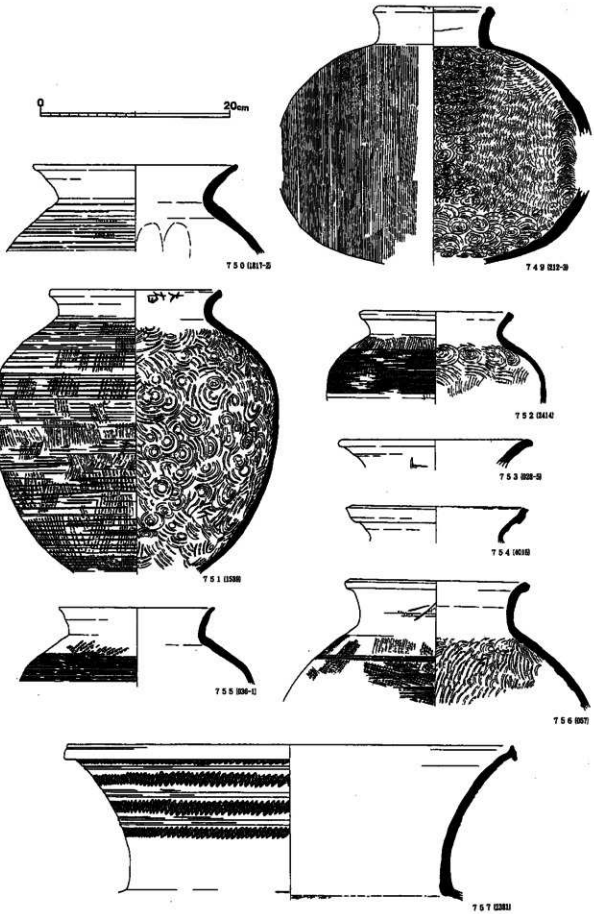

0
10cm

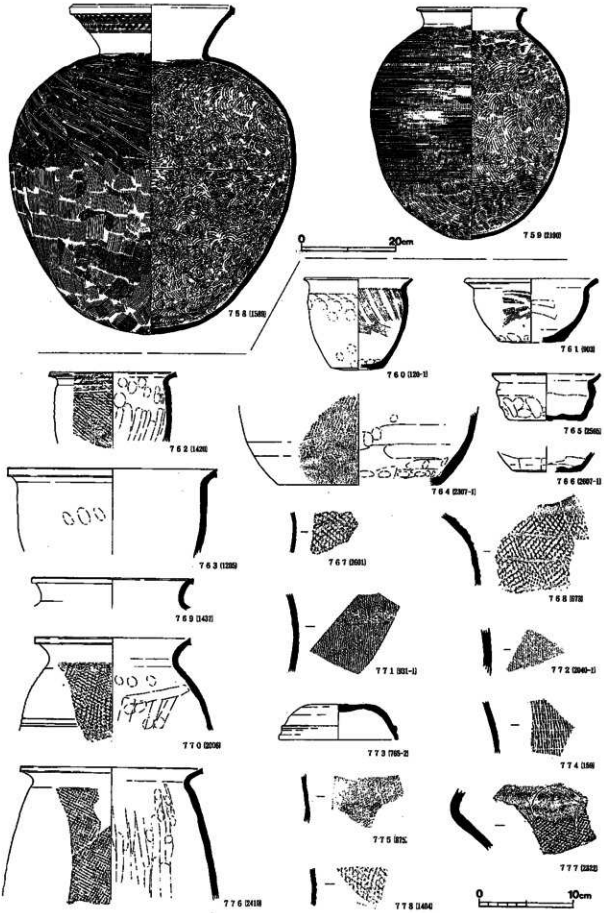
図版40　河道I上層出土遺物8

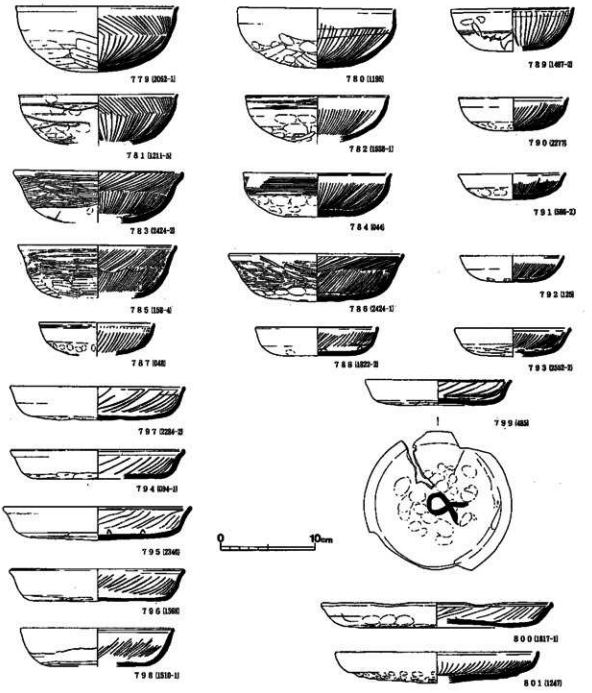



0
20cm

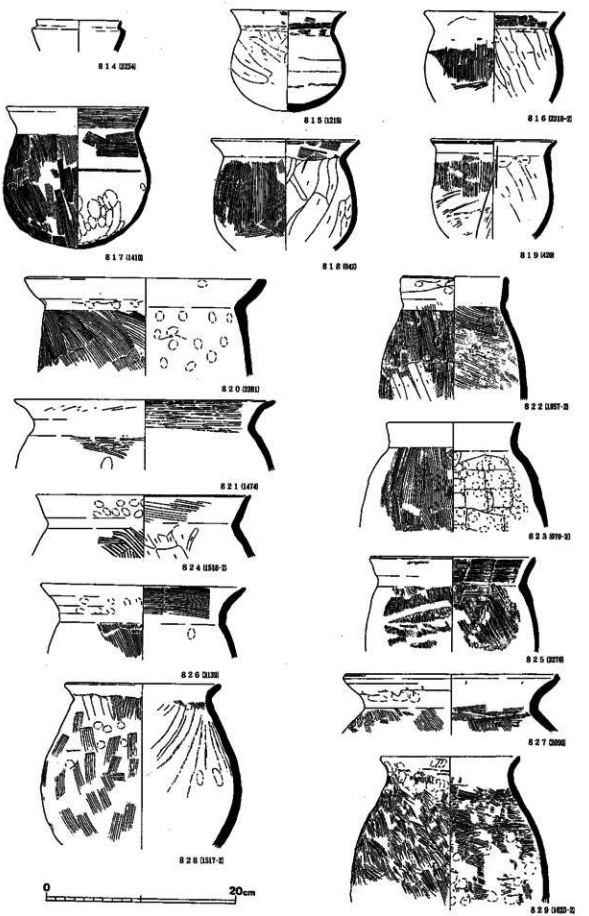

0
10cm

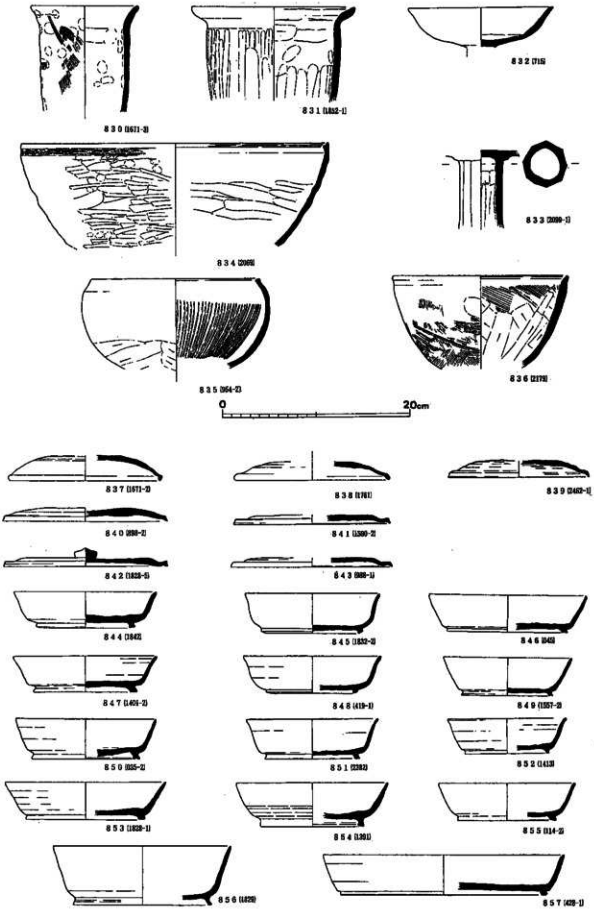

0
20cm

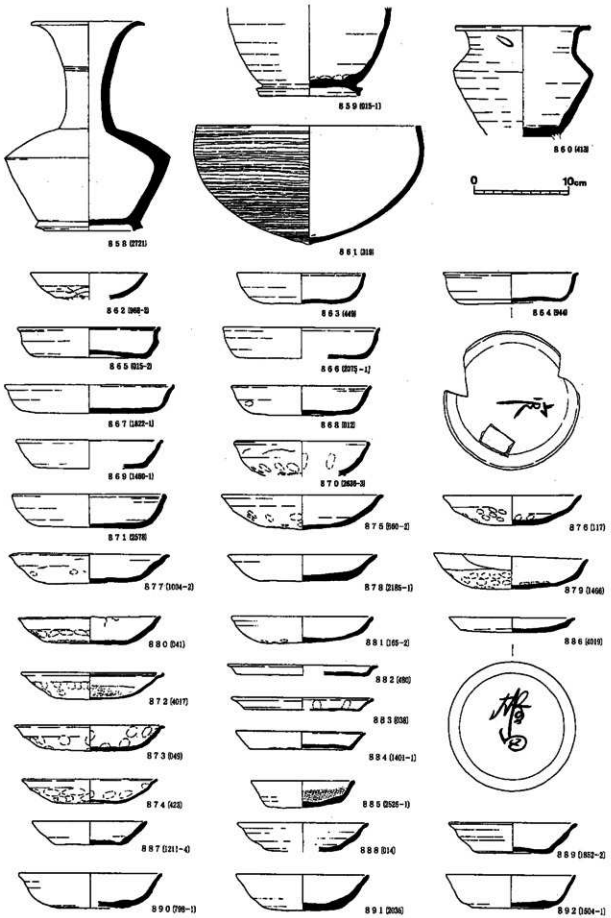

0
20cm
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
0
10cm

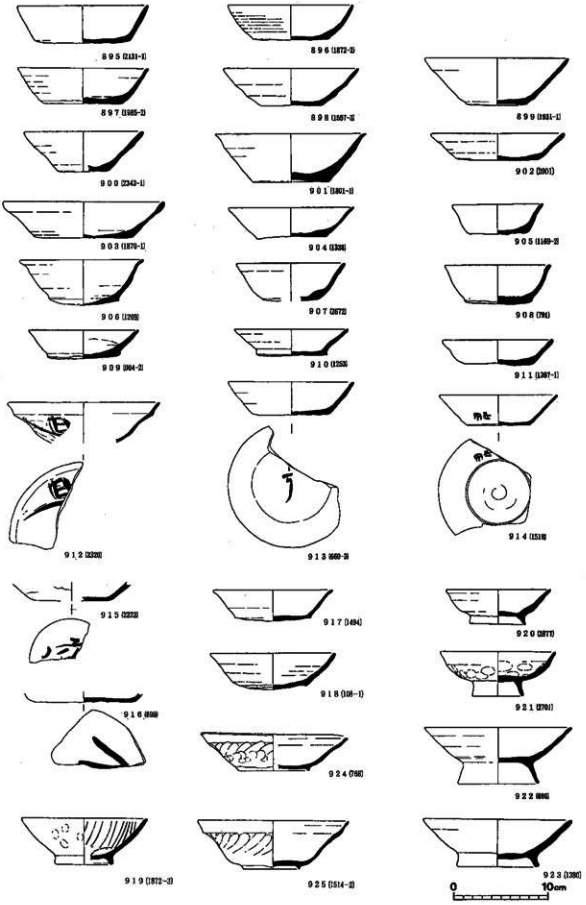

779 (2052-1)
780 (1158)
789 (1497-2)
781 (1211-5)
782 (1658-1)
790 (2275
784 (1044)
791 (586-2)
783 (2424-2)
785 (158-4)
786 (2424-1)
792 (128
787 (548)
788 (1822-2)
793 (2362-5)
799 (485)
797 (2284-2)
794 (894-1)
795 (2346)
0
10cm
796 (1566)
798 (1518-1)
800 (1817-1)
801 (1247)
802 (1899-1)
803 (1822)
804 (405)
805 (2918)
806 (1853-1)
807 (1456)
808 (2033)
809 (212-2)
810 (1844-2)
811 (1416)
812 (1763)
813 (1595)

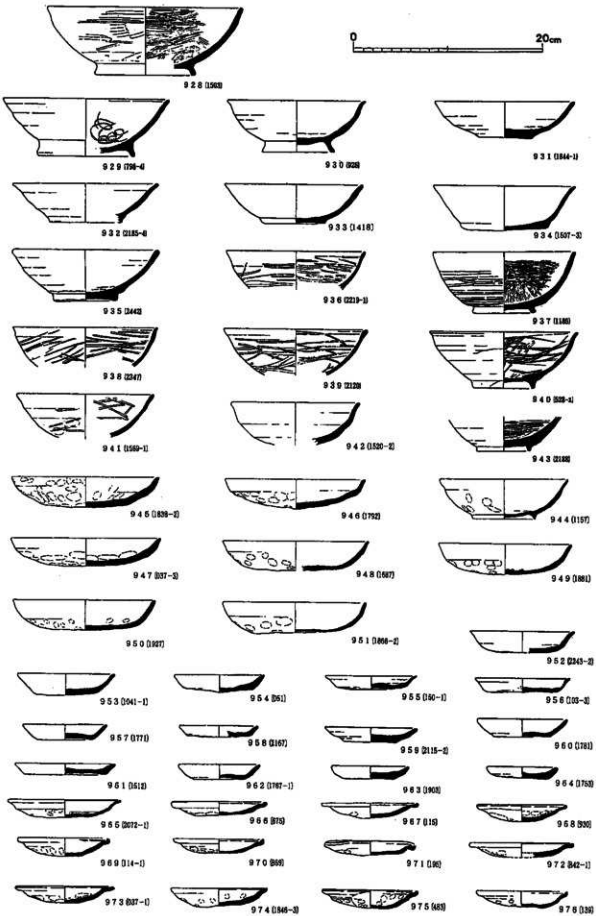
図版46　河道I上層出土遺物14




0
20cm


0
10cm


895 (1131-1)
896 (1872-3)
897 (1985-2)
898 (1957-3)
899 (1931-1)
900 (2343-1)
901 (1921-1)
902 (2001)
903 (1870-1)
904 (1334)
905 (1169-2)
906 (1269)
907 (2072)
908 (791)
909 (904-2)
910 (1255)
911 (1397-1)
912 (3320)
913 (660-3)
914 (1518)
915 (2273)
916 (668)
917 (1494)
918 (108-1)
920 (2077)
921 (2701)
922 (696)
924 (786)
919 (1972-2)
925 (1514-2)
923 (1380)
0
10cm


0
20cm
928 (1503)
929 (796-4)
930 (938)
931 (1844-1)
932 (2185-4)
933 (1418)
934 (1597-3)
935 (3442)
936 (2219-1)
937 (1188)
938 (2347)
939 (2128)
940 (839-4)
941 (1560-1)
942 (1520-2)
943 (2188)
945 (1838-2)
946 (792)
944 (1197)
947 (237-3)
948 (567)
949 (1881)
950 (1937)
951 (1866-2)
952 (2343-2)
953 (1041-1)
954 (951)
955 (150-1)
956 (105-2)
957 (771)
958 (1167)
959 (2115-2)
960 (781)
961 (512)
962 (1767-1)
963 (1903)
964 (1762)
965 (2072-1)
966 (873)
967 (115)
968 (936)
969 (114-1)
970 (869)
971 (192)
972 (842-1)
973 (837-1)
974 (1545-2)
975 (483)
976 (126)

図版51　河道Ⅰ上層出土遺物19

977 (747-1)　978 (824-1)　979 (848-2)　980 (867-2)

981 (1211-2)　982 (1831-3)　983 (1004-1)　984 (927)

985 (166-2)　986 (922)　987 (189-2)　988 (1409)

989 (400-2)　990 (1046)　991 (516-1)　992 (1834-2)

993 (887)　994 (1151-3)　995 (1677-4)　996 (796-2)

997 (852-1)　998 (1866-1)　999 (895)　1000 (2072-2)

1001 (1151-2)　1002 (189-1)　1003 (165-1)　1004 (837-6)

1005 (1029-1)　1006 (895-1)　1007 (1028-2)　1008 (1151-1)

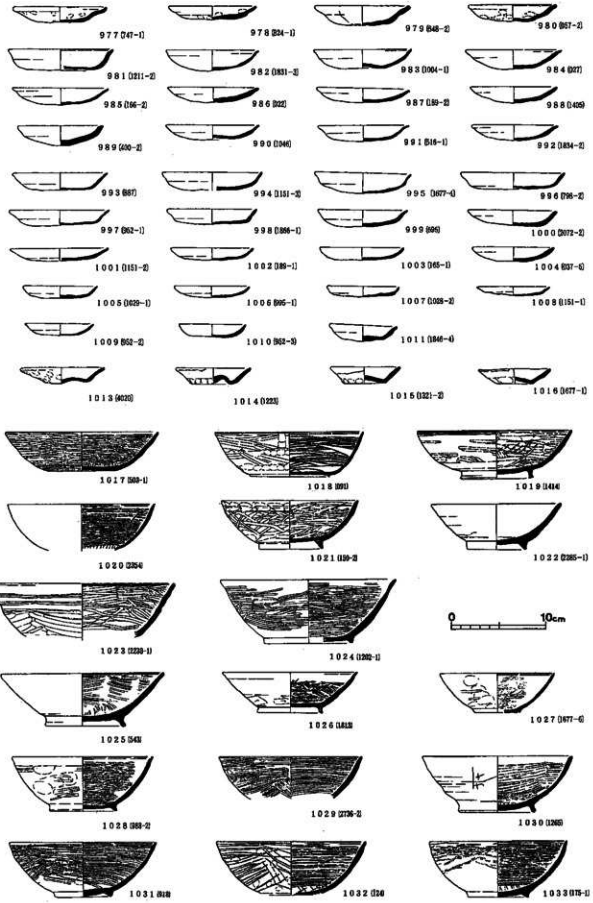
1009 (852-2)　1010 (852-3)　1011 (1846-4)

1013 (4029)　1014 (1223)　1015 (1321-2)　1016 (1677-1)

1017 (580-1)　1018 (891)　1019 (1414)

1020 (2354)　1021 (159-2)　1022 (2285-1)

1023 (2230-1)　1024 (1202-1)

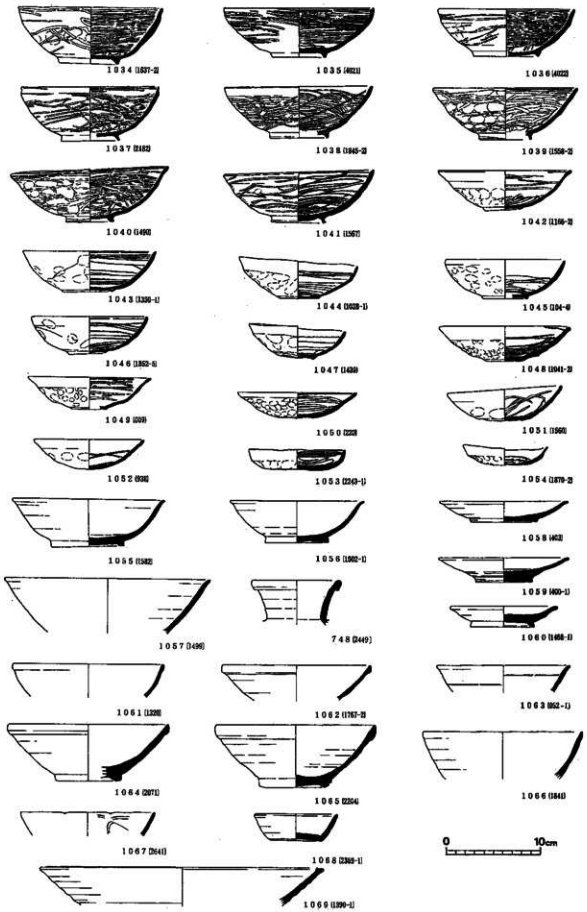


0　10cm

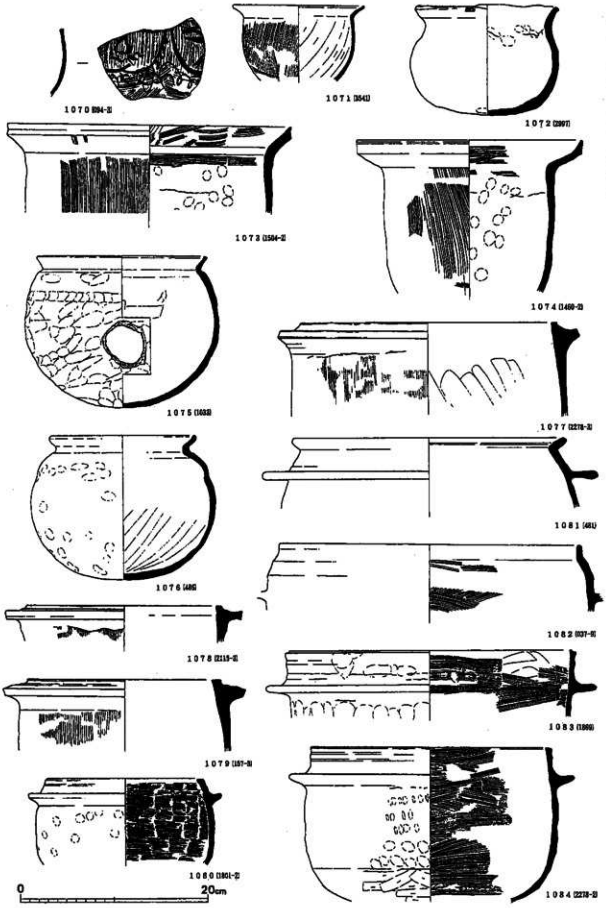
1025 (543)　1026 (1813)　1027 (1677-6)

1028 (988-2)　1029 (2736-2)　1030 (1265)

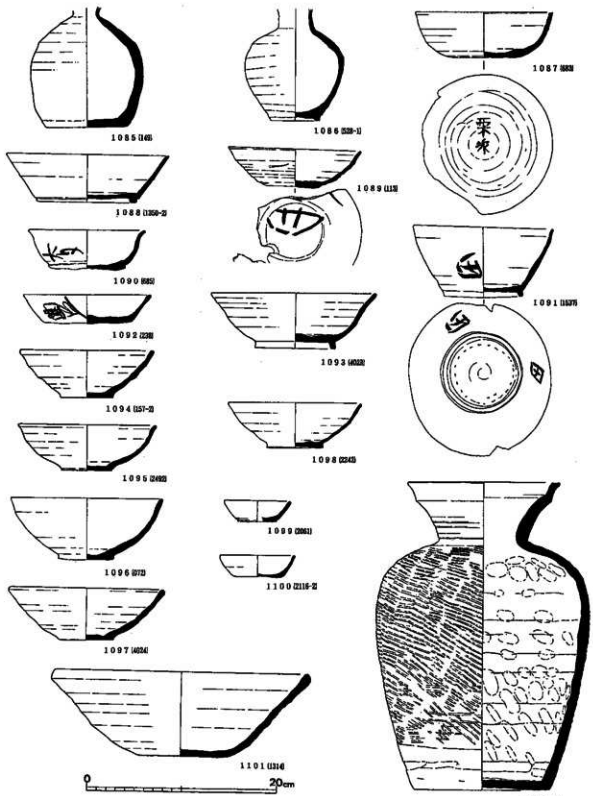
1031 (818)　1032 (724)　1033 (175-1)

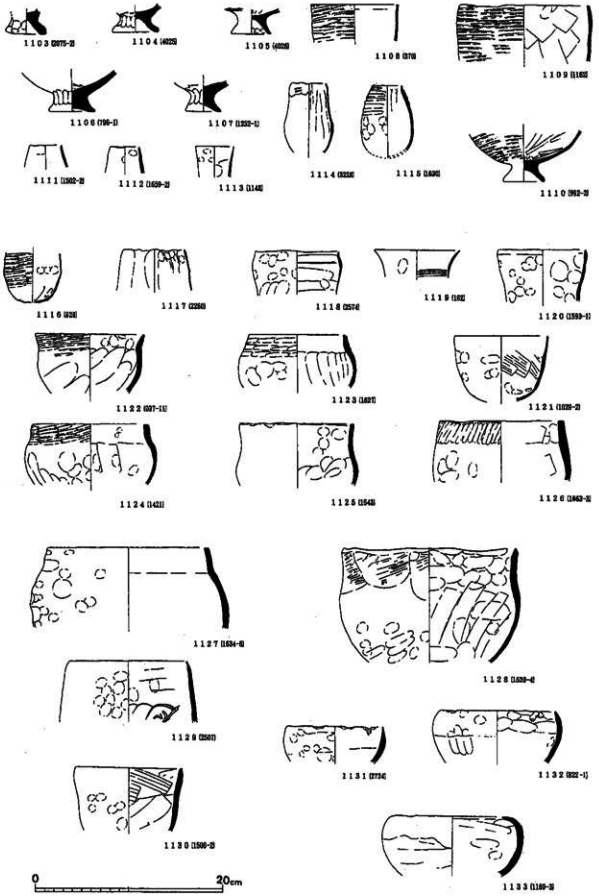

1034 (1857-2)
1035 (4021)
1036 (4022)
1037 (2182)
1038 (1845-2)
1039 (1558-2)
1040 (1492)
1041 (1567)
1042 (1186-2)
1043 (1330-1)
1044 (2618-1)
1045 (204-6)
1046 (1852-1)
1047 (1439)
1048 (1041-2)
1049 (209)
1050 (223)
1051 (1560)
1052 (836)
1053 (2243-1)
1054 (1879-2)
1055 (1342)
1056 (1892-1)
1058 (462)
1059 (400-1)
1057 (1496)
748 (949)
1060 (1468-1)
1061 (1228)
1062 (1767-2)
1063 (952-1)
1064 (2071)
1065 (2264)
1066 (1844)
1067 (2641)
1068 (2262-1)
1069 (1390-1)
0
10cm

図版53　河道Ⅰ上層出土遺物21

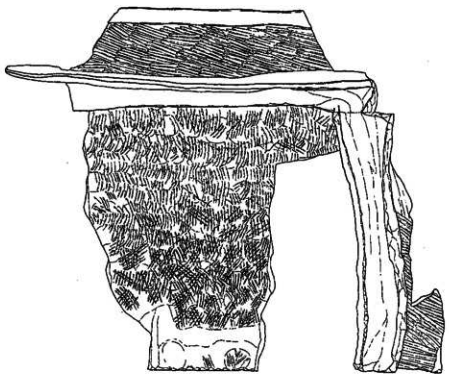


図版54　河道1上層出土遺物22

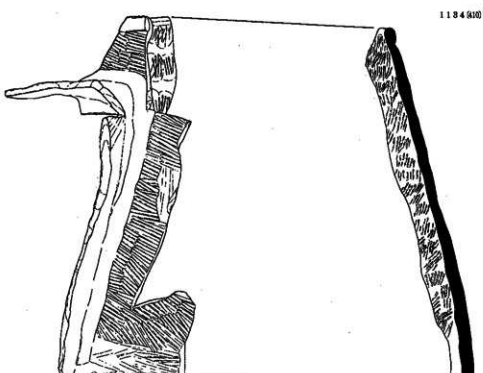



1103 (2075-2)
1104 (4025)
1105 (4026)
1108 (370)
1109 (1163)
1106 (196-1)
1107 (1232-1)
1111 (1502-2)
1112 (1659-2)
1113 (1148)
1114 (3238)
1115 (1630)
1110 (902-2)
1116 (929)
1117 (2260)
1118 (2574)
1119 (162)
1120 (1599-1)
1122 (607-11)
1123 (1627)
1121 (1639-2)
1124 (1421)
1125 (1543)
1126 (1663-3)
1127 (1634-6)
1128 (1639-4)
1129 (2507)
1131 (2724)
1132 (922-1)
1130 (1500-2)
1133 (1169-3)
0
20cm

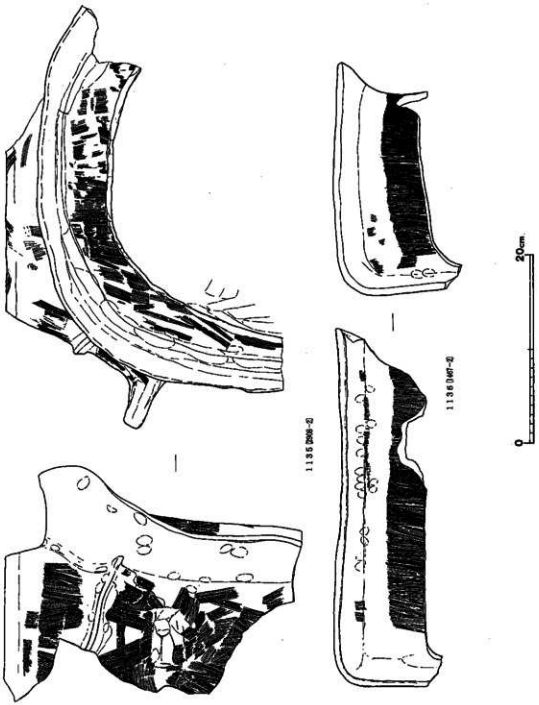
図版56　河道I上層出土遺物24



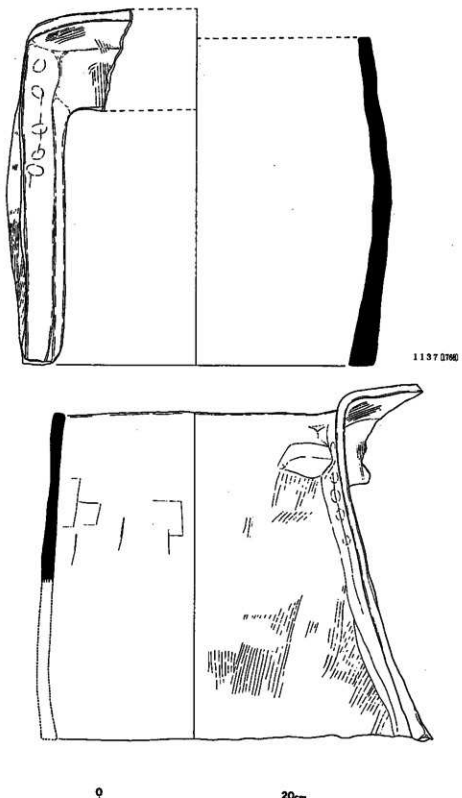
1184(S10)

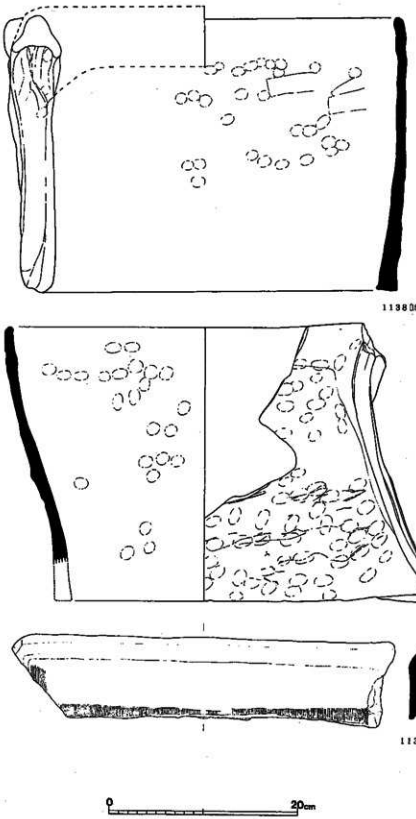


図版57　河道I上層出土遺物25

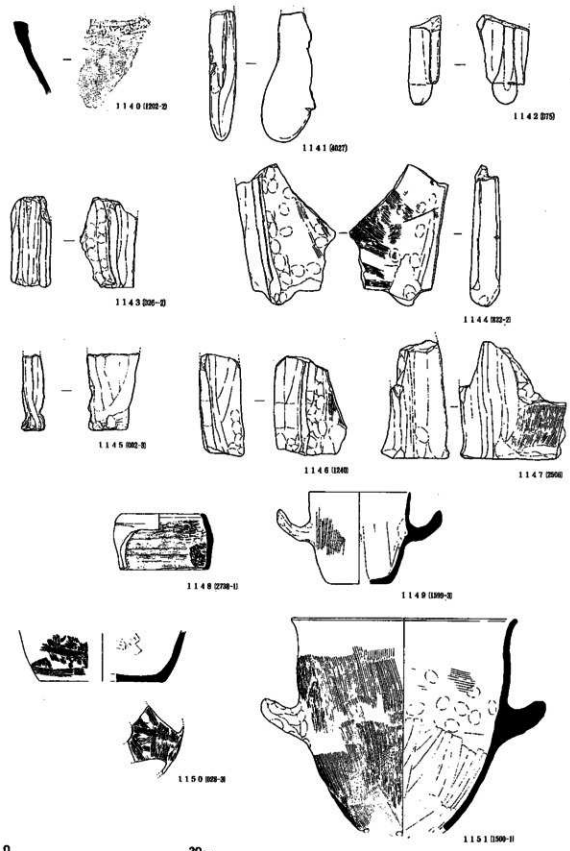


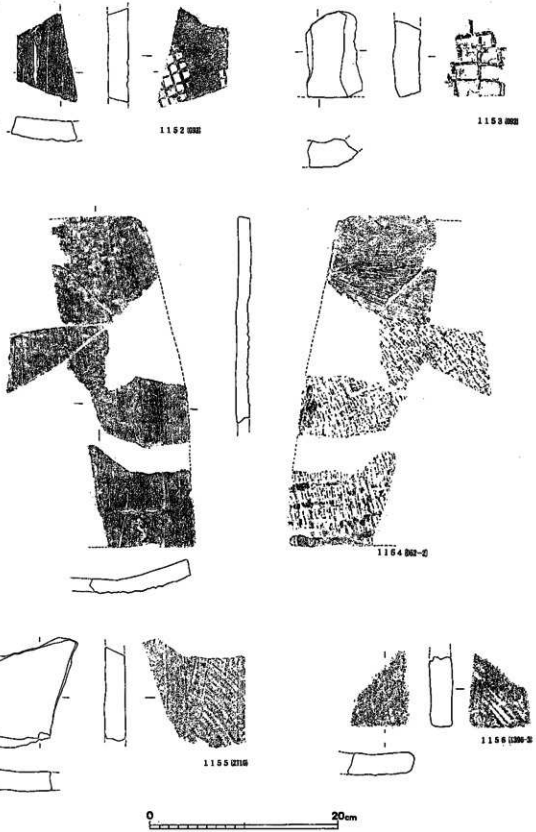
図版58　河道I上層出土遺物26



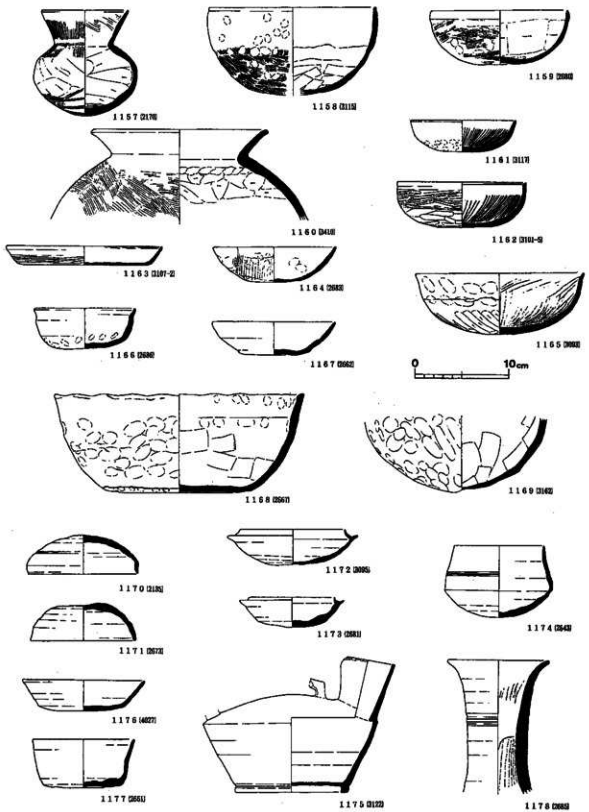

1138(391)
1139(393)
0
20cm

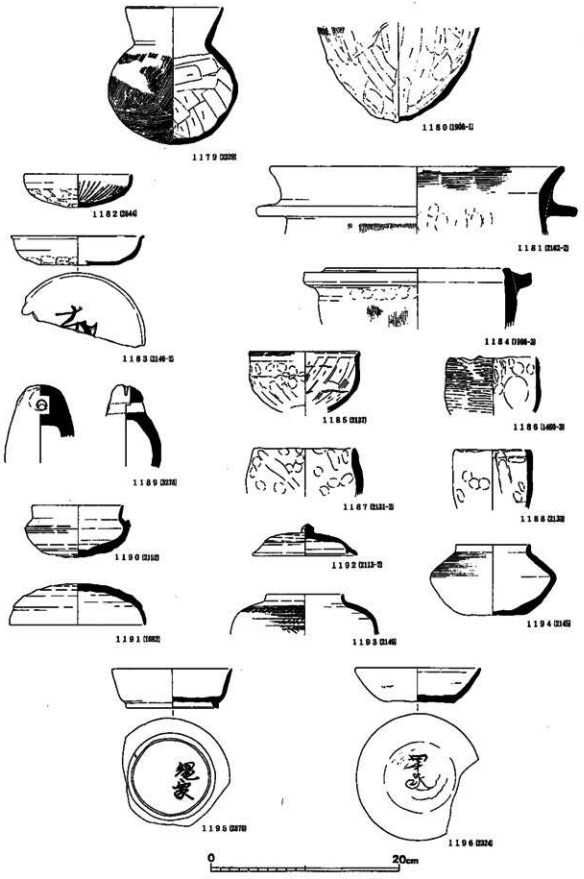
図版60　河道Ⅰ上層出土遺物28

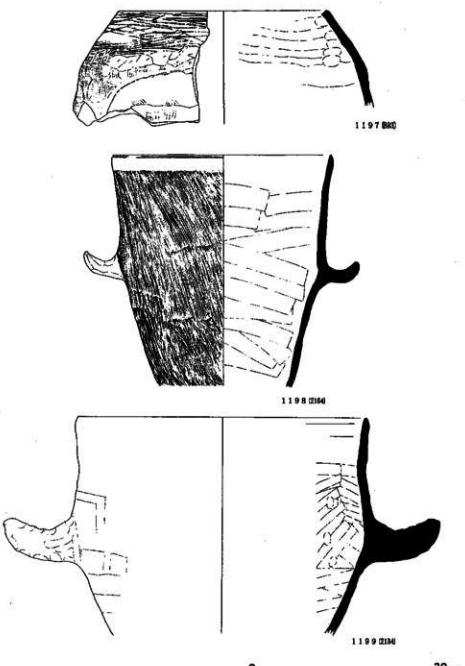


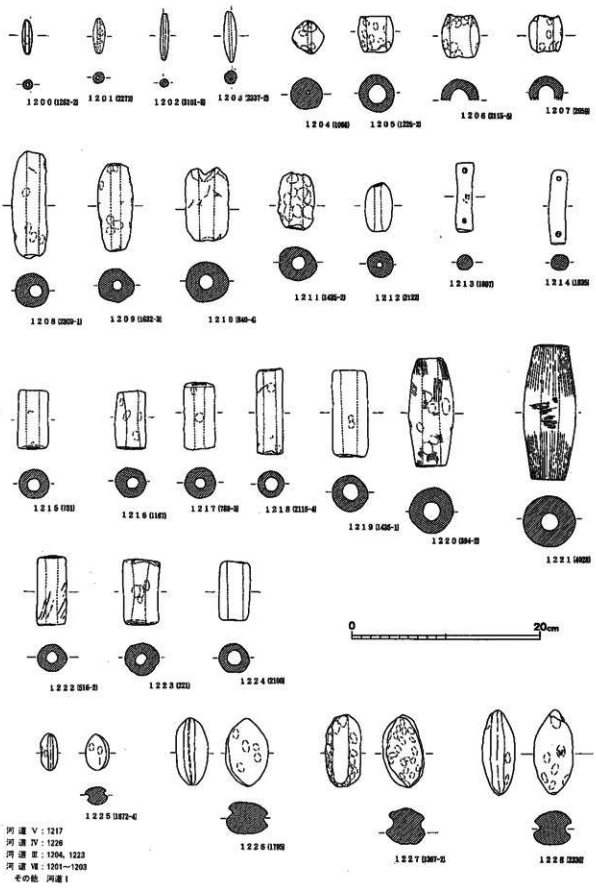

0
20cm

図版62　河道Ⅶ下層出土遺物

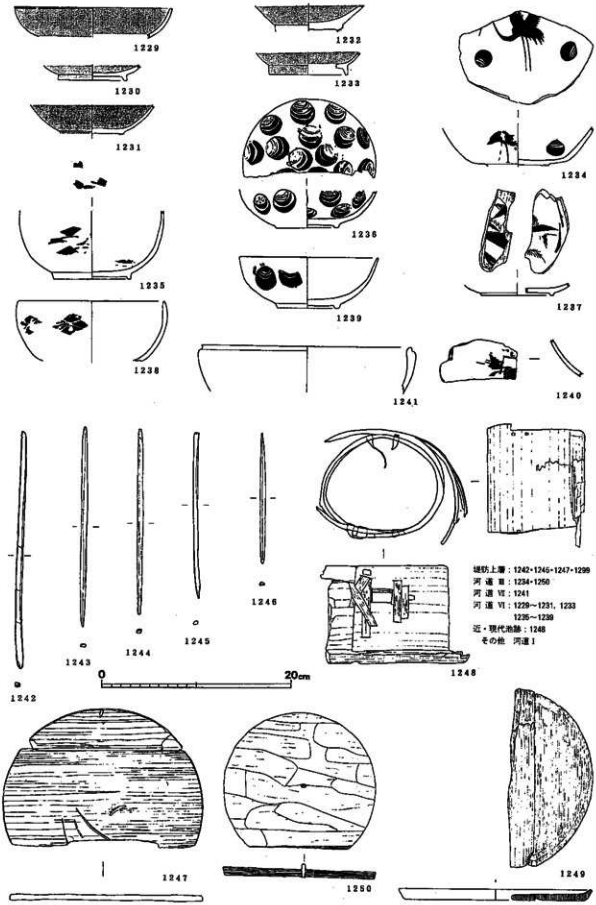


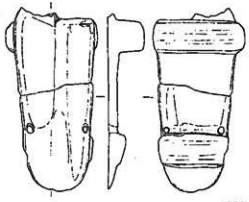

0
20cm

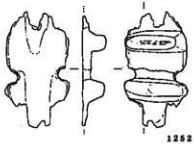

1197
1198
1199
0
20cm

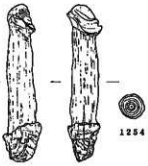


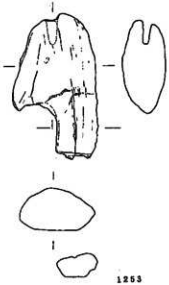
河道 V：1217
河道 IV：1228
河道 III：1204、1223
河道 VII：1201～1203
その他 河道 I


1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
0
20cm
城防上層：1242・1245・1247・1299
河道Ⅲ：1234・1250
河道Ⅵ：1241
河道Ⅵ：1229～1231、1233
1235～1239
近・現代池跡：1248
その他 河道Ⅰ


1251

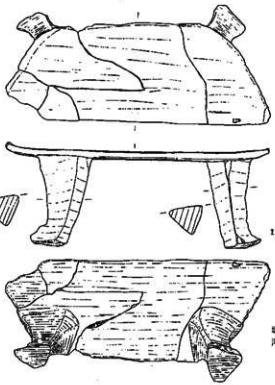

1252


1254


1253

0 20cm

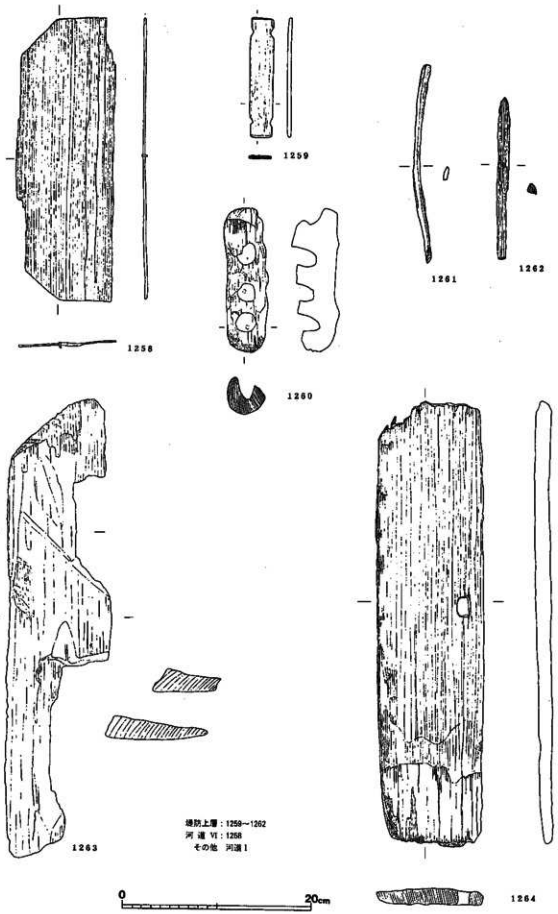
1255

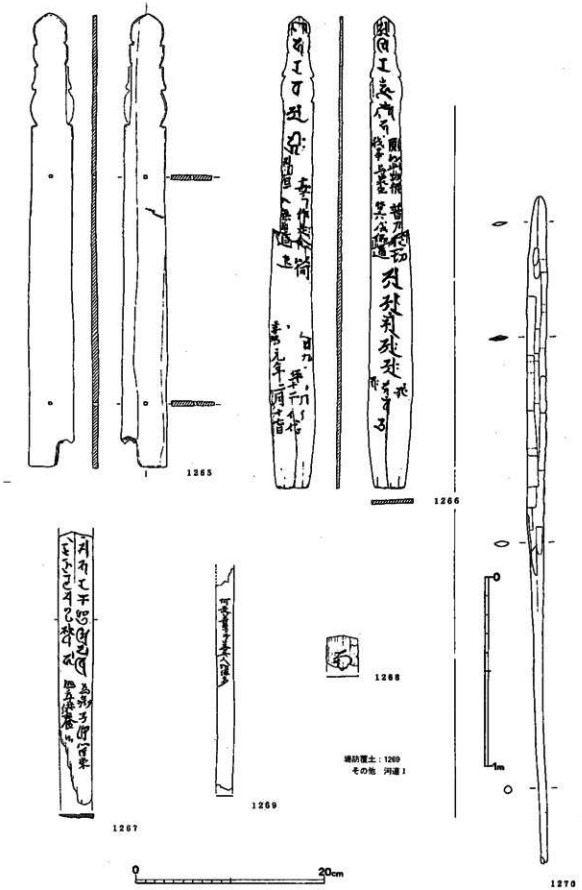

1256

1257

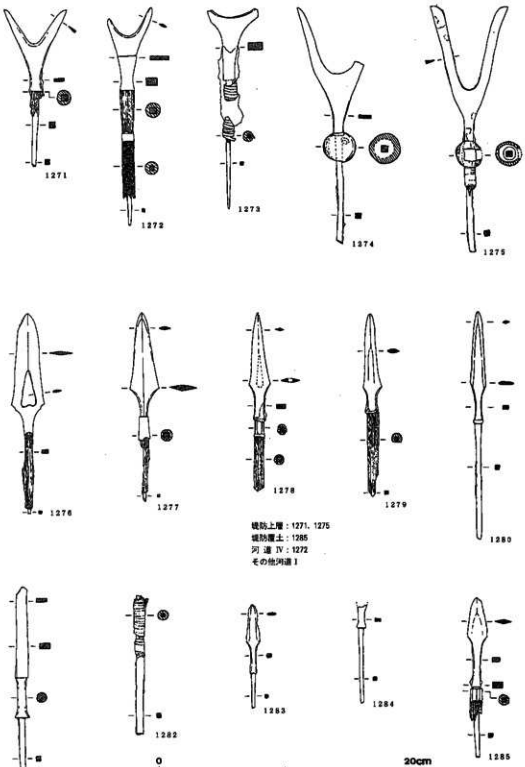
建肋上層：1253
河道 VII：1251
その他 河道 I

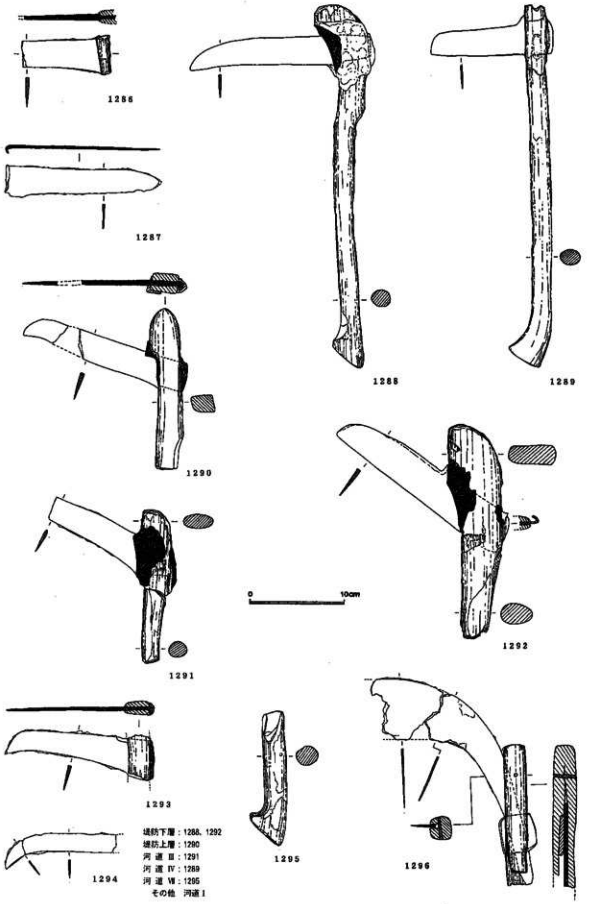
図版68　木製品3


1258
1259
1260
1261
1262
1263
1264
堤防上層：1258～1262
河道Ⅵ：1258
その他　河道Ⅰ
0
20cm

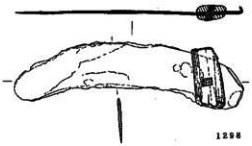

1265
1266
1267
1268
1269
1270
遺物置土：1269
その他　河道1
0
20cm
1m

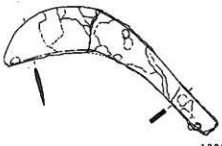
図版70　金属製品1

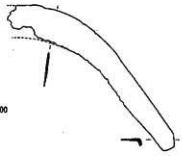

1271
1272
1273
1274
1275
1276
1277
1278
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
城跡上層：1271、1275
城跡覆土：1285
河 道 IV：1272
その他河道 1
0
20cm


1286
1287
1288
1289
1290
1291
1292
0
10cm
1293
1294
1295
1296
堤防下層：1288、1292
堤防上層：1290
河道 III：1291
河道 IV：1289
河道 VII：1295
その他　河道 I

1297


1298

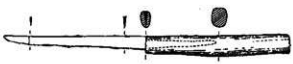

1300


1301

1299

堤防下層：1309
河 道 Ⅶ：1298、1300
その他 河道1

1302


1305

1303

1306

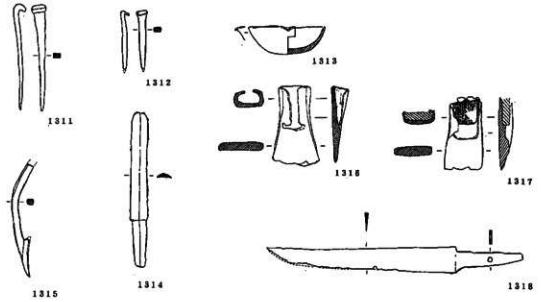
1304

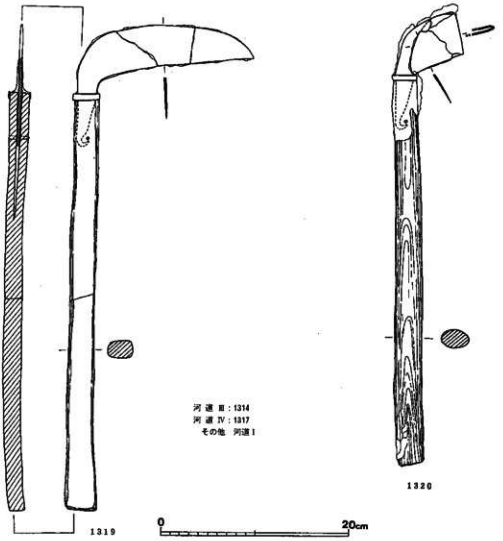
1307

1309

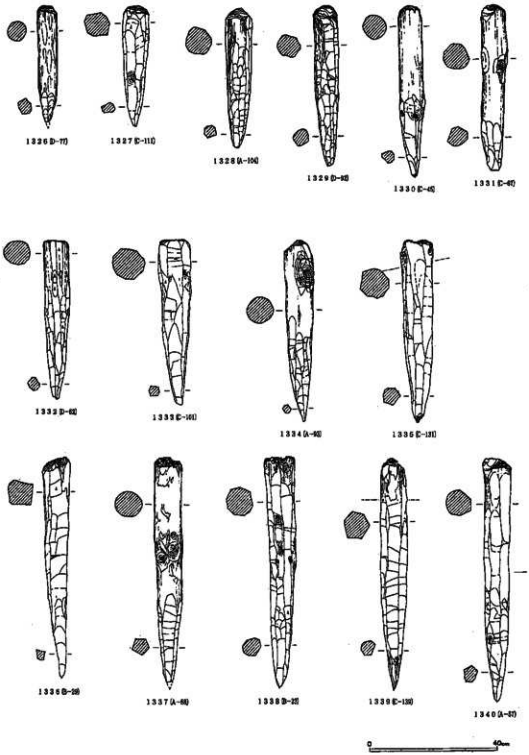
1308

1310

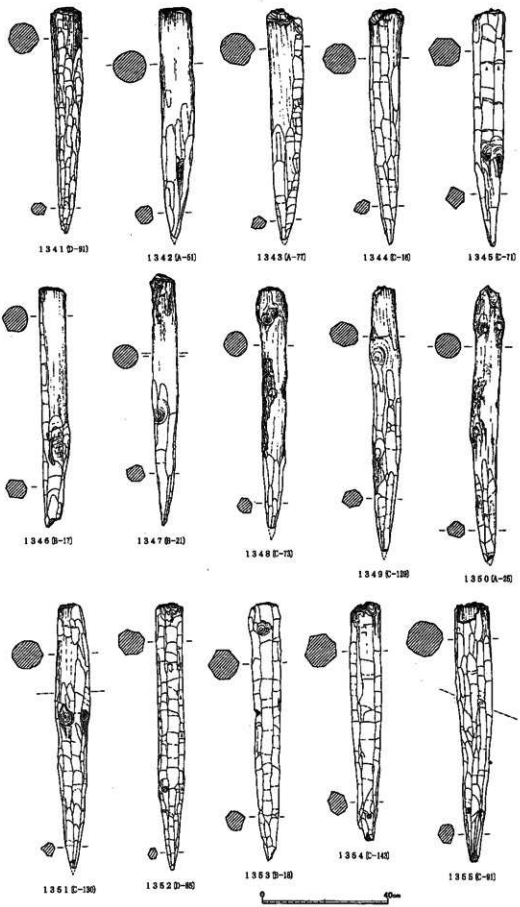

1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318

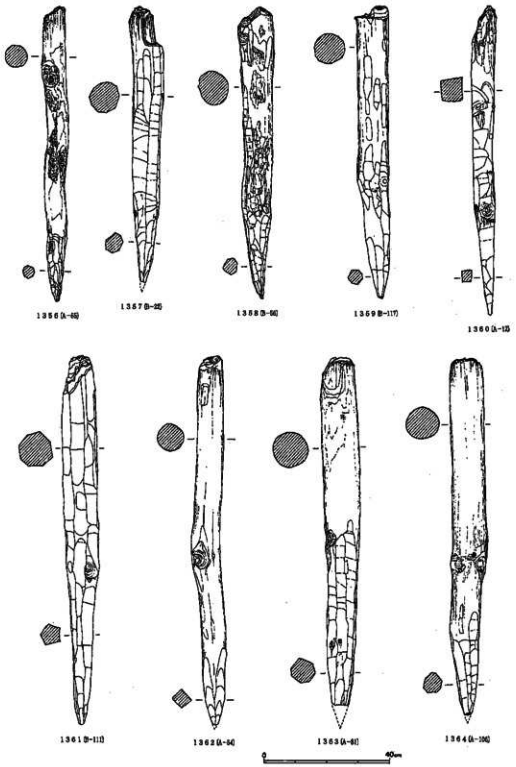

河道 II：1314
河道 IV：1317
その他 河道 I
1319
1320
0
20cm

図版74　金属製品5

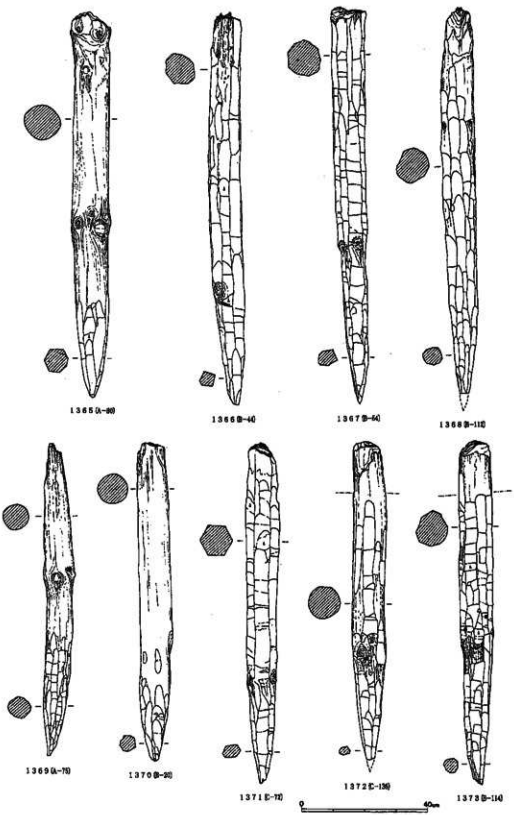


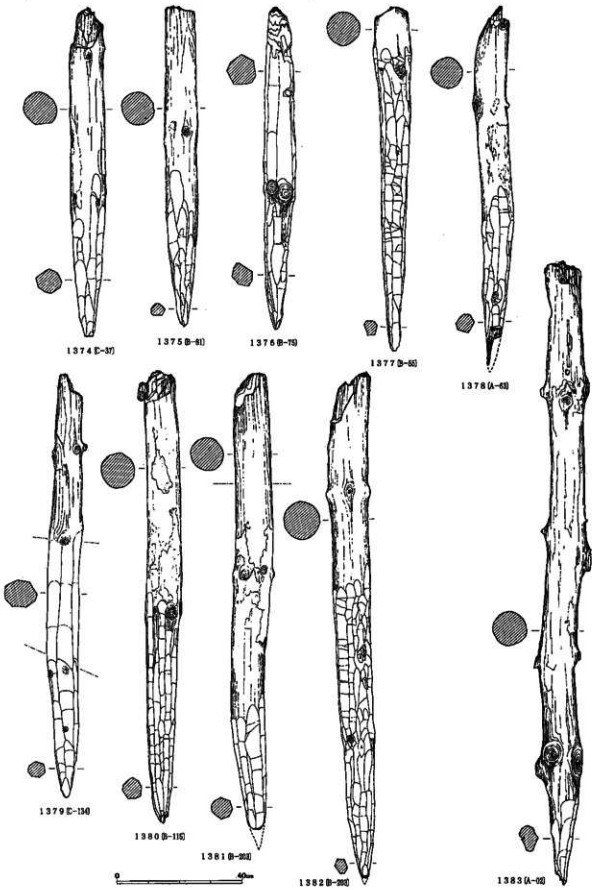
図版76　堤防構成材2


1341(D-93)
1342(A-91)
1343(A-77)
1344(E-16)
1345(E-71)
1346(B-17)
1347(B-21)
1348(E-73)
1349(E-128)
1350(A-25)
1351(E-130)
1352(D-85)
1353(B-18)
1354(E-143)
1355(E-91)
0
40cm

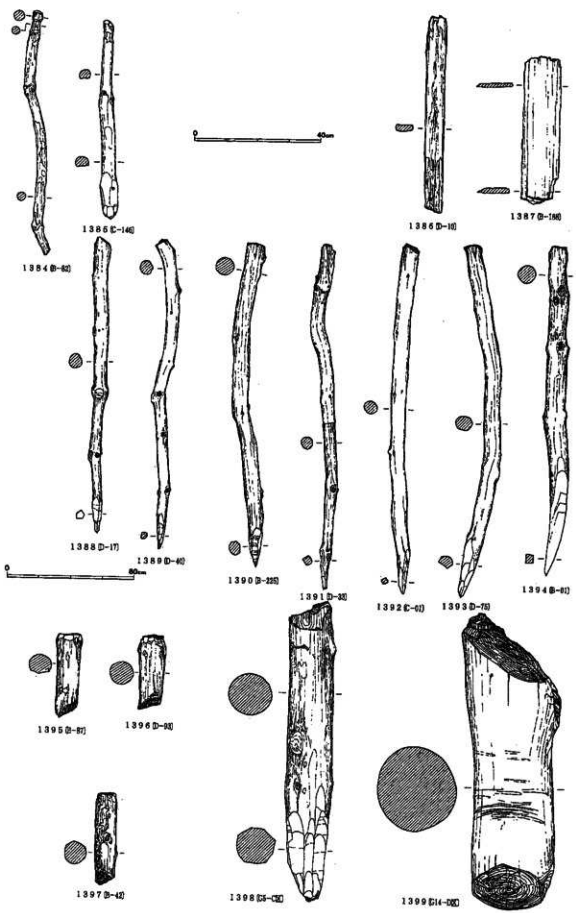

1356 (A-55)
1357 (B-25)
1358 (B-56)
1359 (B-117)
1360 (A-12)
1361 (B-111)
1362 (A-54)
1363 (A-81)
1364 (A-106)
0
40cm

図版78　堤防構成材4


1365A-80
1366B-40
1367B-60
1368B-110
1369A-70
1370B-30
1371E-70
1372C-130
1373B-110
0
40cm


1374(E-37)
1375(B-81)
1376(B-75)
1377(B-85)
1378(A-63)
1379(E-134)
1380(B-115)
1381(B-203)
1382(B-220)
1383(A-02)
0
50cm

図版80　堤防構成材6



報　告　書　抄　録

ふりがな	すいたしごたんじまいせきはっくつちょうさほうこくしょ　いぶつへん
書　　名	吹田市五反島遺跡発掘調査報告書　遺物編
副　書　名	南吹田下水処理場増設に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	増田真木　西本安秀　田中充徳　堀口健二　加藤志月　石山智美　大藤晴代
編集機関	吹田市教育委員会
所　在　地	〒564-0041　大阪府吹田市泉町１丁目３番40号　ＴＥＬ(06)6384-1231
発行年月日	西暦　2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積	調査原 因
五反島遺跡（ごたんじまいせき）	吹田市南吹田（ゴミ・ムラ・ムラ・ゴミ） 5-4356ほか	27205	90	34° 44′ 53 ″	135° 30′ 4 ″	19860701 ～ 19870320	7800 ㎡	下水処 理場増 設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五反島遺跡	集落遺跡 祭祀遺跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	河道(7条) 遺構面 堤防 木柱跡 木組遺構	弥生土器、土師器 須恵器、韓式系土器 製塩土器、瓦、黒色土器 緑釉陶器、輸入磁器 瓦器、土製竈、土錘 墨書土器、人面墨書土器 蛸壺、木製品(漆器、箸、曲物、木皿、下駄、鳥形、陽物、脚付き台、擂粉木、櫂、笹塔婆、柿経、杭)、金属製品(剣、唐式鏡、鏃、鎌、刀子、斧、鋤、坩堝、壺鐙、鉸具、宋銭)、石製品(石斧、勾玉、砥石)、人骨、獣骨、貝殻	平安時代前期の大規模堤防の検出 平安時代前期の川辺の祭祀関連遺物の多量検出

吹田市五反島遺跡発掘調査報告書
－南吹田下水処理場増設に伴う発掘調査報告書－
遺物編
平成15年3月31日
編集　吹田市立博物館
　　吹田市岸部北4丁目10番1号
発行　吹田市教育委員会
　　吹田市泉町1丁目3番40号